

---

# 秀人と愛斗！

ゼロ&インフィニティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秀人と愛斗！

### 【Nコード】

N9674L

### 【作者名】

ゼロ&インフィニティ

### 【あらすじ】

新世紀二十一年、エレメントという超能力者に支配されたノーマル。そんな世界に生き、正義を貫きとおすノーマルの少年識神秀人。正反対の道を選び進む青年零坂愛斗。この二人やその他の人物の生き様を描いたSFロボット小説です。

## プロローグ（前書き）

プロローグという事で短めです。

## プロローグ

心地よい朝日がアスファルトの道路を照らす。

少年はそんな道路を軽快に走っていく。

少年の左手には、ハンドバッグほどの大きさの通学鞆を持っていた、中指には赤紫の指輪がはまっている。朝日を浴びて、星のように輝いていた。

少年は大きな大理石と鉄の柵でできている校門の前に立った。走ったせいで額には、うつすらと汗が滲んでいた。

「ここが僕の新しい学校か！大きいなあ・・・」

少年の名は識神<sup>しきがみ</sup> 秀人<sup>しゅうと</sup>。

今年から高校生、そして、ここが新しい高校、「軍立朧月学園」である。

今は、新世紀二十一年だ。二十一年前に西暦は終わり、新しい暦として、新世紀と呼ばれるようになった。

何故、新世紀が始まったのか？それは、「エレメント」の誕生が原因であった。エレメント、それは二十一年前に突如、世界に現れた超能力者のことを指す。

エレメントは日に日に数を増し、子孫を増やし、世界を覆っていた。十五年前には世界人口の半分近くがエレメントになった。

逆にそのような能力を持たぬ者は「ノーマル」と呼ばれた。

ノーマルはエレメントとなった者達と同じように暮らしていた。しかし、十四年前にエレメント達は一つの国を建国した。それが「ストライダム皇国」である。世界中のエレメントは初代皇帝、レオンハルト一世の呼びかけでストライダムに移住した。

レオンハルト一世は、エレメント達が一斉に移住して、混乱していた世界を、その隙に侵略し、領土を広げた。そして、全世界に向けて、ノーマルはエレメントに劣る人種である、と絶対服従を呼び

かけた。

これに対して、ノーマル達は黙っていなかった。ノーマル達は正義の名の下に武器を取り、五年にも渡る戦争を始めた。これがノーマルとエレメントを今のように分ける切欠となった、「第三次世界大戦」である。

しかし、エレメント達の使う謎の能力にノーマル達は太刀打ち出来ずに敗北を喫した。

世界の三分の二を手にしたストライダム皇国は、世界を間接的に支配する形となり、ノーマルは住む場所、選挙権、裁判を受ける権利も全てを奪われて、差別された。

秀人が住むこの国、「日本エレメント自治区」は十年前にストライダム皇国の侵略を受け、国土は荒廃し、政府は崩壊した。元々、世界有数のノーマルが多い国でつたので、表面的はノーマルの国と見られていたが、実質的には、エレメントが政治を行う完全なエレメントの国家だった。

秀人がこれから通う学校もエレメントが多い、いや、ほとんどがエレメントと言っても過言ではないような学校だ。

普通、ノーマルはエレメントの学校には入れない。というか、入学を許可されない。でも、ここは軍立学校だ。軍の入隊にノーマルかエレメントかの差別はない。

秀人が軍に入る理由。表向きな理由は母が死に際に残した遺言だ。母は秀人に「立派な男になれ」、と言った。「ノーマルの壁を乗り越えて、人々の希望になれ」とも言った。

軍に入り、昇格すればノーマルでも立派に活躍できるという事を他のノーマルに示せる。そう考えていた。

でも、本当の理由は、子供のころから憧れていた、「EMA」（エレメント・パワード・アーマー）という人型戦闘兵器のパイロッツ

トになりたいからだ。

「E M A」とは、エレメントが乗る為にストライダム皇国が開発した物だ。要するに、ロボットである。もちろん、ノーマルでも乗れなくは無いが、エレメントの持つ能力分を自分の体力で補わなくてはならないため、誰でも乗れる訳ではない。

これから始まる新しい学校生活。どんな物になるのだろうか。秀人は期待と同時に、ノーマルでもやっていけるのだろうかという不安もあった。

深呼吸し、校門をくぐる。胸を高鳴らせながら。

## 一話 通りすがりのノーマル

校門の先には、白壁の校舎があった。五階建てのそれは神々しい雰囲気を出しつつ、悠然と聳え立っていた。そんな校舎が何棟もあり、庭園が広がっていた。真ん中に聳え立つ棟は学園長や将軍がいる特別棟で一般人は入れないようだった。

秀人は案内図を見ながら呟いた。

「こんなに大きいと迷うなあ……。とにかく、自分のクラスに行けばいいのかな？」

秀人のクラスは一年四組と入学案内には書いてあったが、教室が何処にあるのか見当もつかなかった。

「とにかく歩き回れば見つかるかな？」

そう思つて、振り返った瞬間、誰かにぶつかった。

「す、すいません！」

反射的に頭を下げて謝った秀人だが、向こうからの返事はない。恐る恐る顔をあげてみるといかにも不良っぽい生徒が三人立っていた。

「てめえ、どこに目えつけて歩いてやがるんだ！」

「ご、ごめんなさい！悪気は無かったんです」

不良三人は、舌打ちして、噛んでいたガムを吐き捨てると、さらに罵声を秀人に浴びせてきた。

「てめえ、名前なんだよ？」

「はい！新入生の識神秀人、ノーマルです」

その途端、にやりと陰湿な笑みを不良たちは浮かべた。

「俺は三年のステイプってんだ。念力のエレメントだ。最近よお、規制厳しくなっちまって、タバコとか吸ってねえからイラついてんだよ。でも、丁度良かった。お前でストレス発散させて貰うぜ」

秀人はぶつかった自分を呪った。何もエレメントにぶつかること

は無かったのに……。

「あの……僕、急いでまして……また次の機会にでも……駄目ですかね？」

ステイブと名乗った不良の返事は早かった。

「駄目だ」

秀人はノーマル。向こうはエレメント。秀人に拒否権はなかった。ノーマルはエレメントに絶対服従だからだ。

秀人は目を瞑り、衝撃に備えた。

「けっ、ノーマル如きがこんな学校入ってくるんじゃないよ」

しかし、その時！身体が宙にふわりと浮いた。いや、誰かに持ち上げられた。爆音が聞こえ、砂埃が顔に当たる。恐る恐る目を開けてみると、自分を抱えているのは、綺麗な黒髪に真っ黒な瞳の、まごうことなき美青年だ。

「貴方は？」

秀人はとぼけた声で尋ねた。

「後でだ」

美青年くんは短く言うと、優雅に地面に着地して、秀人を地面に降ろした。

「てめえ！割り込んできやがって！何処のどいつだ！」

美青年くんは服の埃を払い、不良たちに向き直ると、

「通りすがりのノーマルだ。覚えておくんだな」

不良たちは舌打ちをし、ステイブは腕を構えて、念力を使ったが、念力が美青年くんの居た場所に届いて、地面の埃を巻き上げた時には、すでにステイブの後ろに回り込んでいた。

「チェックメイト。君の負けだ」

抑揚の無い声で美青年くんは言う、腰から日本刀を抜いて、柄を鳩尾に食い込ませた。

白目をむいて、ステイブは倒れた。

後ろの不良の一人が手の平から炎の玉を出したと同時に強烈な回し蹴りを顔面に打ち込んだ。鼻血を出して、地面にどさっと倒れこ

んだ時にはもう一人は逃げ出していた。

逃げていく不良を見送って、また服の埃を払った。秀人は呆然と眺めていた。今まで生きてきて、エレメント三人と喧嘩して勝ったノーマルなんて見たこと無い。

「大丈夫か？怪我はないか？」

「はい、大丈夫です・・・」

美青年くん秀人の手を握って立ち上がらせると、クールだが、相手に悪い印象を全く与えないような、不思議な笑みで、

「君はノーマルだな。気が合うな。俺もノーマルだ」

秀人はさつきと同じ質問をした。

「貴方は？」

「おっと、そういえば名前を聞いてなかったな。名前は？」

秀人は引きつった笑みを浮かべながら、名前を言った。

「識神秀人です。新入生の」

美青年くんは僕の手を握って、言った。

「同じく、新入生のみおさか あいと澪坂 愛斗だ。よろしく頼む」

愛斗は秀人より僅かに背が高かった。しかし、顔が整っているの  
で秀人より、ずいぶんと年上に見えてしまう。

秀人は直感で思った。この人、愛斗はきっと、この学校での初めての友達になるだろうと。

## 二話 自己紹介という名の修羅場（前書き）

第二話ということで、自己紹介の件です。サブタイトルどおり自己紹介は修羅場。

俺はそう思います。

## 二話 自己紹介という名の修羅場

不良を追い払ってから五分、愛斗と秀人は出逢ったばかりだと言  
うのに、以前からの友達のようにベンチに腰掛けていた。手には先  
ほど自販機で買った缶コーラが握られていた。

「あの、強いんですね。エレメント相手に楽勝で勝っちゃうなんて  
感動しました。助けてもらっただし・・・」

愛斗はコーラを飲み干すと、

「エレメントとの喧嘩は慣れてるから」といい、缶を投げ捨てた。  
「でも、凄いですよ！しかも、綺麗だったし」

愛斗は小石を拾って捨てた缶に投げた。見事に命中する。

「秀人も出来るさ。頑張れば」

秀人はちらつと愛斗の腰の日本刀に目をやった。抜かない限り、  
刀には見えない。

「そんな危険物持ち込んでいいんですか？」

愛斗は腰に手を当て、刀を少し抜き、言った。

「許可はとってあるから大丈夫だ。後、俺に敬語は使わなくていい」  
「分かりました。で、どうやって？」

「ノーマルだから、護身用の武器の所持は許可されている」

「そうだったんだ・・・」

秀人は少し驚いた。愛斗はそんな秀人を見て、

「もしかして、武器持っていないのか？」と尋ねた。

「うん」

愛斗は鞆をまさぐり、ナイフを出した。

「これでも持っていればいい」

「ええー！無理だって！使い方わかんないし」

愛斗はナイフを無理やり秀人のポッケに押し込み言った。

「使い方なら教えてやる。ここは士官学校だからな」

秀人は少し困ったが、受け取っておくことにした。

「ところで、クラスは？」

「一年四組だ。君と同じさ」

秀人はまた驚いた。今日は良く驚く日だ。ノーマルが少ない学校でノーマルに助けてもらって、しかも、同じクラスだったとは。

「そうだ！思い出した！教室の場所がわからなかったんだ！」

いきなり叫んだ秀人を愛斗は不思議そうに見た。

「案内図を持ってないのか？」

しかし、秀人は恥ずかしそうに言った。

「持つてるんだけど、方向音痴で・・・愛斗は場所わかるかな？」

愛斗は噴水の向こうにある校舎を指差した。

「あそこだ。いい時間だし、一緒に行くか？」

秀人は嬉しそうに頷いた。

「もちろん、一緒に行くよ。心強いからね」

「じゃあ行くか」

愛斗はすつと立ち上がり、歩き出した。秀人も後から立ち上がり、ついていった。

「綺麗な校舎だな」

秀人は玄関に入ってから、ずっとキョロキョロしていた。

「軍立学校だからな。大分、金をかけているんだろ」

「前の学校とは大違いだな・・・」

秀人はぼそつと呟いた。愛斗は鼻歌を歌いながら階段を上っている。

「教室は五階だ。急ぐぞ。ゆっくりし過ぎた」

「急いでるようには見えないけど・・・」

愛斗は頷いた。

「確かに足は急いではないが、心は急いでいる。身体が急いでも心が遅かったら、対応できないからな」

秀人はまたしても直感で思った。こいつは凄い奴かもしれない、と。そんな調子で五階に行くと、すぐに一年四組が見えた。

「おつ、一年四組だ。あそこだな」

秀人は元気よくドアを開けた。教室中の視線が秀人と愛斗に集まる。昔、転校生が来た時のことを思い出す。

きつと、こんな気分だったに違いない。

「愛斗？ こういう空気の時はどうすればいいんだ？」

愛斗は落ち着いた様子で自分の席に座り、足を組んだ。そして、秀人の方を向き、こう言う。

「こうすればいい」

仕方が無いので、秀人も同じように席に座ったが、足までは組む勇気が無かった。

座ってから五分、五分前を違って、今は皆、席についている。扉が開き、初老のおじさんが入ってきた。恐らく担任だろう。

担任らしきおじさんは教卓に立ち、号令をかけた。

「起立ッ！ 気をつけッ！ 礼ッ！」

初老とは思えない張りのある声だった。全員が着席すると、おじさんは話し出した。

「えー、今日から諸君らの担任になったオスカーだ。まずは高い志を持って入学した諸君らの自己紹介おをして頂きたい」

すると、最前列の赤毛のロングヘアーの女生徒が声を張り上げた。「では、一番に自己紹介させてもらうわ。アルマ・ベルンシュタイン。炎のエLEMENTですわ。以後お見知りおきを」

そう言つて優雅に一礼をし、着席する。秀人は激しく緊張していた。他の生徒もアルマを見習い、次々と自己紹介をしていく。

そして、秀人の番が来た。勇気を振り絞って、立ち上がる。

「し、識神秀人です。えっと、ノーマルです。みなさんと一緒に頑張りたいと思います」

ノーマル。その言葉を聞いた途端、教室中から小声で悪態が聞こえた。

やっぱり……。予想はしていたが、いざ言われると、結構傷つく。

そんな中、愛斗はすつと立ち上がり、

「澁坂愛斗だ。よろしく頼む」さっきと同じ抑揚の無い声だ。全く顔には出ていないが、間違いなく声で威嚇している。

オスカーは愛斗を見て、ふと首を傾げた。どこかで見たことあるような顔だ。何処だったか……。思い出せないが、後で学園長に確認をしとくか、そう思った。オスカーは気になった事はそのままにしておけない性格なのだ。

「うむ。皆、このクラスで三年間を過ごす事になる。仲良くするよ  
うに」

そう言つと、オスカーは教室を出た。同時にベルが鳴る。休み時間だ。自己紹介は乗りきった。次はどうなるのか、全く想像もつかない学校生活になりそうだった。

## 二話 自己紹介という名の修羅場（後書き）

三日連続更新してますが、そろそろ忙しくなりそうなので、更新遅れるかもしれません。

### 三話 悪友イヴオン（前書き）

三話目で新キャラ登場です。この人は後々、物語に大きく関わってくるので、重要です。登場はいろいろな場面を考えましたが結果的にこうなりました。

### 三話 悪友イヴオン

オスカーが教室を出て行くと、生徒たちは友達と話し出した。どうやら入学早々仲良くなっている人がほとんどのようだ。

愛斗が腕時計をいじりながら近づいてきた。

「ジューズでも買いにいくか？」

「ああ、うん。行くけど」

なら、さっさと行くぞ、といった感じに愛斗は歩き出した。秀人も後を追うようについていき、廊下に出て下の階に行こうとした。

「おい、愛斗！」

誰かに呼び止められた。

「その声は・・・イヴオンか？」

愛斗は振り向かないで言った。

「そうだ。入学の時くらい挨拶しろよ」

愛斗と秀人は振り向き、イヴオンに歩み寄った。

「お前がこの学校に入るなんて意外だな。もっとなよなよした奴だと今まで思っていたんだが」

「そう言う愛斗はいいのか？可愛い「彼女」はほったらかしで」

秀人は目を見開いた。彼女？何の話だろう？

愛斗はそんな顔をしている秀人を見て、

「おい、イヴオン。変な言い方をするな。秀人が誤解する」と言った。

秀人はイヴオンを指差して尋ねた。

「で、この人だれ？ノーマル？エレメント？」

愛斗は、咳払いをして言った。

「ああ、こいつは俺の昔の友人のイヴオンだ」

「おいおい、今もだろ」

そう言うといヴオンはポケットから小さな手帳を出し、ペラペラとめくると愛斗に尋ねた。

「ところで、愛斗。今晚は空いてるか？」  
愛斗は頷いた。

「ああ、別に用事はない」

「じゃあ、とイヴオンは手を揉んだ。

「久しぶりに手伝ってくれるか？」

「何時ものか？」

「もちろん」

愛斗は分かった、と頷いた。

「何時だ？」

イヴオンはまたしても手帳をめくった。

「七時に新池袋ステーション第七地下道の出口で待ち合わせでどうだ？」

「いいだろう」

「なあ、何するんだ？」

秀人が愛斗に尋ねた。そんな秀人を見て愛斗はイヴオンに尋ねた。

「こいつも連れてきていいか？」

イヴオンは澄ました顔で、

「別にかまわないさ」と言った。

「じゃあ決まりだ」

愛斗はそう言うといヴオンに言った。

「もう授業が始まるぞ。早く行った方がいいんじゃないか？」

イヴオンは時計を見ると驚いた。

「本当だ。じゃ、また夜な」

「ああ、じゃあな」

そう言い、イヴオンと別れると秀人の方を向き直った。

「結局、ジュース買えなかったな」

「後で買えばいいさ」

秀人は愛斗に質問した。

「愛斗。あのイヴオンて人とどんな関係？」

愛斗は少し考えた。

「まあ、親友以上、幼馴染未満でとこだ。あいつは良い奴だぞ。お調子者だけだな」

「で、夜は何するんだ？」

「ちよっとした人助けみたいなもんだ」

秀人はイヴオンと愛斗の関係を納得した。悪友ってとこだらう。

秀人はさっきの会話に出てきた「彼女」が気になったが尋ねるタイミングを外してしまったので、後から尋ねることにした。

#### 四話 愛斗の素性（前書き）

今回は愛斗の素性についてです。名前とか適当ですがご了承ください。なんだかありきたりの設定になってしまいましたが読んでいただけると幸いです。

#### 四話 愛斗の素性

朝の新生と顔合わせを済ませたオスカーは学園長室へと向かっていった。漣坂愛斗……。見覚えのある顔だった。勘違いではない。絶対にどこかで見たことがある。

「学園長。私です。オスカーです」

そう言い、ドアをノックする。

「入ってよいぞ」

中から落ち着いた声が響いた。オスカーはドアを開け、中に入った。そして、きちんとドアを閉める。

「学園長。お尋ねしたい事があるのですが、お時間はよろしいでしょうか？」

学園長は髪が白くなりかけた初老の男性だった。何時ものように机に広げた書類と格闘している。

「かまわん。言いなさい」

「では、単刀直入に申し上げます。我が一年四組に配属された生徒、漣坂愛斗の事についてですが……」

愛斗の名前を聞いた途端、学園長の顔が引きつった。

「あのノーマルの少年じゃな。彼がどうかしたのか？」

オスカーは学園長の変化に気づいたが、あえて続けた。

「いえ、ただ何処かで見たような顔に見えまして」

学園長は引き出しから一枚の写真を出してオスカーの前に置いた。写真を覗き込んだオスカーは呟いた。

「このお方は日本エレメント自治区区長のエルネスト・ストライダム様ではありませんか。で、エルネスト様がどうかありませんか？」

学園長は何時に無く厳しい口調で言った。

「よく見よ」

オスカーは気づいた。

「よくよく見れば澪坂愛斗と顔立ちなどが似ていますね。もしかすると・・・」

学園長は頷いた。

「澪坂愛斗は彼の本名ではない。彼の本名はヨハン・ジークフリード・ヨゼフィーネ・フォン・ストライダム。

彼はストライダム皇国の皇族だ」

「しかし！彼は日本人です！」

「そうじゃ。彼の父、ジークフリード・ストライダム様も日本人だった。ジークフリード様は前皇帝なき後、皇位を継ぐ候補だった。しかし、不運にもジークフリード様の家系は他の皇族とは違いノーマルの家系だった。結果、他の皇位継承候補者の手によって、家族もろとも虐殺されてしまったのじゃ」

オスカーはさらに問い詰める。

「では、何故彼は生きているのですか？」

「不幸中の幸い、彼は屋敷が焼かれたその日、家には居なかった。ジークフリード様の代わりに他の地方の巡察

に出かけていた。朝になりその知らせを聞いた彼は部下の協力のもと日本に逃れてきたという訳じゃ」

学園長はそう言い、写真をしまった。

「では、このことは・・・」

「うむ、他言無用じゃぞ」

オスカーは頭を下げた。

「分かっております」

そう言い、オスカーは部屋を出て行った。学園長は窓から外の景色を眺めた。

「オスカーには言っておらんが、彼にはもう一つ秘密がある」  
「もちろん、独り言だ。」

「それも何時か、知ることになるだろう」  
「そう言つと、再び机に向き直り、書類と格闘を再開した。」

オスカーは早速行われる授業のため演習場へと向かう途中だった。  
「先生」

後ろから呼び止められた。振り向くとそこに居たのは、黒髪的美青年・・・澪坂愛斗だった。隣には同じクラスの識神秀人も居た。

「次の授業は入学の体力測定でしたよね。集合場所は演習場ではありませんか？」

「ああ、集合しておいてくれ」

さっきの会話のせいで愛斗が急に恐ろしく上の存在になったのだ。

「秀人、先に行ってくれ。忘れ物をした」

「うん、分かったけど急ぎなよ」

二人はそう言うと言った秀人は演習場へ、愛斗は教室棟の方へ向かっていった。

オスカーは底知れぬ不安で頭が一杯になっていた。

#### 四話 愛斗の素性（後書き）

テスト近いので次回は更新遅れると思います。それと、新小説を同時進行で進めたいと思います。

## 五話 生徒会長の威厳（前書き）

何とか五話目です。今回は生徒会長登場です。物語初めての善人エレメントの登場なので、結構重要なキャラの予定です。

## 五話 生徒会長の威厳

愛斗より先に演習場についた秀人は集合していた全員の視線を浴びた。なんか嫌な雰囲気。そう思っていると、朝の自己紹介の時の赤毛の女子、アルマが近づいてきた。

「あら、ノーマルさんは随分と遅れてきましたわね。お陰で私たちが全員の点呼をとる羽目になってしまいましたわ」

秀人は謝る事しか出来なかった。

「すいませんでした！次からは僕がやります！」

アルマは同情したように首を振り、言った。

「次は無いのよ」

その言葉と同時に取り巻きの連中が近づいてきた。

「さあーで、いたぶってやるぜ！」

一人が言えば、全員がにやりと笑いジリジリと近づいてくる。ピンチだ。秀人は咄嗟にナイフを出した。愛斗からもらったナイフだ。一人が笑い転げる。

「おいおい、そんなちっぽけなナイフで立ち向かおうってのかよ」

「そうだ！エレメントだからって調子に乗るな！」

もう一人がアルマをチラッと見る。アルマは頷いた。

「許可がでた。やっちまえ！」

三人は隊形を変えた。V字になり、にじり寄ってくる。一人が炎の玉を飛ばした。右端の奴だ。秀人はそれをかわし、ナイフを構えなおす。

「なかなかやるじゃねえか」

そう言い、三人とも構えた。これじゃ避けきれない。

秀人は覚悟を決めて構えた。当たらずにこの場を乗り切るのは無理そうだ。その時、左端の奴が倒れた。そいつの後ろに立っていたのは・・・愛斗だ！

「愛斗！今まで何処に？」

「質問は後だ」

そう言い、愛斗は秀人の隣に来た。

「どうした？エレメント共？勝負は終わりか？」

愛斗はエレメントを間違ひなく挑発している。遂にアルマまで、前に出てきた。

「度胸は褒めてあげるわ。でも馬鹿ね。まあ、ノーマルだから仕方ないかしら？」

その言葉が気に障ったのか、愛斗はアルマを蹴っ飛ばした。

「痛っ！何すんのよ！」

「お前達が秀人に喧嘩を売ったんだろう？買ったただけだ」

場の空気は硬直している。秀人の前には二人のエレメントがいる。その時、声が響いた。鈴のように澄んだ声だ。

「ちよつと、貴方たち！喧嘩は禁止よ！教官に言っわよ！」

アルマは舌打ちした。

「生徒会長？相手が悪いわ」

そう言うと、踵をかえして、他の列に戻った。

「貴方たちは大丈夫？怪我してない？」

優しい人だ。秀人は感動してしまった。優しそうな顔立ちをした黒髪のロングヘアーの少女は言った。

「私は南風<sup>みなかぜ</sup> 渚。生徒会長、階級は一等兵で、水のエレメントよ」

秀人は驚いた。エレメントなのにノーマルに優しくしてくれるのか？秀人は素直に感動していた。

「僕は識神秀人。ノーマルです」

そこに愛斗が近づいてきた。かなり腹を立てているらしい。

「おい、お前。何故割り込んできた？エレメントが俺たちの邪魔をするな」

「私は生徒会長よ。争いごとを放っておく訳にはいかないわ」

秀人も愛斗をなだめる。

「助かったんだし、良いじゃん。ね、機嫌直して」

愛斗は抑揚の無い声で言った。

「俺は自分の道を邪魔する奴は許さない。たとえ善人だとしても」  
そう言って、愛斗は歩いていった。秀人は渚の方を見ると、笑った。

「気難しいんだ。気にしないで」

それにしても、愛斗は何故そんなにエレメントを嫌うのだろう。  
秀人もエレメントは嫌いだ、いい人はいいい人、エレメントかノーマルかはその次だ。

まあ、何時か分かるだろう。そう思いながら列に加わった。丁度、オスカーも来た。体力測定の開始だ。

## 五話 生徒会長の威厳（後書き）

次回は体力測定に突入です。ご意見、ご感想お待ちしております。

## キャラ紹介 後から見たほうが良いかも・・・（前書き）

今回はキャラ紹介です。とりあえず今まで出て来たキャラの詳細です。物語が進んで、キャラが増えたり、展開が進めば更新していきます。

## キャラ紹介 後から見たほうが良いかも・・・

識神 しきがみ 秀人 しゅご

年齢：16才 身長：169cm

体重：53kg 趣味・特技：運動全般

詳細：ノーマルの青年で、正義感が強い。運動神経は抜群で、勉強もそこそこ出来る。母を病気で亡くしていて、母の遺言と自分の夢のために朧月学園に入った。初日に愛斗と出会い、親友となる。体力測定の結果は優秀。セドリック戦死などの際に興奮状態になり、恐ろしい戦闘力を見せる。小田原の大乱の際、輸送艇占領部隊になり、ロランと共に司令室を占領するなど手柄を立てた。愛斗の許可を得て、東京に戻り、クローディヌと再会し、正義を説かれ愛斗を救う為に愛斗を倒す事を決意した。その後、東京に戻り復学、生徒会に入った。学園祭の夜襲で愛斗にクローディヌを殺され、復讐を誓う。首都包囲戦では愛斗の紫電改と戦い、敗れた。しかしリリーの救出には成功しており、無事生還した。

澪坂 みおさか 愛斗 あいと

年齢：16才 身長：171cm

体重：49kg 趣味・特技：現時点では不明

詳細：秀人と同じく、ノーマルであり、成績優秀、運動神経も抜群、ルックスも一級の青年。澪坂愛斗は日本で使っている偽名で、本名はヨハン・ジークフリード・ヨゼフィーネ・フォン・ストライダムでストライダム皇国の皇族である。両親を幼いころに謀殺されている。リリーという少女を保護しており、入院費も彼が出している。ギャンブルが得意である。アルマと香奈の謀略を見破るなど、とても勘がいい。セドリック戦死の際には学園長室で連日昇格を掛け合ったりなど、仲間思いである。小田原の大乱の際にアルマと戦い、勝利した。伊豆戦争では見事な指揮を執り、帝国を勝利に導いた。

秀人との一騎討ちに敗れ、紫電ごと海に墜落した。その後、聖域に流れ着き、力を手に入れ、熱海に戻った。その後、学園に転校生ヨハン・コルネリウスとして復学し、秀人を仲間に戻す為にクロードイヌを拳銃で殺害する。首都包囲戦で前線に出て敵を撃墜していくが、コードフェニックスの巻き添えで一時行方不明となる。リリーの死を知り、自暴自棄になっていたがカノンが自分の気持ちを愛斗に伝えたことによりもう一度復帰するが、そのカノンの死により、完全に精神が錯乱した。その後、ヴィルフリートの策略に嵌り、裏切られたところをアルヴィに助けられ、アルヴィの死を看取り、その死に際の思いを受け止め、自分のやるべき事を決意した。

#### アルマ・ベルンシュタイン

年齢：16才 身長：164cm

体重：48kg 趣味・特技：紅茶

詳細：ストライダム皇国出身で、由緒正しきベルンシュタイン伯爵家のお嬢様である。気が強い根っからのお嬢様で愛斗と秀人を快く思っていない。香奈と共謀し、愛斗と秀人を罠にかけようとしたが愛斗に見破られ、ロランとアルヴィのEMAによって失敗に終わった。小田原の大乱の際に副隊長として部隊を指揮、反乱に乗じて愛斗を始末しようとし、愛斗の紫電に一騎討ちを挑むも、敗れ去り戦死した。

#### オスカー・ブルンスマイアー

年齢：59才 身長：179cm

体重：59kg 趣味・特技：EMAの整備

詳細：朧月学園一年四組の主任教官である初老の士官。愛斗の顔に見覚えを感じ、学園長から真実を聞かされる。心の奥では愛斗を恐れている。

みかせ なぎさ  
南風 渚

年齢：18才 身長：168cm

体重：48kg 趣味・特技：デスクワークが得意

詳細：朧月学園の生徒会長。愛斗と同じく成績優秀で、ルックスも一級。体力測定では、斗と並び、E・M・Aでの特別試験を受けるも愛斗に敗れ去る。エレメントだが心優しく、ノーマルやエレメントを気にしない善人である。小田原戦後からは愛斗の事を愛くんと呼び慕っている。生徒会に勧誘したりなどもしている。伊豆戦争時にアルヴィと戦い、敗れた。愛斗が秀人に討たれた時は悲しみ、心を閉ざしたが本来の性格をイヴオンや秀人、クローディヌのお陰で取り戻した。愛斗の正体が明らかになった後、思いを確かめ、愛斗の仲間になることを決意する。

イヴオン・フックス

年齢：16才 身長：169cm

体重：52kg 趣味・特技：スリル満点な遊びなど

詳細：愛斗の古くからの親友。幼少時から一緒に遊んでいたらしい。お調子者で、間の抜けたところもあるが、肝心なときはしっかりしている。本編では容姿説明が足りないのここで補足。髪は水色で黄色い瞳をもつ。髪は長くも無く短くも無く普通である。もちろん日本人ではない。

リリー・ケンプフェル

年齢：14才 身長：151cm

体重：34kg 趣味・特技：出来る事は限られているが、外の空気を吸う事が好き

詳細：明るい栗色の髪のノーマル。第三次世界大戦に巻き込まれ、負傷した少女である。偶然愛斗に助けられ、入院費を出してもらって入院している。愛斗を心から慕っているが、愛斗の前では照れてしまう事が多い。戦争に愛斗が行く事を嫌がっており、必死に止めようとした。首都包囲戦にて行方不明になり、生死は不明だったが、

秀人によつて救出されていた。その後、愛斗の秘密を知り、愛斗と戦う事を決意する。

#### ロラン・ギヌメール

年齢：16才 身長：170cm

体重：54kg 趣味・特技：チェス

詳細：16才のノーマルで、第二ノーマル混成EMA中隊、第二小隊の隊長であり識神秀人の副官を務めている。量産期のストライクパニッシャーを改造したものを愛機としており、同中隊のセドリックとしょつちゆうチェスをしている。人懐っこい性格で裏表がなくさばさばしている。セドリック戦死の際には誰よりも死を悲しみ、当分の間、一人チェスをしていた。アルベルトとの戦いで撃墜されている。愛斗復帰後に帝国六華戦となった。首都包囲戦ではリリー救出任務に当たるが、間に合わなかった。

#### セドリック・シャバンヌ

年齢：16才 身長：172cm

体重：55kg 趣味・特技：ロランと同じくチェス

詳細：ロランと同期の青年であり、中隊参謀長を務める。ロランとチェスをする事は三度の飯より大事らしい。普段は明るい性格だが、戦争は嫌いで死を恐れている。愛機はロランと同じくストライクパニッシャーを改造した者である。階級は曹長。小田原戦で敵の旗艦を沈める際に敵戦線を突破するため、敵部隊に突入し、愛斗に遺言を残し戦死した。遺体は愛斗に引き取られ、愛斗たちの手によつて埋葬された。

#### アルヴィ・ラーファエル

年齢：16才 身長：162cm

体重：51kg 趣味・特技：EMAの整備が得意

詳細：第二中隊所属、第三小隊の隊長。階級は小尉補で愛斗と並ぶ

実力者である。幼い容姿のため、人からは弱く見られるが実はその逆でE M Aの実戦では性格が豹変し悪魔のようになる。一方、手先が器用でE M Aの整備を得意とする。まさにE M Aのプロフェッショナルといえる存在。普段の性格はおとなしく静か。専用機を持っており、機体名はリーフアंक。セドリック戦死の際には悪態をつくなど、普段は見られないような行為も見せた。愛斗を心から慕っている。伊豆戦争の際に渚と一度だけ刃を交えており、撃墜したが殺しはしなかった。愛斗復帰後に帝国六華戦になった。首都包囲戦にて聖霊騎士団団長、ライヒアルトの装甲を貫いたが、直後に撃墜されかけた。リリーやカノンを失い、落ち込む愛斗を励ましたが、逆に愛斗に捨て駒扱いされ、ショックを受ける。しかし、愛斗への思いは変わらず、井崎達の裏切りで愛斗が殺されかけた際には、命令を無視して助けに向かい救出に成功した。しかし、未完成の新型機に乗った影響で体が耐え切れずに、そのまま愛斗に自分の気持ちを伝え、愛斗に看取られて息を引きとった。

#### エルネスト・ストライダム

年齢：29才 身長：179cm

体重：59kg 趣味・特技：芸術鑑賞

詳細：ストライダム皇国の皇族であり、日本エレメント自治区の区長。レオンハルト一世の二番目の息子である。

愛斗とは従兄弟の関係。伊豆戦争の際には討伐軍を指揮した。首都包囲戦にてコードフェニックスの巻き添えとなり戦死した。

はなでら

花寺 香奈

年齢：16才 身長：168cm

体重：45kg 趣味・特技：活花

詳細：アルマや愛斗と同じクラスのエレメント。成績、運動神経も優秀で、アルマと同じく秀人たちノーマルを快く思っていない。アルマと共謀し愛斗と秀人を罠にかけようとするも失敗に終わる。伊

豆戦争の際に、カノンの武神乙式と戦うも敗れて、戦死した。

クローディヌ・ケ・デルブロワ

年齢：17才 身長：171cm

体重：43kg 趣味・特技：猫と戯れる

詳細：秀人たちより一つ年上の生徒。秀人に惚れこんでいる。出会った初日にキスをするなど大胆な面もある。成績は優秀だが、運動神経は壊滅的に無い。大きな屋敷に住んでいて、使用人が五十人近くいる。愛斗の事をとても嫌っていて、秀人には愛斗と関わるなど言ったりもする。愛斗が正体のヨハン・コルネリウスに恋心を抱き、そこを愛斗に利用され銃で撃たれた。最期には秀人に自分の心と意思、お礼を伝え、息を引き取った。

浅代 護暁

年齢：53才 身長：186cm

体重：67kg 趣味・特技：将棋で知性を磨く

詳細：熱海ノーマル解放戦線の司令官。常に身構えており、隙を見せない。落ち着いた判断とその人望で部下からは尊敬されている。井崎薫副司令官と将棋で何度も対局している。愛斗の撃墜により、敗北した後に処刑された。

井崎 薫

年齢：76才 身長：180cm

体重：61kg 趣味・特技：護暁との将棋

詳細：熱海ノーマル解放戦線の老副司令官。穏やかな性格で普通の老人に見えるが腰に常に帯刀しており、護暁と同じく将棋が趣味であり特技。目を見開いた時の威圧感は猛禽類の様である。愛斗復帰後に帝国宰相となった。首都包囲戦ではドレッドノート内で指揮を行っていたために直接は巻き込まれなかった。ヴィルフリートの策略にかかり、愛斗を裏切った。

浅代 海音 あさしろ  
かのん

年齢：14才 身長：149cm

体重：42kg 趣味・特技：家庭菜園が趣味

詳細：浅代護暁の娘でEMAのエースパイロット。EMAの操縦技術は軍一であり、同時に頭の良さも兼ね合わせる。愛斗に忠誠を誓い、閣下と呼ぶ程に慕っている。伊豆戦争の際には香奈と戦い、見事に撃墜している。愛斗行方不明時には誰よりも心配していた。愛斗復帰後には帝国六華戦になり、愛斗の副官ともなった。愛斗のリリースの次に大切な人。戴冠パレードの際に、銃撃から愛斗を守り、息を引き取った。

ライヒアルト・イエブラム

年齢：51才 身長：183cm

体重：56kg 趣味・特技：部下とのティータイム

詳細：聖霊騎士団団長であり、大柄な初老の男性である。白髪が混じったその風格は見るものを震え上がらせる。敵にとっては戦場で最も会いたくない相手である。アルヴィに初めて装甲を貰われた。

レオンハルト・ストライダム

年齢：39才 身長：179cm

体重：53kg 趣味・特技：読書

詳細：ストライダム皇国の皇帝であり、かなりの野心を持っている。愛斗の親族の殺害を命じたのも彼である。

アルベルト・カペーチエ

年齢：31才 身長：182cm

体重：51kg 趣味・特技：敵との戦い

詳細：聖霊騎士団の一員。戦争を生きがいにしており、EMAで敵を切り裂く瞬間が至福の瞬間の異常者でもある。仲間に対する信頼

も無く、聖霊騎士団にいるのは戦いだけが目的である。愛機はナイトメアラヴィリンス。カノンの武神乙式と戦うも敗れ去り、戦死した。

最神もがみ撫子なでしこ

年齢：不明 身長：172cm

体重：49kg 趣味・特技：不明

詳細：聖域に閉じ込められていた謎の少女。自分は神である、のような事を言ったが、詳しくは不明。愛斗に謎の取引を持ちかけ、力を与える。人間では無いらしい。

厭いと海星かいせい

年齢：43才 身長：179cm

体重：57kg 趣味・特技：E M Aでの戦闘が得意

詳細：帝国六華戦の一人で、愛斗の副官を務める。屈強な精神と肉体を持ち、第三次世界大戦ではノーマル軍を幾つもの勝利に導いた。ノーマル敗北後は熱海で反対派に入り、愛斗の指揮下に入った。親衛隊のクリスとの戦いでは引き分けとなった。

柏かしわカリヌ

年齢：19才 身長：168cm

体重：47kg 趣味・特技：スポーツ

詳細：帝国親衛隊の一人で、女性だが腕は海星とほぼ同等。強気で戦闘好きな性格だが、根はいい人。喧嘩っ早い所があり、カノンとは言い合いになる事もしばしば。大抵はカノンが負ける。ストライダム皇国には兄がいるらしい。

ヴァランティヌ・シャルトル

年齢：29才 身長：181cm

体重：59kg 趣味・特技：水泳

詳細：帝国指揮下に入った元陸軍所属の士官。E M Aの操縦が得意。水泳はオリンピックを狙えるほどの腕前。性格は温厚である。首都包囲戦にてコードフェニックスに巻き込まれ戦死した。

あさくら  
朝倉 宗治

年齢：31才 身長：178cm

体重：54kg 趣味・特技：機械とかの整備

詳細：帝国親衛隊青龍隊隊長。愉快な性格で、仲間思いである。E M Aの操縦技術も一流。コードフェニックス発動時に退却命令を無視し、追撃をかけた為戦死した。

みなみの  
南野 辰

年齢：29才 身長：176cm

体重：52kg 趣味・特技：読書

詳細：帝国親衛隊白虎隊隊長。落ち着いた性格の持ち主。朝倉と同じく命令を無視し、追撃をかけたため戦死した。

あずま  
吾妻 百合華

年齢：23才 身長：169cm

体重：48kg 趣味・特技：口が上手い

詳細：帝国親衛隊朱雀隊隊長。豪快で気のいい女性である。首都包囲戦にて退却が間に合わずに戦死した。

ジェラルド・カーペンダー

年齢：31才 身長：184cm

体重：59kg 趣味・特技：トランプのポーカー

詳細：聖霊騎士団の一員。茶髪の好青年で、秀人と直ぐに親しくなった。E M Aの腕は超一流で、団長や仲間からの信頼も厚い。愛斗の紫電改に敗れた。愛機はヴァジラ。

## カミーユ・ドルゴポロフ

年齢：17才 身長：159cm  
体重：42kg 趣味・特技：不明

詳細：聖霊騎士団の一員。幼い顔立ちをしているが、EMAの腕は超一流である。仲間からはマスコットとして、親しまれ、本人も満更でもない様子。過去に愛斗と面識がある。

## 鳳凰院 絢ほうおういん あや

年齢：15才 身長：157cm  
体重：43kg 趣味・特技：接客や対人関係の事が得意

詳細：若くして関西連合の盟主となった少女。愛斗の紫電改の実力を見せ付けられ、愛斗にも紫電にも惚れ込み、愛斗率いる新生大日本帝国と同盟を組む。

## ヴィルフリート・ストライダム

年齢：20才 身長：182cm  
体重：58kg 趣味・特技：チェスが得意

詳細：皇国軍総参謀であり現在の皇位継承者の第一候補。豊かな知性と恐るべき頭脳を持ち合わせる。人徳がある人物のように見えるが中身は野心の塊である。愛斗と並ぶ戦略家。コードフェニックス発案者。

## 柏かしわ シルヴェストル

年齢：19才 身長：179cm  
体重：56kg 趣味・特技：写真を撮る

詳細：聖霊騎士団の一員。カリィヌの双子の兄。本人はノーマルに対する偏見を持っていないが自分がエレメントの為、妹のカリィヌあらは酷く恨まれている。

## フェリクス・バウアー

年齢：21才 身長：180cm

体重：57kg 趣味・特技：ヴィルフリートとの談話

詳細：皇国副参謀であり、ヴィルフリートの副官。頭脳明快で明るい性格である。

ニコライ・アンドロポフ

年齢：26才 身長：181cm

体重：56kg 趣味・特技：不明

詳細：聖霊騎士団の一員。愛斗の紫電と戦い、しつこく追跡するがフェニックスに巻き込まれて戦死した。

ナーシャ・ギルマン

年齢：18才 身長：167cm

体重：46kg 趣味・特技：特に無い

詳細：聖霊騎士団の一員。EMAの腕は団長と同等の凄腕である。戦いの時には闘争心を剥き出しにし、敵を圧倒する。彼女の愛機のテルピッツも超精鋭機で騎士団の切り札的存在である。

ギレーヌ・ストライダム

年齢：21才 身長：171cm

体重：48kg 趣味・特技：剣技

詳細：ストライダム皇族の一人で東部方面軍総司令官を務める。女性にも関わらず前線に出てEMAで戦うなど、男勝りの豪傑である。

クリス・ベイカー

年齢：35才 身長：182cm

体重：61kg 趣味・特技：クラリネット

詳細：ギレーヌ親衛隊隊長を務める男性。厭海星とは訓練所時代の同期で腕はほぼ互角。首都包囲戦でフェニックスに巻き込まれ行方不明。

リー・シューミン  
李 瞬敏

年齢：32才 身長：172cm

体重：49kg 趣味・特技：中国拳法

詳細：ギレーヌ親衛隊副隊長を務める女性。クリスを尊敬している。  
中国拳法が得意で女とは思えぬ豪傑。首都包囲戦で戦死した。

さかもと みお  
坂本 澪

年齢：享年19才 身長：164cm

体重：43kg 趣味・特技：料理、家事全般

詳細：日本にやって来た愛斗の専属メイド。家事を何でもこなすスパーメイドであり、同時に戦闘能力も高い。愛斗に対し、親身になってアドバイスするなど母親の様な一面もある。大本営陥落時に戦死した。

ライナー・ドレスラー

年齢：57才 身長：175cm

体重：54kg 趣味・特技：家事

詳細：愛斗の皇子時代の専属執事。愛斗の両親が殺された時には自分の身を持って愛斗の亡命を助けた。現在の生死は不明。

マリア・ストライダム

年齢：18才 身長：163cm

体重：41kg 趣味・特技：舞踊、ピアノ

詳細：ストライダム皇国第四皇女であり、皇族内での唯一の愛斗の味方。愛斗の両親が謀殺された夜に運悪くその場に居合わせてしまったため、大怪我を負った。現在の生死は不明。

## 六話 体力測定と生徒会長（前書き）

六話目です。前はキャラ紹介でしたが、今回は本編です。サブタイトルに最近悩んでいます。

## 六話 体力測定と生徒会長

全員が起立し、気をつけをして立っている。オスカーは咳払いをした。

「えー、これから体力測定を始める。君たちが知っている通りこの体力測定は君たちの階級、配属部隊を決める大切なものだ。心して受けるように」

はい、と全員が返事をする。オスカーは忘れていた事を付け足した。

「あ、言い忘れていたが、このテストは悪魔で自分の実力をテストするものである。よって、エレメントは能力の使用を禁止する。文句はあるか？」

「ありません」

全員が声をそろえて言った。

「よし、では早速、開始する。最初のテストは持久力をテストする。全員、位置につけ」

秀人は笑みを浮かべた。

「（マラソンだったら、いけるかも・・・）」

競技用ピストルの音が鳴った。スタートだ。

秀人は颯爽と走り出した。たいていのエレメントは足が遅いようだった。先頭は愛斗。その次に秀人でアルマ、その他エレメントと続く。ちなみに生徒会長は五位だ。

一週目を走り終わったところには、後ろの方のエレメントはばてていた。

「どうした！それでも士官候補生か！」

オスカーが叫んでいる。結局、四周を走りぬいたのは、先頭の十人だけであった。

「君達には体力がないようだな。なるほど」

オスカーは手帳にメモしている。こうして配属部隊を決めるらし

い。

「なあ、愛斗？楽勝じゃないか？」

「エレメント共が遅いだけだ」

そう言い、ごろんと横になった。

「次は、基礎的な体力を測る。ついて来い」

そう言っ、連れてこられたのは、室内であった。スポーツジムに置いてあるような器具がたくさんある。

「よし、始め」

全員がそれぞれの場所に並び測定を開始した。

「余裕過ぎない？この体力測定」

「そりゃ、そうだろう」

一通り終わらせた愛斗はコーラを飲んでいた。

「集合！」

オスカーが叫んだ。全員が素早く集まる。

「このクラスは出来が悪い者が多い。しかし、一部、優秀な生徒もいる。今から名前を読み上げる」

そう言っ、手帳をめくり名前を読み上げた。

「秀人。アルマ。香奈。リーファル。ナタリー。ルネ。ヤコフ。ロドルフォ。以下の八名は非常に優秀」

しかし、とオスカーは続けた。

「さらに優秀な二人を発表しよう。澁坂愛斗。南風渚。この二人はとても優秀だ。よっ、この二人には特別試験を受けてもらいたい」  
愛斗は何食わぬ顔で言った。

「いいですよ」

「私がかまいません」

うむ、と頷き、オスカーは兵士を呼んだ。兵士と共にやってきたのは・・・本物のEMAだ！

「これは我がストライダム皇国正式採用のEMAである。機体名は「ストライク・パニッシャー」だ。これから二人にはこれに乗って戦ってもらう」

他の生徒は驚いた声で上げた。

「先生、私はE M Aの操縦経験がありません。不可能です」  
渚が反論した。

「心配はいらん。この機体は訓練用だ。操縦はできる」

「で、でも・・・」

愛斗は涼しい顔で言った。

「いいでしょう。やりますよ」

愛斗はストライク・パニッシャーに近づいた。渚も仕方なく頷いた。

「よし、では乗りたまえ。乗り方はそのハッチを開けて中のコックピットに入るだけだ」

二人が乗り込むと、顔の部分が光った。そして、向き合う。

「用意は良いかね。他の生徒は離れなさい」

そう言い、オスカーも離れる。

「では、始め！」

その言葉と同時に、愛斗の機体は、背中のブースターで飛びあがった。上から渚の機体にパンチを叩き込む。渚の機体がバランスを崩し、倒れた。愛斗は背中からE M A専用の小銃を構え、渚の機体に撃ちこんだ。

目の光が消え、渚の機体は動かなくなった。

「勝負あり！そこまで！」

オスカーは渚の機体に走り寄り、ハッチを開け、気絶した渚を運び出した。愛斗も機体から出て来た。

「もう終わりですか。手ごたえが無いですね」

オスカーは渚を兵士に渡すと、生徒たちの方を向き直った。

「今日はこれにて解散！教室に戻れ！あと、愛斗は私のところに来なさい」

愛斗は秀人に近寄ると言った。

「先に教室に行ってくれ。お呼びがかかった」

「なあ、愛斗？お前、E M A乗った事あるのか？」

愛斗は頷いた。

「まあな。少しだけだ」

秀人は感動した。

「何だ。最初に言ってくれよ！今度、操縦方法を教えてくれ」

「別にかまわないが」

「やった！ありがとう！じゃあ、先に帰るね」

秀人は嬉しそうに走っていった。

「明るい奴だな・・・」

愛斗は呟いた。その後、オスカーの所へ向かった。

「何用でしょうか？」

オスカーはズバリと切り出した。

「君は操縦経験があるんだな？」

「はい」

「そうか、明日、所属部隊の発表があるんだが君は恐らく、中隊長ほどの位に抜擢されるだろう」

愛斗は頭を下げた。

「ありがとうございます」

「うむ、帰ってよいぞ」

愛斗はもう一度頭を下げ、戻っていった。

「零坂愛斗・・・私は彼が怖いのか？前に立つだけで、足の震えが止まらない。彼の本性が掴めない・・・」

オスカーは一人、呟いた。

## 六話 体力測定と生徒会長（後書き）

余談ですが、これを更新するちょっと前まで落雷による停電で電化製品が全部使えませんでした。そこで自転車以外に出てみたらどうやら停電が長引いてるのは家の近所だけでした。他の場所は復旧してるのに家の近所はなかなか復旧しなくて、結局、三時間近く停電が続いてました。近くのスーパーとか真っ暗で、中に入ったら、アイムレジェンドのダークシーカーでも出てくると思いました。信号とかも消えて結構、混乱してました。

## 七話 夕陽の病室（前書き）

テスト前の更新はなかなか大変ですね。という事で七話です。

## 七話 夕陽の病室

秀人は校門の前で愛斗と別れた。

「愛斗！今日は七時に集合でいいんだよな」

愛斗は頷いた。

「場所は覚えてるな？」

「新池袋ステーション第七地下道出口でオーケー？」

「ああ」

そう言い、愛斗は秀人の帰る方向とは逆の方向に歩いていった。

「一日でここまで仲良くなれるとは思っていなかったな。心強いね、友達がいるってのは」

秀人は愛斗の後姿を見ながら独り言を呟いた。

愛斗は夕暮れの商店街を歩いていた。ここの商店街は日本が日本エレメント自治区となり、近未来化した後でも昔と変わらない数少ない場所の一つである。そのためここに住んでいる人々のほとんどがノーマルだ。しかし今、愛斗の目的はこの商店街では無い。この先の新渋谷にある区立病院である。

愛斗は商店街の一角の花屋に入った。何時ものいきつけの場所である。愛斗は店員の女性に声をかけた。

「美弥さん。何時もの花束ありますか？」

美弥と呼ばれた女性店員はにこやかに笑って言った。

「もちろんあるよ。そろそろ来る頃だと思ってるね」

愛斗は礼を言った。

「いつもありがとうございます。なんだか気を遣わせてるみたいで・  
・」

「いいのよ。気にしないで。リリーちゃんは元気？」

「元気ですよ。心配しないで下さい」

愛斗も笑って返した。学校では絶対見せない無邪気な幼さが残る

笑顔。美弥は花束を愛斗に渡した。愛斗はポケットから千円札を出し、渡した。

「おつりはいりません。いつも前もって用意して頂いていますので」  
愛斗は最後にもう一度お礼をし、新渋谷に向かって歩いていった。

区立ニュー渋谷病院は自然公園の中にある大きな病院である。新渋谷はエレメントが人口のほとんどを占める完全なエレメントの街だった。そんな区立ニュー渋谷病院第二入院病棟の八 三号室にリリー・ケンプフェルは入院していた。

リリーは夕方の日がぼんやりと差し込む病室から、目の前の自然公園を何時ものように眺めていた。リリーは左足が動かない。視力もほとんど無く人の顔もぼんやりとしか認識できない。原因は八年前の爆撃である。吹き飛ばされ、頭を強打し左足が動かなくなり、粒子爆弾の光を目に直接浴びたため、視力もほとんど失った。治せない訳ではないが身寄りもいないため治療費が出せない。かろうじて入院出来るのは、愛斗のお陰であった。

リリーが少し視線を落とすと同時に病室のドアが開いた。

「どちら様ですか？看護婦さん？」

少しの間を開けて、声が返ってきた。

「俺だ。愛斗だ」

その名前を聞いた途端、リリーの顔がぱつと輝いた。先ほど外を眺めていた寂しそうな表情とは対照的な表情であった。

「愛斗さん？本当に？」

ああ、と声が聞こえた。

「面会時間ギリギリだった。今日は花を持ってきてやったんだ」

そう言い、ベッドに近づき花瓶に花を挿した。リリーは頬を赤らめて言った。

「愛斗さん、手を握ってください」

すぐにリリーの手に暖かい手の感触が伝わる。

「これで良いか？」

「ありがとうございます。その・・・寂しかったんです。ずっと・・・」

照れて、頬が更に赤くなっている。夕陽を受けて明るい栗色の髪が更に明るく輝く。

「今日から新しい学校だったんだ。イヴオンも俺と同じ学校だ。これから会う約束もしているしな」

リリーは楽しそうに笑った。

「イヴオンさんですか？以外ですね。そんな性格には見えないです」

愛斗も笑っていた。

「そうだろ。俺も言っちゃったんだ。もっとなよなよした奴だと思っただぞ、てな」

「愛斗さんの楽しそうな声を聞いている時が一番楽しいです」

リリーは心からそう言った。

「もう一人、いい奴がいたぞ。名前は秀人、心優しい奴だ。きっとお前とも気が合うぞ」

そして、愛斗は真顔になった。

「なあ、リリー。調子はどうだ？視力は回復したか？」

リリーは首を横に振った。

「駄目です。お医者さんもこればかりは手術しないと、どうにもならないらしいの」

愛斗はリリーの手をもう一度握り、更にその手に力をこめた。

「リリー、何時か俺がお前に手術を受けさせてやる。約束する」

リリーは悲しそうに笑った。

「別に私はこのままでも構いませんわ。愛斗さんがいてくれれば」  
愛斗は更に強く言った。

「絶対だ。絶対に治してやる。それまで我慢してくれるか？」

リリーは頷いた。

「はい、待っていますわ」

その時、看護婦の声が聞こえてきた。

「澁坂愛斗さん？面会時間は終了ですよ。お帰りください」

「分かった。今、帰る」

そう言い、愛斗はリリーの額に優しくキスをした。

「それじゃあ、また今度な」

リリーは微笑んだ。

「はい。今日はわざわざ来てくださってありがとうございます。お陰で楽しい一時を過ごせましたわ」

愛斗は微笑んで、

「俺も楽しかった。じゃあな」と言い、病室を出た。  
リリーはまた窓の方を向き、一人涙を流した。

## 七話 夕陽の病室（後書き）

いつか、兵器紹介もやりたいと思います。まあ、出来たらですけど・  
・・。

後、ご意見、ご感想をお待ちしております。

## 八話 リヴァーサルカジノ（前書き）

今回、ストーリーは進行しません。只の小話みたいなものです。

## 八話 リヴァーサルカジノ

時刻は午後六時五十五分。秀人は言われた通り、新池袋ステーション第七地下道出口で愛斗とイヴオンを待っていた。

新池袋もエレメントが多い。駅前を歩く人を見ててもほとんどがエレメントだ。

「何か居心地悪いな・・・」

秀人がそう呟くと同時に聞き覚えのある声が聞こえた。振り返ると、愛斗がいた。

「来るのが早いな秀人。待ったか？」

秀人は笑いながら言った。

「いや、まだ来たばかりだよ」

「そうか、イヴオンは来たか？」

秀人は首を横に振った。

「まだだよ」

愛斗は反対側の通りを見た。

「あいつはバイクで来ると思うんだが・・・お、来たな」

秀人も反対側の通りを見た。轟音と共に大きめのバイクがやってきた。バイクは愛斗の脇に止まると、イヴオンがバイクから降りた。

「お二人さん、待ったかな？」

「五十九分三十二秒、ギリギリつてとこだな」

愛斗は時計を見ながら呟いた。秀人はバイクを撫でながら尋ねた。

「ねえ、これで僕たち移動するの？」

「ああ、歩きより楽だぞ」

イヴオンが秀人と同じ様にバイクを撫でながら言った。その時、駅前の上空を巨大な戦艦が通った。戦艦からスピーカーを通して、声が聞こえてきた。

「新池袋地区のエレメントの皆さんにお知らせがあります。只今、旧中野から練馬にかけて暴動が発生しております。そのため、新有

楽町線、西武池袋線、区営大江戸線は運行停止となります。尚、暴動はすぐに鎮圧されますのでご安心ください。繰り返します・・・」  
秀人達三人はずっと上を見ていた。そして、イヴオンが悪態を放った。

「何が暴動だよ。お前らに押さえつけられて支配されてきたノーマルのレジスタンスじゃねえか」

愛斗も頷いた。

「大方、レジスタンスの煽動で暴動を起こしているんだろう。何時もの事だ」

イヴオンが周りの群集を見回して呟いた。

「俺たちもここで暴れるか？」

愛斗は苦笑した。

「おい、イヴオン。お前が暴れるのは構わんが、仕事はどうする？」  
イヴオンが思い出したように言った。

「そついや、そうだったな。早く行こうぜ」

そつ言い、バイクに飛び乗った。

「お前らも早く乗れ」

愛斗はぴょんとイヴオンの後ろに飛び乗った。秀人も愛との後ろに飛び乗る。

「よし！飛ばすぜ！しっかり掴ってな！」

そつ言った瞬間、バイクは飛ぶように走り出した。

「うおっ、早っ！」

愛斗は慣れてるような口調で言った。

「また改造したのか？懲りない奴だ。それでこの前、事故っただろ？」

イヴオンは笑った。このスピードの中で笑えるのはかなり難しい事だ。

「男は冒険が大事なんだよ！冒険が！」

愛斗は呆れたように首を振った。

「それをただの馬鹿と言うんだ。いい加減、安全運転を心がける」

しばらく走り、駅前とは違う雰囲気の通りに入るとイヴオンがブレーキをかけた。そして、止まる。

「ついたぜ、ここが「リヴァーサル・カジノ」だ」

バイクを降りた三人は店の中に入った。秀人は恐る恐るイヴオンに尋ねた。

「もしかして、もしかしてけど・・・ここで遊ぶ気？」

愛斗は頷いた。

「半分正解だ」

イヴオンは入り口のカウンターに座り、叫んだ。

「マスター！ロドルフォさん！イヴオンだけど、愛斗連れてきたよ！」

すると、奥のカーテンからがっしりとした男性が出て来た。

「イヴオンか？愛斗を連れてきてくれたのか！助かった！」

イヴオンは分かっているとでも言った口調で言った。

「で、おじさん。何番テーブル？」

マスターは後ろの掲示板を見て言った。

「依頼主は三番テーブルだ。早く行ってやれ」

イヴオンは頷いた。

「了解。マスター。皆、行くぞ」

イヴオンは二人を先導するように先に歩き出した。そして、三番テーブルについた。三番テーブルでは、一人の中年ノーマルがエレメントにポーカーで負けていた。

イヴオンは後ろから話し掛けた。

「ファウストさん。愛斗の登場です」

負けていたファウストは急に顔をあげた。

「おお、待っていたぞ」

ファウストが席を立つと、代わりに愛斗が座った。

エレメントの親父はにやりと笑った。

「ほお、見たところ賢そうだな。相手にとって不足はないということか」

愛斗は抑揚の無い何時もの声で言った。

「さつさと始めるぞ」

エレメントの親父はにやりと笑った。

「いいだろう」

十分後、ファウストは愛斗のお陰で失った金額を取り戻し、更にその倍を稼いだ。エレメントの親父は床に崩れ落ち、うわ言のように呟いた。

「馬鹿な・・・こんな餓鬼に私が負けるとは・・・」

愛斗はふん、と鼻を鳴らした。

「相手が悪かったな」

驚いている秀人を尻目にして、イヴオンは愛斗の肩に手をまわした。

「いやあ、何時も通りの腕前だな」

「なに、奴は考えが浅すぎる。ただ、それだけの事だ」

秀人は愛斗にぼそつと言った。

「僕には何がなんだか分からなかったよ」

愛斗は秀人に向かって微笑んだ。

「何時か分かるようになるさ」

秀人はその時思った。できたら分かりたくない、と。

カジノを出ると、冷たい都会の夜風が頬に当たり、熱気のあるカジノの汗を流してくれた。

## 八話 リヴァーサルカジノ（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしております。

## 九話 能面の百鬼（前書き）

ようやくテストが終わりました。ということでは九話目です。ちなみにサブタイトルの百鬼はびゃっきと読みます。

## 九話 能面の百鬼

現在時刻午前一時三十七分。練馬駅周辺では暴動が発生していた。練馬駅構内に立て籠もるレジスタンス、石田雄一大尉以下三名は激しい攻撃を受けていた。

石田大尉は構内に侵入してきた敵兵にサブマシンガンで乱射した。  
「くそっ！俺のマガジンはこれで最後だ！」  
隣のレジスタンスも叫んだ。

「俺もです！」

悪態をつき、石田大尉は叫ぶ

「全員撤退！三百メートル後退するぞ！」

四人はプラットホーム目掛けて走り出した。後ろからは銃弾が引っ切り無しに飛んでくる。石田大尉は手榴弾を投げつけた。爆音と同時に敵の叫び声が聞こえた。

「隊長！敵に回りこまれました！」

石田大尉が周囲を見回すと、確かに敵に囲まれていた。

「突破しろ！」

石田大尉は叫び、最後の手榴弾を投げつけた。他の隊員も投げる。僅かだが敵が崩れた。

「今だ！」

四人は手の小銃を乱射した。

「敵の包囲が崩れた！今だ！行け行け！」

四人は何とか切り抜けたが安心も束の間、敵はスクーターで追ってきた。石田大尉は逃げ切れない事を悟ると隊員に叫んだ。

「お前ら！先に行け！俺が時間を稼ぐ！」

一人の隊員が立ち止まった。

「しかし、隊長が・・・」

「相談している時間は無い！行け！」

隊員は頷くと走っていった。その瞬間、銃弾が頬を掠った。

「ぐわっ！」

驚いて倒れた石田大尉に敵が詰め寄った。

「目標を一人確保。射殺します」

銃口が一斉に石田大尉に向けられた。石田大尉は覚悟を決め、目を閉じた。しかし、その時、敵は後ろから何者かに撃ち殺されて地面に転がった。石田大尉は目を開けその人物を見た。石田大尉は驚いた。その人物は鬼の能面を被っていたのだ。鬼の面の目の部分からは冷たい視線が覗いていた。

「お前は何者だ？」

能面の人物は抑揚の無い声で言った。

「能面の百鬼とでも言っておこう。お前たちの味方であり、エレメントの敵だ」

その声で男だと分かったが、顔は全くわからない。

「では、レジスタンスなのか？」

能面の百鬼は答えた。

「違う。レジスタンスではない。それに今は話している場合ではない」

能面の百鬼の後ろには敵兵が迫っていた。

「早く逃げた方がいい」

石田大尉は頷いた。

「恩に着る。この恩は何時か必ず返すぞ」

石田大尉は闇の中へと走り去っていった。敵兵は能面の百鬼に銃口を向けた。

「手を挙げる！さもなければ射殺する！」

能面の百鬼は腰の鞘から日本刀を抜いた。

「相手になってやろう」

敵兵三人は笑い転げた。

「おいおい、そんな刀で俺たちと戦おうって言うのか？笑わせるな！」

一瞬のことだった。敵兵の後ろに回りこんだ能面の百鬼は敵兵三

人を一気に切り捨てた。敵兵三人は地面に倒れた。すでに絶命している。能面の百鬼は抑揚の無い声で言った。

「相手が悪かったな・・・」

能面の百鬼は一飛びで、鉄塔の上に登った。周囲の様子が良く見える場所だ。そこで能面の百鬼は能面を取った。その下の顔は見覚えのある顔だった。そう、澁坂愛斗である。

愛斗は火災があちこちで起きている市街を眺め、呟いた。

「戦況はエレメントに有利か・・・。せめてもう少し、頭数だけでも減らしたくか・・・」

愛斗は再び能面を付け、市街の方へ向かっていった。能面の横顔は月を受けて輝いていた。

## 九話 能面の百鬼（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 十話 配属部隊決定（前書き）

祝、十話目です。大した事無いけど・・・

## 十話 配属部隊決定

リヴァールサルカジノで人助け？をした秀人は完全に寝不足だった。校門をくぐると丁度、イヴオンとあった。

「おお、秀人くんじゃないか！昨日の感想は？」

秀人は苦笑いを浮かべた。

「酷い寝不足だ」

イヴオンは満足そうに頷いた。

「最初は誰だってそうさ。何、すぐに慣れるぜ」

秀人はイヴオンに愛斗について尋ねた。

「なあ、イヴオン？「彼女」って誰だ？」

イヴオンは思い出したように言った。

「そういえば、そんな事言っただな……。まあ、愛斗から直接聞けばいい」

秀人は顔をしかめた。

「結構、聞きにくい事なんですけど……」

イヴオンは大口を開けて笑った。

「別に大した事じゃないぜ。聞いてみる」

秀人は頷いた。

「うん、聞いておく」

イヴオンとは教室の前で別れた。教室に入ると昨日のような冷たい視線はなかった。愛斗はすでに来ていて、机で寝ている。秀人は近づき、声をかけた。

「愛斗？起きてる？」

愛斗は机に突っ伏したまま答えた。

「寝てる」

「いや、喋ってるし……。起きてるだろ」

愛斗は渋々、顔を上げた。

「何か用か？」

「いや、大した事じゃないんだけどね、昨日、イヴオンが言ってた。ほら、彼女が何とかって、あれって誰の事かな？って思ってた。いや、別に答えたく無ければ答えなくてもいいけど・・・」

秀人はもじもじと言った。愛斗は即答した。

「今度会わせてやる。だから寝させてくれ」

秀人は驚いたが、あえて、突っ込まずそのまま寝かせた。

五分後、鐘がなり、オスカーが教室に入ってきた。

「えー、配属部隊が決定したので発表する」

全員が静かになった。オスカーは咳払いをして続けた。

「まず、ほとんどは後方の補給部隊の士官候補生だ。昨日のテストで優秀だった者、識神秀人くん。君は第二ノーマル混成E M A中隊、第一小隊隊長に任命された。期待しているぞ」

周りから拍手が飛ぶ。秀人も正直に驚いていた。学生で小隊長は破格の出世だ。

ちなみに、E M A部隊は十機で一小隊だ。小隊が六隊集まって、中隊。中隊が三隊で一大隊。大隊が三隊で旅団、もしくは師団である。

「次に湊坂愛斗。君は優秀なため、第二ノーマル混成E M A中隊長だ。頑張ってくれたまえ」

他の生徒がどよめいた。それもそのはず、学生が中隊長はまずありえない。秀人も聞いたことが無かった。しかもノーマルなのに。

他にも次々と名前が呼ばれていく。昨日のテストで優秀だったほかのエレメント達は、全員同じ部隊だった。

「以上だ。これからは訓練に励むように」

そう言い、オスカーは教室を出て行った。秀人は座席を立ち上がり、愛斗の席へと行った。

「愛斗。いや、愛斗殿かな？上官だからね」

そんな事を言っている秀人に愛斗は一言、こう言った。

「秀人、最初に言ったが俺に敬語を使うな。これは上官からの命令だ」

秀人は笑いながら言った。

「はい、命令とあらば仕方ありませんな」

愛斗は席を立った。

「イヴオンの配属も聞いてくるか」

愛斗はイヴオンの教室に向かった。教室の前で叫ぶ。

「イヴオン！配属部隊を教える！」

すぐにイヴオンが出て来た。

「何だ？中隊長？何か用か？」

愛斗と秀人は顔を見合わせた。

「噂の広がり早いね」

愛斗も頷く。

「全くだ」

イヴオンが説明した。

「教官が言ってたんだぜ。中隊長が学年にいるから見習え！って」

「お前は何処の配属だ？」

愛斗がイヴオンに聞いた。

「俺は情報戦略科の士官候補生だ。下っ端の下っ端さ」

愛斗が皮肉な笑みを浮かべた。

「お前は機械をいじるのが好きだったからな。ぴったりじゃないのか？」

イヴオンはじろつと愛斗を睨んだ。

「別になりたくて、なったわけじゃない」

秀人は理解した。どうやら、機械についての話題はイヴオンにとってはタブーらしい。

「それより早く訓練場に行くぞ。部下が待ってる」

秀人も頷いた。いよいよ本格的な訓練が待っているはずだ。

## 十話 配属部隊決定（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております

## 十一話 第二中隊のメンツ（前書き）

十一話目で新キャラ登場します。

## 十一話 第二中隊のメンツ

愛斗と秀人はイヴオンと別れ、訓練場に向かった。新入生はたいてい、こういった感じに顔合わせをする習慣になっている。訓練場には百人近くの学生兵士がいた。どれもE M Aの搭乗者だ。

学生兵士の一人がこちらに気づいた。そして、叫ぶ。

「全員！新中隊長に敬礼！そして、第一小隊新隊長に敬礼！」

秀人は呟いた。

「一応、上級生もいるんだよね？」

愛斗は頷いた。

「しかし、この学校では階級がものを言う。年齢は二の次だ」

「でも、僕たちまだ階級なんてもらってないよ」

学生兵士の一人が前に出て来た。

「えー、本日付で我が第二ノーマル混成E M A中隊の隊長に任命された澁坂愛斗中尉殿、同じく同中隊、第一小隊長に任命された識神秀人軍曹殿へ敬意をこめてお祝いたします」

愛斗は感じのいい笑みで言った。

「ありがとう、君の名前は？」

学生兵士の一人の茶髪の青年は元気よく言った。

「第二小隊長のロラン・ギヌメール伍長です。識神軍曹と一緒に愛斗中尉の補佐をさせていただきます」

金髪の青年も愛斗に手を差し出してきた。

「中隊参謀長のセドリック・シャバン又曹長です。隊の副官を務めさせてもらいます」

愛斗は書類を見ながら頷き、呟いた。

「第三小隊長は？」

すると、奥のE M Aを整備していた黒髪の少年が顔を上げた。顔はまだ子供だ。とても幼く見える。

「君の名前は？」

少年は立ち上がり、敬礼した。

「はい、第三中隊隊長のアルヴィ・ラーファエル小尉補です。えっと、よろしく願います。新中隊長殿」

愛斗は素直に驚いた。秀人に至っては口をあんぐり開けて、素っ頓狂な声を出した。

「小尉補？君みたいな子供が！？」

「失礼ですが、貴方方より年上ですよ」

セドリツクはニヤニヤ笑っている。

「愛斗さん、こいつはE M Aの実戦となると性格が豹変して、夜叉みたいになるんですよ」

ロランが教えてくれた。

「そうか、期待しているぞ」

後の面子は黒髪ロングヘアの第四小隊隊長ブルーノ・アルマーニなど、かなり、有能だ。

「この部隊は優秀だな。素晴らしい」

愛斗は感心した。ロランは秀人の肩を叩いた。

「秀人隊長？貴方の専用E M Aが上の方から支給されていて……まだ試作品らしいんですけど、試験飛行ということで貴方が乗って良いらしいです。もし、気に入れば貴方の者になりますし……どうですか？」

秀人はすぐに頷いた。

「もちろん！専用機を持つことが憧れだったんだ！」

ロランは満足そうに頷いた。

「じゃあ、こちらへ」

そう言い、案内された格納庫には青と金を基調とした中型のE M Aがあった。

「すごい！精鋭機じゃないか！こんなのに乗っていいの？」

ロランは頷く。

「はい。貴方の物ですよ。試験飛行ですけど……ちなみに機体名は「スピッツ・オブ・ファイア」ですよ」

秀人は感激のあまり涙を流した。

「かつこいい！最高！」

秀人はロランに尋ねた。

「君達は専用機無いの？」

ロランは恥ずかしそうに言った。

「まあ、専用機と言う程ではないけど、量産機のストライク・パニッシャーを強化したやつを使ってますよ。この中隊で専用機を持つてるのは貴方と中隊長とアルヴィくらいですから」

秀人は愛斗の専用機も見たくなった。

「愛斗のはどれ？」

そこへ丁度来たセドリックがロランに言った。

「中隊長の専用機なら用意してましたけど、中隊長が自分で選ぶって、お金もってどこかに行きました」

秀人は首を傾げた。

「E M A って買えるの？」

ロランはまあ、と言った感じに頷いた。

「多分、安いのを買ってきて自分でカスタマイズするんでしょうね。そうゆう奴は結構いますから」

唐突に秀人は教室に弁当を忘れた事を思い出した。

「ちよっと、弁当取ってくるから待ってて」

ロラン達は頷いた。

「詰め所にいますから、いつでも来てください」

秀人は頷き、教室に走っていった。

## 十一話 第二中隊のメンツ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。あと、キャラ紹介を更新します。

## 十二話 愛斗専用機とアルマの企み（前書き）

十二話目です。いよいよ、愛斗専用機の登場です。

## 十二話 愛斗専用機とアルマの企み

愛斗は街に出ていた。自分の命を預けるE M Aだ。自分で選びたかった。愛斗は適当に電気街に来ていた。昔は秋葉原という名前だったらしいが、今は只の電気街だ。愛斗は近くの電気部品店の親父に店を訪ねた。

「すまないが。E M Aを売ってる店はこの辺にあるか？」

親父は一瞬、愛斗を訝しげに見て、顔を覗き込んできた。

「あんた、エレメントかい？」

愛斗は首を横に振った。

「いや、ノーマルだ」

親父はにやりと笑う。

「いい店があるよ。着いてきな」

そう言い、親父は愛斗を裏路地に連れ込んだ。ごみ臭い路地だ。汚物などが転がっている。しばらく進むと、地下への階段が目に入った。

「ここを下まで降りな。E M Aが売ってるぜ。それも日本製のな」

愛斗は期待感を覚えた。

「日本製は期待できるな。性能がいいと評判だ」

愛斗は階段を下った。暗い階段だ。一步一步踏み出すたびに、階段の金属音が鳴り響く。最下階まで行くと、怪しい鉄扉が見えた。

「ここか？」

愛斗はノックもせずに扉を開けた。中は工場のようなだった。金属の錆びの臭いが鼻を突く。

「誰？客？なら歓迎だよ」

暗がりから白髪の老人が出て来た。愛斗は早速、本題を切り出した。

「E M Aが欲しい。いいのはあるか？」

老人は笑みを浮かべた。

「いいがあるよ。君は運がいい。こっちにおいで」

老人に案内され奥に向かうと、E M Aが目に入った。でかい。量産機よりでかくて、黒と青の機体が不気味に輝いている。まるで搭乗者を待ちかねていたかのように・・・。

「これは「紫電」、日本製のE M Aだよ。量産機の三倍の性能を誇る精鋭中の精鋭機。防御力、攻撃力も桁外れだよ。ただし、装備が付いてないんだよね。装備を自分で整えられるかい？」

愛斗は頷いた。

「自信はある。で、その値段を教えてください」

老人はここぞとばかりに値段を切り出した。

「五百万ドルだね。うん、これが最安値だよ」

愛斗の予算は一千万ドルだ。余裕で足りる。

「この紫電買った！」

老人はにこりと笑い、紫電の鍵を投げ渡した。愛斗は鍵を空中でキャッチする。

「帰りは乗って帰れば良いよ。軍人なら飛行許可は出ているだろう？」

愛斗は頷き、小切手を机に置いた。

「小切手はここに置いておく。保障などはあるか？」

老人は手で顔を仰ぎながら答えた。

「部品の交換くらいならここに来ればいい」

愛斗は頷いた。そして、コックピットに乗り込み鍵を差し込んだ。作動音が聞こえモーターが動く。機械音声が響いてきた。

「紫電、出力全開。エアウイング機動」

愛斗はスロットルレバーを思い切り倒した。そして、左右の操縦桿を握って引いた。

「エアウイング点火！」

愛斗は叫んだ。天井が開き、空が見えた。

その瞬間、紫電は一気に上空へと舞い上がった。電気街の上空を飛び回ってみる。

「いい機体だ。気に入った」

そして、紫電は学園の方向へ向かって飛んで行った。

所変わって、ここは学園の教室である。窓際の机にはアルマが座っていた。アルマは無償にイライラしていた。

「何よ・・・あの優秀ノーマルは・・・私たちエレメントより階級も技能も上だなんて・・・」

アルマは不満たらたらであつた。根っからのお嬢様であり、エレメントであるためノーマルに劣るという事がどうしても我慢できない。

「アルマさん？」

後ろから声をかけられた。声をかけた人物は同じクラスの成績優秀者のエレメント、花寺香奈であつた。  
はなでらかな

「あら、香奈さんではありませんか？何か私に御用でも？」

アルマは社交界のような笑顔で微笑む。これが貴族の嗜み、そう教えられてきた。

「私は花のエレメントですの。戦には向きませんけど」

アルマは疑問をぶつけた。

「なんでこんな学校入ってきたのよ？」

香奈は空を見ながら言った。

「何ていうか・・・何か自分に出来ることをしたいと思って・・・それより、と香奈は本題を切り出した。

「同じクラスの識神秀人と澁坂愛斗。目障りじゃありませんか？」

アルマはにやりと笑う。

「同感ね」

香奈はアルマの耳元で囁いた。アルマが意地の悪い笑みを浮かべた。

「その作戦。気に入ったわ。協力して追い出しましょう」

香奈は頷く。

「ええ、邪魔なノーマルを排除するために・・・」

## 十二話 愛斗専用機とアルマの企み（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 兵器紹介〜THE WEAPON CATALOG〜(前書き)

前々からやりたかった兵器紹介です。キャラ紹介と同じく、更新していきます。

## 兵器紹介 THE WEAPON CATALOG

機体名：ストライク・パニッシャー ｝ Punisher Strike

開発年：新世紀十二年 開発国：ストライダム皇国

全高：6.23m 重量：6.5t

搭乗者：ストライダム皇国一般兵及び、訓練生

詳細：基調カラーは黒。新世紀十二年開発のストライダム皇国正式採用機。高い戦闘能力のと機動性を兼ね合わせている。新世紀十三年から量産機として幅広く使用されるようになった。生産コストが低いことから、新世代のEMAとして世界各国で幅広く使用されている。

装備：プラズマシールド×1

スラッシュソード×1

プラズマライフル×1

エネルギーカッター×2

プラズママシンガン×1

飛行用エアウイング×2

対地用キャノン×1

機体名：スピッツ・オブ・ファイア ｝ Spitz of Fire

開発年：新世紀二十年 開発国：ストライダム皇国

全高：7.02m 重量：6.2t

搭乗者：識神秀人

詳細：基調カラーは青と金。ストライダム皇国の特殊研究チームが開発した新型EMA。量産機とは比べ物にならない戦闘能力と機動性を持ち、試験飛行として、識神秀人専用機になった。軽量化に成功したため、量産期では実現できなかった戦闘能力を発揮し、それ

でも尚大幅に追加された武装を駆使し、一機で五機と対等に渡り合う事が出来る。量産期とは違い、全身にプラズマシールドを展開する事ができる。

装備：強化プラズマシールド×1

プラチナメタルソード×1

エネルギーカッター×2

プラズママグナムMk-2×1

飛行用エアウイング×6

エアスロット×10

腕部内蔵小型ミサイル×5×2（両腕に内蔵されているため）  
粒子空雷×10

機体名：紫電（しでん）Shiden

開発年：新世紀十九年 開発国：日本

全高：7.20m 重量：6.0t

搭乗者：零坂愛斗

詳細：基調カラーは黒と青。日本が独自に開発し、闇市場に出回っていたのを、愛斗が安値で購入。自分なりにカスタマイズし、軽量化、独自に武装の追加、飛行システム機能の向上を完璧にした。その性能は天下一と噂されている。オリジナル武装はどれも量産機や他の士官の専用機にも無い。軽量化したにもかかわらず、スピッツ・オブ・ファイアなどよりも大きく、耐久力も上回る。スピッツ・オブ・ファイアと同様、全身にプラズマシールドを展開できる。

装備：強化プラズマシールド×2

レーザーサムライブレード×2

左腕部内蔵小型加粒子砲×1

エネルギーカッター×4

飛行用エアウイング×6

非常用ターボブースター×4

カラスモーク×10

強化プラズマライフル×1

サブマシンガン×2

粒子空雷×10

ミサイルランチャー×1

機体名：リーファンク 〈Lee Funk〉

開発年：新世紀十八年 開発国：スイス連邦王国

全高：7.00m 重量：6.3t

搭乗者：アルヴィ・ラーファエル

詳細：基調カラーは青と白。従来のストライダム皇国製とは違う独特なつくりをしたEMAである。機体の性能よりパイロットの操縦能力を重視するつくりで戦闘力は感情の昂ぶりによって変化する。クロムメタルの強化装甲板は生半端な銃火器くらいは通さない。これを使いこなせるのは戦闘中に性格が豹変するアルヴィくらいで非常に操縦の難しい機体である事には違いはない。通常戦闘時は主に大型のランスを使用するが、ベアプラズマライフルを使う事もある。飛行時にはエアウイングではなく旧式のブースターを使用する。無駄な装備を省いており、必要最低限の装備のみがある。全身にプラズマシールドを展開できる。

装備：強化プラズマシールド×1

ナイトランス×1

ベアプラズマライフル×1

飛行用エアブースター×4

エネルギーカッター×2

非常用ブースター×2

機体名：クリムゾン・サタン 〈Crimson Satan〉

開発年：新世紀十七年 開発国：ストライダム皇国

全高：7.4m 重量：6.9t

搭乗者：アルマ・ベルンシュタイン

詳細：基調カラーは赤。ストライダム皇国でベルンシュタイン財閥が直々に開発したE M A。操縦の容易化、装甲の強化などの課題をクリアし、アルマ専用機となった。戦闘時は主に接近戦だが遠距離用の武器も装備している。新型のため、ロストシューターを装備しており相手の自由を奪う事が出来る。全身にプラズマシールドを展開できる。

装備：ブロスソード×1

プラズマライフル×1

プラズママシンガン×2

飛行用エアウイング×4

非常用ブースター×2

エネルギーカッター×2

ロストシューター×1

機体名：リーフリッパー（Rifurippa）

開発年：新世紀十六年 開発国：ストライダム皇国

全高：7.1m 重量：6.5t

搭乗者：南風渚

詳細：基調カラーは白。ストライダム皇国の学生士官用に開発され、試験飛行として南風渚に貸与された。外見を重視した造りに評価は賛否両論だが、性能は保証されている。装備など特筆するところはないが、スペックは量産機の二倍である。ロストシューターを装備しているが、飛行用エアウイングは二枚と量産機と同じである。挙げられる問題は装甲の強度が量産機とほぼ同じ事である。全身にプラズマシールドを展開可能。

装備：プラズマシールド×1

スラッシュソード×1

プラズマライフル×1

エネルギーカッター×2

プラズママシンガン×1  
飛行用エアウイング×2  
対地用キャノン×1  
ロストシューター×1

機体名：フラワブルーム（Flower Bloom）

開発年：新世紀十六年 開発国：ストライダム皇国

全高：7.2m 重量：6.6t

搭乗者：花寺香奈

詳細：基調カラーはピンク。ストライダム皇国、アイリス社が開発したE.M.A。リーフリッパーと同世代の機種で外見を重視している。性能はリーフリッパーとほぼ同じだが、強化装甲を使用しているためリーフリッパーより高い防御力を持っている。一方、機動力ではリーフリッパーに劣る面もある。全身にプラズマシールドを展開可能。

装備：プラズマシールド×1  
スラッシュソード×1  
プラズマライフル×1  
エネルギーカッター×2  
プラズママシンガン×1  
飛行用エアウイング×2  
対地用キャノン×1  
ロストシューター×1

機体名：武神乙式（Bushin Othusiki）

開発年：新世紀十九年 開発国：日本

全高：7.2m 重量：7.0t

搭乗者：浅代海音

詳細：基調カラーは黒。日本が開発したE.M.A。大量武装型のため、重量は重くなったが機動性は失っていない。全身にありとあらゆる

武器を仕込んでおり、敵を容赦ない火力で粉碎する。胸部内蔵大口径加粒子砲を切り札としており、ロストシューターで相手を引き寄せ、粉碎するのを得意戦術としている。世代的には新型の分類に入り、

ストライダムの精鋭と戦っても遅れをとらない程の高性能である。

全身にプラズマシールドを展開可能。

装備：飛行用エアウイング×4

プラズマシールド×1

スラッシュソード×1

プラズマライフル×1

プラズマガン×2

ホーネットミサイル×100

光粒子魚雷×80

肘部内蔵ナイフ×2

爆散刀×1

腕部内蔵加粒子砲×2

胸部内蔵大口径加粒子砲×1

ロストシューター×4

エネルギーカッター×4

非常用ブースター×6

デミスナイフ×1

小型ナイトランス×1

粒子空雷×30

機体名：ナイトメア・ラヴィリンス（Nightmare Ravens）

開発年：新世紀18年 開発国：ストライダム皇国

全高：7.2 重量：6.5t

搭乗者：アルベルト・カペーチェ

詳細：聖霊騎士団、アルベルト・カペーチェの愛機。基調カラーは

黒と紫。固有装備のプラズマブレイクブレードは文字通り、プラズマシールドを中和し、破壊する事が出来る。機体性能は攻撃に特化しており、重量も軽い。機体性能は紫電には及ばないが、量産機相手なら何機であろうと、遅れをとらない。外見、性能の両方を手に入れた新型機として、前線での活躍は多い。武神乙式と戦い、粉々に粉砕された。

装備：飛行用エアウイング×4

プラズマブレイクブレード×1

スプライトホーネット×20

ロストシューター×2

非常用ブースター×4

機体名：ブライト・ウイング 〈Bright Wing〉

開発年：新世紀18年 開発国：ストライダム皇国

全高：7.1m 重量：6.2t

搭乗者：クリス・ベイカー

詳細：基調カラーは白と黒。ストライダム皇国次世代量産機として大量生産される予定だったが、生産コスト上の理由で廃案となり、先行試作機のみが親衛隊に配備されたEMA。性能的には優秀で、機動力も指揮官機に相応しいが現在は生産終了となっている。クリスの乗っている機体は独自のカラーリングを施しており、性能も他のブライトウイングと比べても上回っている。

装備：飛行用エアウイング×4

プラズマシールド×1

電磁サーベル×1

ロストシューター×2

非常用ブースター×2

機体名：晴嵐 〈Seiran〉

開発年：新世紀21年 開発国：日本

全高：6・8 m 重量：5・9 t

搭乗者：南野辰

朝倉宗治

吾妻百合華

詳細：基調カラーは銀。新生大日本帝国、皇帝親衛隊の隊長格の指揮官にのみ支給された新鋭機。兵装は主に接近戦向きで、ストライダム皇国、第六世代以降にのみ取り付けられているロストシューターも装備している。晴嵐の設計自体は三年程前から存在していたようだが、実際に生産に取り組んだのは愛斗の即位後である。コストの問題で量産機とまではいかなかった。

装備：飛行用エアウイング×4

自動回転刀×1

ロストシューター×2

プラズマシールド×1

非常用ブースター×2

兵器紹介〜THE WEAPON CATALOG〜(後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 十三話 偽りのラブレター（前書き）

十三話目です。最近、雨ばかりでテンション低いです・・・

### 十三話 偽りのラブレター

教室に戻った秀人は弁当を机から出した。同時に何かが机から落ちた。手紙である。これは・・・もしかして・・・。

「ラ、ラブレター！？ハートのシールがついているし・・・もしかしたら・・・」

秀人は一瞬にして浮かれた。僕も捨てたもんじゃないなあ・・・。早速、封を切り、中を見る。

「識神秀人様へ

今すぐに、裏庭に来てください。お話したい事があるので、一人で来て下さい。

K・Hより」

秀人は走り出した。裏庭に向かって、ちっとも疑わない性格の秀人は騙されやすくもあった。

そんな秀人の様子を見て笑う二人がいた。香奈とアルマである。

二人は顔を見合わせた。

「男って馬鹿ね。あれで引っかけちゃうんだから」

香奈も笑う。

「本当にそうね。馬鹿みたい」

二人の間には別の手紙があった。もう五人のエレメントの送った手紙である。内容はこんなもんだった。

「今すぐに裏庭に来い。そこで決闘だ。E M Aは持参しろ！

識神秀人より」

「そこで決闘させて、潰す作戦ね。面白いじゃない。でも愛斗のほうはどうするのよ？」

香奈は微笑みながら言った。

「秀人が助けを求めれば、助けに行くわよ。E M Aを持ってない二人にはキツイでしょうね」

二人は意地の悪い笑みを浮かべながら、窓の外を眺めていた。

秀人は裏庭へと着いた。そこに待っていたのは五人のエレメントが乗った量産機のストライク・パニッシャーであった。

「テメエが識神秀人か？」

秀人は困惑しながら頷いた。

「はい、まあそうですね。」

「E M A 無しか・・・随分余裕じゃねえかよ？」

秀人は相手が何を言っているか分からなかった。でも、分かる事がある、非常にマズイ状況だ。本能が告げている。

「あの、もしかして・・・」

相手のストライク・パニッシャーは頷いた。

「そうだ、決闘だ！テメエから言い出したんじゃないか！」

なんて事だ！見事に引かなかった。罠だったんだ。でも、一体誰が？

「あの、やっぱり決闘は中止ってことで・・・」

「ふざけんな！」

秀人は怒鳴られた。同時にストライク・パニッシャーの拳が飛んできた。寸での所でかわす。地面が轟音と同時に吹き飛んだ。勝てない。生身じゃ・・・。秀人の本能が死を告げていた。

教室には丁度愛斗が帰ってきた。というか、ロランとアルヴィと一緒に秀人を探しに来たのだが。愛斗はすぐに机の上ラブレターに気づいた。ロランがちよっかいを出した。

「秀人隊長もやりますね。青春って感じ？」

しかし、愛斗は厳しい表情だ。そして、アルマと香奈の所へと歩いていった。

「お前ら、秀人をどうする気だ？」

アルマはとぼけた。

「何の話ですか？言いがかりは・・・」

愛斗はいきなりアルマの胸倉を掴んだ。

「ひっ……！」

アルマは正直ビビった。声もでない。

「手紙にお前の香水の匂いがついていて。それに筆跡も同じだ。言え！何をする気だ？」

アルマは完全に勢いに押された。

「ちよつと、決闘でも……相手はE M A持参で……」

その瞬間、アルマは殴られ気絶した。

「ロラン！アルヴィ！E M Aを用意しろ！急げ！」

「了解！」

三人は走り出した。

秀人は逃げ回っていた。敵五体を相手にしながら。

「駄目だ！勝ち目なんてあるわけない！」

秀人は転んだ。もう終わりだ。殺される。夢を果たせなかった自分が情けない。

その時、一陣の風が舞い起きて、一機を粉碎した。ストライク・パニッシャーに似ているが違う。あれは……もしかしたら……。

「秀人隊長！大丈夫です！助けに来ました！」

上には青い機体があり一機を粉碎した。もう一機が反応して、殴りかかった。この訓練用の機体には武器が無い。よって、殴る、蹴るしか出来ない。それをかわして、スラッシュソードでもう一機は真っ二つになった。

「けっ！雑魚がほざくんじゃねえよ！」

確かに、アルヴィは言葉が悪くなっている。残り二機を愛斗の乗ったスピッツ・オブ・ファイアがマシンガンで撃墜した。以外とあつけないものである。

愛斗はスピッツ・オブ・ファイアから降りた。

「E M Aはいつでも乗っていたほうが安心かもしれないな」

秀人は誓った。もう二度とラブレターを信用したくないと。

## 十三話 偽りのラブレター（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 十四話 戦争の幕開け（前書き）

実を言つと、ここからが本当の本編です。

## 十四話 戦争の幕開け

ラブレター事件から三ヶ月が経った。あれから秀人はラブレター恐怖症になったようで、ラブレターのラ字を聞いただけでも過剰反応するようになってしまった。ロランはそんな秀人を励ましている。

「隊長。落ち込まないで下さいよ。俺たちまで悲しくなっちまいますよ」

秀人はボルトをペン回しの要領でまわしている。

「落ち込むよ……。だって、罠に引っかけたし、かつこ悪いし……」

愛斗は三ヶ月間、ずっと中古のEMAの補修をしている。

「秀人は考えすぎだ。もっと気を強くしろ」

愛斗がそう言った。愛斗はアルヴィを呼んだ。

「アルヴィ！そのパーツを取ってくれ」

アルヴィが装甲板を背負ってきた。

「これですか？」

「そうだ、そこにおいてくれ」

アルヴィはEMAでの戦闘になると、性格が豹変する。もちろん専用機も持っていた。

「僕のパーツを使えば、サイズが合うと思いますよ」

アルヴィがアドバイスをした。アルヴィは戦闘だけでなく、機体の整備も得意だった。まさにEMAのプロフェッショナルという事だ。

秀人はそんな愛斗のEMA、紫電を見て呟いた。

「そんな中古のやつにしくなくても用意してあったのに……」

愛斗が紫電の肩のエネルギーカッターを溶接しながら叫んだ。

「自分のEMAは自分で選びたい。それだけだ」

秀人は紫電の脚を軽く叩きながら言った。

「で、後どのくらいで完成するんだ？」

愛斗が設計図を見ながら呟いた。

「この調子でいけば明日の朝だな」

秀人は鼻歌を歌いながら、缶ジュースを飲み始めた。

「にしても、暇だな……。軍に入ったら毎日戦争かと思ったのに」

愛斗が呆れて呟いた。

「昔と違って今は割と平和だからな。戦争なんてたまにあるか無いかだ」

ロランは笑いながら言った。

「いざ、戦争になったら真っ先に前線に投入されるのは俺たちみたいなノーマルの部隊だからな」

セドリックは悲しそうに首を振った。

「俺は戦争なんて無い方が良いです。仲間が死んだら悲しいですし・  
・・」

愛斗は紫電から飛び降り、セドリックに歩み寄った。

「同感だな。しかし、セドリック。中隊参謀長がそんな弱気では務まらないぞ」

そう言って、愛斗は首にかけたロケットを大事そうに触りながら続けた。

「俺はいつか、戦争が起こらない世界を作りたいと思う。その時は協力してくれるか？」

その場に居た中隊員全員が叫んだ。

「もちろんですよ、隊長！」

アルヴィも頷いた。

「悪くないんじゃないですか」

愛斗は全員を見回し、言った。

「俺たちは一生の仲間だ」

回りが歓声に包まれた。丁度その時、格納庫の扉が開いた。オスカーが入ってきたのだ。

「第二中隊、中隊長及び各小隊長は集まってくれ。場所は学園長室だ。急げ」

全員が顔を見合わせる。

「よし、行くか。セドリツクも着いて来い。」

愛斗は格納庫の出口に向かって歩いていった。秀人達、小隊長も愛斗に続いた。学園長室のある棟は他の棟より大きかった。中は冷房が効いている。ロランが正直な感想をもらした。

「俺たちの格納庫にも欲しいですね。冷房を大量に」

愛斗は笑いながら言った。

「なら、頼んでみるか？学園長様とやらに」

どつと笑いが起こる。学園長室の前には二人の将校がいた。愛斗は将校の前に立ち、敬礼をした。

「第二ノーマル混成E M A中隊長、以下七名。学園長直々の召集によりここに参りました」

うむ、と将校が頷いた。

「入室を許可しよう」

愛斗はドアを開けた。中には老人が一人いた。彼が学園長のようなだ。

「愛斗中尉かね？」

「はい。以下七名集まりました」

学園長は咳払いをした。

「君達に集まってもらったのは他でもない」

愛斗が口を挟む。

「戦争ですね」

学園長が頷いた。

「その通りじゃ、現在、伊豆半島周辺で反乱がおきている。君たちにも攻撃に参加してもらいたい」

愛斗の返事は早かった。

「分かりました。作戦内容は？」

学園長は説明を始めた。

「明日の夕刻に出撃し、小田原に向かえばいい。詳しい作戦内容は現地で説明するそうじゃ」

わかりました、といった感じに頷いた愛斗は思い出したように笑いながら言った。

「お願いがあるんですけど・・・」

「なんじゃ？」

愛斗はここぞとばかりに切り出した。

「帰ってきたら、格納庫にエアコンを設置していただけますかね？」  
学園長も笑った。

「お安い御用じゃ」

愛斗は後ろに七人に言った。

「だそうだ。みんな、気合を入れろ！」

七人は歡喜の叫びをあげた。

## 十四話 戦争の幕開け（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 十五話 出撃前夜（前書き）

いよいよ戦争です。この先に待つのは明るい未来でしょうか、それとも……。とにかく十五話目です。

## 十五話 出撃前夜

格納庫に戻った一行は全員に作戦のことを説明した。そして、愛斗は最後にこう言った。

「全員、聞いてくれ。これが最後の夜になるかもしれない。悔いの無いように過ごせ」

中隊員は全員解散した。セドリックは膝が震えていた。

「中隊長。俺、死ぬのでしょうか？」

愛斗はセドリックの肩に手を置き囁いた。

「みんな同じ気分なんだ。心配するな俺が全員生還させてやる」

セドリックは泣き出してしまった。

「俺、本当は怖いんですよ。死にたくない。かつこつけて軍に入っただけは間違いないでしょうか？」

愛斗は笑った。

「酒でも飲むか？少しは忘れたほうがいいぞ」

セドリックは愛斗が差し出したビールを一気に飲み干した。愛斗はセドリックの肩を叩いた。

「それでいい。今日は飲みつぶれろ」

セドリックは頷き、二本目を開けた。愛斗は秀人の方へ向かって歩いてきた。

「秀人、俺は今日行かなくてはならない場所がある。お前にも是非来て欲しい。会わせたい人がいる」

そして、アルヴィを見て言った。

「アルヴィ、お前は俺の紫電を仕上げてくれるか？夜中には戻ってくるがそれまでここに居てくれるか？」

「喜んで。最後の晩にこれを仕上げたいですし」

愛斗は頷いた。

「助かるぞ。すぐに戻る」

秀人は愛斗に尋ねた。

「何処に行くんだ？」

愛斗は意味ありげに笑った。

「前に会わせてやると言っただろ」

秀人はもしかして、と呟いた。

「俺の「彼女」に会いたいんだろ？」

秀人は元気よく頷いた。

区立ニュー渋谷病院ではリリーが何時ものように外を眺めていた。愛斗がいなくては外に出れないため、愛斗が来た時には出来るだけ外に連れて行ってもらっている。病室のドアが開いた。

「リリー？いるか？」

リリーがはつと呟いた。

「愛斗さん？」

愛斗が病室に入ってきた。秀人も一緒だ。

「リリー、今日は前に言った秀人も一緒だ」

そう愛斗は言い、秀人に軽く会釈をした。

「リリーさんですか？えっと、秀人です。愛斗から聞いてるかな？」

リリーは秀人の頬に手をあてた。

「貴方は人の暖かみに溢れています。真っ直ぐな心の持ち主ですね」

秀人は驚いた。昔、友達からも同じ事を言われた。リリーは悪戯っぽく笑った。

「驚きました？私は人の本質を見抜くのが得意なんです」

そして、愛斗を呼んだ。

「あの、外に行きたいです・・・」

愛斗は笑いながら言った。

「いつも遠慮しなくていいと言っているだろう。さあ、行くぞ」

愛斗は廊下から車椅子を持ってきた。愛斗はリリーを持ち上げると、車椅子に優しく、壊れ物でも扱うかのようにそっと乗せた。

「ありがとうございます。あの、重くありませんか？」

恥ずかしそうにリリーが尋ねる。愛斗はリリーの頭を撫でながら

答えた。

「秀人よりずっと軽いから安心しろ」

秀人は愛斗に持ち上げられたことを思い出した。

「僕だつて軽い方だぞ！」

秀人は勢いよく言った。

「秀人、行くぞ。外の空気を吸いたいらしい」

愛斗は秀人の文句を聞いてすらいなかった。

病院を囲むようにしてある自然公園は他の患者もたくさんいた。

「やっぱり、外の空気はいいな。なあ、リリー？」

リリーも頷いた。

「愛斗さんがいればどこにいても楽しいです」

愛斗は切り出しにくそうに言った。

「リリー。落ち着いて聞いてくれ」

秀人は愛斗が今日ここに來た理由を悟った。

「明日に戦争に行かなくてはいけない。すぐに戻ってくるが、一応言っておいた方がいいと思つたんでな」

リリーは悲しそうに首を振り、愛斗の腕にしがみついた。

「嫌です。死んだらもう会えないじゃないですか」

愛斗はリリーの手を握り強く言った。

「絶対に生きて帰ってくる。約束する。そうしたら、俺が戦争の無い世界を作つてやる。きつとだ」

リリーは言った。

「なら愛斗さんも約束してください！戦争にはもう行かないと！」

愛斗は悲しそうに言った。

「それは俺が軍にいる限り、無理だ」

秀人が何かを言おうとした時、看護婦が歩いてきた。

「リリーさん？診察の時間ですよ。面会は終了です」

リリーは頷いた。

「愛斗さん。今すぐでなくても何時か約束してください」

愛斗はリリーの顔を真っ直ぐに見つめ、言った。

「・・・分かった」

看護婦はリリーの車椅子を押しながら行ってしまった。

「愛斗・・・いいのか？」

愛斗は下を向きながら呟いた。

「仕方が無いだろう。俺は軍人だからな」

しかし、そう言った愛斗の目は軍人の目ではなく、とても脆い只の青年の目だった。

## 十五話 出撃前夜（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 十六話 小田原防御戦

翌日の昼過ぎ、愛斗の紫電が完成した。格納庫前には隊員が大勢集まっていた。ロランが全員に向かって叫んだ。

「みんな！出撃当日に我らが隊長機が完成いたしました！試験飛行等一切無しの実戦です！」

周りが笑いに包まれる。試験飛行無しで実戦は普通ありえない。

「みんなも機体の整備をしておけ！いいな？」

愛斗も叫んだ。

そして、夕方、全員が裏庭に集まっていた。量産機のストライクパニッシャーがずらりと並ぶ。アルヴィと秀人以外の小隊長は全員、ストライクパニッシャーを改造した機体を使っている。

「全員、乗り込め！三分後に出発だ！」

裏庭には他の生徒や教官が見物しに来ている。

秀人はスピッツオブファイアに乗り込み、鍵を差し込んだ。エアウイングが起動した。

「識神秀人！発進準備完了！」

秀人は紫電への無線へ叫んだ。そして、他の小隊員にも叫ぶ。

「P1からP10まで、全機報告せよ！」

次々に無線に声が入ってきた。

「P2発進できます！」

「P6準備完了、オールグリーン！」

秀人はまた紫電への無線に伝えた。

「全機、発進準備完了！」

愛斗が無線機で全員に通信した。

「これより出撃する。隊列は打ち合わせどおりだ」

愛斗はブースターはのスイッチを入れた。旧式のため発進時はブースターで浮かばなくては行けない。愛斗は左右の操縦桿を思い切

り引いた。紫電はエアウイングをフル稼動して一気に上空まで飛んだ。そして、レーダーを確認、小田原に操縦桿を向けた。他の機体も続く。

中隊が小田原に着いたのは午後七時のことだった。小田原に接近し、後一キロのところで異変に気づいた。愛斗はレーダーを確認した。全員の無線に報告する。

「全員戦闘準備！すでに戦闘が開始している模様、戦闘隊形は自由だ！好きに暴れる！」

三十秒後敵の部隊と正面衝突した。すさまじい弾幕。これが戦場かと、秀人は鳥肌がたった。

「うおおおおおお！」

秀人は叫びながらプラチナメタルソードを抜き、敵のE M Aを粉碎した。後ろには、常にプラズマシールドを展開しているため後ろからの攻撃は問題なかった。愛斗からの通信が聞こえた。

「秀人！小隊を連れて味方の旗艦の防衛に当たれ！」

「了解！」

秀人は小隊全員に伝えた。第一小隊が旗艦の方へ向かう。旗艦は敵の攻撃に対し、弾幕を張って防御していたが、ところどころが炎上しており撃沈は時間の問題だった。

「こちら第二ノーマル混成E M A中隊、第一小隊！援護します！」

秀人はプラズママグナムで敵機を撃ち落した。不思議と恐怖は無かった。一方、アルヴィは例によって例のごとく、感情が豹変していた。

「はははははは！邪魔だ！どけ！」

そう叫びながら、ナイトランスを振り回し、敵機を粉碎していく。回りを取り囲んでも、リーチの長いナイトランスを振り回しているため近づけない。

その時、旗艦からの通信が入った。

「第二中隊に告ぐ。敵の旗艦を撃墜せよ。プラズマシールドを展開

できない旧式の戦艦だ。なんとかなるだろう。健闘を祈る」

愛斗は無線機で全員に伝えた。

「全員行くぞ！続け！」

怒涛の勢いで敵の包囲網を突破していく。中隊の損害はゼロ。これならいける。

「全員、このまま突き進め！」

愛斗は叫んだ。しかし、敵の旗艦の回りは防御が堅かった。突破できない。

「慎重に行け！守りが堅いぞ！」

その時、一機が飛び出した。敵の包囲網に突っ込んで行く。

「中隊長！俺に任せてください！」

セドリックだった。セドリックはそのまま突っ込んだ。

「今のうちに！早く！」

セドリックが絶叫している。セドリックはスラッシュソードを使い、敵を撃墜していく。

「よし！今だ！敵が崩れた！」

愛斗が叫ぶ！そして、全機が突入した。その時だった。セドリックの機体の後ろに敵の隊長機が回りこんだ。ナイトランスが背中を貫く。セドリックの絶叫が無線機から聞こえた。セドリックの機体が爆発した。最後にセドリックが言った言葉が嫌でも耳に入ってきた。

「隊長・・・戦争の無い・・・争いの無い世界を託しましたよ・・・」

「

愛斗は叫んだ。

「全機突入！セドリックの犠牲を無駄にするな！」

秀人は真っ先にセドリックを殺した隊長機に向かっていった。

「糞野郎！くたばれ！」

秀人は叫びながら、プラズママグナムを撃ちまくる。隊長機がナイトランスを構えた。秀人は構わず突っ込む。

「前方にプラズマシールド展開！」

ナイトランスがプラズマシールドに食い込む。その隙にプラチナメタルソードを振り下ろす。隊長機は頭部を粉碎された。そして、粉々に砕け飛ぶ。愛斗は強化プラズマライフルを構えた。安全装置をはずし、標準を旗艦に合わせる。

「ロラン！チャージが終わるまで援護をしてくれ！」

ロランの返事が聞こえた。

「了解しました。平和のために！」

どうやら、セドリックの最期の言葉を聞いているのは全員だったようだ。

「チャージ開始！」

プラズマライフル一発で旗艦を沈めるには司令室を最大出力で撃つ必要がある。大体チャージ完了まで三十秒くらいだろうか。

「頼む・・・ロラン・・・後十秒だ・・・」

ロランは押されていた。敵の方が数は圧倒的に多い。

「六・・・五・・・四・・・三・・・二・・・一・・・ゼロ！」

愛斗は引き金を引いた。青い閃光が銃口から飛び出す。真っ直ぐに飛び閃光は旗艦の司令室を貫いた。旗艦の司令室は吹っ飛び、機体は爆発した。敵が撤退を始めたようだ。弾幕が弱まっていく。

「全機に告ぐ。味方旗艦まで撤退せよ。尚、我が隊の損害は一機のみ・・・繰り返し・・・」

愛斗は苦しそうに言った。セドリックの事は言わない訳にはいかない。

「みんなが知っている通り、セドリック・シャバン又曹長は我らの勝利のために、平和のために戦死した。彼の死を無駄にする訳にはいかない。俺は学園に帰ったらセドリックの中尉への、俺と同じ階級までの昇格を学園長に頼んでくる」

悲しみの声が無線機を通して漏れてくる。ロランが叫んだ。

「セドリックに乾杯！」

全員から同じような声が聞こえる。

「全員帰還するぞ！セドリックは我らの軍神だ！」

全員が唱和した。

「我らが軍神よ永遠に！」

愛斗は歓声の中、学園に帰還した。

## 十六話 小田原防御戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 十七話 悲しき願い

朧月学園の第三格納庫は冷房が効いていた。無事生還したら、冷房を取り付けて貰う約束だったからだ。しかし、いくら冷房をつけてもらっても帰らぬ人がある。中隊員は酷く落ち込んでいた。

秀人はセドリツクの写真を撫でながらあらぬ方を見ている。ローンは黙々と一人チェスをしていた。セドリツクがいなくなってしまう、相手がいなくなってしまったのだ。アルヴィも落ち込んでいる。E M Aの整備をしながらセドリツクの名前を機体に彫っている。アルヴィはため息をついた。

「セドリツクさん・・・くそっ！」

E M Aでの戦闘以外でアルヴィが悪態をつくのは珍しいことだ。

よほど落ち込んでいるのだろう。ローンはチェス板から目を上げた。

「愛斗隊長が掛け合ってくれてる。大丈夫だ。心配ない」

ローランが言った通り、愛斗は連日、学園長室に通い、セドリツクの中尉への昇格を掛け合っていた。

学園長室では毎日同じような会話が続いた。

「何故です！何故認められないのですか！セドリツクがいてくれたから我らは勝てたのです！」

愛斗は学園長を怒鳴りつけた。学園長は残念そうに首を振った。

「確かに、彼の犠牲なしでは勝利はなかっただろう。じゃが、これは上の決定。彼の中尉への昇格は認められない」

愛斗はまた叫ぶ。

「もう一度、もう一度掛け合ってください！」

しかし、学園長はうんとは言わない。

「今、お前にいった事が軍会議での最終結論じゃ。これ以上粘っても無駄じゃろう」

愛斗は必死だった。何と学園長に向かって、頭を下げたのだ。そ

う、土下座だ。

「お願いします。セドリックのために・・・」

こんな姿を他では見ることは出来ないだろう。それほど真剣だったのだ。

「セドリックは最期に俺に遺言を残しました。世界を託した、と言ったのです。俺への恩賞はいりません。只、セドリック、あいつだけには昇格させてやりたい。後は何もいりません」

学園長は愛斗を見て、哀れに思った。

「お前の気持ちはよく分かる。私が皇帝であつたら間違いなく昇格させるだろう。しかし、上には逆らえん」

愛斗は立ち上がりドアの方に歩き出した。そして、去り際に一言言った。

「俺は認めない！こんな国を俺は認めない！」

愛斗は部屋を出てから涙を見せた。めったに見れないだろう、愛斗の無く姿は。

格納庫の扉が開き、愛斗が帰ってきた。ロランが走り寄った。

「愛斗隊長！セドリックの昇格は？」

愛斗は首を横に振った。

「駄目だ。軍会議の最終結論で認められなかった。おそらく、ノーマルだという事が原因だろう」

隊員が悪態をつく。ロランが泣き目で言った。

「畜生！畜生！何がノーマルだ！何がエレメントだ！セドリックは馬鹿なエレメントのために死んだんだ！俺はエレメントをぶっ殺してやる！片っ端から全員！」

隊員から賛同の声が飛ぶ。アルヴィがぼそつと言った。

「僕も納得がいきません」

秀人も叫んだ。

「セドリックの死を無駄には出来ない！」

愛斗は全員を見回し、言った。

「俺はこれからこの部隊ごと軍を離反しようと思う。その後は他のレジスタンスと組んでこの国をぶっ潰す。この作戦に異議はあるか？」

全員が一気に唱和した。

「異議なし！」

愛斗は頷き、言った。

「作戦を立て次第、報告する。それまでは何時もどおりだ」  
全員が頷いた。

「よし、解散だ！」

秀人は心を決めていた。自分達を駒としてしか見てないこの国、エレメントに復讐してやるつと。

## 十七話 悲しき願い（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 十八話 秀人の出会い（前書き）

今回は新キャラ登場です。ちなみにこの作品のE M Aは色だけしか書いていません。姿形は読者のご想像にお任せします。

## 十八話 秀人の出会い

格納庫をでた秀人は苛立ちを隠せなかった。愛斗も横にいた。その時、後ろから思い切り背中を叩かれた。

「おっはよー！秀人くん！愛くん！」

それは生徒会長、南風渚だった。愛斗は耳を疑った。

「あいくん？俺の事か？」

渚は元気よく頷いた。

「もちろん！見直しちゃった！強いんだね」

渚はズバリと言った。

「ねえ、生徒会に入らない？大歓迎なんだけど・・・」

愛斗はまあ、と言った。

「見学ならしてもいいぞ」

渚の目が輝く。

「じゃあ、こっちにきて！」

愛斗は渚に手を引きずられていつてしまった。

「また明日だ、秀人」

秀人は頷いた。

「分かった。また連絡してくれ」

秀人は歩きだそうと振り返った時、誰かとぶつかった。

「きゃっ！」

女性のようだ。秀人はしゃがんで抱き起こした。

「大丈夫ですか？すいません、余所見してまして・・・」

その女性は綺麗な桃色のロングヘアーをしていた。癖はなくストレートだった。

「識神・・・秀人さんですよね？」

秀人は頷いた。

「そうですけど、何か？」

女性は恥ずかしそうに言った。

「私はクローディヌ・ケ・デルヴロワです。貴方の噂は聞いています。一度、会ってお話をしたくて」

秀人は驚いた。僕って以外とモテる？クローディヌは続けた。

「出来たら、この後私のお屋敷までいらっしやりませんか？」

秀人は何時も感じのいい笑顔で言った。

「別にいいですよ、用事も無いですし」

クローディヌの屋敷は途轍もなく大きい西洋風の屋敷だった。庭園があり、噴水からは澄んだ水が吹き出て、虹をつくっていた。

「大きいですね。使用人もたくさんいるんでしょうね」

クローディヌは頷いた。

「はい、五十人ほどいます。今は掃除でもしています」

秀人は大きな玄関の前に立ち尽くした。

「僕の寮の玄関の五倍はありますね」

中も広がった。とてつもない大ホールが玄関を開けた先に広がっていた。使用人の一人が近づいてきた。

「おかえりなさいませ、クローディヌお嬢様。そちらはお友達でしょうか？」

クローディヌが笑顔で頷く。

「ええ、お友達です。とても頼りになる方なんですよ」  
使用人も笑顔で喜ぶ。

「お嬢様のお友達なら大歓迎です。応接間にお通ししましょうか？」

「そうして下さると助かりますわ」

使用人は歩きだした。

「応接間へどうぞ」

応接間は社長室のような部屋だ。大きなソファーに座るとすぐに紅茶が出て来た。

「紅茶でよろしいでしょうか？」

クローディヌが尋ねてきた。

「はい、大丈夫です」

秀人はそわそわと見回した。

「どうかしました？」

秀人は笑いながら言った。

「いえ、ただ大きくて落ち着かないなー、って」

クローディヌが笑いながら聞いてきた。

「こつゆうお屋敷は初めて？」

秀人は恥ずかしそうに言った。

「はい、初めてです」

クローディヌは唐突に言った。

「私、貴方が素敵に見えまして・・・」

秀人はさっきの愛斗のように耳を疑った。

「素敵！？僕がですか？」

クローディヌは頷く。

「はい、お慕いしております」

秀人は照れながら言った。

「そんな事言ったら、僕より愛斗の方がずっと魅力的ですよ」

クローディヌは顔を曇らせた。

「澁坂愛斗・・・私、あの方は嫌いです。何か企んでいるように見

えます・・・」

秀人はまた耳を疑った。愛斗ほどいい人はいないだろう。

「愛斗はいい奴ですよ。まあ、何を考えているか分からないときは

あるけど・・・」

クローディヌは悲しそうに言った。

「出来れば秀人さんにはあの方と一緒に居て欲しくないです」

愛斗は確かに反乱を企てているが・・・それには僕も賛成だった。

秀人は時計を見て言った。

「もう時間ですし、帰りますね。今日は楽しかったです」

クローディヌは立ち上がり、近づいてきた。

「私事です」

そう言い、頬にキスをしてきた。

「え・・・！」

秀人は正直、動揺したが平静を装った。

「じゃあ、また明日！」

「ええ、また明日」

秀人は屋敷をでてから愛斗の事を考えた。愛斗はいい奴だ。間違っ  
つてない。そう思う秀人だった。

リリーの病室には愛斗がいて、今日の話をしていた。

「今日は、生徒会に勧誘されてな。意外と楽しそうだったぞ」

リリーは無邪気な笑顔を見せた。

「私も学校、行きたいです」

愛斗はリリーの手を握り言った。

「怪我が治ったら、俺が通わせてやる」

リリーは優しく頷いた。愛斗も微笑み返す。

「面会は終了ですよ」

看護婦の声が響いた。

「じゃあな、リリー。また今度来る」

愛斗は病院を出た。外はもう暗い。愛斗はリリーの笑顔进行を思いた  
した。無邪気な顔、悲しい顔、いろんな顔が浮かぶ。あの笑顔を守  
りたい。だから俺は戦う。そして、鬼の能面を靴から取り出す。そ  
して、呟く。

「だから、俺はこの能面を被り続ける。世界のために・・・」  
能面を被ったその顔は冷たかった。

## 十八話 秀人の出会い（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。後、キャラ紹介も更新します。

## 十九話 計画立案（前書き）

雨ばかりで嫌ですね。これも温暖化の影響でしょうか？

## 十九話 計画立案

秀人とクローディヌのが出会った翌日の放課後。生徒は全員下校した後、第二中隊は第三格納庫に集められていた。愛斗が全員に作戦を伝える。

「全員よく聞け！我が隊に最高のチャンスともいえる任務が入った」  
ロランがいきり立った。

「その任務とは？」

愛斗が頷き言った。

「先日の戦いで小田原の皇国軍はかなりの打撃を受けた。そのため大量の兵器が一機の輸送艇で運ばれる。その輸送部隊の護衛に学園の我が第二中隊と学生エレメントE M A中隊が護衛につくことになった」

ロランが笑みを浮かべた。

「そこで兵器を奪ってエレメントを殲滅。ノーマル解放戦線に参加する。大体は当たってますか？」

愛斗は頷いた。

「その通り、我らの世界のために」

全員が唱和する。

「世界のために！」

秀人が叫んだ。

「出発は明日の早朝！全員、気を引き締める！」

愛斗も叫んだ。全員がそれぞれのE M Aを整備し始めた。

「久しぶりにエレメントと殺り合えますよ！」

普段はおとなしいアルヴィも興奮している。愛斗は秀人に近づき、言った。

「俺はリリーに別れの挨拶をする。永遠の別れではないが、当分の間は会えないからな」

秀人も頷いた。

「僕もクローディヌに会って来る。リリーに僕の事も伝えてくれ」  
愛斗は秀人を見て笑った。

「秀人も遂に彼女が出来たか？」

秀人は顔を赤くして、否定した。

「昨日、会って話をしたただけであってべ、別にそんな関係では！」

愛斗は笑っていた。

「別に恥ずかしがる必要はないぞ。人間だからな」

秀人は叫んだ。

「だ、だから！」

愛斗は手を振りながら行ってしまった。

「人の話を聞いてくれよ……」

秀人はぼやいた。

「リリー？元気か？」

愛斗が病室に来た。リリーも笑顔で迎える。

「愛斗さん、珍しいですね。二日連続で来られるなんて」

愛斗は悲しそうに頷いた。

「リリー？すまんが当分来られないかもしれない。でも、今の仕事が終わったら必ず会いに来るから待っていてくれ」

リリーは寂しそうに言った。

「会えないのは寂しいですけど、仕事なら仕方ありませんよね」

愛斗は優しくリリーの頭を撫でた。

「今日は一日中ここにいて話をしたい。構わないか？」

リリーは嬉しそうに頷いた。

「はい。一日中、一緒にいれるなんて夢みたいです」

愛斗は微笑み、言った。

「よし、じゃあまず外に出るか？」

「はい」

ロランはまた一人チェスをしていた。

「セドリツク。見てろ！俺が！俺が仇をとってやるぞ！」

ロランの復讐心は絶頂を迎えていた。もう、敵を、ストライダム皇国を潰す事しか考えられない。

「ロラン。また一人チェスをしているの？」

アルヴィが話し掛けてきた。

「アルヴィ・・・俺は・・・セドリツクを・・・あいつを見す見す殺しちゃった・・・あの時、助けられたかもしれないのに・・・！」  
アルヴィはロランの向かいの席に座った。

「あの・・・僕で変わりになるか分からないのですが・・・チェスの相手なら僕でも出来ます・・・」

ロランは顔を上げた。

「そうか・・・なら、始めよう。セドリツクとの対局を思い出させてくれ・・・」

二人は黙々とチェスを始めた。

秀人はクローディヌとの最後の時間を楽しんでいた。

「セドリツクはいい奴だったよ・・・本当に・・・」

クローディヌの目にも涙が浮かんでいた。

「仲間の死は悲しいものです。でも、秀人さん。悲しまないで下さい。それが彼の願いでしょう」

クローディヌは愛斗の事を話題に出してきた。

「秀人さん。澁坂愛斗の様子はどうですか？何か秀人さんを危険なことに巻き込んだりしてませんか？」

秀人は笑いながら言った。

「クローディヌは考えすぎだよ。愛斗はいい奴だって・・・」  
クローディヌは叫んだ。

「そんな訳ありません！澁坂愛斗は危険です！」

秀人は困ってしまった。愛斗の事をここまで嫌う人がいるなんて・・・。

「でも、生徒会長さんも慕っているし・・・悪い人の訳が無いよ」

秀人は紅茶を飲み干した。

「じゃあ、用事があるから先に帰るよ」  
クローディヌは頷いた。

「秀人さん。考え直してください」

秀人は一応頷いておいた。勝負はいよいよ明日だ。

## 十九話 計画立案（後書き）

ちなみにリリーという言葉は英語で「百合」の意味らしいです。今日知りました。

## 二十話 Rebel Justice (前書き)

何故か海に行きたいです・・・海辺をサザン聞きながらドライブしたりしたいですね。

## 二十話 Rebel Justice

早朝、裏庭には前回の出撃時の倍ほどの部隊が揃っていた。半分は愛斗の中隊、もう半分は同じ学生エレメントで構成されたE M A部隊だ。上空には輸送艇が待機している。次々とE M Aが空に浮かぶ中、秀人たちの部隊もようやく出撃した。輸送艇の前方にエレメント部隊、後方に第二中隊だ。愛斗の声が無線機から聞こえた。

「絶好のチャンスを与えてくれたな。天気は快晴。いい日だ」

愛斗は作戦の詳細を説明した。

「行動開始の合図は俺が敵の将校機を撃ち落したらだ。それまでは普通にしている」

「了解」

秀人は頷いた。

「了解」

ロランも頷く。

輸送部隊は小田原に近づいた。無線機から愛斗の声が聞こえてきた。

「小田原まで距離一・五キロ・・・行動開始する。通信は常にオンにしておけ」

紫電が隊列から抜けた。強化プラズマライフルを構えて、狙いを定め始めた。

「後五秒で発射する。用意はいいか？」

全員が頷いた。

「いつでもどうぞ、隊長！」

ロランの声が聞こえた。愛斗は将校機に狙いをつけた。

「ロックオン。ファイア！」

青い閃光が飛び出した。将校機に向かって真っ直ぐに飛んでいく。

ストライダム皇国軍大佐は将校機に乗り、暇な護衛任務を音楽を

聞きながら過ごしていた。将校とは思えぬ姿だが、誰も見ていないのでお構いなしに大音量で音楽をかけ続けていた。しかし、そんな平和は一瞬で奪われた。プラズマライフルは将校機を木っ端微塵に破壊した。

「こちら、K1！隊長がやられたぞ！」

冷静な声が聞こえた。

「落ち着きなさい、K1！態勢を整えなさい！」

アルマだった。この隊の副隊長はアルマだったのだ。アルマは冷静な指示を飛ばす。

「状況報告をしなさい！」

「はい！後方の第二ノーマル混成EMA中隊隊長、湊坂愛斗中尉のプラズマライフルによるものです！」

アルマはニヤリと笑った。

「反乱です！全機、後方の部隊を攻撃しなさい！」

香奈の声が聞こえた。

「チャンスですね。あいつらを始末する」

アルマは意地悪く笑う。

「本気でいくわよ！」

愛斗は撃ち落したことを確認すると、すぐに指示をだした。

「第一小隊、第二小隊は輸送艇の占領。他は敵部隊を殲滅せよ！銃器を好きなだけ使え！」

一斉にプラズマライフルの閃光が敵部隊に飛んだ。続いて、マシンガンの音。敵部隊は次々と仲間を失っていく。

秀人はロランと共に輸送艇のシャッターをこじ開けた。そして、中に入り込む。中には大量の兵器が置いてある。次々と仲間が入ってくる。そして、EMAから降りた。白兵戦だ。秀人が叫んだ。

「行け！司令室を占領しろ！」

階段を上ると敵の兵士がいた。秀人は容赦なくマシンガンを撃った。敵兵士が床に倒れる。

「司令室まで一気に走りぬけろ！」

ロランがアサルトライフルを乱射する。敵兵士は次々と倒れていく。

「司令室はこの先だ！急げ！」

司令室の扉はロックが掛かっていた。

「畜生！開け！」

ロランが叫ぶ。

「どけ！」

秀人が叫んだ。

そして、愛斗から預かっていた手投げ弾を扉に向かって投げた。扉が吹っ飛ぶ。

「行け！占領だ！」

ロランが乱射しながら入った。敵の悲鳴。悲鳴が轟く。ロランの声が聞こえた。

「占領完了！弾幕をつくるぞ！」

ロランがスイッチを押すと、輸送艇にプラズマシールドが展開され、ミサイルや機銃が発射される。

一方、外では激戦が繰り広げられていた。戦況は愛斗たちに有利だった。紫電はレーザーサムライブレードを二本抜き、二刀流で構えた。

ストライクパニッシャーが次々と斬りかかって来る。

「邪魔をするな！」

紫電の性能に敵うはずも無く順番に撃墜されていく。二刀流の紫電は手ごわく、相手に与える迫力も量産機とは桁外れだった。背後のリーダーにプラズマライフルの反応があった。

「プラズマシールドを背部に展開！」

プラズマライフルの閃光はシールドに当たって爆発した。紫電にダメージは与えられない。爆発の煙が晴れる前に紫電のレーザーサムライブレードの一閃を受け、撃墜された。

「粒子空雷射出！」

紫電の脚部から射出された粒子空雷は敵機を巻き込み、爆発。六機ほどが餌食になった。

「エアウイング最大出力！飛ばすぞ！」

エアウイングで敵に突っ込み、切り裂く。二機が真っ二つになり、爆発した。

アルヴィも奮戦していた。性格の豹変によって感情は最高に昂ぶり、攻撃力は紫電と同じまで上がっていた。

「消えな！カス共！」

アルヴィはこうなると手がつけられない。彼の愛機である、「リファंक」は恐ろしい姿で敵をナイトランスで串刺しにする。

「カス過ぎるんだよ！」

ナイトランスで後ろから突っ込んできた敵を木っ端微塵に粉砕。

コックピットの中では笑い声が響いていた。悪魔のような高笑いである。しかし、それは愛斗も同じだろう。愛斗は紫電の中で不敵な笑みを浮かべ、叫んだ。

「エレメントの諸君！君等はノーマルの恐怖を身をもって感じることになるだろう！」

その時、前に真紅のEMAが現れた。

「零坂愛斗！お前をここで始末するわよ！」

アルマだった。愛斗はまた不敵な笑みを浮かべた。

「お前とこんな所で会えるとはな・・・面白い！相手になってやろう！この紫電でな！」

アルマもニヤリと笑った。

「私の愛機、クリムゾンサタンの最初の犠牲者はお前なの？もっと強い奴がよかったわ！」

愛斗は叫んだ。

「その言葉をお前はあの世でも後悔するだろう！」

クリムゾンサタンはブロスードを抜き、紫電に振り下ろす。し

かし、プラズマシールドのせいで紫電には届かない。右手のレーザーサムライブレードでクリムゾンサタンの横っ腹を狙い、斬った。やはり、プラズマシールドを展開していた。素早い撃ち合いが始まった。クリムゾンサタンはプラズマガンで紫電に向かって乱射する。紫電はクリムゾンサタンを蹴り飛ばし、サブマシンガンを構え、撃つ。輸送艇の回りで激しい戦闘が始まる。愛斗はサブマシンガンを乱射しながら言った。

「思ったより、腕はいいようだな」

アルマは鼻を鳴らした。

「当たり前よ！次で息の根を止めるわ！」

アルマはロストシューターを胸部から射出した。ロストシューターとはワイヤーで繋がった超合金で出来た鋭い金属片を相手に突き刺し、動きの自由を奪ってから自分に引き寄せる武器だ。愛斗は笑った。

「勝負ありだな！」

ロストシューターが紫電を貫く瞬間、紫電はE.M.Aとは思えない動きでかわし、突然、上空に舞い上がった。クリムゾンサタンはすぐに上を向き、太陽を直視してしまった。一瞬、アルマは目を瞑ってしまった。目を開けると、紫電はいない。

「なっ！何処にいったの！？」

「ここだ！」

後ろから声が聞こえた。その瞬間、クリムゾンサタンは頭部を紫電の左腕に鷲掴みにされた。

「紫電隠し兵器、左腕部内蔵加粒子砲を見せてやる」

アルマは鳥肌がたつを感じた。アルマが最期に聞いたのはぞつとするような愛斗の声だった。

「お前の人生に幕を下ろすのは俺のようだな」

その瞬間、加粒子砲がクリムゾンサタンの頭部を吹き飛ばした。パイロットを失った機体は炎上しながら、落ちていった。愛斗は平然と指示をだした。

「隊長機は俺が撃墜した。残兵の始末をしろ」

アルヴィの声が無線機から聞こえた。

「了解。始末します」

五分後、敵部隊は全滅。五機ほどは逃げていった。愛斗の声が輸送艇の指令室に響いた。

「作戦成功。これより本隊は輸送艇と共に相模湾に進路を変更する」  
ロランが愛斗に尋ねた。

「その後は？」

愛斗が答えた。

「追って連絡する。全機、輸送艇にE M Aをしまえ。この大部隊では目を引いてしまう」

秀人は叫んだ。

「勝利は我らに！」

輸送艇は相模湾へと向け、進路を変更した。

## 二十話 Rebel Justice (後書き)

今回からおまけコーナーです。名付けて、「キャラクター名言コーナー」、名前の通り各キャラに名言を言ってもらうコーナーです。

記念すべき第一回目はこの人！

” 自分の能力、才能云々の前に

やってみないと分からないだろ！”

by 識神秀人

キャラ紹介、兵器紹介更新します。

## 二十一話 熱海へ

七月二十七日、午後七時。相模湾上空を飛行中のストライダム皇国輸送艇には、今や反乱軍となった第二ノーマル混成E M A中隊が酒盛りを始めていた。ロランが叫ぶ。

「我らが澪坂軍に乾杯！我らの世界のために！」

五十九人全員が唱和する。まるで独裁国だ。愛斗が全員に向かい、叫んだ。

「全員、よく聞け！これから我々は熱海へと向かう。そこで友軍と合流する」

アルヴィが尋ねた。

「友軍とは？」

愛斗が頷いた。

「皆が知っている通り、熱海を中心とした伊豆半島はノーマル解放戦線の本拠地だ。そこに兵器と一緒に約六十機のE M Aを持って反乱軍に参加する。すでに話はつけてある」

歓声が飛び交う。秀人も立ち上がった。

「セドリックに約束した世界をつくるのは今しか無い！」

愛斗も叫んだ。

「熱海まで後十五分だ。身だしなみを整えろ！」

全員が服の乱れを整え始めた。

十五分後、輸送艇は熱海に到着、着陸した。輸送艇から五十九人が出て来た。目の前には兵士がたくさんいて、E M Aも結構の数があつた。司令官らしき立派な無精ひげの男が出て来た。

「第二ノーマル混成E M A中隊長澪坂愛斗中尉だ。司令官はお前か？」

男は頷いた。

「いかにも、俺がノーマル解放戦線総司令官の浅代護暁だ」

愛斗は頷いた。

「ここで立ち話もなんだ。中で話をしたい」  
護暁は真剣な顔でついて来いと言った。

司令部の中は中々ハイテク機器が揃っていた。愛斗は席についた。  
他の士官も全員席につく。護暁の隣の老人が口を開いた。

「私が副司令官の井崎薫<sup>いさきかある</sup>じゃ」

愛斗は手元の地図を見ながら話し出した。

「全軍の詳細を教えてください」  
護暁が頷いた。

「我が軍は熱海に兵員五百人、E M A三十機、各対空兵器を用意している。伊東、下田はその資料をみればわかるだろう」

愛斗はズバリと切り出した。

「軍の指揮権を俺に譲って欲しい」

他の解放戦線メンバーは驚いた。いきなり、何を言い出すのかと護暁が咳払いをした。

「何だと！？いきなり何を言い出すのかと思えばからかっているのか？」

愛斗は冷静な声で言った。

「俺が軍を指揮すれば間違い無く日本エレメント自治区は倒れる。保障しよう」

全員が耳を疑う。

「しかし、いきなり言われてもだな・・・」

愛斗は間髪いれずに続けた。

「あの兵器を見ただろう。どうやって奪ったのか、教えてやってもいい。俺に指揮権を譲れ。駄目なら何を当てる」

護暁は言葉に詰まった。確かに嘘を言っているようには見えない。  
「譲るのが得策かもしれんな」

薫副司令官が唐突に口を開いた。

「しかし、それでは・・・」

三時間にも渡る話し合いの末、指揮権は愛斗に移った。しかし、一つ条件つきだった。

「我が不肖の娘を補佐につけてもらう。活躍したがっているからな」  
愛斗は頷いた。

「E M Aの腕はどうだ？」

護暁は笑った。

「娘の腕は一流だ。専用機も持っている」

愛斗は満足そうに微笑んだ。

「十分だ。何処にいる？」

護暁は後ろを指差した。

「彼女がそうだ」

後ろには綺麗な黒髪のロングヘアの少女がいた。

「君が浅代殿か？」

少女は頷いた。

「はい。浅代海音あさしろかのんです。閣下に忠誠を誓います」

愛斗は笑った。

「閣下か・・・悪くは無いな。よろしく頼むぞ浅代」

浅代は一礼し、去っていった。愛斗は振り返り、護暁に言った。

「朝までに日本の電波をジャックしておいてくれ。できるな？」

護暁は頷いた。

「もちろんだ。しかし、何をする気だ？」

愛斗は冷やかな笑みを浮かべ言った。

「熱海を暫定首都とし、ここに新生大日本帝国を建国する」

護暁は驚いた。この新司令官はいきなり何を言い出すのかと。

「正気か？何が目的だ？」

愛斗は答えた。

「国民を煽動する。皇国が一斉に攻めてくるだろう。それが目的だ」  
そう言い愛斗は鬼の能面を被った。

「それは？」

愛斗は抑揚の無い声で言った。

「俺は能面の百鬼だ。そして、新生大日本帝国の初代皇帝だ」  
護暁は頭を下げた。

「御意」

愛斗は能面の中で不敵な笑みを見せた。

「復讐が、ストライダムの奴らへの復讐劇の始まりだ・・・」

## 二十一話 熱海へ（後書き）

名言コーナー！第二回目はこの人です！

”何かを変えたいのなら、

まず言葉では無く行動で示せ”

by 湊坂愛斗

キャラ紹介更新します。

## 二十二話 愛斗の真意

秀人は輸送艇の司令室で寛いでいた。ロランとアルヴィは寝てしまっていた。そこに愛斗が入ってきた。

「秀人、お前は何故戦う？」

唐突に聞いてきたので驚いたが、普通に答えた。

「まあ、正義のためかな」

愛斗は頭を抱えて言った。

「俺は正義を名乗り戦ってきたが、実は正義なんてそこにはない。俺が戦うのは復讐のためだけだ」

秀人はいきなりそんな事を言われて動揺してしまった。

「俺は復讐のためにお前達を利用してきた」

愛斗は続けた。

「でも、間違ったことをしたとは思っていない。俺はそれが正しいと思ってやった。復讐は正義だ。お前はと思う？」

秀人はゆっくりと言った。

「分からない。それは自分で考えるべきだと思う」

愛斗は秀人にあることを言った。

「俺はこの戦争が終わったら、聖域に向かいたいと思う。ついて来てくれるか？」

秀人は質問した。

「聖域？初耳だな」

愛斗も頷いた。

「エレメントが生まれた謎が眠るらしい。そこに行けば世界を変えられるかもしれない」

秀人は興味ないと言った感じで言った。

「別にいいけど・・・終わったらな」

愛斗は頷き、司令室を出て行った。その後ろ姿は寂しい男の後ろ姿だった。

翌朝、全国放送の電波がジャックされ、あるニュースが流れた。能面の男が喋りだした。

「私は能面の百鬼である。私は熱海を中心とする伊豆半島に新生大日本帝国を建国した。そして、私は初代皇帝である。全国のノーマルよ！立ち上がれ！今こそストライダムを、エレメントを滅ぼすのだ！」

回りから歓声が飛んだ。愛斗は歓声の中、何時までも壇上に立っていた。

ここは軍立朧月学園。学園長室には大量の書類と報告書が届いていた。

「報告、第二ノーマル混成EMA中隊、以下五十九名が軍から離反し、物資を強奪、そして、同学園の生徒を大量に撃墜、戦死させた・・・か」

将校が口を開いた。

「今朝のニュースも彼らの仕業でしような」

もう一人の将校が言った。

「政府はエルネスト様が直々に軍を指揮をし、討伐する方向で意見を固めており、学園の生徒全てを出撃させよとの事です」

学園長は不満そうに呟いた。

「嫌な予感がする・・・とにかく生徒全員に伝えなさい」

渚は生徒会長室でイヴオンと話し合っていた。

「そんな・・・愛くんがそんな事をしたなんて・・・」

イヴオンが舌打ちをした。

「愛斗の奴・・・俺に相談もしなかった・・・あいつは変わっちゃまったな・・・」

渚も悲しそうに言った。

「愛くんとは戦いたくないけど、やるしかないのよね・・・」

その時、生徒会室の扉が勢いよく開いた。クローディ又だった。

「秀人さんが反乱を起こしたって本当ですか!？」

イヴオンが頷いた。

「ああ、そうだけど・・・」

クローディ又が叫んだ。

「あの澁坂愛斗が唆したに違いないわ!」

渚が泣き目で叫んだ。

「愛くんは悪い人じゃ無いわ!口から出任せを言わないで!」

クローディ又は溜まっていた思いを吐き出した。

「澁坂愛斗が悪いのよ!きっと脅迫されてたのよ!許さないわ、殺してやる!」

イヴオンが怒鳴った。

「お前に愛斗の何が分かるんだよ!お前こそいい加減なこと言っんじゃないねえ!」

三人のムードは険悪になっていた。渚が泣きながら呟く。

「とにかく、今は出来る事をしましょう」

## 二十二話 愛斗の真意（後書き）

名言コーナー第三回目はこの人です。

”人生、楽しい事ばかりより、

悲しい事がある方が人間らしいわ”

by 南風渚

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 二十三話 伊豆戦争勃発

愛斗は熱海本部で書類や地図を見比べ作戦を練っていた。その脇の机ではカノンが補佐をしていた。

「閣下。先ほどは素晴らしい演説でしたね」

愛斗は微笑を浮かべながらクールに言った。

「演説などではない。思った事を国民に訴えかけたただけだ」

晴れて皇帝になった愛斗はこれから攻めてくるであろう皇国軍との戦いに備えて十分に作戦を練る必要があった。

「浅代よ、お前のE M Aを俺に見せてくれないか？」

カノンは嬉しそうに頷いた。

「もちろんです。閣下」

愛斗は立ち上がった。

「よし、では行くぞ。格納庫はどっちだ？」

カノンが案内をした。

「こちらです。閣下」

大きな格納庫の扉の中には大きなE M Aが置いてあった。

「これが私の愛機、「武神乙式」です。私の腕はまだ未熟ですが・

・

赤と金を基調にした武神乙式は悠然と立っていた。

「いい機体だ・・・心が奮い立つ。いいE M Aに恵まれたな」

カノンは顔を赤くして言った。

「光栄です」

その時、格納庫の扉から誰かが入ってきた。ロランだ。

「隊長！伝令です！エルネスト・ストライダム総督を中心とする討伐軍が侵攻を開始しました」

愛斗は待ち侘びていたとばかりに笑った。

「敵の配置を報告しろ」

ロランは頷いた。

「はい。陸路で小田原方面からE M A部隊二個連隊、対地ヘリ部隊一個大隊が熱海に向けて進撃中。相模湾から同じく熱海に向けてエルネスト総督が乗る旗艦を中心にE M A部隊が一個大隊。伊東方面にE M A部隊一個連隊、下田にも同じく一個連隊、三島方面には敵の対地ヘリ部隊が二個大隊です」

愛斗はうつすらと笑みを浮かべた。全て予想通りだ。

「今すぐ、全員を集める。作戦を報告する」

ロランは一礼し、格納庫を出て行った。愛斗はカノンの方を向いた。

「浅代、お前には大事な仕事がある。手伝ってくれるか？」

「もちろんです。閣下」

カノンは頷いた。

輸送艇の司令室には新帝国軍の士官が三十人ほど集まっていた。

愛斗はその中央の席に座り、地図を広げた。

「まず、鄙菱山頂上に第一中隊を配置。プラズママシンガンとプラズマライフルを全機装備、対空部隊も配置しておけ。絶対に気づかれないようにしろ。第一中隊の内、第三小隊は湯河原I Cで敵を待て、敵を発見し次第連絡しろ。一応、こちらでも敵の動きは分かるが念のためだ」

護業は頷く。

「海上から接近してくる敵部隊はどうする？」

愛斗は地図を指差した。

「俺の第二中隊と浅代は上空の雲の上で待機だ。レーダーで見ると敵は雲の下、五十メートルの所を通過する。そこで合図を待て」

「伊東、下田はどうしましょう？」

「下田のE M Aを全部、伊東に移動しておけ。下田には伊東の対空兵器を全て移動しておけ」

愛斗は井崎の方を向いた。

「井崎、お前は下田の指揮を頼む。詳細は追って連絡する」

井崎は頭を下げた。

「了解、閣下」

護業はもう一つの問題を出してきた。

「閣下、三島方面の敵はどうするのですか？」

愛斗は冷静に言った。

「敵は三島方面の軍は投入してこない。待機させるはずだ」

「何故です？一氣に畳み掛けて来るかもしれませんぞ」

愛斗は地図を叩きながら言った。

「敵は用心してくるはずだ。そのような馬鹿な真似はしない」

愛斗は立ち上がり、手を三回叩いた。

「準備に取り掛かれ！時間は限られているぞ！」

ストライダム皇国日本エレメント自治区軍の旗艦は相模湾をゆつくりと熱海に向かっていた。司令室ではエルネストが総督としての指揮を行っていた。

「敵はたかが反乱軍。一氣に叩き潰す」

しかし、エルネストには心配があった。敵の総司令官である零坂愛斗、いや、我が従兄弟が敵なのだ。父は昔、エルネストにこう言った。

「お前はいずれ軍の指揮を執る事があるだろう。しかし、絶対に油断してはならない事がある。同じ一族と戦う時だ」

いや、敵がどんな奴でもこの兵力差に勝つ事はできないだろう。エルネストは自軍の勝利を確信していた。恐らく、この心配は杞憂に終わるだろうと。

「熱海まで後三十分！戦闘態勢に移れ！」

旗艦の護衛に当たっていた渚は悲しく呟いた。

「戦いたく無くても戦わなきゃ駄目なのよね・・・」

隣にはピンクのEMAに乗った香奈がいた。アルマの写真を見て

眩いた。

「見ててね、アルマ。仇は討つから・・・」

一方、湯河原ICでは敵を発見した第三小隊が愛斗に報告を開始した。

「こちらベータ1、敵連隊を発見。どうぞ」

愛斗は指示を出した。

「ベータ1、後退しろ」

「了解」

第三小隊は後退し始めた。気づいた敵が発砲を開始する。

「敵が発砲を開始しました。どうぞ」

「了解した。応戦しながら、料金所まで後退だ」

第三小隊も発砲を開始した。愛斗は紫電の中で更に指示をだす。

「アルファ1、敵が視界に完全に入ったら一斉射撃だ。しっかりやれ」

「了解しました」

鄙菱山山頂の第二中隊はプラズマライフルや銃器を構えた。

「目標が見えました。十秒後に攻撃します」

敵の部隊は何の疑いもなしに距離を詰めていく。そして、完全に射程距離に入った時、プラズマライフルや銃器が火を噴いた。敵のE M Aが破壊されていく。

「どうした！？奇襲か？」

「いえ、敵は山頂から発砲しています！」

司令官は山頂を指差した。

「半分を向こうの攻撃にまわせ」

「了解」

E M Aの大群が山頂に向かってきた。第二中隊が直ぐに報告する。

「敵部隊接近中。ご指示を」

愛斗は指を鳴らした。

「そのまま攻撃を続ける。対空部隊は近づいてきた奴を全て叩き落

せ」

敵部隊は山頂目掛けて突き進んだ。その時、地上からの対空砲火で何機かが落ちていった。ミサイルが飛び交う。プラズマシールドがついていない量産機は防ぎようが無かった。愛斗は高笑いをした。「ははははは！粉々に撃ち落せ！」

司令官は山頂に送り込んだ部隊が撃墜され、前線が崩される様を目の当たりし、動揺を隠せなかった。

「全軍態勢を立て直せ！」

愛斗は容赦せずに次の指示を下した。

「ベータ1、後退を中止して追撃しろ。遠慮せずにぶつ放せ」

第三小隊はE M A専用の自動小銃を構え、撃ちながら敵を押し戻した。敵部隊の混乱は収まらず、たった十機に次々と破壊されていく。愛斗は敵が完全に戦意を喪失したところを見計らって、第三小隊に次の指示を下した。

「ベータ1、湯河原I Cまで撤退、アルファ1は指示を待て」

熱海では敵の旗艦が攻撃を開始した。エルネストが攻撃合図を出した。

「敵をひねり潰せ！」

全E M Aが動き出した瞬間、旗艦に衝撃が走った。

「後部エンジンに被弾！出力低下！」

エルネストは叫んだ。

「敵は何処だ！？」

突然、司令室に通信が入った。

「お前らの真上だ」

コックピットの前に黒いE M A、紫電が浮かびあがった。プラズマライフルを構え、左のエンジンも破壊した。

「くそ！持ちこたえられない！」

雲の上からの突然の奇襲で敵はパニックに陥った。外では、渚が一機のE M A、アルヴィの乗るリーフランクと向き合っていた。

「貴方、専用機を持っているところを見ると中々の腕前みたいね」  
アルヴィは冷やかな笑みを浮かべた。

「僕は第二ノーマル混成E M A中隊、第三小隊隊長のアルヴィ・ラーファエルだ」

渚は驚いた。同じ学校の生徒だったのだ。

「戦いたくは無いけど・・・仕方ないわね」

渚のE M A、リーフリッパーは白を基調としたE M Aだ。性能も量産機とは比べ物にならないが、アルヴィの方が実力は上だった。

「お喋りは嫌いだ。さっさとケリをつける」

リーファンクのナイトランスは鋭く、リーフリッパーのプラズマシールドに食い込んだ。そのまま機体に突き刺さる。勝負は一瞬でついた。リーフリッパーは飛行不能となり、ふらふらと落ちていった。

「同い年の奴だ。殺しはしない」

リーファンクは別のE M Aと戦い始めた。一方、復讐に燃える香奈は愛斗を、紫電を探していた。

「待ってなさい！私のフラワブルームで始末してやるわ」

そして、見つけた。味方に指示を送っている。香奈は叫びながら突っ込んだ。しかし、愛斗にはたどり着けずに邪魔が入った。

「閣下には指一本触れさせない！」

カノンの武神乙式はスラッシュソードを相手に振り下ろした。フラワブルームはそれを掴み、へし折った。武神からはミサイルが大量発射された。フラワブルームのプラズマシールドに当たり、ほとんどが防がれたが、一発が命中した。衝撃が走る。

「くっ！ミサイルなんてずるいわ！」

武神は遠慮せずにエネルギーカッターを連続発射する。右腕を見事に切断した。

「ロストシューター射出！」

武神のロストシューターはフラワブルームを引き寄せた。

「何をする気！？」

カノンは叫んだ。

「これよ！」

武神の胸部が開き、加粒子砲を発射する。フラワブルームは木っ端微塵に碎け散った。

「閣下、撃墜しました」

愛斗はカノンを褒めた。

「よくやった、浅代。伊東、下田でも同じような戦況だ」

伊東では熱海と同じ、雲の上からの奇襲で敵を壊滅状態に追い詰めていた。下田では、二倍の対空砲火で敵を撃墜していた。ミサイルに対してへりは無防備すぎ、全く役に立たなかった。

エルネストは司令室で他の部隊との通信を通して怒鳴っていた。

「もう一度報告しろ！」

「はい、鄙菱山からの奇襲と敵の強行作戦で我が隊は壊滅状態です」

「同じく、伊東への侵攻も失敗です」

「下田も苦戦しています」

エルネストは首を振り、椅子に座った。

「情けない・・・これが世界に誇るストライダム皇国の軍隊か？」

副司令官は叫んだ。

「エルネスト総督！ご指示を」

こうなったら、力でねじ伏せるしかない。エルネストは大声で叫んだ。

「三島方面の軍を動かせ！総攻撃だ！」

「了解！」

愛斗は敵の様子を伺っていた。通信からカノンの声が聞こえた。

「閣下、見事な指揮でしたね」

しかし、愛斗はまだ油断していなかった。

「なんてことは無い。敵の選択肢を絞っただけだ」

そこで愛斗は不敵な笑みを浮かべた。

「さあ、敵はどう来るか？」

その時、通信が入った。

「閣下、三島方面の敵軍が動き始めました！」

愛斗は鼻で笑った。

「敵はやけになったな。一番、単純な選択肢を選んだか」

愛斗は慎重に言った。

「待機させていた熱海防空隊で一気に叩き落せ、それで勝敗はつく」

山の合間からの対空砲火で三島からのヘリ隊は全滅寸前で退却を始めた。結果、皇国軍は敗走、晴れて帝国の勝利となり、第一次伊豆戦争は終結した。

## 二十三話 伊豆戦争勃発（後書き）

キャラ紹介を、兵器紹介を更新します。

## 二十四話 聖靈騎士団

所変わって、ここはストライダム皇国首都ハーゲンブルグにあるバイエルン宮殿。皇帝レオンハルト一世が玉座に座り、一人の男を待っていた。正面の扉が開き、一人の煌びやかなマントの正装に身を包んだ男が入ってきた。

「来たか、ライヒアルト・イエブラムよ。お前たちセイント・パラディンズ聖靈騎士団を呼んだ理由は分かっているな？」

聖靈騎士団はストライダム皇国最強の騎士団であり、十五人で編成されている皇帝直属の親衛隊である。ライヒアルト・イエブラムはそんな聖靈騎士団の団長である。ライヒアルトは真剣な顔で答えた。

「日本エレメント自治区の反乱の件でしょうか？我々が出向く程の事ではないかと存じ上げますが」

しかし、レオンハルト一世は顔を暗くした。

「我が不肖の息子、エルネストが指揮する軍が負けたそうだ。今すぐに日本に行って欲しい」

ライヒアルトは驚きの声をあげた。

「エルネスト様が！？反乱軍の首領は一体誰なのですか？」

レオンハルト一世は更に顔を暗くした。

「まだ不確かな情報だが、亡き我が弟、ジークフリードの息子のヨハン・ストライダムだ」

それから、思い出したように言った。

「そして、今使っている名前は「澁坂愛斗」だ」  
ライヒアルトは首を傾げた。

「ミオサカアイト？変わった名前ですな」  
レオンハルト一世は頷く。

「日本語だ。現地では通訳が必要か？」

「いえ、必要ありません。それより、現地の状況を教えていただき

たい」

レオンハルト一世は頷き、簡単な説明をした。

「まず、状況は最悪だ。すでに新生大日本帝国なる国の建国を宣言し、世界に覇を唱えている。エルネストの軍は敗北し、このままでは本当に東京まで占領するかもしれん勢いだ」

ライヒアルトは頭を深く下げ、言った。

「分かりました、直ぐにでも日本に発ち我が軍を勝利へと導きましよう」

レオンハルト一世は顔を輝かせた。

「そうか、行ってくれるか！吉報を待っているぞ！」

「今すぐにでも団員を集め、向かいます」

新生大日本帝国首都熱海では勝利を祝う宴が開かれていた。護暁が野太い声で叫んだ。

「我らが日本！我らが皇帝、澁坂愛斗に乾杯！」

「閣下万歳！閣下万歳！」

全兵士が唱和する、まるで、神のように愛斗は持ち上げられていた。

「分かった！分かったから下ろしてくれ！」

人ごみから抜け出した。愛斗は脇に外れた。そこにカノンが近づいてきた。

「浅代、お前は皆と一緒に盛り上がらないのか？」

カノンは優しく頷いた。

「はい、何時いかなる時も閣下の傍にいないてはいけませんので」

愛斗はそうか、と頷いた。

「なら、あっちのテントで一杯やろう。さすがに疲れた」

カノンは心から嬉しそうに笑った。

「閣下の仰せとあらば」

そんな笑顔を見て、愛斗はリリーの事を思い出し涙ぐんだ。

「閣下？どうかしましたか？」

愛斗は涙を拭い、微笑んだ。

「なんでもない。少し東京に残してきた大事な人を思い出したただけだ」

カノンは悪戯ぽく笑った。

「女性ですか？ 閣下はさぞおモテになるんでしょうからね」

愛斗は首を振り、言った。

「確かに女性だが、そういった関係ではない」

そして胸のロケットを握り、言った。

「世界で一番大事な人だ……このロケットはその人から貰ったんだ」

愛斗は秀人の事を思い出した。秀人も大事な人と別れ、俺に着いてきてくれたのか……。そこに丁度、秀人が来た。

「愛斗と一杯やろうと思って来たんだけど、邪魔だったかな？」

愛斗は秀人に優しく言った。

「秀人、お前は一度東京に帰れ。クローディヌと会って話をして来てもいいぞ」

秀人は驚いた。

「えっ！？ 戻って大丈夫なのかな？」

愛斗は頷いた。

「敵もこの敗戦で市街の見張りまで手が届いていないだろう。大丈夫だ」

秀人は本当に嬉しそうに笑った。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

秀人は荷物を整理しに行った。

「そつだ。俺より大事な人を選んだほうがあいつにとっても幸せなんだ」

そんな愛斗の呟きを聞いたカノンは言った。

「閣下は帰らないんですか？ 大切な人がいるのに……」

愛斗は決意のこもった目で言った。

「その大切な人のために選んだ道が今の道だ。後悔はしていない」

そして呟く。

「セドリックにも約束したんだ・・・」

カノンは愛斗の手を引く張った。

「閣下、めでたい時にそんなしんみりしていると運が逃げていきますよ」

そして、テントを指差す。

「ほら、一杯やるんじゃないですか？」

愛斗は頷いた。今はこの小さな勝利の喜びに浸っても罰は当たらないだろう。

## 二十四話 聖靈騎士団（後書き）

名言コーナー第四回目はこの人です。

”夢より明日を見る

そこから明日が生まれる”

b y 湊坂愛斗

## 二十五話 秀人の選択（前書き）

二十五話目です。今回から後書きに次回予告？みたいなものを書いていきます。

## 二十五話 秀人の選択

翌朝、兵士や指揮官などほとんどの兵員が二日酔いでつぶれていた。

「今、敵が攻めてきたらどうするつもりだ？」

愛斗はぼそつと愚痴を吐いた。カノンも愛斗の横で呟いた。

「酷い有様ですね・・・」

愛斗も頷く。ロランが上半身裸で大酄をかいている。アルヴィはその隣でぐっすりと眠っていた。

「アルヴィは酔ってはいないようだな」

秀人の姿は見当たらない。もう出発したようだ。

「せいぜい楽しめ、一時の休息だ」

愛斗はその言葉を兵員と秀人、両方に向けて言った。

秀人は久しぶりに見るクローディヌの屋敷の前に立っていた。緊張しながらベルを鳴らした。数秒経って中から返事が返った。

「はい、どちら様ですか？」

クローディヌの声だった。秀人は緊張しながら言った。

「僕だ、秀人だよ」

驚きの声が聞こえた。直ぐに扉が開く。クローディヌが今にも泣きそうな目で見てきた。秀人は済まなそうな顔で言った。

「クローディヌ、心配かけたよね？ごめ・・・むぐっ！」

いきなり抱きついてきたので秀人は息が詰まった。

「心配しましたのよ！反乱軍になったと聞いて、あの淺坂愛斗に唆されたに違いないと思いました！」

秀人はばつの悪そうな顔をして言った。

「確かに愛斗が言い出した事だ。だけど間違った事はしていない」

一先ず、応接室で秀人は愛斗の事情を説明した。聞き終えてからクローディヌは納得したような顔で言った。

「澁坂愛斗の事情はわかりました。でも秀人さんは澁坂愛斗に利用されているだけです。気づかないのですか？」

秀人は首を振り、言った。

「確かに愛斗はそう言った。でも僕は自分の意思で愛斗と行動してる。愛斗の復讐は正当な物だ」

クローディヌはそれを否定した。

「正当な復讐など存在しません。如何なる理由があっても人を傷つけてはいけません」

秀人は落ち着いて言った。

「じゃあ、クローディヌは僕が愛斗に利用されて死んだら黙ってられるかい？きつと愛斗を殺そうと思うんじゃないのかい？」

クローディヌは下を向き言った。

「確かに無理です。でも本当の友達だと思うのだったら、正しい道に気づかせるべきです。そうする事によってその人も他の人も救われるのではないのですか？」

秀人に頷いた。

「愛斗を救う・・・でも、どうやって？」

クローディヌは秀人の手を取り言った。

「それは貴方が考えるべき事です。今日は泊まっていてください」

秀人は頷き、寝室に向かった。愛斗を救うこと・・・それが自分に分に出る一番の事なのか？

「誰か教えてくれ！僕はどうすればいい？」

秀人は叫んでいた。

翌朝、秀人はクローディヌの家を出た。秀人の心は決まっていた。クローディヌが心配そうに声をかけた。

「秀人さん。やっぱり行くのですか？」

秀人は力強く頷いた。

「ああ、でも復讐じゃない。愛斗を正しい道に、そして救ってくるんだ」

クローディヌは微笑んだ。

「よく決断してくれました。貴方は澪坂愛斗の本当の友達ですね」  
秀人は手を振りながら駅に向かった。愛斗を変えるのは自分しかない。そう思うと太陽が一段と輝いて見えた。

## 二十五話 秀人の選択（後書き）

### 次回予告

遂に愛斗を救う事を決めた秀人の行動とは？

その時、愛斗は？そして、皇国最強の部隊、聖靈騎士団が動き出す。  
次回、二十六話「ホントウノトモダチ」お楽しみに

## 二十六話 ホントウノトモダチ

二回目となる反乱軍討伐軍エルネスト総督の乗る旗艦には本国よりやってきた十五人の騎士、聖霊騎士団が乗り込んでいた。

「反乱軍はまだかよ、飽きてきたぜ」

そう言ったのはNO15のアルベルト・カパーチェだった。聖霊騎士団はそれぞれに番号がついていて、腕や技術で番号がつけられる。要するにアルベルトは一番下という事だ。

「反乱軍だろうが何だろうが、俺のナイトメアラヴィリンスで地獄に送ってやるよ」

アルベルトは善人にはほど遠い男だった。EMAで戦い、敵を殺す事を楽しむ悪魔のような男だ。しかし、腕は十五人の中では最下位とはいえ、かなりの腕前だ。そんなアルベルトを呆れたようにあざ笑う男がいた。

「お前はそんな事を言ってるから、何時までも弱いんだよ」

この男はNO7のジェラルド・カーペンダーであった。アルベルトは立ち上がると胸倉を掴んだ。

「お前は何時も善人ぶってて嫌いなんだよ。俺はお前を越してみせる。笑ってられるのも今のうちだぜ」

ライヒアルトは苛立ちを隠せず怒鳴った。

「お前ら、何時も喧嘩をしてないで静かにしてろ！」

アルベルトは舌打ちをして、部屋を出て行った。同時に一人の士官が入ってきた。

「聖霊騎士団の方々ですね。総督がお呼びです」

今回の出兵には聖霊騎士団の内、四人だけであった。他の団員は本国で待機でしていた。総督のいる司令室に入ったアルベルトを除く三人はエルネストの前行き、片膝をついた。

「エルネスト総督、何用でしょうか？」

エルネストは暗い顔で言った。

「敵の事だ。侮ってはならない」

ライヒアルトは頷いた。

「分かっております。もちろん全力で戦うつもりです」

「ならいい。健闘を祈る」

熱海本部では酔い覚めの司令官たちが愛斗の作戦説明を聞いていた。

「敵の進路は陸路だ。前の戦と同じ小田原方面から進軍をして来ている」

愛斗は地図のある部分を指差した。

「ここの岸壁に全機を隠す。俺の合図で一斉に攻撃開始だ」

愛斗は立ち上がり全員に叫んだ。

「分かったなら行動開始だ！二日酔いで倒れている暇はないぞ！」  
司令官や兵員が本部から出て行った後で愛斗は椅子にもたれかかった。

「大丈夫ですか？閣下。お疲れのようですが・・・」

愛斗はまた立ち上がり言った。

「大丈夫だ。ちょっと立ち眩みがしただけだ・・・」

「なら、良いのですが・・・」

愛斗はカノンの頭を撫でて言った。

「心配しなくてもいい。大丈夫だ。早く出撃するぞ」

カノンは静かに頷いた。

「はい、閣下」

東京から戻った秀人は武器庫からプラズマライフルを拝借した。これだけではどうしても必要だった。愛斗を救うために・・・。

「愛斗は僕が救う。そして本当に新しい世界を・・・」

秀人は呟き、スピッツオブファイアに乗り込み、出撃した。

岸壁に張り付くようにして隠れている帝国軍のEMAは通信だけをオンにし、後のシステムはオフにしていた。愛斗の横には武神が

いた。敵の戦艦の通過まで後三十秒だ。

「全員、攻撃準備」

「了解」

敵の大きな戦艦がゆっくりと上空に姿を現した。しかし、まだまだもう少し……。その時、敵の旗艦が視界に入った。

「来た！」

紫電はプラズマライフルを構えた。そして、発射。旗艦の後部エンジンに命中した。

「行け！攻撃開始だ！」

紫電が二刀流の構えをとり、岸壁から手を離し浮かび上がる。他の機体も続いた。紫電は猛スピードで敵の部隊に突っ込んだ。武神も続く。紫電はあつという間に二機を同時破壊した。ランスを構えた隊長機は紫電にランスを突き出した。しかし、難なく弾かれ、カウンターで真つ二つになった。

「さあ、来い！」

叫んだ愛斗の乗る紫電はまさに悪魔だった。武神は怯んだ敵機に容赦なくミサイルをぶっ放した。

旗艦の司令室ではエルネストが頭を抱え込んでいた。

「またもや奇襲に引つ掛かるとは……」

無線機からアルベルトの声が聞こえた。

「団長、俺が始末するぜ。横取りはすんなよ」

ライヒアルトが叫んだ。

「お前に任せよう。侮るな」

アルベルトは鍵を差込み、ニヤリと笑った。

「ナイトメアラヴィリス、発進！」

ハッチが開き夜空が見えた。飛び出したナイトメアラヴィリスは敵の一団を見つけ突撃をかけた。ナイトメアラヴィリス最強の兵器、プラズマブレイクブレイドはプラズマシールドを中和し、直接機体にダメージを与えられる刀状の武器だ。それを振るい、ストライクパニッシャーを切り裂いた。飛び掛ってきた敵を真つ二つに

する、アルベルトにとってこの瞬間は至福の瞬間であった。

「ふふっ、ははは！楽しいよな！俺のナイトメアラヴィリンスも喜んでるぜ！」

すると、一機の色違いが飛び込んできた。恐らく小隊長レベルだろう。

「カスは引っ込んでけ！」

プラズマブレイクブレイドを振り下ろす。色違いはそれを受け止める。

「カスじゃない！ロラン・ギヌメールだ！」

ナイトメアラヴィリンスは容赦せずに次の一撃を繰り出した。ロランのスラッシュソードは真っ二つになり、更にプラズマシールドに食い込んだ。

「くそっ！プラズマシールド出力全開！」

アルベルトは意地の悪い笑みを浮かべた。

「無駄だよ！死にやがれ！」

プラズマブレイクブレイドはどんどんプラズマシールドにめり込んでいく。

「うあっ！」

プラズマシールドが破られ、右腕が損傷した。機体は落ちていった。

「けっ！雑魚が！」

それからあたりを見回した。

「おっ！紫電発見！」

真っ直ぐにナイトメアラヴィリンスは紫電にむかっていった。愛斗も気づき、向き合った。

「お前が澁坂愛斗か？」

「そうだ」

アルベルトは笑い始めた。

「ここで始末してやる。俺はあいつらより優れている事を見せつけてやる」

愛斗はアルベルトに負けず劣らず、不敵な笑みを浮かべる。

「お前のような低レベルな聖霊騎士団に構う暇は無い。浅代、相手をしてやれ」

武神が紫電の前に出て来た。

「新生大日本帝国皇帝親衛隊隊長、浅代カノンがお相手します！」  
アルベルトは叫んだ。

「雑魚は引っ込んでろ！」

プラズマブレイクブレイドを真っ直ぐに振り下ろしてきた。武神はスラッシュソードで受けるがスラッシュソードは真っ二つになった。武神はないナイトメアラヴィリンスを蹴り飛ばし、ミサイルを発射した。香奈の時と同じ戦法だ。敵はプロ、プラズマシールドを展開し防いだ。間髪いれずに二十発を撃ちこむ。

「小賢しいんだよ！」

ナイトメアラヴィリンスは爆煙をくぐりぬけ、間合いを詰めた。

「剣がなきゃ防げねえなあ！」

プラズマブレイクブレイドを振り下ろす。武神は肘の部分を曲げた。すると、鋭利な刃物が両側から飛び出した。それで受け止める上に飛び上がり旋回し、後ろに回りこんだ。

「まだまだ！甘いよ！」

ナイトメアラヴィリンスは腹部からミサイルを射出した。武神はそれをかわし、カラスモークを使った。

「くそっ！見えねえ！」

背後から声が聞こえた。

「甘いのは貴方ですよ！」

突然、機体に衝撃が走った。ロストシューターで串刺しにされたのだ。首だけ振り返ると武神の胸部が開いた。

「終わりですね」

明るいが冷たい声だった。

「ぐわあ！畜生！この小娘があああ！」

武神は加粒子砲でナイトメアラヴィリンスを粉碎した。残骸が落

ちていく。

「勝負ありですね」

司令室ではライヒアルトが叫んだ。

「アルベルト！くそっ、やられた！」

ジェラルドは口笛を吹いた。

「へえ、アルベルトに勝ったか。中々やるじゃん。なあ、カミーユ」  
カミーユと呼ばれた少女は涼しい顔で言った。

「どうでもいいけどそれより戦況が大変・・・」

エルネストは叫んだ。

「敵を押し戻せ！」

秀人はプラズマライフルを構えた。狙いは愛斗だった。ここで止めてみせる。そう誓ったからだ。クローディヌの言った言葉の意味がわかった。

「愛斗、これで目を覚ませ」

そして、発射。紫電に衝撃が走る。

「エアウイング損傷！くそっ、やられた！」

紫電は後ろを振り返るそこにはスピッツオブファイアがいた。

「どういづつもりだ。秀人」

秀人は落ち着き払った声で言った。

「僕は愛斗を止める、復讐はやめよう」

愛斗は秀人を睨んだ。

「誰に吹き込まれたんだ？」

秀人は答えた。

「誰でもない。自分の判断だ」

愛斗は残念そうに言った。

「お前は俺に牙を剥こうというのか？」

秀人は頷く。

「それで止められるのなら」

「なら、戦うしかないな。邪魔をするのなら」

紫電は二刀流の構えで向かっていった。スピッツオブファイアもプラチナメタルソードを構え、突っ込んだ。

紫電のブレードを跳ね返し、切り返す。

「ミサイル発射！」

紫電から何十発ものミサイルが一斉にスピッツオブファイアに向かってくる。

「愛斗！そんなもんじゃこのスピッツオブファイアは倒せない！」

プラズマシールドに全弾防がれた。紫電のブレードが猛スピードで振り下ろされる。受け止めたスピッツオブファイアのプラチナメタルソードは砕け散った。プラズマシールドをフルに展開しているため、機体は傷つかないがエネルギーは刻一刻と減っていた。そして、遂にスピッツオブファイアのプラズマシールドのプラズマエナジーが切れた。紫電も同じくエアウイングが消えた。お互いにブースターを使い、空に浮かんでいる状態だ。秀人が計器を確認し呟いた。

「エアウイング、プラズマシールド共にエネルギー切れか」

愛斗も呟く。

「紫電も同じだ」

秀人は予備のスラッシュソードを構えた。

「これで終わりにするぞ！」

「僕もだ！」

二人は一騎打ちでお互いに火花を散らした。勝者は秀人だった。

紫電は炎をあげて落ちていった。愛斗の声が聞こえた。

「紫電！動け！」

紫電は炎に包まれた。そして、海に落ちていく。

「閣下！そんな・・・」

回りもどよめく、そして、撤退を始めた。秀人は進行方向を変えた。旗艦へ向かったのだ。

「スピッツオブファイア搭乗者、識神秀人軍曹だ。総督との面会を

求める」

旗艦司令室に堂々として来た秀人にエルネストは驚きを隠せなかったが、何とか声を絞り出した。

「よくやった。しかし、何故奴らを裏切ったのだ？」

秀人は首を横に振った。

「裏切りではありません。愛斗を救ったのです」

エルネストは頷き、言った。

「望みは何だ？」

秀人は待っていましたとばかりに言った。

「僕を聖霊騎士団に入れてください！」

## 二十六話 ホントウノトモダチ（後書き）

### 次回予告

激戦で敗れるも命を取り留めた愛斗。

流れ着いた場所は待ち望んだ聖域。突然、現れた女は愛斗にある提案を持ちかけるが・・・

次回「聖域の神殿」お楽しみに

## 二十七話 聖域の神殿

「ほう、聖霊騎士団に入りたいとな？」

秀人は頷いた。

「はい、足手まといにはなりません。必ず、皇国のお役に立って見せます」

エルネストはちらつとライヒアルトを見た。ライヒアルトが秀人の前に立った。

「君を聖霊騎士団の一員として認めよう。これからはNO15を名乗るがいい」

秀人はエルネストの手をとり、言った。

「本国の皇帝陛下、そして貴方に忠誠を誓います」

エルネストが満足そうに頷いた。

「よし、これから叙任式を始める。秀人卿は前に」

秀人は一步前に出た。

「識神秀人卿を聖霊騎士団の一員として認め、今後の活躍を祈り、これを授与する」

そう言い、エルネストは金色のバッジを秀人の服につけた。

「これは？」

「それは聖霊騎士団員の証となるバッジ。それを着けている限り、全ての公共施設や娯楽施設の利用料金が無料になる。そして、司令室への入室が許可される」

秀人は後ろから肩を叩かれた。

「よう、相棒。今日から仲間だな」

秀人は振り向いた。一人の茶髪の男が立っていた。

「俺はジェラルド・カーペンター。聖霊騎士団だ」

「僕は識神秀人です。よろしく」

秀人は笑顔で答えた。

「前のNO15と違って、性格が良さそうだな。こっちの人が団長

のライヒアルトさん。こっちの女の子がカミーユだ」

立派なマントを羽織った男が秀人の手をがっちりと掴んだ。

「私が団長のライヒアルト・イエブラムだ。よろしくな！同志よ！」  
小柄な少女も秀人の手を握った。

「カミーユ・ドルゴポフよ。よろしく」

秀人は全員に愛想よく挨拶を返した。そして、愛斗の事を思い出す。生きているのだろうか？

臨時帝都熱海は大混乱に陥っていた。本部では会議が行われている。

「閣下の安否は確認できたのか？まだだと？急げ！」

護曉が必死に叫んでいる。

「遺体が見つかったっていう噂も聞いたぞ！」

「敵に回収されたらしい！」

本部には真偽を問わず噂が聞こえてくる。カノンが全員に向かって叫んだ。

「閣下は死んでいません！必ずお戻りになります！」

カノンは涙を流しながらどこかに走っていった。自分の寝室に駆け込んだカノンは布団に顔を埋め、泣きながら言った。

「閣下・・・お戻りください・・・生きていますよね？私は信じております」

青い空、波の音。愛斗は海岸の波打ち際に倒れていた。快晴の空は何処までも続いている。まるで、海が上と下で二つあるようだ。

愛斗は視線を動かす。一人の女性が目に入った。ブルーヘアーの女性はこちらを見下ろしていた。

「お前は・・・誰だ？」

全身に痛みが走る。恐らく大怪我をしているのだろう。

「終わりか？」

女は唐突に聞いてきた。

「何がだ？」

愛斗は聞き返す。女はため息をつき、言った。

「分かっているだろう？お前の復讐劇は終わりなのかと聞いている」  
愛斗は心を読まれたようで一瞬の肌寒さを覚えた。

「何故分かった？」

女はここぞとばかりに笑ってみせる。

「私に分からない事など無いぞ。隠すだけ無駄だ」

そう言い、女は右手を上げた。すると右手が光りだした。あれで心を読む、なぜか直感で理解できた。

「で、どうなんだ？終わりなのか？」

愛斗は女を睨みつけ言った。

「終わるものか！」

愛斗は必死に這いずりだした。ぼろぼろになった紫電が向こうの波打ち際に転がっている。

「無駄だ。今のお前の怪我ではたどり着くまでに息絶える。それにお前の乗ってきたあの紫電という機械も動く事は無い。そのくらい自分でも分かっているだろう？」

愛斗はまた仰向けになった。

「気持ち悪い奴だな・・・」

愛斗は皮肉をこめて呟いた。女は笑顔を見せた。

「褒め言葉として受け取っておこう」

愛斗は女の顔を見ながら言った。

「お前はノーマルか？エレメントか？」

女は愛斗の傍の砂を蹴りながら言った。

「どちらでもない。只、言える事はお前たちの味方だという事だ」

「どういうことだ？」

女は唐突に切り出した。

「力が欲しいか？ノーマルよ」

愛斗は頷いた。

「ああ、欲しい。どんな力だ？」

女の右手が光った。

「心配するな。エレメントにする訳ではない。エレメントを超える力をやるう」

愛斗は尋ねた。

「エレメントを超える力とは何だ？」

「エレメントは力を持った。そして、ノーマルを迫害した。エレメントは大自然に存在する物全てに干渉する力を持った。しかし、エレメントが直接、干渉できない物が一つあった」

「それは？」

女は先を続けた。

「神が作り出した最高傑作であり、最大の過ちでもある人間だ。エレメントは炎を操り、人間を焼ける。水を使い吹き飛ばす。風で切り裂く。しかし、それは間接的な干渉でしかない。お前に与える力は即ち、人間に直接干渉できる力という事だ」

愛斗は更に尋ねた。

「具体的に言ってくれないか？」

「それは分からない。言えるのは人間に直接干渉できる力が手に入るというだけだ」

「お前の力は何の力なんだ？」

女の右手が再び光った。

「人の情報を読み取る力だ。これでお前の情報を読む事が出来る」  
愛斗は頷いた。

「分かった。しかし、条件があるんだろう？」

女は不敵な笑みを見せた。

「よく分かったな。無駄に勘がいいな」

愛斗も同じ笑みを見せる。

「褒め言葉として受け取っておこう」

女は背後の神殿を指差した。

「条件はあの神殿の中の水晶を割る。それだけだ」

「自分では無理なのか？」

女は頷いた。

「水晶がある限り、私はあの神殿には入れないし、島から出られない」

愛斗は自分の身体を見ながら言った。

「俺は動けないぞ。怪我が治らない限りな」

女は笑って見せた。

「その心配は無いぞ。怪我は私が治す」

そう言い、右手を愛斗の額に置いた。自分でも癒されていくのがわかる。二分後、女は手を離れた。

「もう大丈夫だろう。さあ、行くがいい」

愛斗は立ち上がり、砂を払うと、腰の刀を確認した。

「わかった。直ぐに戻るから待っている」

愛斗は神殿に向かい歩き出した。

「でかいな・・・予想以上だ」

神殿は古代マヤ文明の神殿のような形式をしていた。階段はなく、ぽっかりと中心に穴が開いている。愛斗はその穴から中に入った。暗い神殿の中の壁には壁画が描かれ、象形文字が刻まれている。もちろん愛斗には読めない。

「これの事か？」

奥の小さな祭壇に水晶が置いてある。愛斗はそれを掴み、床に投げつけた。鋭い音を発し、水晶は砕け散った。

「これで良いのか？」

「よくやってくれた」

後ろには女が立っていた。水晶を割ったから、入って来られるようになったのだろうか。

「さあ、島を出よう。それに力をくれるんだろう？」

女は頷き、愛斗に近づきいきなり自分の唇を愛斗の唇に押し付けた。

「ん！何だ、いきなり・・・」

女は顔を話すと笑った。

「これで契約完了だ」

愛斗は身体を見回した。

「何か変わったようには感じないが・・・」

「私にはよく分かるぞ」

愛斗は壁に埋め込まれた鏡を見た。そして驚く。

「俺の目が・・・」

愛斗の目は左目が青、右目が赤く染まっていた。

## 二十七話 聖域の神殿（後書き）

### 次回予告

愛斗を討ち、学園に凱旋した秀人。そこで待っていた人は？  
そして、カノンやロランたちの運命は？  
次回、二十八話「秀人の凱旋」お楽しみに

## 二十八話 秀人の凱旋（前書き）

前回、愛斗が手に入れた力を具体的に説明します。まず、

・人間を創り変える。

・自分の潜在能力を限界まで高める。

以上の二つの力が使えます。具体的に説明すると、両目を使う事で人間そのものを創り変える事が出来ます。普段はどちらか片方、必要に応じた能力の目を使います。二つ目の能力は主に戦闘中に発動し、戦闘力等を限界まで高めます。

## 二十八話 秀人の凱旋

学園の学園長室では秀人が学園長と話をしていた。もちろん愛斗の事もだ。

「愛斗は恐らく死にました。熱海の新政府も降伏する方針で意見を固めております。新政府の司令官は処刑したそうですね」

学園長は頷いた。

「ああ、これが名簿じゃ」

名簿の中には浅代護暁の名前もあつた。

「護暁さん・・・処刑されたんですか・・・」

学園長は名簿を閉じ、立ち上がった。

「講堂に移動したまえ。表彰式がある」

秀人は立ち上がり、ドアを開け講堂に向かった。廊下ですれ違う将校は全て敬礼で挨拶を返す。講堂はすでに満杯だった。

「識神秀人殿、壇上に」

秀人は階段を上り、エルネスト総督の前に立った。

「貴君を聖霊騎士団に任命する。新世紀二十一年、日本エレメント自治区総督エルネスト・ストライダム」

そして、任命状を渡された。深く一礼をし、壇を下りた。総督や学園長の長い話が始まった。

「秀人さん！」

クローディヌだった。

「クローディヌ！会いたかったよ！」

二人は抱き合った。

「貴方はきつと正しい決断をしてくださると思っていましたわ」

秀人は愛斗の事を思い出した。

「愛斗は死んだ。死体は確認してないけど、撃墜したのは確かだ」  
クローディヌは秀人を更に強く抱きしめた。

「それでいいのです。秀人さんが無事なら・・・」

「でも、愛斗の死によって悲しむ人もいるんだ。ロラン、アルヴィ、カノン。それにリリーだって……」

秀人は熱海の新政府にいる人達を思い出した。

「彼らはどうしたのですか？」

「そういえば、名簿に名前が無かった。どこかに逃げたのだろうか？」

「分からない。その内に見つかるんじゃないか？」

クローディ又は秀人の手を掴み、言った。

「今日は私の家でゆつくりとお話したいです。いいですよ？」

秀人は頷いた。

「ああ、いいよ。今日はゆつくりと話そう」

秀人はクローディ又と別れ、生徒会室に行った。中には渚が椅子に座って頂垂れていた。

「秀人さん？」

渚がゆつくりと振り向いた。

「ああ、僕だよ。愛斗の事は……」

渚は秀人の言葉を遮った。

「言わないで。愛くんの事はもういいんです」

渚は愛斗が見学をしに来た時に撮った写真を見た。

「愛くんは間違っていました。秀人さんは愛くんを止めてくれたのよね。だったら恨んだりしないわ」

秀人はとにかく謝った。

「ごめん、本当に。愛斗は……」

秀人は愛斗の写真を見て、言った。

「いい奴だったよ」

熱海司令室では敵への降伏が決まり、ロランとカノンが荷物を纏めていた。最高司令官である父、護暁を処刑された恨みはカノンの心に強く残っていた。

「せめて隊長がいれば……」

ロランがため息をつく。

「閣下は何時か戻ってきます。必ず、絶対に・・・」

「その通りだ」

後ろから見覚えのある声が聞こえた。二人は同時に振り向く。そこにいたのは・・・。

「閣下！何処に行つていらしたのですか！？」

「隊長？嘘だろ！」

そこに立っていたのはサングラスを掛けた愛斗だった。

「全員を集める。軍を再編する」

「了解！」

二人は同時に敬礼をし、走り去って行った。愛斗はサングラスを取った。

「隠れてないで出て来い。撫子」

司令室の隅から女が出て来た。

「撫子？何だそれは？」

愛斗は女に近づいた。

「お前の名前だ。名前が無いと不便だろう。お前の名前は最神撫子だ」

女は大した不満も無いようだった。

「変わった名前だな」

そう呟いただけである。

「この目は便利だな。礼を言うぞ」

愛斗はサングラスを掛けた。

司令室にはかき集めた士官が屯っていた。

「これより軍の再編会議を始める。まず、俺の副官を浅代に務めて貰う。文句は無いな？続いて、もう一人の副官を決める。厭 海星  
よ、やってくれるな？」

一人の青年が立ち上がった。

「我が君主にこの命を捧げます」

海星は熱海では無く、下田で司令官を務めていた男だ。先日の敗

戦で大勢の士官を失った軍は下田、伊東からも士官を募ったのだ。  
「先日、浅代が戦った聖霊騎士団。皇国の花形とも言えるこの部隊は歴戦の兵揃いだ。よって、我が帝国にも花形とも言えるものが必要だ」

愛斗は立ち上がり、叫んだ。

「ここに俺を主将として帝国精鋭隊「六華戦」ろっかせんを編成する！部隊は六部隊。浅代は「小町隊」隊長。俺は「業平隊」。海星には「康秀隊」。アルヴィには黒主隊を任せる」

愛斗は更に続けた。

「もう一つ、帝国親衛隊を編成する。皇帝を守る親衛隊だ。軍の進軍の際には、旗艦の左翼を守る「青龍隊」、右翼を守る「白虎隊」、前方を守る「玄武隊」、後方を守る「朱雀隊」の四隊で編成する。玄武隊隊長は柏力リーヌ。かしわお前に任せる」

一人の少女が立ち上がった。年は十五、六才といったところだ。

「御意」

他の部隊編成は六華戦「遍照隊」隊長はロラン。「喜撰隊」隊長がヴァランティヌ・シャルトル。親衛隊「青龍隊」は朝倉あさくら宗治そうじ。「白虎隊」は南野みなみの辰しん。「朱雀隊」が吾妻あずま百合華ゆりかだ。

「以上の部隊編成で軍を再編する。尚、井崎には帝国の宰相を務めて貰いたい。いいな？」

井崎は深く頭を下げた。

「恐縮です」

愛斗はサングラスを外した。

「我々には切り札がある」

「閣下、その目は？」

カノンが驚いている。

「俺は「碧眼の力」を手に入れた。「服従の左目」と「忘却の右目」だ」

回りから歓声が飛んだ。愛斗の両目が鈍く輝く。その横では撫子が薄笑いを浮かべた。

「俺はこれから単独行動をする。指示があるまで熱海で待機しろ」

「単独行動？どちらへ？」

カノンが問い掛けた。

「東京だ。学園に戻る。秀人には我が軍に戻って貰う」

## 二十八話 秀人の凱旋（後書き）

### 次回予告

学園に復帰した秀人、イヴオンや渚との学校生活。

しかし、これで事件は終わらなかった。

愛斗の策略が再び動き出す。

次回二十九話「転校生」お楽しみに

## 二十九話 転校生（前書き）

愛斗は左目で情報などを聞き出し、右目でその記憶を奪います。二つ同時に使う事は滅多にありません。

## 二十九話 転校生

朧月学園の一年四組は騒然としていた。転校生の知らせを受けて秀人も少し嬉しかった。愛斗の事を少しでも忘れたかった。教室のドアが音をたてて開いた。オスカーが入ってくる。

「みんなが聞いているように今日から転校生がやってくる。皆、仲良くするように。では、ヨハン君、入ってきなさい」

ドアの向こうから一人の青年が入ってきた。教室が静まり返る。秀人はあぐりと口を開けた。

「今日からこの学園に転校してきたヨハン・コルネリウスです。皆さんと楽しく過ごしていきたいと思います。どうかよろしくお願いします」

感じのいい美青年。黒髪、背も同じ、声も同じだ。唯一違うのは瞳の色だけ……。秀人は立ち上がり叫んだ。

「愛斗！何でここにいるんだ！？」

ヨハンは首を傾げた。オスカーが咳払いをした。

「秀人君、彼は反逆者澁坂愛斗では無い。不思議な程似ているが別人だ」

秀人は力が抜けたように椅子に座った。オスカーが教室から出て行くと、ヨハンは秀人の方に向かって歩いてきた。

「君が英雄の識神秀人君だね。すごいじゃないか。あの反逆者を討ち取るなんて」

秀人は首を振った。

「僕は英雄じゃ無い。只の男だ」

ヨハンは秀人に問い掛けた。

「でも、どうして裏切ったんだい？君は彼らの味方だったんじゃないのかい？」

「クローディヌが僕に教えてくれた。復讐は悪だ。正義じゃない。僕は愛斗を救ったんだ」

ヨハンは意味ありげに笑った。

「へえ、つまりクローディヌさんが君にそう言ったんだね？」

秀人はヨハンを見た。

「何でそんな事聞くんだ？別にどうでもいいだろ」

「いや、気になっただけさ。深い意味は無いよ」

ヨハンは笑顔で教室から出て行った。性格は愛斗と大違い、正反對だ。でも、気になった。別人だとわかってるのに。

ヨハンは教室から出た後、人気の無いところでため息をついた。

「ふう、好青年を演じるのは大変だな。おい、出て来い撫子」

暗がりから女が出て来た。

「私に用か？」

「ああ、クローディヌ・ケ・デルブロワ。この女を調べる。行動パターン、性格、など全てをだ。お前の力を使えば余裕だろう？」

女はニヤリと笑う。

「まるでストーカーだな。お前は面白い奴だが、変態なのか？」

ヨハンこと、愛斗はまるで無視しているかのように手を振った。

「頼んだぞ、俺には行くところがある」

「リリー・ケンプフェルの所か？ストーカーの次はロリコンなのか？お前の傍にはリリーといい、カノンといい年下の女ばかりだな」

愛斗は腹を立てたのか何も言わずに去っていった。

「ふっ、面白い奴だな。感情を表に出さない男か・・・」

ヨハンが向かったのは生徒会室、渚のところだ。ドアを開けると、渚がこちらを向いた。

「貴方がヨハン君？本当に愛くんにそっくりね・・・」

ヨハンは愛斗とは正反対の笑みを浮かべた。

「よく言われます。それより、生徒会に入りたくて来たのですが・・・」

渚は顔を輝かせた。

「それなら大歓迎よ。まあ、簡単に説明するわ。その間に書類にサインして、それで・・・」

長い説明を終えて、ヨハンは生徒会のバッジをつけた。

「これで生徒会役員になったんですね」

「ええ、そうよ。頑張つてね」

ヨハンは生徒会室を出た。そして独り言を呟いた。

「生徒会に入れば、情報収集が楽になる。次は学園の動力だ」

ヨハンは学園の動力室に赴いた。ドアの前に立ち、扉に手を掛けた。

「何をしているんだね？」

ヨハンは慌てて振り返った。オスカーだった。

「すいません。道に迷ってしまつて・・・ここは何の部屋ですか？」

オスカーは扉を弄りながらいった。

「ここはこの学園の動力室だ。入るには二十桁のパスワードの入力が必要だ」

ヨハンは頷いた。

「では」

愛斗の両目が眩いばかりの光を放つ。オスカーはその光を直視してしまった。

「パスワードを入力しろ」

オスカーは感情の無い声で言った。

「私にはわからない。知っているのは学園長だけだ」

ヨハンは舌打ちをした。光が収まっていく。

「・・・！私はここで何を？」

ヨハンは笑った。

「先生が学園を案内してくれていたんじゃないですか」

「そうだったか。すまない、少し呆けていたようだ」

ヨハンは階段を上り始めた。

「先生？行きましょう」

そう言い、ヨハンは階段を上っていった。オスカーは何か腑に落

ちなかったが、あまり気にせず、教室へと戻った。

## 二十九話 転校生（後書き）

### 次回予告

学園に潜入した愛斗は兵力の増強のため大阪に出向く。

大阪には日本最大級の組織、「関西連合」があった。

そして、紫電が再び現れる。

次回三十話「紫電、再び」お楽しみに

三十話 紫電、再び（前書き）

祝、三十話目です。

### 三十話 紫電、再び

八月二十四日深夜未明。ここは新生大日本帝国最大の戦艦、ドレツドノートの司令室である。中央の玉座には愛斗が座っていた。脇にはカノンと海星が副官として立っている。司令室に乗組員の声が響いた。

「新大阪、連合本部まであと五分です」

大阪を本部として、実質的に関西を仕切っている関西連合の本部は大阪にある。愛斗率いる帝国軍は大阪連合盟主である鳳凰院<sup>ほうおういん</sup> 絢<sup>あや</sup>との会談のためにはるばる大阪まで来たのだ。

「着陸します」

大きな飛行場に戦艦は着陸した。

「浅代、海星、行くぞ」

愛斗はそう呟くと能面を被った。建国を宣言した時に能面を被っていたので、今も人前では被るようにしているのだ。戦艦のタラップから降りると、黒服のSPが大勢待ち構えていた。その一番前に愛斗と同じ年くらいの少女がいた。

「ようこそ、大阪へ。ウチが関西連合盟主の鳳凰院絢や」

愛斗は差し出された手を握り返した。

「俺が新生大日本帝国皇帝、能面の百鬼だ」

絢はSPに道を空けるように指示を出した。

「お客さんを部屋に頼むわ」

SPは頷いた。応接間のような部屋に通された愛斗とカノンと海星はソファアに座った。続いて、絢が入ってくる。

「何や、部屋に入っても面は取らんのかいな」

「俺は能面の百鬼だ。他の何者でもない」

絢は大体納得した、といった顔で向かいのソファアに座った。

「そちらのお二人さんは？」

カノンが一步前に出て、絢の手を握った。

「私は新生大日本帝国精鋭部隊六華戦小町隊隊長兼、副指令の浅代カノンです」

海星もそれに習った。

「同じく厭海星だ」

「飲み物は紅茶でもええか？」

愛斗は頷いた。

「構わない。それより、本題に入りたいのだが」

絢が宥めた。

「まあ、まだそっちの戦力が頼りになるか分からへんからな」

愛斗は写真を大理石のテーブルに置いた。

「これが俺の紫電だ。噂は聞いているだろう」

絢は写真を興味深そうに眺めた。

「紫電！カッコええな。でも、壊されたとちゃうのか？」

愛斗は頷いた。

「ああ、一度はな。正確に言うと今は紫電ではない、紫電改だ」

「なんや、カッコええ名前やな」

愛斗は資料を見せた。

「破壊された紫電を回収し、再び改装した。以前の紫電のスペックの二倍の性能を得た最強のE M Aだ」

綾は紅茶を啜ると、笑って見せた。

「実戦を見ん限りは何とも言えんなあ」

ドアが勢いよく開いた。

「なんや、会議中やで」

「姫様、警備隊に感づかれました！こちらに向かってきております！」

愛斗は能面の中で不敵な笑みを浮かべた。

「紫電改で行く。実戦を見せてやろう」

そう言い、愛斗は立ち上がった。

「カノン、海星。スタンバイだ」

「了解」

三人は部屋を出た。

司令室のアルヴィは連絡を受けて、紫電改の出撃の用意をしていた。

「相変わらず立派ですね。隊長の紫電は」

後ろには愛斗が立っていた。そして紫電改のハッチを開けた。

「紫電改、発進用意！十秒前！」

シャフトが開いた。愛斗は能面を外し、通信をオンにする。

「こちら紫電改。アルヴィ、用意はいいか？」

「もちろんですよ！隊長、何時でも発進できます」

愛斗は紫電をのロットルを限界まで下げた。

「最初から出力全開で行く。紫電改、発進！」

紫電改はエアウイングを機動させ、敵のいる方角へと飛び去った。敵を確認、戦闘を開始する」

紫電改は両腕を広げた。脇の部分と背中からミサイルを一斉に射出した。二キロ程先で小爆発が起こる。敵の警備部隊の隊長は通信で叫んだ。

「報告しろ！被害はどの程度だ！？」

他の警備員の声が聞こえた。

「隊長！紫電です！」

隊長は血の気が引くのが分かった。

「紫電？澁坂愛斗の紫電か？」

「はい、信じたくありませんが、目の前に……」  
通信が途絶えた。

「あれは……紫電……」

漆黒の機体が夜の空に現れた。

「ぐおおおおお！」

隊長は死に物狂いで切り掛かった。紫電改の鋭い一閃。隊長機は二つに裂かれ、墜落した。紫電改に通信が入った。

「ホンマにすごいなあ。感動したわ。ええよ、同盟締結や」

絢のその言葉を聞いて、愛斗は笑みを浮かべた。

「こちら紫電改、只今より帰還する。急いで熱海に帰還するぞ」  
紫電改は満月の下を優雅に帰還した。

## 三十話 紫電、再び（後書き）

### 次回予告

待ちに待った学園祭がやってきた！

心待ちにする生徒たち。

愛斗の企みが動き出す。

次回三十一話「それぞれの企み」お楽しみに

### 三十一話 それぞれの企み（前書き）

この小説のアナザーストーリーの連載を開始しました。本編がダイナミックな内容ばかりなので、ライトな物語が見たい方はそちらの方もどうぞよろしくお願いします。

### 三十一話 それぞれの企み

学校に来た秀人はまず生徒会室に行く。今日もそれは同じだった。ドアを開けると何時ものように渚がいる。

「秀人くん、もう直ぐ学園祭なのよね。知ってた？」

秀人は初耳だったので驚いた。

「全く知らなかったよ。何をやるの？」

渚はとっておきの笑みを浮かべた。

「今、企画しているのは仮装パーティーなのよね。どう思う？」

秀人は仮装パーティーと聞いて、興味を抱いた。

「面白そうじゃん。やろうよ」

丁度、イヴオンがやってきた。

「イヴオンくん！仮装パーティーをやるうと思っただけかどうかかな？」

「俺は良いと思うぜ」

続いて、クローディヌとヨハンが入ってきた。

「クローディヌとヨハンはどう思う？仮装パーティー」

「良いんじゃないかしら」

「僕も賛成です」

渚は手を叩いた。

「じゃあ、早速準備開始ね」

渚は書類を整理し始めた。他のメンバーも各自の仕事に取り掛かる。秀人は椅子に座り、愛斗の写真を見た。そして、リリーのことを思い出した。

「皆、ちよつと用事を思い出した。授業に遅れるかもしれないから教官に伝えておいて」

イヴオンが頷いた。

「わかったぜ」

秀人は病院へ向かった。

「リリー？いるかな？」

リリーがこちらを向いた。

「秀人さん？愛斗さんも一緒ですか？」

秀人の顔が暗くなった。悟られないようにベッドに近づき、リリーの手を握った。

「愛斗は忙しいみたいで当分来られないんだ。でも心配するなって言ってたよ」

秀人は胸が苦しくなった。リリーに嘘はつきくた無かった。でも、  
「リリー、落ち着いて聞いてくれ。愛斗は死んだ。反乱を起こして、僕が撃ち落したんだ」

何て言える訳ない。リリーは悲しそうな顔をしたが直ぐに笑顔になった。

「会えないのは寂しいですけど、永遠に会えない訳じゃないので平気です。愛斗さんに無理をしないでと伝えてください」

秀人は頂垂れた。この少女は永遠に会えない事に気づいてない。嘘を何時までも吐きとおすのは無理だ。何時かはバレる。その時はどうすればいいのだろう。

「分かった。愛斗に伝えておくよ。リリーも気をつけてね。夜は冷えるから」

結局、こんな言葉しか出てこなかった。

「秀人さん？何か辛い事でも？」

「何でも無いよ。じゃあね、授業に遅れないようにしないと」  
リリーも笑顔で返してくれた。

「はい、さようなら。秀人さん」

秀人は初めて愛斗を葬った事を酷く後悔した。

クローディ又は一人ほくそえんでいた。

「仮装パーティー。これで秀人さんとの中を急接近ですわ」  
クローディ又は色々妄想を繰り広げていた。

「おい、クローディヌ？大丈夫か？」

イヴォンの声でクローディヌは我に返った。

「へっ！だ、大丈夫よ！」

ヨハンは声を上げて笑った。

「クローディヌさんは仮装パーティーが楽しみみたいだね。相当浮かれているし」

クローディヌの頬が赤く染まった。澁坂愛斗にそっくりなヨハんに普通なら、嫌悪感を抱くのだが、何故か、ヨハンの笑顔を見ると顔が赤くなってしまふ。恐らく、恋心に近いものを抱いているのだろうが、クローディヌはそれを認めようとしない。

「この書類はどうすればいいんだ？」

イヴォンが渚に尋ねた。

「それはまだいいわ。それより、こっちの書類を・・・」

クローディヌはため息をついた。ヨハンは思い出したように、

「ちょっと用事を思い出しました。行って来ますね」

と言い、部屋を出て行った。

部屋を出たヨハンは学園長室に向かった。学園長室の前の警備は手薄だ。手薄になる時間帯を狙ってきたのだから手薄なのは当たり前だが。

「学園長？いますか？ヨハンですけど・・・」

「入ってよいぞ」

ヨハンはドアを開けて中に入った。

「学園長？お尋ねしたい事が」

学園長はヨハンの顔をじっと睨んだ。

「何か？」

「いや、澁坂愛斗にそっくりじゃのう・・・と思ってな」

「よく言われますよ」

学園長は咳払いをした。

「すまん。で、何用じゃ？」

ヨハンは微笑む。両目が眩いばかりの光を放った。学園長もその光をオスカーと同じように直視した。

「動力室のパスワードを教える」

そう言い、ヨハンは一枚のメモ用紙を取り出し、ペンと一緒に机の上に置いた。学園長はそこに二十桁の数字を書いた。

「これで間違いないな？」

学園長は虚ろな目で頷いた。

「ああ、それで正しいはずじゃ」

目の光が収まった。学園長が我に返る。

「何だ、ヨハン君？何の用じゃ？」

「いえ、何でもありません」

ヨハンはそう言うと、部屋を出て行った。

ヨハンが次に向かったのは薄汚れたレジスタンスの本部であった。能面を被り、中に入る。中には大勢の兵士や民間人がいた。一人の大將格の男がヨハンの姿を見て驚いた。

「貴方は能面の百鬼様？」

周りの視線がヨハンに集まる。その男は何時ぞやのレジスタンス、石田大尉であった。石田大尉は叫んだ。

「皆、この方は俺の命を救ってくださった恩人だ。丁重に歓迎しろ」

石田大尉はヨハンに近づいた。

「今日はどのような理由でこの薄汚い場所へ？」

「お前たちに協力してもらいたい。日本からエレメントを追いつために」

石田大尉は驚いた顔を見せた。

「何ですと？そんな事が可能なのですか？」

「すでに新生大日本帝国と関西連合は手を組んでいる。後は東京を、首都を落とすだけだ」

石田大尉は少し考えた。そして、顔を上げる。その顔には決意の色が浮かんでいた。

「はい、協力しましょう。何をすれば？」

ヨハンは冷たい声で言った。

「指示を待て。それだけだ」

石田大尉は頷いた。

その夜、リリーは愛斗の事を考えていた。

「愛斗さん・・・会いたいです。どうして会いに来てくれないんですか？」

その時、窓が開く音がした。涼しい夜風が吹き込んでくる。

「誰かいるの？」

聞き覚えのある声が響く。

「俺だ。愛斗だ。久しぶりだな」

リリーは驚いて大声を出した。

「愛斗さん？どうしてこんな時間に？しかも窓から・・・」

愛斗はリリーの頭を手で撫でた。

「あまり大声を出さないでくれ。いいか、よく聞け。悪いテロリストが戦争を始めようとしている。九月九日、この日までに街から逃げないと駄目だ。迎えを出す。九月九日の午後六時に新渋谷駅に来い。いいな？」

リリーは頷いた。

「分かりました。愛斗さんは？」

愛斗は優しく言った。

「俺はやる事がある。先に逃げてくれ」

「嫌です。愛斗さんと一緒じゃないと・・・」

愛斗は何時に無く厳しい声で言った。

「頼む、お願いだ。逃げてくれ」

リリーは観念したように頷いた。

「分かりました」

「ありがとう、リリー」

愛斗はリリーの頬にキスをして、再び窓から降りていった。

「愛斗さん・・・」

リリーは悲しみの混じった声で呟いた。

### 三十一話 それぞれの企み（後書き）

#### 次回予告

いよいよ学園祭本番。

クローデイヌの、愛斗の企みが動き出す。

その時秀人は？

次回三十二話「決戦・学園祭」お楽しみに

## 三十二話 決戦・学園祭

九月八日。学園祭当日、学園内は朝から盛り上がっていた。皆が浮かれ、騒いでいる。秀人もその一人だった。

「おい、秀人！たこ焼き食いに行こうぜ」

イヴオンに誘われ、秀人は頷く。

「クローディヌやヨハン達も探さなきゃ・・・」

「そうだな・・・何処に行つたんだ？」

広場には屋台が沢山あるが、皆の姿が見当たらない。

「なあ、秀人？クローディヌに告白したりしないのか？」

イヴオンがいきなり聞いてきたので秀人は動揺を隠せなかった。

「そ、それは！まあ・・・」

イヴオンがニヤリと笑った。

「こういう特別な日が狙い目だぜ」

秀人も頷いた。

「じゃあ、少し話をするかな？」

イヴオンが秀人の背中を思い切り叩いた。

「そうだ！そうしろよ！俺も生徒会長と話してくるかな？」

渚はイヴオンのタイプにヒットしているようだった。

「まあ、頑張れよ」

イヴオンは辺りを見回し、呟いた。

「愛斗にも見せてやりたかったな・・・」

「そうだな・・・」

イヴオンが石を蹴り飛ばすと、いきなり笑い始めた。

「今はしんみりしてる場合じゃないな！楽しまないと！」

秀人も笑った。

「そうだな！そのほうが良いよな！」

丁度その時、ヨハンとクローディヌが現れた。

「やあ、君たち。楽しんでいるかい？」

イヴオンが頷いた。

「そりゃ、楽しいぜ！」

「僕もだよ」

クローディヌも楽しそうに笑う。

「良かったですね。ヨハンさんが心配していたんですよ。愛斗の事で落ち込んでいなかった」

秀人は寂しそうな顔を見せた。

「まあ、寂しいっちゃ、寂しいけど今は楽しまないと」

クローディヌは秀人の傍に近づいた。

「今日の仮装パーティーは楽しみにしています。楽しい一夜になるように・・・」

仮装パーティーは夜に開催される。場所は大きなホールだった。

「僕も楽しみにしてるよ」

「俺も着ていく服を選ばないとな！」

イヴオンが仮装した自分の姿を妄想し始めた。

「僕はイヴオンと屋台を見て回るけど、クローディヌとヨハンはどうする？」

「私はヨハンさんと演劇でも見に行きます。どうか楽しんでください」

秀人は手を振った。

「じゃ、また夜にね」

秀人は決意を固めた。思いを伝えるには今日しか無いと・・・。

その夜、パーティー会場に秀人はやってきた。中々お洒落なタキシードを着込んでいた秀人は辺りを見回してクローディヌの姿を探した。

「よお、秀人」

後ろから声を掛けられ振り返ると、イヴオンが立っていた。

「イヴオン・・・お前、その格好・・・」

イヴオンは大きなマントを身に纏い、タキシードを着ていた。ま

るで、ドラキュラ伯爵だ。

「演劇部から借りてきたんだ。似合ってるだろ？」

秀人は失笑した。

「まあ、似合っているけど、変わってるな・・・」

「まあな。でも、渚はこういう方が好きなんじゃないのか？」

秀人は反応に困ったが一応、賛成しておいた。

「頑張れよ」

秀人は再びクローディヌを探し始めた。そして、見つけた。クローディヌは別のテーブルで食事をしていた。

「おい！クローディヌ！」

秀人は叫びながら走り寄った。

「あら、秀人さん？」

秀人はクローディヌを見た。

「あれ？お取り込み中だったかな？」

その時、渚の声が舞台から響いた。

「皆さん！本日は仮装パーティーにご出席いただき、誠にありがとうございます！今夜は楽しんで下さい！」

秀人はクローディヌをもう一度見た。綺麗な純白のドレスはとても神々しい。

「いや、パーティー始まったし、食事でもどうかな？」

クローディヌが口を開きかけた時、入り口のドアが開いた。入ってきたのは能面を被った男だった。

「の、能面の百鬼！？」

秀人は言葉を失った。

「な、何で愛斗が？死んだはずじゃ・・・」  
能面の男が面を外した。

「ヨハン君？何でそんな物を？」

クローディヌが面食らって尋ねた。

「いや、愛斗って人と似ているなら、似合つと思ひまして・・・」  
秀人は胸を撫で下ろした。

「寿命が縮んだよ。本当に驚いたからさ」

会場に曲が流れ始めた。イヴオンは渚の方に向かっていった。きつと誘うのだろう。

「クローディヌさん？少し食事でもしませんか？」

ヨハンがクローディヌに微笑みかけた。

「ええ、構いませんわ」

秀人も負けずに誘った。

「クローディヌ？曲も始まったし、その・・・僕と踊りませんか？」

クローディヌはヨハンを振り返った。ヨハンは笑って頷いた。

「構わないよ。踊っておいで」

クローディヌはヨハンに礼を言った。

「後、クローディヌさん？後でお話があるので、一緒に来ていただけますか？」

「はい、喜んで」

秀人はクローディヌの手を取り、曲に合わせて、踊り始めた。ステップは知らないが、リズムに合わせれば可笑しくはならない。

「クローディヌ・・・あの・・・」

秀人はイヴオンの言った事を思い出し、何か気の利いた言葉を掛けようと思った。

「あの、綺麗ですね」

結局、こんな言葉しか思いつかなかった。

「何がですか？」

思わぬ質問で秀人は口籠った。

「えっと、クローディヌが綺麗だな、って・・・」

秀人は思いつきの嘘を叫んだ。

「あっ、コンタクトが外れた！ちよっとトイレに行って来るね！」  
本当はコンタクトなんて付けていない。頭を冷やすためにここから離れる口実だ。トイレに走っていく秀人をクローディヌは残念そうに見た。

「もっとはっきり言うてくだされば良いのに・・・」

トイレに駆け込んだ秀人は顔を洗った。そして、頬を叩く。  
「よし、すっかりやるぞ！」

クローディ又はヨハンに声を掛けられた。

「今、お暇みたいですね。ちよつと良いですか？」

「ええ、良いですけど」

ヨハンはクローディ又の手を引き、中庭に向かった。丁度、トイレから帰って来た秀人は何処かに行く二人を見てしまった。

「あれ、何処に行くんだ？」

秀人は不本意だが後を追うことにした。二人の歩みは早かった。何度も見失ったが、何とか追跡を続けていた。

「くそ、参ったな・・・」

これで見失うのは五回目だ。

「とにかく探すか・・・」

秀人はとにかく歩き回ることにした。

中庭にたどり着いた二人はまず、向き合った。

「一体、何の用ですか・・・んっ！」

クローディ又はいきなりヨハンに抱きしめられ、息が詰まった。

「クローディ又さん、秀人の事はどう思う？」

クローディ又は照れを隠せずに小さな声で呟いた。

「優しい方だと思いますわ」

ヨハンは更に続けた。

「クローディ又さんは秀人君に正しい道を説いたそうだね。僕を見ていて嫌な気持ちになったりしていないかい？」

「澁坂愛斗と貴方は別人ですわ。ヨハンさんもとっても素敵なお方ですわ」

ヨハンは抱きしめる手に更に力を込める。そして・・・突然、電気が消えた。鋭い銃声。クローディ又は訳も分からず、ヨハンを見た。その顔に表情は無い。クローディ又は次に自分の腹に手を当

てた。当てた手には血が付いていた。

「ヨ、ヨハンさん・・・？」

ヨハンの手には拳銃が握られていた。クローディ又はヨハンから離れた。ヨハンは冷たい笑みを浮かべた。

「鈍い奴だな・・・この場に及んでもまだ俺をヨハン・コルネリウスだと思っているのか？」

クローディ又は痛みを堪えて、言葉を吐き出した。

「お前は・・・澁坂愛斗・・・？」

ヨハンこと愛斗は不敵な笑みを浮かべた。

「お前の鈍さが弱点だ。この計画でお前を殺す事は俺の計画の第一歩となる。お前は本当にこの俺に惚れたのか？俺は憎き相手じゃなかったのか？」

「誰が・・・お前なんか・・・」

愛斗は更に続けた。

「お前は俺から秀人を奪った。秀人は俺の計画に必要なだった。それを邪魔した時点でお前は殺される運命だったんだ」

クローディ又は地面に仰向けに倒れこんだ。そして、何とか言葉を捻り出す。

「秀人さんはお前に利用させないわ。絶対に・・・」

愛斗は拳銃をクローディ又は胸の上に置くと、去り際に言った。

「そろそろ、秀人が来るだろう。秀人に伝えておけ。始まりの場所で待つ、と」

愛斗は能面を被り立ち去っていった。

秀人は中庭にたどり着いた。頭はかなり混乱していた。突然の停電、謎の敵の夜襲。全てがおかしい。中庭の真ん中に秀人は人が倒れているのを確認した。

「ク、クローディ又？」

秀人は駆け寄った。回りには血溜りが出来ている。

「誰がこんな事を・・・クローディ又！目を開けて！」

クローディヌは薄っすらと目を開けた。

「ひ、秀人さん？」

秀人は手を握り言った。

「人を呼んでくる！絶対に死ぬな！」

立ち上がろうとした秀人の手をクローディヌは引つ張った。

「私・・・騙されてた・・・馬鹿よね、本当に笑いものよね・・・でも、秀人さんは違うわ。正直者で優しくて最高の人だったわ・・・」

「クローディヌ、好きだよ」

秀人は言えなかった言葉を呟いた。

「嬉しい・・・でも、もうお別れみたいなの・・・」

秀人は叫んだ。

「死ぬな！君がいなくなったら・・・僕は・・・」

クローディヌは思い出したように呟いた。

「澁坂愛斗が・・・貴方にこう伝えろって、始まりの場所で待つ・・・」

「始まりの場所？もしかしたらあの噴水広場か？」

クローディヌは最期の力を振り絞った。

「私も・・・秀人さんの事が・・・好き・・・でも、私の復讐をするのは・・・やめて・・・私のことは忘れて新しい人と・・・」

そして、目を閉じた。

「あり・・・がと・・・」

腕から力が抜けていく。

「クローディヌ!？」

しかし、返事は無かった。秀人はクローディヌの胸に置いてあつた拳銃を握り締め、叫び、泣いた。そして、場全ての原点である噴水広場へ向かった。

噴水広場にたどり着いた秀人が見たものは能面を被った一人の青年の姿だった。

「愛斗・・・よくもクローディヌを・・・お前だけは殺す！」

秀人は拳銃を構えた。

「その仮面を脱ぎ捨てろ！素顔を見せてみる！」

愛斗は能面を取った。その下の顔は愛斗そのものだった。

「秀人、お前は本当の正義を理解出来ていないようだな」

「黙れ！これがお前の言う正義なら分からなくてもいい！」

秀人は拳銃の引き金に手を掛けた。

「愛斗、お前の復讐は何だ？エレメントを片っ端から殺せば気が済むのか？」

「秀人、お前には本当の事を教えたい。何故、こんな事をしたのかも。正義とは何なのかを」

愛斗は首のロケットを指で弄った。

「お前にその引き金を引く勇氣はあるのか？なら今すぐに撃てばいい。俺は逃げも隠れもしない」

愛斗は素早く、自分のマントの中から拳銃を取り出し秀人のボタンを弾き飛ばした。

「俺は撃つことが出来る。お前は今、撃たなかった。撃てば俺を始末できたのに・・・」

秀人は悪態をつき、引き金を引いた。しかし、弾丸は愛斗には当たらなかった。後ろの噴水にピンクのE M Aが立っている。愛斗はそのE M Aの手のひらに飛び乗った。

「秀人！お前が本当の目的、正義を知りたいのなら俺の所に来い。」

俺はお前がどんなに裏切ろうと拒まない」

愛斗はそう言うと、E M Aに指示を出した。

「撫子！出発だ！」

E M Aは浮かび上がった。秀人は拳銃を構えて撃ったが、プラズマシールドのせいで愛斗には届かなかった。飛び立った後の噴水広場には静寂のみが残った。

## 三十二話 決戦・学園祭（後書き）

### 次回予告

大事な人を愛斗に奪われ復讐を誓う秀人。

同時に愛斗は副都心を同時攻撃し、決戦にでる。

しかし、愛斗に待っていたのは・・・

次回三十三話「魂の決戦〈前編〉」お楽しみに

### 三十三話 魂の決戦〜前編〜

朧月学園襲撃の翌朝。かなりの建物が残骸となった裏庭でイヴオンは瓦礫を漁っていた。

「くそっ！クローデイヌもヨハンも何処に行っちゃったんだよ」

イヴオンは先ほどからずっと悪態をついている。クローデイヌとヨハンはいなくなり、秀人も朝一番に政庁府に行ってしまった。渚も事態の収拾に追われている。話し相手がいなかった。仕方ないのでイヴオンはラジオをつけた。ラジオから女子アナの声が流れてきた。

「昨日未明、朧月学園を中心とするエリアでレジスタンスによる破壊活動が行われ、死者は数千人との情報もあります。この事態に対して政府は軍を出動させました。そして、先ほど入ったニュースです。新生大日本帝国と

関西連合の連合軍が副都心池袋、渋谷、新宿に攻撃を開始しました。政府はこの件に関しては一切のノーコメントです。あっ！只今入った情報です！新生大日本帝国が政府に対しての宣戦布告を発表しました。該当するエリアにお住まいのエLEMENTの方々は避難を開始してください。危険地区に指定されたエリアは……」

イヴオンはため息をついた。

「同じニュースばっか……俺も逃げた方がいいのかな？」

そのころ、日本ELEMENT自治区政庁府では秀人が司令室の前に立っていた。

「聖霊騎士団の識神秀人だ。通してくれないか？」

将校がバッジを確認した。

「聖霊騎士団の識神秀人卿ですね。入室を許可します」

秀人は頷き、自動扉をくぐり、司令室に入った。司令室の玉座には見知らぬ男が座っていた。その回りにはジェラルドとカミューに

ライヒアルト、他は新顔だ。

「よお、秀人、紹介するぜ。この三人は本土から派遣された聖靈騎士団の柏シルヴェストル卿とナーシャ・ギルマン卿、ニコライ・アンドロポフ卿だ」

秀人は三人に近づき、一礼した。

「初にお目に掛かります。識神秀人です」

「柏シルヴェストルです。よろしく」

「ナーシャ。ギルマンよ。まあ、ヘマはしないでね」

「ニコライ・アンドロポフだ。同志よ」

玉座の男が立ち上がった。

「自己紹介は済んだか？」

ライヒアルトが片膝をつき、深く頭を下げた。

「ヴィルフリート殿下。ご指示をお出してください」

ヴィルフリートと呼ばれた男は頷いた。

「私はストライダム皇国軍総参謀を務めるヴィルフリート・フォン・ストライダムだ。秀人卿は初めて見るな」

「はい、殿下。秀人卿は新しい団員です」

ヴィルフリエートの隣に立っている男が秀人を観察し始めた。

「私は副参謀のフェリクス・バウアーです。秀人卿、以後お見知りおきを」

その時、後ろの扉が開いた。長髪の女性が部下と思わしき軍人を二人引き連れて入ってきた。

「どうした、レギーネよ」

「どうしたもこうも無い！長ったらしい自己紹介は後にしろ！今は戦争中だ！」

秀人はその大声に怯んだ。相当の男勝りの性格のようだ。

「君が秀人君だね？」

レギーヌが引き連れてきた男の方が笑顔で尋ねてきた。

「はい」

「私はレギーヌ様親衛隊の隊長、クリス・ベイカーだ。こっちの女

性は副隊長の李瞬敏だ」  
リーシューミン

「よろしく願います。クリスさんと・・・シューミンさん？」

「そうだ。発音が良いな」

秀人は振り返り、ライヒアルトに尋ねた。

「エルネスト殿下は？」

「エルネスト殿下は渋谷の前線に陸戦艇で指揮をされている。私たちはその援護に渋谷に行くのだ」

ヴィルフリートが頷く。

「作戦は理解しているな。早速、出撃せよ」  
「了解」

全員が頷き、格納庫に向かった。

渋谷上空、新生大日本帝国戦列艦、ドレッドノート内司令室。愛斗は玉座に座り、素早く指示を出していた。

「レジスタンス全部隊、敵警備部隊と交戦を開始しました。通信を繋げます」

乗組員が通話ボタンを押すと、石田大尉の声が聞こえてきた。

「こちら石田です。敵警備部隊と交戦中。エルネストの陸戦艇は二キロ前方にあります。上空にはレギーネ・ストライダム副指令の母艦が待機中です。このままの戦力では敵の主力との戦闘には耐えられません。応援を」

「了解した。リリーの回収が終わったら、主力部隊を投入する」

愛斗は敵のシステムからハッキングした情報を眺めた。一枚の資料をみたカノンが愛斗に尋ねた。

「閣下、少し気になる事が・・・」

愛斗はカノンを見た。

「何だ、浅代？」

「いえ、これが気になりまして・・・」

愛斗は資料を見た。

「コードフェニックス？何の事だ？」

愛斗はパソコンを立ち上げ、ハッキングを開始した。

「何重にもブロックされているな・・・これ以上の情報は望めなさそうだ」

カノンは書類を見て、独り言を呟いた。もちろん愛斗には聞こえなかった。

「何か嫌な予感がするのですが・・・気のせいですかね・・・」

愛斗は時計を見た。

「リリー回収のタイムリミットは午後六時だ。まだ余裕があるな」

午後五時、愛斗は立ち上がり叫んだ。

「まだか！リリーの回収が終わらなくては攻撃が始められない！」

井崎が通信ボタンを押した。

「回収班、まだ回収は完了しないのか？」

通信先はかなり混雑しているようだ。雑音が後ろから聞こえてくる。

「はい、リリー・ケンプフェルは確認出来ません」

愛斗は指で書類の角を折りながら、呟いた。

「頼む、リリー。時間が無いんだ・・・急いでくれ・・・」

午後五時三十分。まだ通信は来ない。愛斗は携帯電話を手にとり、リリーの携帯電話に掛けた。直ぐにリリーがでる。

「愛斗さんですか？」

「ああ、そうだ。今、何処にいる？」

リリーは残念そうな声で答えた。

「まだ、病院です。ごめんなさい・・・」

「何だと！？逃げると言っただじゃないか！」

愛斗は叫んだ。

「愛斗さんは何処に？」

愛斗は司令室を見回してから答えた。

「安全な船の中だ。お前も早く逃げろ」

リリーは悲しそうに言った。

「無理です。他の患者さんも溢れる程いて、みんな逃げようとして  
います。私は廊下に出る事も難しい状況です。本当にごめんなさい  
・・・」

「お前の謝る事じゃない」

「私、愛斗さんと逢えて本当に良かったです。初めて出会った時の  
事、今でも覚えています。はつきりと・・・だから・・・お礼が・・・  
したくて・・・」

電波が乱れてきた。電波塔が破壊されかけているのかもしれない。  
「あ・・・りがとう・・・」

通話が途切れた。司令室に通信が鳴り響く。

「閣下！もう限界です！主力部隊が到着しました。早く、早く援軍  
を！」

カノンが愛斗の肩を叩いた。

「閣下、ご指示を」

他の乗組員、井崎も同じ様に言った。

「閣下、ご決断をお願いします」

愛斗は頭を抱えた。自分の発言で、大切な人の命が儚くも消え去  
ってしまうのだ。しかし、今の愛斗は皇帝だ。国を優先する義務が  
あるのだ。愛斗は震える声を喉の奥から絞り出した。

「攻撃を開始しろ。主力部隊を投入だ」

### 三十三話 魂の決戦〜前編〜（後書き）

#### 次回予告

遂に苦渋の決断を下した愛斗。

そして、決戦が幕を開ける。

この戦いの果てに残る物とは？コードフェニックスとは何なのか？

次回三十四話「魂の決戦〜後編〜」お楽しみに

## 三十四話 魂の決戦〜後編〜

愛斗がリリーを見捨てた瞬間、秀人は背中に酷い悪寒を感じた。その悪寒の正体こそ分らないが、とにかく嫌な予感がした。

愛斗はふらふらと玉座から立ち上がった。

「閣下？何処へ？」

愛斗は冷たい声で言った。

「井崎、ここはお前に任せた。浅代、出撃だ」  
「了解」

二人は格納庫へと向かった。

石田大尉は市街地で激しい銃撃戦を行っていた。隣のストライクパニッシャーが爆発した。

「くそっ！親衛隊か！」

上空に現れた白いE M Aこそがギレー又親衛隊の証拠であった。白と黒のE M Aが前に出て来た。

「親衛隊隊長、クリス・ベイカー！名のある奴は掛かって来い！私のブライトウィングが相手になろう」

石田大尉は齒軋りをした。親衛隊と戦っても勝ち目はない。諦めかけたとき、上空に別の一団が現れた。一機の銀色のE M Aが飛び出てきた。

「皇帝親衛隊、白虎隊隊長、南野辰の晴嵐がお相手しよう！」

ブライトウィングがプラズマガンを抜いた。そして、発射する。

晴嵐は素早く交わし、大きな太刀を抜いた。そして突き出す。ブライトウィングはその太刀を掴む、閃光が弾ける。晴嵐の胸部から口ストシューターが射出された。

「まだまだ！」

ブライトウィングはそれを弾き返し、引き寄せた。

「間合いが詰まった！」

しかし、晴嵐は素早く、ブライトウイングの顔面に蹴りを叩き込んだ。

「ぐっ！」

バランスを失ったが、寸でのところでミサイルを射出した。二発程が晴嵐に命中する。

「中々の腕前だな！」

再び、二機はお互いに火花を散らした。石田大尉は見とれていたが、正気に返る。

「全軍、攻撃を開始しろ！俺たちは地上部隊の殲滅が目的だ！」

エルネストストライダムの陸戦艇には厭海星率いる部隊が向かっていった。それに気づいたのはリーであった。

「クリス！敵が陸戦艇に迫っているわ！」

「分かった！リー、こいつの相手を頼む！」

リーのE M A、ミストセヴェルブが晴嵐に突っ込んだ。その隙にクリスは陸戦艇の方に向かう。海星もそれに気づいたようだ。

「あの機体は・・・クリス・ベイカーか？」

海星は雷電のエナジーウイングの出力を最大にしてクリスに向かっていった。

「クリス・・・覚えているか？」

「ああ、海星、何時かの決着をここでつけよう！」

二人は訓練所時代の同期であった。当時は全くの互角で勝負は何時も引き分けだったのだ。

雷電は背丈を越える剣、「村雨」を構え、下から突っ込んだ。ブライトウイングはサーベルを抜き、それを受け止める。赤い閃光が村雨とサーベルの間ではじける。

「プラズマ加工か！」

海星は更に村雨を振り上げ、叩き下ろした。

「力だけで押し通すのは無理だぞ！」

ブライトウイングは村雨をかわし、後ろに回りこんだ。

「待っていたぞ！」

雷電の背中かロストシューターが飛び出た。油断していたブライトウィングの腰の部分に当たった。

「くっ！油断した」

海星とクリスが死闘を繰り広げている頃、柏カリー又は玄武隊を率いて、別の部隊と対峙していた。敵は聖霊騎士団の柏シルヴェストルであった。

「久しぶりね、兄さん。ここで会うとは思っても見なかったわ」

「カリー又、僕は君を倒さないといけない。君を正しい道へ戻すために・・・」

カリー又は自分のE M A、ハーヴィルスの中で怒鳴った。

「正しい道？エレメントが調子に乗るな！」

カリー又は剣を抜き、怒号と一緒にシルヴェストルのE M A、ブラックセイヴァーのプラズマシールドに突き刺した。シルヴェストルもミサイルで応戦する。

「聖霊騎士団の力、なめって貰っては困る。本気で行かせて貰うよ」  
「望むところよ！」

出撃した愛斗は紫電改で病院へと向かっていた。回りには小町隊とカノン、ロラン、アルヴィがいた。最後尾に撫子だ。

「おっ、獲物発見。ありや紫電だ。よし、秀人行くぞ」

「愛斗を殺すのは僕がやる！」

ジェラルドのヴァジュラと秀人のスピッツオブファイアは同時に飛び出した。

「おい！待て！まだ敵の戦力が分らん以上、飛び出すのは危険だ！」

ライヒアルトは叫んだが二人は突っ込んで行ってしまった。始めに気づいたのは愛斗だった。

「聖霊騎士団が接近中だ。ロラン、お前はリリー救出を優先しろ！」

「了解、隊長！」

ロランは病院の方角へ飛び去っていった。

「俺が相手をする」

紫電改は前に飛び出た。そして、始めに突っ込んできたヴァジュラにレーザーサムライブレードを振り下ろした。

「プラズマシールドがあるからそう簡単には触れないぜ！」

「なら、これはどうかな？」

紫電改はいきなり動きを変えた。陽炎のように揺らいだかと思うと、ヴァジュラは紫電改の蹴りを喰らって、落ちて行った。続いてスピッツオブファイアがプラチナメタルソードを振り下ろした。紫電改はそれを碎き、レーザーサムライブレードで脚を切り落とした。続いてミサイルを喰らって、地面に叩きつけられた。

「くそっ！言わんこっちゃない！」

ライヒアルトは巨大な剣を構え、向かっていった。ライヒアルトのEMA、ヴァンガードは完全防御型だ。全身が鋼鉄の塊のようなもので、その装甲を碎いた者はいない。

「私はあの女を始末するわ」

ナーシャはカノンに向かっていった。

「テルピッツの戦闘能力を見せてやるわ」

ニコライは相手を紫電改に定めた。

「ここは僕が戦う！」

アルヴィのリーフアングが前に飛び出で、ナイトランスでヴァンガードの剣を受け止めた。

「中々だな。しかし、この装甲は貫けまい！」

アルヴィはナイトランスで腕を突き刺したが、呆気なく弾かれた。「か、堅すぎる・・・装甲も何もかも・・・」

アルヴィはなら、と言い、ナイトランスを投げつけた。ナイトランスはヴァンガードに当たり、爆発した。それと同時に二本目のナイトランスを構えて、勢いをつけて突いた。

「甘い！」

ヴァンガードは剣を横にして防御の姿勢をとった。そして、ナイ

トランスが突き刺さる。さっきと違うのは跳ね返されずに剣にめり込んでいく。

「何！？我が防御が！」

「生憎、この槍は特別でね！」

一気に剣に穴を開け、胸の装甲板に突き刺さり、火花が散った。

「ヤバイ！」

アルヴィはいきなり後ろに飛びのいた。二人がいたところを加粒子砲が一閃する。

「危ないですよ！」

カノンはナーシャと激闘を繰り広げていた。加粒子砲はカノンが放ったものである。

「邪魔！」

ナーシャはリーフアंकをテルピッツで弾き飛ばした。カノンもヴァンガードを突き飛ばす。

「女って怖いですね・・・」

「ああ、同感だな」

ライヒアルトとアルヴィは頷きあった。紫電はあっさりニコライを打ち取っていた。

「閣下！指示を！」

愛斗は叫んだ。

「全軍に告ぐ！デストロイア作戦を開始しろ！」

「了解！」

武神は胸部内蔵加粒子砲で近くの高層ビルを破壊した。

「何をする気なの！？」

帝国軍のEMAは装備している重火器を地上に向けて撃ちだした。デストロイア作戦、それは地上への無差別攻撃作戦であった。武神の加粒子砲が一気にビルを破壊した。上手く隠れていた陸戦艇は裸になった。

「閣下、エルネストの陸戦艇を発見しました。攻撃を開始します」

海星はクリスと激闘を続けていた。海星の雷電はブライトウィングに村雨を振り下ろす。ブライトウィングはそれを蹴り、弾いた。「まだまだ！」

雷電が飛びのいた。殺気を感じたクリスのブライトウィングも後ろに下がった。二機が戦っていたところが加粒子砲の一閃を受け、爆発した。

「危ないぞ！浅代！」

「海星さん、デストロイア作戦が発令しました。そこは危ないですよ」

海星は通信がオフになっている事にその時気づいた。

「すまない、オフになっていたようだ」

「気をつけてくださいね。後、加勢は要りますか？」

「いや、いらん。俺が片付ける」

武神は踵を返し、陸戦艇に向かった。その後をナーシャのテルピッツが追う。

「待ちなさい！」

「しつこいですよ！」

武神は向き直り、上空に舞い上がった。そして、ミサイルを大量発射する。

「そんな物効かないわよ！」

テルピッツは機敏な動きで避けた。そして、サーベルを振り下ろす。武神は肘の刃物で弾いた。その反動で加粒子砲を叩き込んだ。

テルピッツは左手の盾で防いだが、盾も吹き飛んだ。武神からはミサイルが飛んでくる。

「凄い弾幕ね！」

テルピッツはロストシューターを射出した。武神の胸の部分に当たった。

「くっ！油断しました」

武神は態勢を整え、向き直った。

紫電は上半身だけになってもしつこく追ってくるニコライのEM  
Aと戦っていた。

「邪魔をするな！」

「最期まで妨害してやる！」

秀人のスピッツオブファイアも同じく、両足を切断されていたが  
病院に向かっていた。

「リリー！待ってる、僕が助けてやる！」

紫電にドレッドノートから通信が入った。

「閣下、ロラン様がリリー様の救出に向かいました。アルヴィ様は  
敵を片付け次第、戦線に復帰するとの事です」

「分かった！これで後は聖霊騎士団を始末するだけだな！」

愛斗は通信を送った。

「浅代！聖霊騎士団を始末しろ！それで障害は無くなる！」

「了解しました」

スピッツオブファイアは病院に到着した。リリーの病室に向かう。  
「もう少しだ・・・止まらないでくれよ、スピッツオブファイア！」

政庁府では司令官のヴィルフリートが玉座で戦闘の様子を見守っ  
ていた。隣のフェリクスが呟いた。

「このままでは聖霊騎士団が全滅します。如何しますか？」

ヴィルフリート一言呟いた。

「フェニックス作戦を始めろ」

「しかし、まだ前線にはエルネスト様、レギーネ様が・・・」

しかし、ヴィルフリートは冷たく言った。

「構わぬ、まずは池袋、新宿だ。その五分後に渋谷だ」

「御意」

フェリクスは叫んだ。

「コードフェニックスだ！やれ！」

モニターの前に座っていた男がボタンを押した。

紫電がニコライとの戦闘を繰り広げている際、紫電に緊急連絡が入った。

「閣下、井崎ですが緊急事態です」

「何だ、言え」

井崎は気まずそうに言った。

「池袋、新宿の部隊からの連絡が途絶えました。原因は不明です」

「関西連合はどうした？」

「はい、その事です。が絢様からは「光が・・・」と言う連絡を最後に繋がりません」

電波障害か？愛斗はそう思ったが、ある事を思い出した。コードフェニックス。もしかしたら・・・。その時だった。渋谷の中心に光の玉が浮かび上がった。そして、膨張していく。

陸戦艇の司令室でもエルネストが叫んでいた。

「あの光はフェニックス！？何故、ここで・・・まさか！」

エルネストは通信で全機に伝えた。

「全軍撤退せよ！フェニックス作戦だ！」

「敵が引いていく？何故だ？」

海星は疑問に感じた。

「何故、フェニックスを？」

クリスが叫んだ。

「海星、勝負は今度だ！逃げるぞ！」

クリスは後退を始めた。その瞬間、光はいきなり膨張の速度を増した。

「俺たちも引くぞ！朝倉！南野！退却だ！市街地から逃げろ！」

光は朝倉と南野を飲み込んだ。

「この光は・・・」

「うわぁ！」

飲み込まれ、通信が途絶えた。雷電も光に包まれる。

「何だ、あれは？」

ロランはもう少しで病院というところで光に飲まれた。アルヴィも同じだった。

「隊長、光が・・・」

次々と通信が途絶えていく。石田大尉はスクランブル交差点の真ん中で光に飲まれた。

「閣下！謎の光が！閣下！」

また、途絶えた。エルネストも司令室で怒りのあまり絶叫した。

「おのれ！ヴィルフリートめ！図つたな！」

陸戦艇は光の中に消えていった。

「前線がおかしい！ドレッドノートを後退させ、高度を上げろ！」  
井崎が乗組員に向かい、叫んだ。紫電の通信に敵の映像が混じった。

「殿下！お逃げください！」

リーだった。リーは叫んだが、通信が途絶える。愛斗は目を見開き、震えた。病院の方角にも光が迫る。

「リーー！」

愛斗は叫び、ニコライを光の中へ突き落とした。そして、病院の方角へ向かう。

「閣下！そちらは危険です！」

カノンの言葉も聞かずに紫電は光に飲み込まれた。シルヴェストルとカリー又は部隊ごと同時に飲み込まれた。

「兄さん！これは！」

「分からない！でも・・・」

通信が途絶えた。次の瞬間、光の玉は炸裂した。爆風がドレッドノートに押し寄せる。武神とテルピッツは爆風で吹き飛ばされた。カノンはそのまま気を失った。

## 三十四話 魂の決戦〜後編〜（後書き）

### 次回予告

コードフェニックスにより終わりを告げた戦争。  
しかし、両軍の被害は致命的なものだった。  
リリーは何処に？愛斗を更なる苦悩が襲う。  
次回三十五話「終焉の地」お楽しみに  
後、キャラ紹介など更新します。

### 三十五話 終焉の地

カノンは荒野に立っていた。その荒野の彼方には愛斗と紫電の姿がある。

「閣下！ご無事でしたか！」

しかし、愛斗は紫電に乗り、飛びたった。そして、反対側に飛んでいく。

「お待ちください！閣下！そちらに行つては駄目です！そちらに行つては・・・」

カノンは飛び起きた。全身が汗でびしょ濡れになっている。

「夢・・・？」

「ようやく目が覚めましたか？」

カノンはベッドの脇を見ると、井崎が座っていた。

「ずっと魘されておりましたぞ。閣下の名前を呼びながら・・・」

「閣下はどちらに！？」

井崎は気まずそうに下を向いた。

「残念ながら未だ見つかりません。閣下だけでなくアルヴィ様や口ラン様も・・・死亡が確認された者もおります」

カノンはベッドから立ち上がり、ふらふらと歩き出した。

「カノン様！？どちらへ？」

「閣下を・・・閣下を探しに行きます・・・」

井崎はカノンにしがみ付き、止めた。

「いけません！その御体では持ちませんぞ！」

「しかし！閣下が！」

カノンは床に倒れた。気絶したようだ。

「カノン様、私も助けに行きたいのです。しかし、渋谷はもう・・・」

「

茶色の大地、薄暗い空、まるで荒野だ。ここは昨日まで渋谷とい

う大都市があつた場所なんて言われても誰も信じないだろうが、渋谷がここだという事は事実である。瓦礫の中から一人の茶髪の男が這い出て来た。

「俺のヴァジユラがぼろぼろだ。ここは何処だ？」

瓦礫から出て来たジェラルドは辺りを見回した。

「中東を思い出さぜ・・・」

そう呟くと、向かいの瓦礫からもう一人の男が出て来た。

「くっ！リリー！何処だ！」

ジェラルドはその顔を見て、咄嗟にサーベルを抜いた。

「澁坂愛斗！」

愛斗はその声に気づくと、刀を抜いた。双方が飛び上がり、丁度中間点で刃を交えた。刀とサーベルのぶつかる音が響く。

「お前！秀人はどうした！」

ジェラルドが叫ぶと、愛斗も叫び返す。

「お前こそ何故ここにいる！」

「あの光はお前らの仕業だろ？違うのか？」

愛斗はサーベルを切り払うと再び鋭い一閃を繰り出した。

「ふざけるな！お前たちがやったんだろう！コードフェニックスを、よくもリリーを！」

ジェラルドは愛斗の一閃をサーベルで受けたが、サーベルが砕けてしまった。

「くそっ！」

愛斗はジェラルドの喉に刀を突きつけた。

「一突きで終わるが、今は殺し合いをしている場合ではないな」

愛斗は刀を納めた。

「お前、通信機は持っているか？」

ジェラルドはポツケから小さな機械を愛斗に放り投げた。

「こちら愛斗だ。誰か聞こえたら返事をしろ」

雑音が混じるがかすかに声が聞こえた。

「隊長？お・・・俺です・・・ロランです。今・・・そっちに向か

い……ます」

五分も経たずに右腕と左足だけになったロランのE M Aが姿を現した。

「隊長！ご無事で！」

ロランはE M Aから飛び降り、愛斗に近づいた。そして、ジェラルドを眺めた。

「隊長、こいつは？」

「敵だが、今は争う場合ではない」

愛斗は通信機の周波数をアルヴィのリーファンクに合わせた。

「アルヴィ？聞こえているか？」

「隊長？僕は生きていますよ。リーファンクは飛べますが、もうぼろぼろです」

「そうか……アルヴィ、俺をドレッドノートまで送ってくれ。俺の現在地を送る」

愛斗はパネルに座標を入力し、転送する。

「ロラン、お前はこいつを敵の政庁府まで送ってやれ」

「了解」

ロランはジェラルドをE M Aに乗せると、浮かび上がった。

「じゃあ隊長、行って来ます。後で俺たちのE M Aを修理してくださいよ。俺のは新しいE M Aで頼みます」

愛斗は頷いた。

「ああ、新しいE M Aを開発しよう」

その時、愛斗の脳裏に一つの顔が浮かんだ。リリーの顔だ。

「ロラン、リリーは何処だ？救出した後はどうした？」

ロランが口籠った。

「あの、隊長。実は間に合わなかったんです……すみません……」

愛斗の顔から血の気が引いた。

「リリーは……」

「リリーさんは恐らく……助からなかったと……」

その時、アルヴィが到着した。  
「アルヴィ、急いで戻るぞ！確認しなくてはいけない事がある！」

## 三十五話 終焉の地（後書き）

### 次回予告

全てを失い、全てを破壊した「フェニックス」  
しかし旗艦ドレッドノートで愛斗を待っていたのは  
リリーの訃報だった。悲しみの果てに落ちる愛斗を  
救えるのは誰なのか？

次回三十六話「失ったもの」お楽しみに

## 三十六話 失ったもの

ドレッドノートのハッチが開いた。装甲が溶けた機体がゆっくりと着地する。アルヴィのリーフアंकだ。そこから愛斗が飛び降りた。

「井崎！確認したい事がある！」

井崎が直ぐに走り寄って来る。

「閣下、何でしょうか？」

「犠牲者の名簿を見せる。民間人もだ」

井崎は隣の男から、書類を受け取ると愛斗に渡した。

「これ全部か？多いな」

「はい、民間人だけで五百枚です。軍関係の犠牲者はこちらに・・・」

愛斗は井崎の説明など聞かずに必死に五十音順に並んだ名前から目的の名前を探した。そして、四百九十三枚目に見つけた。

「リリー・・・逃げると言ったのに！」

愛斗は書類を床に叩きつけた。更に近くの兵士に掴みかかった。

「お前、何故助けなかった！」

いきなり胸倉を掴れた兵士は必死に叫んだ。

「私は出撃していませんので・・・」

愛斗は兵士を突き飛ばした。直ぐにカノンが愛斗を押さえた。

「閣下！落ち着きください！」

愛斗はカノンの腕を振り払い、膝から床に崩れ落ちた。

「俺を一人にしてくれ。話し掛けるな」

愛斗はそれだけ言うと、部屋に重い足取りで歩いて行った。

政庁府では皇国軍が撤退準備を始めていた。秀人は機体ごと回収され、聖霊騎士団の死者はニコライただ一人であった。その政庁府に一機のE M Aが降り立った。

「お前はここで降りろよ。ここから先に進むと、撃ち落されそうだ」  
そうロランが言つと、ジェラルドは飛び降りた。

「礼を言わないとな。サンキュー」

ロランは照れくさそうに笑った。

「まあ、事態が事態だからな。次に会うときは戦場だ」

ロランはそう言つと、飛び立った。ジェラルドはしばらくの間、見送っていた。

その晩、愛斗は部屋のベッドに座り込み、うわ言のようにリリーの名前を呟いていた。

「リリー・・・俺は・・・お前に何一つしてやれなかった・・・」

愛斗は勢いよく立ち上がり、コップを床に叩きつけ、割った。自分自身に腹が立つ。リリーを助けられなかったという罪悪感とリリーとの約束を何一つ守れなかったという後悔の念で愛斗は潰されそうになっていた。

「リリー、俺はお前がいないと何も出来ない男なんだ・・・お前が唯一の俺の支えだったんだ」

愛斗にとつてのリリーは家族以上の存在だった。

「俺は戦う目的を失った・・・お前の笑顔を見る事はもう出来ない。お前の声を聞く事も出来ない」

静寂の中、ドアが叩かれた。

「閣下、井崎ですがお邪魔してよろしいでしょうか？」

「鍵は掛かっていない。入って来い」

井崎は恐る恐る部屋に足を踏み入れた。床には物が散乱している。閣下に見てもらわなくてはいけない物があります。我が軍の犠牲者名簿です。それに・・・」

「後にしてくれ・・・それとも俺にリリーの事を思い出させるつもりか？」

井崎は直ぐに床に土下座をした。

「いえ、滅相も無い！私は閣下に事実を知ってもらいたいのです！」

愛斗はベッドの両端を思い切り叩いた。

「黙れ！出て行け！俺に近づくな！老いぼれは書類と格闘してればいい！」

井崎は怯えた兔のように部屋を出て行った。三十分後、再びドアが叩かれた。

「隊長、入りますよ」

ドアを開けて入ってきたのはロランとアルヴィだった。ロランが口を開いた。

「隊長、あの・・・すみませんでした。俺がもう少し早ければ・・・」

アルヴィも気まずそうだった。

「僕も・・・すみません。リリーさんはきっと成仏して、隊長を守ってくれていますよ」

愛斗は小さい声で呟いた。

「言いたい事はそれだけか・・・」

愛斗はゆっくりと立ち上がり、二人に近づいた。

「ロラン、お前はリリーを何故、助けなかった？」

「いえ、隊長、俺は助けに行きました。でも、間に合わなかったんです」

愛斗は怒鳴った。

「俺はそんな事は聞いていない！結果を聞いているんだ！」

「た、助けられませんでした・・・」

「最初からそう言え。俺はお前の言い訳を聞きたい訳じゃない」

愛斗は次にアルヴィを見た。

「アルヴィ」

アルヴィは肩を震わせて返事をした。

「何ですか、隊長？」

「お前は何故、リリーを助けなかった？」

アルヴィは言いにくそうに呟いた。

「敵と戦っていました・・・」

「お前はリリーより敵を選んだのか」

アルヴィは小さな声で反論した。

「いえ、僕は・・・」

愛斗は大声で怒鳴った。

「黙れ！誰がお前に口答えする権利があると言った？お前らは俺が助けに行けといったら、助けに行け！お前らは俺の駒だ！俺が戦えと言ったら戦い、俺が死ねと言ったら死ね！捨て駒が！」

アルヴィは何か言おうとしたが、ロランに肩を叩かれて部屋を出て行った。

「もう二度と来るな・・・」

愛斗は携帯電話を手にとり、リリーにかけた。本日、八十七回目の行動だ。五分ほど経って、次はカノンがドアを叩いた。

「入れ」

愛斗が入室を許可するとカノンが部屋に入ってきた。愛斗はカノンが自分を慰める言葉や謝罪をしたら直ぐに怒鳴って部屋を追い出すつもりだった。しかし、カノンは意外な言葉を口に出した。

「閣下、寂しいのですか？」

愛斗はカノンを見ると、呟いた。

「お前は何をしに来た？」

「閣下を助けに来ました」

カノンは愛斗の頭を抱きしめた。

「閣下は寂しいのですよね・・・そして、思っても無い事を口に出す。閣下の悪い癖ですよね？」

愛斗はカノンの腕の中でぼそりと言った。

「リリーは俺にとって唯一無比の存在だった。俺はリリーとの約束を守れなかった、駄目な男だ」

「私で代わりになるか分かりませんが、寂しいのなら私がリリーさんの代わりになります」

カノンは愛斗の胸に顔を埋めた。

「閣下が悲しいのなら一緒に悲しみ、閣下が喜ぶのなら私も喜び、

閣下が死ぬ時が私の死ぬ時です」

そして、カノンは愛斗に無邪気な、リリーのような笑顔を見せた。

「私は閣下の部下であり、リリーさんの代わりですから」

愛斗は自然と涙が溢れた。

「ですから、戴冠パレードにご出席ください。そこで、能面をお取りになり、素顔を国民に見せるのです」

「分かった。戴冠パレードには出席しよう。もちろん素顔で・・・だからしばらくこのままで居させてくれ」

カノンは頷くと、愛斗の膝の上で寝息を立て始めた。

## 三十六話 失ったもの（後書き）

### 次回予告

カノンの言葉に励まされ、戴冠パレードに出席する事を決めた愛斗。そして明らかになるリリーの生死。

戴冠パレードで愛斗をさらなる悲劇が襲う。

次回三十七話「最愛の別れ」お楽しみに

後、兵器紹介も更新したいと思います。

### 三十七話 最愛の別れ

秀人はふと目を覚ました。銀色の天井が広がっている。

「目が覚めましたか？ 秀人さん」

秀人は上半身を起こし、声の人物を見た。それはリリーだった。

「リリー、怪我は無いかい？」

秀人はあの夜、リリー救出に成功していたのだ。傍にはジェラルドがいた。

「おお、秀人。目、覚めたか？」

リリーは秀人を見た。

「あの、愛斗さんの事ですけど・・・」

秀人は身を固くした。次の嘘を考えなくては・・・。

「秀人さん・・・愛斗さんは過ちを犯したんですね？」

秀人はリリーをゆっくりと見た。

「誰から聞いた？」

「俺が全て話したんだよ」

ジェラルドが水を注ぎながら言った。

「ジェラルド？ 何故話した？」

ジェラルドは水を秀人に渡すため息をついた。

「嘘で誤魔化すより本当の事を話した方がいいだろ」

リリーも頷く。

「愛斗さんが過ちを犯して、クローディヌさんや他の人も殺したのなら・・・私が愛斗さんに罪を償わせます。私は今日から愛斗さんの敵にです」

リリーの声には涙が混じっていた。

「テレビ点けるぞ。丁度、澁坂愛斗の戴冠式だ」

ジェラルドがテレビのスイッチを入れた。

ここは東京。政庁府から伸びる街道には大在の国民が集まってい

る。その街道に大きな神輿のような車が走り出そうとしている。中には真つ白い正装に身を包んだ愛斗がいた。街道にはアナウンサーが大勢居る。全員がこの記念式典を心待ちにしていた。

「さあ、いよいよ我らの救世主、そして日本の統治者である新生大日本帝国皇帝、能面の百鬼様が遂に素顔をお見せになります。あつ！見えました！」

愛斗は堂々と素顔で玉座に座った。横にはカノンと無事に帰還した海星がいる。皇帝の顔を見た国民は口々に話し始めた。

「あれが皇帝陛下？もつと怖い顔かと思っただわ」

「でも、頼りなさそうね・・・」

「素晴らしい・・・実に堂々としていらつしやるぞ・・・」

飛行艇の中の絢も感激の声を上げた。

「あれが能面の百鬼かいな。凜々しい顔やな」

車が進み始めるとアナウンサーが実況を始めた。

「さあ、中央の玉座に座つていらつしやる御方こそ、皇帝陛下です！その隣には副指令の浅代様、海星様のお姿があります。そして、パレードの先頭を務めるのは玄武隊です。隊長は柏力リーヌ様。左翼を守るは青龍隊、右翼を守るは白虎隊、後方は朱雀隊です。そして、六華戦の方々もお見えになりました！」

愛斗は歓声に沸く国民に手を振った。

「まあ、お手をお振りになったわ！」

一人の女性が叫ぶと、歓声がより大きくなった。愛斗は歓声に包まれながら只、前を見ていた。

そんな歓声に包まれている中、街道の脇のビルの十階には一人のエレメントがいた。男は狙撃銃に弾を込めた。男に任された任務は皇帝の暗殺だった。男は銃を構え、狙いを定めた。狙いは愛斗の頭だ。

「この命、皇国のために・・・」

男は引き金に指を掛けた。

カノンは胸を張り、愛斗の横に立っていた。そして幸か不幸か、カノンの目は愛斗に向けられた銃口に気づいた。カノンが次にとつた行動、カノンは愛斗を庇う様に射程内に飛び込んだ。

「閣下！危ないです！」

次の瞬間、短い銃声が響いた。歓声が止む。カノンの胸から赤い鮮血が垂れた。

五秒間の静寂。海星が我に返り、叫んだ。

「あのビルだ！行け、青龍隊！犯人を殺せ！」

左にいた青龍隊がビルの方角へ飛んでいった。

愛斗は玉座から立ち上がると、カノンに近づいた。そして、カノンを自分の膝の上に乗せた。

「浅代？目を開ける！」

カノンがゆつくりと目を開けた。

「か、閣下・・・お怪我はありませんか・・・？」

「ああ、大丈夫だ。だから、喋るな！」

しかし、血は止まらない。回りに出来た血溜りが彼女の命の短さを教えていた。

「閣下、私は・・・幸せでした・・・最期に・・・」

「駄目だ！死ぬな！お前はリリーの代わりになると言ったじゃないか！」

海星が愛斗の後ろに立った。

「閣下、救急隊を呼びますか？」

「当たり前だ！急げ！」

海星が頷き、叫んだ。

「救急隊を呼べ！」

愛斗はカノンを更に抱きしめた。

「お前が死ぬ時は俺が死ぬ時だ！お前がそう言ったんだ！死ぬのは許さない！」

「閣下、すみません・・・どうやらそのお約束は守れそうにありま

せん・・・」

愛斗の目から涙が溢れる。

「駄目だ！死ぬな！リリーも死に、お前も死んだら・・・」

カノンは死に際にあるというのに笑顔を見せた。

「閣下？私は・・・世界のノーマルの希望に・・・なれましたか？」

「ああ、お前は全世界のノーマルの英雄だ！だから、死ぬな！」

カノンは空を見上げ、最期の言葉を言った。

「閣下、私は・・・何時でも・・・閣下を・・・」

カノンは安らかに目を閉じた。愛斗はカノンを激しく揺すった。

「浅代！？おい！目を開けろ！」

しかし、返事は返ってこなかった。白い服を着た救急隊が今更になってやってきた。

「閣下、救急隊が来ました！」

愛斗は冷ややかに呟いた。

「遅い・・・」

「はい？」

「遅い！もう意味が無い！」

海星はカノンに近づき、脈を計った。

「駄目だ・・・脈が無い・・・」

車の階段を井崎が上ってきた。

「閣下、パレードは中止しますか？それにお召し物が血で台無しです。お着替えをお持ちしましょうか？」

愛斗はカノンを抱えると、玉座に座らせた。

「いや、パレードは続ける。俺も着替えない。しかし、パレードの内容は変更だ。戴冠パレードは中止にして、浅代の追悼パレードを執り行う。車を走らせろ」

「御意」

井崎は指示を部下に出した。回りから歓声が飛ぶ。群集が再び、叫びだした。井崎は立ち上がった愛斗の姿を見て、呟いた。

「閣下、そのお姿は・・・」

愛斗の来ていた白い正装は血で紅に染まっていた。まるで日本の国旗、日の丸のようだった。

## 三十七話 最愛の別れ（後書き）

### 次回予告

カノンを失い、心を閉ざした愛斗。

その頃、渚もある決意を固めていた。

愛斗は立ち直れるのか？渚の選ぶ道は？

次回三十八話「真実の意味」お楽しみに

## 三十八話 真実の意味

薄暗い部屋。渚が目を覚まして一番に目に入った光景だ。

「ここは？」

渚は記憶を辿ってみた。確かあの夜に白い光から逃げようとしてリーフリッパ―に乗った。それで、光に飛ばされて……。

「目が覚めたかね？」

渚が横を向くと一人の老人が部屋の隅で包丁を研いでいた。

「貴方は？」

渚が尋ねると、老人は包丁を置き、水を持ってきた。

「わしは只の老人じゃ、それより水を飲みなされ。三日三晩眠り続けておったからの」

渚は重い頭で考えた。

「愛くんは何処？」

老人はテレビを点けた。

「愛くん？誰じゃ？」

「零坂愛斗です。確か生きていたはずじゃ……」

「皇帝陛下の事かね？先日のパレードで陛下の副官が死んだらしいが……」

渚は目から溢れる涙を止められなかった。

「愛くんが人殺しなんて……クローディヌさんを殺したなんて……」

渚は秀人から全てを聞いていた。クローディヌの事もヨハンの正体も。

「陛下は深い悲しみに陥っておる」

「どついう事ですか？」

渚は尋ねた。

「陛下の戦う目的は復讐ではない。それは人を煽動するための偽りの口実じゃ」

「愛くんは復讐なんて考えていないという事ですか？」

「そうじゃ、陛下は考え深い御方じゃ。何か真意があるのじゃろう」  
渚は立ち上がった。

「何処へ行くのじゃ？」

渚の心は決まっていた。

「愛くんの所へ行きます。そして、真意を確かめてきます」

老人は渚を見つめた。

「それでどうするつもりじゃ？」

「もし、本当の目的があるなら私は愛くんに協力します。もし、復讐だけなら・・・」

渚は強い口調で言った。

「私が愛くんを止めます」

愛斗は虚ろな目で会議に出席していた。

「・・・閣下！」

愛斗は井崎の鋭い声で我に返った。

「何だ・・・井崎」

井崎は書類を愛斗の前に置いた。

「これが予算です。我が国の予算は・・・」

愛斗は井崎を遮った。

「井崎、もういい。分かっている」

「閣下、お気持ちは分かりますが閣下は国の元首です。国の事を第一に考えて貰わなくてはいけません」

愛斗は立ち上がった。

「予算はお前たちに任せる」

井崎は次に愛斗の隣の空席を指差した。

「それに六華戦と親衛隊の再編成を。カノン様の代わりを・・・」

「黙れ！浅代の代わりなど存在しない！」

愛斗はついカッとなって叫んだ。

「浅代の席は浅代のものだ。永遠に！」

井崎は何も言わなかった。代わりに海星が愛斗を諭した。

「しかし閣下、ストライダムとの会見。これだけは放って置けませんか」

愛斗は頷いた。

「分かっている。俺もストライダム皇国とは講和すべきだと思う。こちらの兵力はまだ揃っていない。建て直しが要だ」

愛斗は口ではそう言うが、軍の再編をする気はさらさら無かった。そんな気力は無い。もう愛斗は完全に戦う目的を失ってしまっていた。もう自分が死のうが生きようが関係ない。

「俺は少し休む。後はお前たちに任せた」

誰も引き止める者はいなかった。井崎は少しずつ愛斗に疑心を抱いていた。閣下はフェニックスの事を知っていたのではないか？それを知りながら攻撃を行ったのではないか？

部屋に戻った愛斗はベッドに座り込んだ。ベッドの脇の棚にはリリーとカノンの写真が沢山並んでいる。愛斗の部屋はそこまで広くはない。皇帝とは思えない質素な部屋だ。愛斗が現在住んでいるのは元政府府である。日本国だった頃には国会議事堂だったらしい。そして今は新生大日本帝国宮だ。

愛斗はリリーの写真を手にとると、話し掛けた。

「リリー、お前は俺を恨んでいないのか？俺はお前に何もしてやることが出来なかった・・・」

そんな愛斗の部屋がある最上階の壁面には渚が張り付いていた。そして、窓枠を掴み、愛斗の部屋の窓をそつと開ける。中から愛斗の声が聞こえてきた。

「リリー、浅代。お前たちに約束した事は何一つ実現出来なかった。リリーや浅代が楽しく笑っていられる国を、世界を俺は目指していた。でも、お前たちがいなくなったら意味がないんだ」

渚は愛斗の目的を理解した。渚は意を決して、部屋に入った。

「愛くん？」

愛斗が素早く振り向く。

「渚？何故ここに？」

渚は愛斗に微笑みかけた。

「愛くん、協力しようと思って。リリーさんやカノンさんのために」

渚は愛斗に手を差し出した。

「私たちは仲間よ。愛くんは一人じゃないわ」

「俺にそう言った奴は全員死んでいった。お前も・・・」

「違うわ」

愛斗は渚をじっと見つめた。

「渚、お前を我が軍に入れよう。六華戦の一員となってくれるか？」

渚は愛斗に片膝をついた。

「終生、愛くん、忠誠を誓うわ」

愛斗は頷いた。

「お前を明日の会議で紹介しよう。ロランたちとも仲良くしてくれ」  
愛斗はそう言ったがまだ立ち直れてはいなかった。

## 三十八話 真実の意味（後書き）

### 次回予告

愛斗の真意を知り、仲間になり協力する事を決意した渚。

そしてストライダム皇国からの大使の正体とは？

天才同士の会談が始まる。

次回三十九話「偽りの二国会談」お楽しみに

## 三十九話 偽りの二国会談（前書き）

キャラ紹介を更新します。

### 三十九話 偽りの二国会談

翌朝の会議、愛斗が見知らぬ女性を連れて入ってきたのに面々は驚いた。

「閣下、そちらの御方は？」

愛斗が渚を促した。

「本日より新生大日本帝国精鋭六華戦に配属されました。南風渚です」

愛斗が手を叩いた。

「と、いう訳だ。皆、会談の件はどうなった？」

井崎は頷き、書類を読み上げた。

「皇国側は講和会談を受託しました。会談は二日後に予定されていますがよろしいですか？」

愛斗は書類を見て、詳細を確認した。

「いいだろう。二日後だな。皇国側の特使は誰だ？」

井崎は顔写真をテーブルの上に置いた。

「ヴィルフリート・フォン・ストライダムか。レオンハルトの長男だな」

愛斗は一度面識があった。といっても大分昔の話だが……。

「分かった。では二日後にここの応接室で行う」

井崎は愛斗にもう一枚の書類を見せた。

「スパイラルリーファークの設計図です。既に完成間近です」

愛斗は頷いた。

「そつか。順調にやれ」

会議室を出た愛斗に撫子が近づいてきた。

「久しぶりだな・・・何処に行っていた？」

撫子は無表情だ。

「リリー・ケンプフェル、浅代カノンを失い、今度は南風渚。年上

か・・・」

愛斗は撫子は軽く無視した。

「聞いているのか？お前に言い忘れた事がある。お前の力の事だ」

愛斗は耳を傾けた。聞き逃す訳にはいけない事かもしれない。

「言ってみろ」

「お前の力には副作用がある。忘れていたけどな」

撫子は愛斗の額に手を当てた。

「かなり力を使ったな。そろそろ副作用がでるぞ」

愛斗は手で撫子を遮り、部屋に向かった。

「自分では意識していないのか・・・まあ、何時か痛い目を見るな」

二日後、巨大戦艦が帝宮の飛行場に着陸した。中から出て来たのはヴィルフリート・フォン・ストライダムその人であった。その傍らには参謀のフェリクスがいる。

皇国側にとってこの会談は需要であった。そのため、皇国一の参謀、ヴィルフリートが選ばれたのである。海星がヴィルフリートを出迎えた。

「ヴィルフリート殿下ですね。閣下がお待ちです」

ヴィルフリートが頷き、応接室へと向かった。今回の会談は一对一である。海星は応接室の前まで案内した。

「こちらで閣下がお待ちです。フェリクス殿はこちらへ」

海星はフェリクスを別室へと連れて行った。残されたヴィルフリートは扉を開けた。中は冷房が効いていた。有名な絵画が飾っており、中央に大理石のテーブルがある。その両側にソファがあり、壁には日本とストライダムの国旗が置いてある。

愛斗はテーブルの反対側のソファに座っていた。

「ようこそ、久しぶりだな。ヴィルフリート」

ヴィルフリートは愛斗の向かいの席に座った。

「私もだ。我が従兄弟、ヨハン・フォン・ストライダムよ」

愛斗はヴィンフリートに手を差し出した。ヴィルフリートは愛斗

の手を握った。

「懐かしいな。最後に会ったのはレオンハルトの記念式典の時以来か」

ヴィルフリートは頷いた。

「覚えているのか。あの時は私も幼かったな。レギー又は覚えているか？」

「ああ、皆覚えているぞ。エルネストの事もな」

二人はしばらく昔話に耽った。一通り終わった時、愛斗が本題を切り出した。

「そろそろ本題に入ろう。俺はストライダムと争う気はない。講和を結びたい」

ヴィルフリートは頷いた。

「私も同意見だ。争いは好まない」

もちろん二人とも上っ面だけの会話である。愛斗はストライダムとの戦争は避けられないものだと思っていた。ヴィルフリートもこの国を中から壊すつもりだった。

「ヨハンよ。個人的に尋ねたい事がある。お前は父母を殺された時にどう思った？そして、今はどう思う？」

ヴィルフリートは密かにポケットに入っている機械のスイッチを押した。

「恨んだ。只ひたすら恨んだ。だから復讐をしようと思った」

愛斗の今の目的は復讐ではないが、ここは復讐ということにしておく事にした。

「今も復讐だ。俺は復讐の為なら何でも利用してやる。味方だろうが敵だろうが関係なく」

ヴィルフリートは満足そうに笑った。

「そうか。なら、私をここで殺せばいい」

愛斗は首を横に振った。

「ここが外交の場では無く、戦場ならそうしている」  
ヴィルフリートは作り笑いを浮かべた。

「ここが外交の場である事に感謝しておこう」

ヴィルフリートと愛斗は最後に握手し、部屋を出た。

愛斗と別れたヴィルフリートはフェリクスを呼んだ。

「フェリクス、大収穫だ。これから井崎薫の所へ向かう」

井崎は会議室に向かって歩いていった所を呼び止められた。

「井崎殿」

井崎は振り向いた。そこにいたのは。

「ヴィルフリート殿、如何しましたか？」

「お前は澪坂愛斗の事をどう思っている？」

井崎は少し悩んだが、答えた。

「やろうとしている事や目的はわかりません。しかし、能力は否定出来ないのです。それに彼が私達を必要としているなら、私はその期待に応えなくてはいいけません」

ヴィルフリートはポケットから録音機を出した。

「これを聞いてもそう言えるかな？」

ヴィルフリートは再生ボタンを押した。

「俺は復讐の為なら何でも利用してやる。味方だろうが敵だろうが関係なく」

井崎は目を丸くした。

「まさか、閣下がそんな事を・・・」

ヴィルフリートは録音機をポケットにしまった。

「しかし、事実だ。お前たちはあの男に利用されているだけだ。澪坂愛斗は自分の復讐劇の役者にお前達を使っただ。目を覚ませ」

井崎は膝から崩れ落ちた。

「私はどうすれば・・・」

ヴィルフリートは井崎に耳打ちをした。

「私がお前達の本当の独立を手伝ってやろう。お前達がやる事は只一つ・・・」

ヴィルフリートは井崎にある仕事を任せた。



### 三十九話 偽りの二国会談（後書き）

#### 次回予告

会談を終えた愛斗はまだ立ち直れてはいなかった。

そしてヴィルフリートの陰謀が動き出す。

裏切りの井崎が愛斗に牙を剥く。その時、愛斗を救うのは？

次回四十話「部下の生き様」お楽しみに

## 四十話 部下の生き様

会談の三日後、愛斗は毎晩のようにすることがある。それは寝る前にカノンとリリーの写真を前に語りかける事だ。

「リリー、俺はお前に約束した事を果たせなかったな。俺にとってのお前は特別だった。お前がいるからこそまで頑張れたのに・・・」

次に愛斗はカノンの写真を手に取った。

「浅代、お前は俺との約束を守れなかった。同時にお前との約束を俺は守れなかった」

愛斗は写真を置き、ベッドに座り込んで泣き始めた。

「お前達は簡単に俺の目の前からいなくなってしまった。これは俺が流してきた血の報いなのか？」

「その通りだ」

愛斗が振り返ると、何時ものように突然、撫子が現れた。

「寂しいのだろう？」

撫子はカノンと同じ言葉を言った。

「俺を馬鹿にする気か？」

愛斗はさすがに少し顔を顰めた。

「お前を慰めてやる」

撫子はカノンと同じ様に愛斗を抱きしめた。愛斗は違うと分かっているのにカノンの時と同じ感覚を覚えた。

「なあ、撫子。教えてくれ。俺が戦う目的は何なのだろう？」

「それはリリーの為では無いのか？死して尚」

愛斗は脱力した声で言った。

「俺は生きているのが辛い。リリーや浅代がいなくなるとは考えてもいなかった」

「それはお前が力を手に入れた代償だ。諦める」

その時、ドアが勢いよく開いた。

「愛くん！大変よ！」

渚は愛斗と撫子を見て、一步後ろに下がった。

「ごめん・・・お邪魔しました・・・」

愛斗は撫子を振り払った。

「何でもないぞ。用件は何だ？」

渚は思い出したように叫んだ。

「大変よ！反乱が起きたの！今、帝宮の正門で警備部隊が迎え撃つてるけど長くは持たないわ！」

愛斗は耳を疑った。

「何？反乱だと？首謀者は？」

「帝国宰相、井崎薫よ！」

「何だと、井崎が？」

愛斗は直ぐにマントを羽織り、刀を腰に差した。

「今行く。渚、お前は裏庭のE M Aで逃げる。撫子もだ。俺も直ぐに行く。柊空港で合流しよう」

渚と撫子は二人揃って出て行った。愛斗は柵の上の写真を全て、懐に入れて部屋を出た。

正門に向かった愛斗は全滅した警備部隊を発見した。それと同時に正門が破壊され、大量の兵士が飛び込んできた。愛斗は刀を抜き、一人を斬った。斬られたのを目撃した兵士達は愛斗を囲むようにして間合いを取った。正門から一人の影が目に入った。

「井崎、何のつもりだ？」

井崎は怒鳴った。

「今更、惚ける気か？この嘘吐きめ！」

愛斗は何の事だか分からなかった。

「我が国はお前の手など借りぬ！ヴィルフリート様は我らの独立に力を貸してくれるそうだ」

愛斗は全てを悟った。

「貴様らは敵の罠にはまったんだ！気づかないのか！」

愛斗の後ろに二機のE M Aが降り立った。完全包囲という訳だ。

「我らはお前の道具ではない！ここでお前には死んでもらう！」

愛斗が何かを言おうとした時、足を弾丸が掠めた。

「ぐっ！」

愛斗は膝から倒れた。そういう訳か……。愛斗は理解した。リリーを失い、浅代を失い、最後は自分の命を失う。愛斗は諦めた。全てが終わった今、出来る事は死ぬだけだ。

「いいだろう。俺を撃ち殺せ。そして、楽にしてくれ……」

愛斗は敵の方に向き直った。井崎が呟いた。

「諦めたか……」

その時だった。愛斗の後ろのE M A二機がいきなり爆発した。そして、愛斗の後ろに青いE M Aが降り立つ。その姿は……。

「スパイラルリーファンク！という事はアルヴィか？」

「そうですよ！隊長！助けに来ました！」

スパイラルリーファンクは愛斗を驚掴みにし、浮かび上がった。

でも、何故だ？スパイラルリーファンクは未完成のはずだが……。

「アルヴィ！何故、俺を助けに戻った！逃げろと命令したはずだ！中から声が聞こえた。」

「何でつて……僕の隊長だからですよ。うぐっ！」

愛斗はアルヴィの呻き声にある事が思い当たった。

「アルヴィ！まさかかとは思うが、それは未完成じゃないのか？」

「そうですよ……。冷却システムと耐電パネルがないんですよ……。ぐわっ！」

また、アルヴィの呻き声が聞こえた。

「やめろ！アルヴィ！今すぐ降りろ！冷却システムと耐電パネルの大事さはお前がよく知っているだろう！」

冷却システムがないという事はコックピットの温度はどんどん上がり続けるという事だ。耐電パネルが無いと操縦桿を操作する度に身体に電流が走る。どちらにせよアルヴィが持たない。

「アルヴィ！これは命令だ！今すぐ止めろ！降りろ！」

「残念ですけど、隊長の命令は無視させてもらいますよ！ぐっ！」

後ろからミサイルが次々と飛んでくる。それをプラズマシールドでかわすが、数が多すぎる。一発が命中した。

「うわっ！」

アルヴィが叫んだ。

「アルヴィ、限界だ！降りろ！」

アルヴィは苦しみながら言った。

「隊長には僕が軍に入った理由を教えていませんでしたよね？」

「それがどうした！今は関係ない！」

アルヴィは敵の追跡を振り切りながら、地上部隊の対空砲火をかわした。

「理由なんて無いんですよ……ただ才能を買われたから……」

アルヴィは続けた。

「僕の考えなんて誰も聞いちゃくれません。本当は科学者になりたかったのに……僕の意味なんてそこにはありませんでした……」

「軍に入っても、必要とされているのは僕の存在では無くて……僕の技術と能力だけだった……誰も僕の意見なんて聞いてくれない……上官がE M Aを直せと言えば、黙って直し、上官が前線で敵を倒せと言えば……黙って戦った。皆、僕を戦闘マシンとしか見ていなかった」

愛斗はアルヴィに向かって叫んだが聞こえていないようだった。

「でも、そこに隊長が現れた！隊長は僕を戦闘マシンとしてじゃ無く、一人の人間として扱ってくれた。僕の意見を聞いてくれた、僕を褒めてくれた、僕に仲間をくれた、生きる理由をくれた。そして何より……うぐっ！」

アルヴィは一息ついて、叫んだ。

「僕に隊長という存在を刻み込んでくれた！だから……」

スパイラルリーフアークは追ってきたストライクパニッシャーにミサイルを叩き込んだ。

「僕は隊長を守る義務がある！たとえ……どんなに……がはっ！」

スパイラルリーフアंकから煙が出始めた。オーバーヒートの寸前だ。

「それが・・・僕の義務なんだ・・・」

次の瞬間、ストライクパニッシャーの攻撃を受けて、スパイラルリーフアंकは墜落を開始した。

「ぐはっ！隊長・・・飛び降りてください・・・」

愛斗を掴んでいた手が緩んだ。愛斗は近くの草むらに飛び降りた。五秒後に轟音が響く。

愛斗は草むらから起き上がると、一機のストライクパニッシャーが降り立つのが見えた。愛斗はアルヴィと敵が十分に見える距離に行き、待った。敵が降りると、愛斗は拳銃を撃ち込んだ。敵が倒れる。愛斗は死体を漁って、E M Aの鍵を奪った。そして、スパイラルリーフアंकに近づき、ハッチに手を掛けた。

「うっ！」

愛斗は思わず手を引っ込めた。もの凄い熱さだ。中の温度は想像できた。

「くそっ！」

愛斗はマントを破り、手に巻きつけた。渾身の力を込めて引っ張る。

「開いてくれ・・・」

重い音を立ててハッチが開いた。中にはアルヴィがぐったりと横たわっていた。

「アルヴィ！」

愛斗が中に入ると、物凄い熱気が愛斗を襲った。サウナを余裕で上回る温度だ。愛斗は中に飛び込み、アルヴィを抱きかかえ、近くの小川に走った。アルヴィを川原に横たえ、破ったマントを小川の冷水に浸し、アルヴィの顔に当てた。アルヴィの目が薄っすらと開き、愛斗を見た。

「アルヴィ、一つ答える。俺はお前に酷い事を言った。捨て駒と・・・」

アルヴィは微笑んだ。

「分かってますよ・・・隊長の悪い癖ですよね・・・心にも無いことをカッとなつていつてしまう・・・」

愛斗も微笑んだ。

「ああ、よく分かっているな・・・やはり、本当の部下は違うな」  
アルヴィは空を見上げると、呟いた。

「例え、本当だとしても・・・隊長に何と思われても・・・僕は構いませんよ・・・隊長は隊長ですから・・・」

アルヴィは愛斗を見つめ、最期の言葉を吐き出した。その顔に朝日が当たる。

「隊長は僕の最高の隊長です・・・もし、生まれ変わったら・・・また・・・隊長の部下になりたいです・・・隊長と一緒に・・・平和に暮らしたいです・・・ね・・・」

アルヴィは目を閉じ、安らかに息を引き取った。愛斗も頷いた。

「ああ、お前は最高の部下であり、親友だった」

愛斗はアルヴィを抱きかかえ、敵のE M Aに乗り込み、柊空港に向かった。

## 四十話 部下の生き様（後書き）

次回は番外編をやる予定です。お楽しみに

番外編 Lamentations of the imperial (前書)

更新が大分遅れました。まあ色々やってるうちに忘れていた訳ですが・・・

時は新世紀十一年、ここはストライダム皇国、バイエルン宮殿。宮殿の中庭は世界一とも謳われる庭園が広がっていた。そんな宮殿に一人の幼い少女がいた。

「ここ何処？」

少女の声は中庭に寂しく響いた。少女の名前はカミーユ・ドルゴポロフといった。カミーユは宮殿に仕える侍女の娘だ。最近、この宮殿で住み始めた訳であり構造を知らなかった。

「どうかしましたか？」

カミーユは咄嗟に後ろを振り向いた。立っていたのは自分と背が変わらない綺麗な黒髪の少年だった。カミーユは戸惑ったが直ぐに答えた。

「道に迷ったちゃったの・・・」

「何処に行きたいのかな？」

カミーユは小さな声で厨房、と言った。

「あちらですよ」

少年はカミーユの後ろの扉を指差した。

「ありがとう」

カミーユはそれだけ言うと、走り去っていった。

カミーユの遊び相手は乳母だけだった。しかし、乳母には直ぐに飽きてしまった。同じ童話ばかり読み、遊びは退屈だ。少年と出会ってから、三日後。カミーユは乳母から逃げた。そして中庭に向かったのだ。カミーユは中庭が好きだった。花も沢山ある。乳母の抑止を振り切って、カミーユは中庭に走った。中庭に行くと、噴水の脇にこの間の少年がいた。

「お兄ちゃん！」

カミーユは少年に向かい、走っていった。少年もそれに気づく。

「君はこの間の女の子だね」

少年も自分の事を覚えていたようだった。カミーユは少年に抱きついた。カミーユを追ってきた乳母がそれに気づいた、猛ダッシュで走りよってくる。

「カミーユ！こら！」

乳母はカミーユを少年から離れた。

「この方はヨハン様、皇太子よ！失礼でしょ！すみません、ご無礼がありましたら謝罪します」

どうやら少年はヨハンと言う名前らしい。しかも皇族のようだ。

「ごめんなさい。知らなくて・・・」

カミーユは乳母に謝った。

「私じゃなくてヨハン様に謝りなさい」

「ごめんなさい」

カミーユはとても不安になった。皇族に無礼な事したら大変な事になる。幼い少女でもそこは理解していた。しかし、ヨハンの口から出た言葉は以外な言葉だった。

「元気がいい子だね。僕と遊ぼうか？」

ヨハンはそう言い、微笑んだ。

「よろしいですか？」

乳母は頭を下げたまま、訪ねた。

「構わないよ。僕も暇だったんだ」

乳母は深く頭を下げ、何度も感謝の意を示した。

「ヨハン様の親切に感謝感激でございます」

乳母はそう言うと、立ち去っていった。

「じゃあ、何をして遊ぼうか？」

カミーユは即答した。

「お花で帽子を作りたい！」

ヨハンは頷いた。

「いいよ、じゃあ、お花を摘もうか？」

二人は咲き誇っている花を摘み始めた。その姿はまるで実の兄妹

のようだった。

ヨハンは毎日のようにカミーユの遊び相手を務めた。二人は時には中庭で遊び、厨房でおやつをもらう。平凡だが幸せだったに違いない。

そんなある日、何時ものように中庭で花を摘んでいると、後ろから呼ばれた。

「おい、ヨハン！たまには訓練に顔出せよ！」

その人物をカミーユは見たことがあった。確か今の皇帝の三男、エルネスト様だ。ヨハンは立ち上がると、叫んだ。

「今は僕たちの時間だ。邪魔しないでくれ」

エルネストはその言葉にすこし腹を立てたようである。

「何だと、兄に生意気な口を利くのか？」

エルネストは背中に背負っている木の剣を取り出した。

「丁度いい、僕と勝負しろ」

ヨハンは自分に放り投げられた剣を拾った。

「よく言うよ。僕は兄さんに負けた事は一度も無いよ」

エルネストは悔しそうに歯軋りをした。そして、攻撃目標を変えた。

「ヨハン、その女の子は誰だ？」

「カミーユだ。カミーユ・ドルゴポロフ」

「ドルゴポロフ？ああ、あの出来の悪い侍女の娘か？」

カミーユはその言葉で叫んだ。

「お母さんの悪口は言わないで！」

カミーユはエルネストを叩いた。

「何を！僕を叩いたな！」

ヨハンは直ぐにカミーユを止めた。

「カミーユ！駄目だよ。女の子がそんな事をしちゃ」

何とかカミーユはエルネストから離れたが、エルネストは相当、腹を立てていた。

「侍女の娘の分際でこの僕に逆らうとは！お前を牢屋に閉じ込めてやる！」

エルネストはカミーユの手を引きずり、歩き出そうとした。

「止める！」

ヨハンが叫び、エルネストを押し倒した。

「痛い！」

エルネストが叫び、転んだ。ヨハンが木の剣を構える。カミーユはヨハンの後ろに隠れた。

「やったな！」

エルネストが立ち上がり、ヨハンと向かい合った。

「何をしているんだね？」

三人は声の方を見た。

「ヴィルフリート兄さん！ヨハンが！」

「お前が女の子を苛めるからだろう！」

二人は再び睨み合う。

「えいっ！」

エルネストが木の剣を勢いよく振り下ろした。ヨハンはそれを見極めた。

「はっ！」

ヨハンはその木の剣をカウンターで弾き飛ばした。

「ううゝ」

エルネストが悔しそうに唸った。

「面白いじゃないか。頑張れよ」

ヴィルフリートは傍観者として見物を開始した。

「止めて！」

そこに一人の女の子が割って入ってきた。

「マリア！何故止める？」

ヴィルフリートがマリアに尋ねた。

「喧嘩を止めるのは当然ですわ！」

カミーユはマリアのことも知っていた。マリア・フォン・ストラ

イダム。皇帝の次女だ。

「ほら、二人とも仲直りして」

マリアが促すと、二人は仕方なく喧嘩を止めた。ヨハンはカミーユに向き直ると微笑んだ。

「怪我、してないよね？」

「うん！大丈夫！」

カミーユが元氣そうに頷くと、ヨハンも笑みを浮かべた。

カミーユが異変に気づいたのはそれから一週間後、ヨハンはぱったりと姿を現さなくなってしまった。他の宮殿の子供に聞いても分からない。結局、ヨハンはカミーユの前から忽然と姿を消してしまった。

噂を聞けば反対派によって殺されたらしい。カミーユはヨハンと逢えなくなってからというもの、心を閉ざし、無口な少女になってしまった。

カミーユは今でもヨハンを思い出す。それほど特別な人だったからだ。

次回も番外編をやりたいです。

後、ご意見・ご感想をお待ちしております。

番外編〜日本へ〜（前書き）

久しぶりの更新です。まあ宿題とか色々大変な訳なのですよ。  
ではどうぞ〜

番外編く日本へく

ヨハンがカミィユと知り合ってから一週間。

ヨハンは屋敷の一室で両親と話をしていた。

「母上、僕には無理ですよ」

ヨハンが静かな声で反論する。

「いえ、ヨハン。貴方が行きなさい」

ヨハンの両親、ジークフリードとヨゼフィーネはヨハンにそう言った。ヨハンが行く、と言うのは地方の巡察の事である。

巡察は毎月、領主が行う。皇族であるヨハンの家の領地は他の貴族等とは比べ物にならないほど広い。だからこそ巡察という大任はよほどの人物で無くてはならない。

「ヨハンよ。何事も経験だぞ。お前はきっと出来る筈だ。出来なくてもなんら恥じる事は無い」

そう言われると気が楽だが、ヨハンは中々首を縦に振らなかった。「でも……」

ジークフリードの顔をヨハンは盗み見た。そしてため息をついた。「分かりましたよ。僕が行きます」

その言葉を聞いて、二人はとても嬉しそうな顔をした。

「そうか。なら今日はお祝いだ。何でも食べたい物を言え」

ヨハンは疑問を残した顔で頷いた。何かおかしい、おかしすぎる。普段ならこんな事頼まれないだろうし、様子もおかしい。

ヨハンは何も言わずに部屋を出た。そのまま屋敷を抜け出し、中庭に向かった。噴水の縁に座り、またため息をついた。

「調子狂うな……僕は別に……」

ヨハンは小石を拾い上げ、噴水に向かって投げた。水が綺麗に跳ねる。

「お兄ちゃん？」

その声にヨハンは振り向いた。

「やあ、カミーユ。どうしたんだい？」

「一緒に遊ぼうと思って・・・」

カミーユは恥ずかしそうに言った。

「いいよ。じゃあ厨房にでも行こうか？丁度昼食時だ」

ヨハンはカミーユを促し、厨房に向かった。しかしヨハンの心の中には疑問が残っていた。

「ヨハン様？」

ヨハンは自分を呼ぶ声で我に返った。

「ああ。続けてくれ」

「はい、ですから今年度の収益は・・・」

ヨハンは上の空だった。どうしても胸騒ぎがするからである。何故か分からないが不吉な予感がするのだ。

「ヨハン様？御気分が悪いのですか？」

ヨハンの専属執事であるライナー・ドレスラーが耳元で囁いた。

「いや、平気だよ。少し胸騒ぎがするんだ・・・」

「そうでございますか。ならそろそろお戻りになりますか？」

ヨハンは頷いた。一刻も早く屋敷に戻りたかったのだ。ライナーはヨハンの前に立ち、報告を打ち切った。

「本日の報告はここまでです。ヨハン様も御疲れの様ですので」

ライナーの威厳のある声に、集まっていた群衆は帰り支度を始めた。ヨハンも席から腰を浮かせ、門の前に止めてある車に向かった。「ライナー、限界まで飛ばして欲しいんだ。急いで屋敷に戻らないと・・・」

ライナーが車のドアを開け、ヨハンを促した。

「さあ、御乗りください。急ぎましょう」

ライナーもヨハンの顔に浮かぶ不安を感じ取っていた。ヨハンは車の後部座席に座ると、貧乏揺すりを始めた。よほど落ち着かないのだろう。

屋敷までは三時間程かかるが、二人の間に会話は生まれない。ヨ

ハンの乗る車の後ろには他の執事が乗った黒いワゴン車が二台走っている。

暗い車内でヨハンが顔を上げ、ライナーにもどかしい口調で尋ねた。

「ライナー、父上達は今日、屋敷で客人を迎える予定とかはあったかな？」

「いえ、そのような御話は聞いておりません」

「そう。ならいいんだ」

ヨハンはそれで会話を打ち切り、黙り込んだ。

車が屋敷の前に止まったのは午前一時の事だった。ヨハンは車から飛ぶ様にして降り、屋敷の門の前に呆然と立ち尽くした。

「これは・・・？」

屋敷の正門の金具はずたずたに引き裂かれ、火が燻っている。

ヨハンは全速力で屋敷の玄関へと走った。屋敷の玄関は吹き飛ばされ、家中の窓ガラスが砕け散っていた。

「そんな・・・」

ヨハンは空洞になった玄関を潜り、大広間に足を踏み入れた。中に広がっていた光景とは・・・。

「父上！母上！それに姉上も・・・」

大広間は血の海と化していた。大階段の中腹には執事や使用人、メイドが全身を撃ち抜かれ、死んでいる。そして階段の上には血に塗れたジークフリードの姿が、階段の下には血の海に横たわるヨゼフィーネの姿があった。

さらにヨハンにショックを与えたのは大広間の中央に目を薄つすらと開いたままでひたすら震え、倒れている唯一のヨハンの味方であったマリアの姿があったからだ。

「姉上！しっかりしてください！」

ヨハンがマリアに駆け寄り、抱き起こした。マリアの目の焦点がヨハンに向いた。

「ヨハン・・・？」

「そうですね！誰がこんな事を・・・」

マリアは何発もの銃弾を被弾していた。後ろからライナーと二人の執事が現れた。

「ヨハン様！お逃げください！」

ライナーが拳銃を引き抜き、階段の上にいた兵士を狙い撃った。

「ライナー！これは？」

ライナーと二人の執事はヨハンとマリアを抱え、階段の裏に逃げ込んだ。

「ライナー、奴らは一体？」

ライナーは壁の石造のボタンを押した。大きな絵画がずれ、抜け道が現れた。

「この穴は？」

「これは抜け道でございます。ここからお逃げください」

「逃げる？一体何処へ？」

ライナーが服から小さなケースを取り出し、ヨハンに手渡した。

「この中身は落ち着いてからご覧下さい」

ライナーはそれだけ言うと、ガソリンを大広間に撒き始めた。

「ライナー！何を！」

「お静かに！ヨハン様は死んだという事にするのです」

ヨハンはいばらく黙っていたが、頷いた。

「分かった。で、ここを抜けたらどうすればいい？」

ライナーはヨハンに地図を渡した。

「ヨハン様は南に向かって下さい。途中で合流しましょう。それからヨハン様は日本にお向かい下さい」

「日本！？」

ヨハンは素つ頓狂な声を上げた。

「そうです。日本で保護してもらう手筈になっております」

「どうしてそんなに手際がいいの？」

ライナーは少しの間黙っていたが、重々しく口を開いた。

「それは・・・ご主人様、ジークフリード様からのご命令ですので・  
・」

「何だつて？」

「ジークフリード様はこの事態を想定しておられました。その上で  
このような事態に陥った場合に私にこの事をご指示なされました」

ヨハンは驚きを隠せなかった。しかし、今どこのこの言つて解  
決する問題でも無い。

「分かったよ。ライナーも無事で」

ヨハンはそれだけ言つと、抜け穴を潜り、走り出した。途中で一  
度だけ振り返る。

「さようなら、マリア。そしてカミィユ。もう二度と逢う事は無い  
だろうね・・・」

ヨハンの安らかな生活は終わりを告げた。今日からヨハンはヨハ  
ンでは無くなったのだ。

番外編〜日本へ〜（後書き）

次回も番外編です。しばらく続く予定なので。

番外編〜新しい生活〜（前書き）

今回は比較的短めです。ではどうぞ〜

## 番外編〜新しい生活〜

見慣れない景色が広がっている。ここは異郷。ストライダムを遠く離れた日本だ。

「この屋敷が僕の家？」

ヨハンは呆けた声で尋ねた。

「そうです。ヨハン殿下」

ヨハン殿下、か・・・。

ヨハンが日本に招かれた理由、それはストライダム皇国に、エレメントに対抗するためだった。

ストライダムが世界を統一しようと言うなら、ノーマル大国の日本は窮地に立たされる。それを防ぐ為には切り札が必要だ。それがヨハンなのである。

ヨハンはあくまでもストライダムの皇族だ。皇族を手元に置いておくのは悪い話では無いだろう。もちろん本当の目的はそうでは無い。日本政府はヨハンを皇帝にし、新しい国家を創ることが目的だ。ヨハンはもちろん自分の置かれた状況を理解していた。それを分かった上で日本に来たのだから。

溜息をついて、屋敷へと足を踏み入れた。

「ようこそお出でくださいました」

爽やかな女性の声が聞こえた。ヨハンは屋敷の玄関に立っているメイド服姿の少女を見た。年は十五、六の少女で、かなりの美人だ。「貴方は？」

ヨハンが尋ねる。少女は笑顔を崩さずに答えた。

「私は本日付でヨハン・ジークフリード・ヨゼフィーネ・フォン・ストライダム皇太子殿下の専属メイドに就かせて頂きました、坂本<sup>さかもと</sup> 澪<sup>みお</sup>と申します」

そう言い、澪はヨハンに手を差し出した。ヨハンがそれを握る。「よろしく。僕がヨハンだ」

ヨハンは靴をきちんと脱いで、行儀良く家に足を踏み入れた。その様子を見て、漣が笑った。

「若、ご自分の家なのですからもつと普通にお振る舞いになればよろしいですよ」

ヨハンはそう言われ、顔を赤らめた。

「そうだよね」

ヨハンは家の中を歩き回ってみた。家の構造を理解するためだ。

「木材のいい匂いがするね」

ヨハンが大黒柱に顔を近づけ、呟いた。

「これが日本の伝統建築でございます」

漣が家について説明する。ヨハンは和室の座布団に座り、ライナ―から貰ったケースを開いた。

そこにはこれからの事が多々書かれていた。

「漣、僕はまずどうすればいいんだ？」

「若にはまず名前が必要なのですよ」

名前？とヨハンは鸚鵡返しに言った。

「僕にはヨハンって名前があるけど？」

「いえ、日本には日本の名前があるのです。今日から若は日本人ですからね」

漣はそれからヨハンの顔を見た。

「見たところ、血統は日本系では？」

「僕は真正の日本人だよ」

ヨハンは笑いながら言った。

「なら話が早いです。日本語はお分かりで？」

「もちろん」

ヨハンはそれから少し考え込んだ。

「決めたよ。苗字は坂本漣から「漣」と「坂」を貰って、漣坂にしよう」

漣も微笑む。

「光栄です」

ヨハンはそれから名前を考え始めた。まず部屋を漁ってみる。

DVDデッキを漁っていると、一本のDVDが目に入った。それを手にとってみる。

「これは？」

「それは「愛の北斗七星」という今、日本で大人気の恋愛映画ですよ。ご覧になります？」

ヨハンはそのタイトルを少し眺めた。

「じゃあ、名前は「愛の北斗七星」から「愛」と「斗」を貰って、愛斗にしようかな？」

漑がすぐさま賞賛する。

「素敵なお名前ですわね」

ヨハンも自分が決めた名前を漢字で紙に書いてみた。

「漑坂愛斗か・・・いい名前じゃないかな」

「ええ、とても」

ヨハン改め、愛斗は元気良く庭に飛び出した。

「少し見て回ってくる！」

愛斗は垣根を越え、川に走り寄った。

「綺麗だな。宮殿の噴水とはまた一味違う美しさがある」

愛斗は川に素足で入った。冷たい水が心を癒してくれる様に感じる。愛斗はそのまま川岸に上がり、寝そべった。

何処までも青い空が見えた。何故かここでの新しい生活は愛斗に新しい出会いを与えてくれるような気がした。それがどんな形であつたとしても。

「若！昼食に致しませんか？」

漑の声が聞こえた。

「今行くよ！」

愛斗は勢い良く立ち上がり、漑の下へ、新しい家へと走り出した。ソウ、今日こそ漑坂愛斗トイウ、「悪魔」ガ生マレタ日ナノダカラ。

番外編く新しい生活く（後書き）

次回予告

起こってしまった事実を変えられない。

第三次世界大戦とは何なのか？

その先に待っていた未来とは？

次回番外編「World War ?」お楽しみに

番外編〜World War ? ? ? (前書き)

番外編は当分続きそうです。

もうしばらくお付き合いください。

## 番外編 World War ？ ？ ？

「大きな城だな」

愛斗が感服の声を上げる。

「江戸城ですよ。昔は天皇の皇居だった場所です」

澪が説明する。愛斗は日本の皇帝として、江戸城にある日本軍大本営に出頭しなくてはいけない。これからもうさうだろう。

「さあ、若。行きましよう。お偉いさんは痺れを切らしていますよ」「僕が偉いんだから気にする必要は無いんじゃない？」

愛斗が最もな事を言う。

「いえ、立場上で優位なだけです。若の器量を発揮しなくては信用は生まれませんよ」

「分かったよ」

愛斗は渋々頷き、城門の前に立った。門の前には白い軍帽を被った海兵隊員がいる。

「皇帝陛下です」

澪が短く言うと、兵士は道を空けた。

「さあ、参りましよう」

愛斗と澪は並んで大本営へと足を踏み入れた。

中央司令部は大きなモニターだらけの部屋だ。愛斗はその中央の椅子に座った。

「で、何をすれば？」

愛斗が澪に尋ねた。

「これから会議ですので、報告を聞き、冷静な判断を下すのです」  
澪が愛斗の耳元で囁いた。愛斗も頷き、全員に目配せした。

一人の無精ひげを生やした軍人が書類を読み始めた。

「ではご報告させて頂きます。まず我が軍の兵力はどう集めてもストライダムの一程の十分の一程です」

愛斗が手元の書類を手に取り、頷いた。

「続いて、戦線についてですが今現在、ストライダムとの交戦は起こっておりません。しかし、敵は着々と日本攻略の準備を進めている状況です」

一通りの説明が終わり、愛斗が各部隊の配置図を見た。

「敵は多分、ここから来ると思う」

愛斗が北海道の一角を指差した。

「何故そう言いきれるのですか？」

「警備が薄いし、地形上にも上陸に適しているからね」

愛斗が澄ました声で言う。

「紹介が遅れました。私、日本陸軍最高司令官の浅代富嶽あさしろ ふがくと申します」

無精ひげを生やした軍人が遅れて挨拶をした。

「僕がこれから軍の指揮を執る。皆、よろしく頼むよ」

愛斗が全員を見回して、言った。

屋敷に戻った愛斗は和室に座り込み、寝そべった。そして息を大きく吐き出す。

「疲れるよな。やっぱり・・・」

「仕方ありませんよ、若。若はそれ程期待されているという事です」  
澪が夕飯の支度をしながら愛斗に言った。

「それより、まだ時間がありますし、遊びに出ては如何ですか？」

「そうしようかな・・・」

愛斗は起き上がって、屋敷から出た。日が沈みかけた森や川の景色はどこか懐かしさを感じさせた。

「公園にでも行こうかな・・・」

愛斗は近所の公園に向かって走り出した。

公園といっても、林の中に二つだけ遊具がある小さな公園だが、この時間は子供がよくいるので一緒に遊べるだろう。

愛斗は公園の前に立っていた少年に声をかけた。

「ねえ、近所の子？」

「ん？ああ、そうだけど」

二人の会話に気付いたのか、公園の中で遊んでいた六人程の少年がこっちに向かってきた。

「おい、どうした？」

「いや、何か知らない子が・・・」

ガキ大將的な子供がこっちに向かってきた。

「お前、新入りか？」

「まあ、引越して来たばかりだけど」

愛斗がそう言くと、ガキ大將は少し笑みを浮かべた。

「俺は飯塚龍<sup>いづかりゅう</sup>。お前は？」

「僕は澀坂愛斗だよ」

愛斗が笑顔で返す。

「そうか。丁度いい、俺と勝負だ」

「いいけど何で？」

「俺達の仲間になりたいのなら、俺と互角に戦って見せろ」

愛斗は笑顔を崩さずに行った。

「いいけど、どういう勝負をするの？」

「男はこれで勝負だ」

龍はそう言い、木刀を背中から引き抜いた。もう一本を愛斗の前に放り投げる。

「これで？」

「そうだ。何か文句あるか？」

「いや、無いよ。早速始めよう」

愛斗は木刀を拾い上げ、構えた。

「いい度胸だ」

龍が一気に愛斗に木刀を振り下ろす。愛斗はそれを軽い身のこなしで避けた。

「次は僕だ！」

愛斗が龍に木刀を勢い良く振り下ろした。

「まだまだ！」

龍がそれを受け止め、弾いた。龍が木刀を弾き返したときに空いた愛斗の脇腹へと斬り込む。

愛斗はそれを左手で受け止めた。右手で龍の頭に振り下ろす。それを龍は避けることに成功した。

二人が少し間合いを取る。

「中々やるじゃねえか」

「そっちこそ」

愛斗は笑みを浮かべた。エルネストなんかよりずっと張り合いがある。

「勝負はこれからだよ！」

愛斗はフェイントを掛け、間合いに飛び込んだ。龍が木刀で愛斗の喉を狙って突いた。

「はっ！」

愛斗はそれを避け、龍の腹に蹴りを決めた。

「がっ！」

龍が少しうめいた。愛斗は遠慮せずに木刀で次の一撃を叩き込む。

「くそっ！」

龍の右手が愛斗の木刀を受け止めた。

愛斗はまた離れて間合いを取る。

「お前、強いな・・・」

龍は木刀を投げ捨てた。

「お前の勝ちだぜ」

愛斗も木刀を同じ様に投げ捨てた。

二人は歩み寄り、お互いに握手をした。

「強けりや、大歓迎だ。今日から仲間だ」

愛斗も微笑みを返す。

二人の間に友情が生まれたその時、一人の大人が叫びながらこちらに走ってくるのが見えた。

「父ちゃん！」

龍が叫んだ。

龍の父は公園に入ってくるや否や、叫び始めた。手にはラジオが握られている。

「おい、龍！ラジオを聞いたか？」

「聞いてないよ！どうしたんだよ、父ちゃん？」

龍の父はラジオのスイッチを入れた。

ラジオから大きな声が響いている。その場にいた愛斗達も耳を傾けた。

「本日、午後五時三十分四十二秒。ストライダム皇国軍が北海道札幌市に上陸、攻撃を開始しました。これに対し、大本営はストライダム皇国に宣戦布告。交戦を開始しました。只今入った情報によると、ストライダム皇国軍は日本本土各地で上陸を開始し、戦闘を始めているとの事です」

愛斗はその放送を聞き、溜息をついた。

遂に戦争が始まったのだから。龍が愛斗達に向かって叫んだ。

「おい！聞いたか！遂に戦争だ！」

歓声が沸いた。

・  
・  
皆が勝利を信じていた。勇気ある民族としての誇りを胸に掲げて・

番外編「World War ?」(後書き)

次回予告

愛斗にとっての最高の出会い。

それはリリーとの出会いだった。

次回、知られざる愛斗とリリーの出会いが明らかになる。

次回番外編「World War ?」お楽しみに

番外編〜World War?〜(前書き)

ちなみに作中の愛斗と零の屋敷があるのは熱海です。  
ではどうぞ〜

## 番外編 World War ? ?

神奈川県旧小田原市、市内の公園。

幼いリリーは午後の暖かな日差しが当たる公園の砂場で一人で遊んでいた。

兄弟も友達もあまり居ないリリーにとって、一人で遊ぶのが何時もの習慣だったのだ。砂場で山を作り、更にもう一個作る。単純な遊びだがリリーは気に入っていた。

「まだ来ないのかな」

リリーの口から自然と言葉が漏れる。

リリーはこの公園で母が迎えに来るのを待っている。何時もの事だが、何故か今日は不安で心が一杯だった。

「ふう」

リリーは不意に空を見上げる。

午後の透き通った青空は何処か悲しさを感じさせた。

「早く迎えに来てよ・・・」

リリーの口から涙声が漏れる。自然と涙が溢れてきた。何故か心細いのだ。

昨日の夕方に戦争が始まったらしい。戦争なんてリリーにはまだ理解出来ないが、恐ろしい事であるくらいの印象は持っていた。

そのせいもあってか、リリーはとても心細かったのだ。リリーは立ち上がり、公園を出た。町を歩き回り、母の顔を捜す。

もちろん見つかる筈は無い。この時間は仕事だからだ。でも、捜さずには居られなかった。

「疲れた・・・」

リリーが座り込む。また空を見上げてみると、今度は別の物が目に入った。

「あれ・・・何？」

それは空に浮かぶ巨大な戦艦だった。その大きさに本能的な恐怖

を覚え、リリーは走り出した。

心なしかサイレンの音が聞こえた気がした。  
その瞬間だった。

「いやっ！」

戦艦から放たれた何発、何百発もの光の弾。真っ直ぐと地面に向かい落ちてくる「それ」は死の権化としか見えなかった。

光の弾は地面に当たった瞬間、炸裂して炎に包まれた。リリーは運悪く光を直視してしまった。

「！！！！！」

声も出ずにリリーは吹き飛ばされた。何かに強く頭を打つ。いや、打ったのかも分からない。そのまま意識は遠のいていった。

「・・・ん・・・？」

リリーは熱気で目を覚ました。目の前は真っ暗だ。とにかく目を開こうとしたが、開かない。というより、開いたつもりなのだが見えないのだ。

「嘘・・・真っ暗・・・怖い」

リリーの口から涙声が漏れる。周りからはバチバチという何かが燃える音、木材が弾ける音しか聞こえない。

「熱っ！」

リリーが手に熱さを感じて、手を引っ込めた。とにかく逃げよう、そう思ったリリーは立ち上がろうとした。

おかしい、立てない。足に力が入らないのだ。いや、力を入れているのに動こうともしない。まるで足という存在自体が無くなったみたいに。

「やだ・・・動かない！」

リリーは必死にばたつく。何とか這って逃げようとする。ここに居れば死ぬ。それだけが頭の中で回っていた。

今の状況なんて目が見えなくても分かる。周りは火の海だろう。

この焼ける音、燃える匂いが周りの光景を物語っていた。

「やだ・・・死にたくないよ・・・助けて・・・」

リリーが泣きながら呟いた。その声に反応する者はいない。周りがどんどんと火に包まれていく感覚がした。死の予感が近づく。

「助けて・・・」

リリーが声を絞り出した。

「逃げる！」

声が響いた。次の瞬間、リリーの体は浮くような感覚を覚えた。

「えっ？」

リリーが驚きの声を上げる。体が炎から離れていく。

「大丈夫？」

また優しい声が聞こえた。

「目が・・・見えないの・・・」

リリーは答える。声の人物はリリーを抱きかかえていた。声の人物の暖かい腕にリリーは少し頬を赤らめた。

次第に炎の熱が遠ざかっていく。同時に人の声も聞こえてきた。

声の人物が立ち止まり、リリーを地面に横たえた。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

声の人物は先ほどと同じセリフを言った。

「目が見えないの・・・足も動かない・・・」

声の人物がリリーの足に触れた。

「まだ名前を聞いてなかったね。名前は？」

声の人物がリリーに尋ねた。

「リリー。リリー・ケンプフェルです」

「そうか。僕は澪坂愛斗。ちょっと失礼」

愛斗はそう言い、リリーの足を調べ始めた。リリーはとても恥ずかしかったが、嫌な気持ちでは無かった。

「別に足に異常は無いね。じゃあ目を見るよ」

愛斗は少し移動し、リリーの顔を手で開かせようとした。だが開かない。

「目は・・・重症かも知れないね。今から病院に行こう」

「はい」

愛斗はリリーを再び、抱きかかえて歩き出した。

「すいません。今、どうなっているんですか？」

リリーは愛斗に尋ねた。

「敵の空襲で町は火の海だ。君も危なかったしね。今は市街から出たから安全だよ。だから落ち着いて」

リリーは頷いたが、周りからは人々の悲痛な声が聞こえる。恐らく避難者で溢れかえっているのだろう。

愛斗はリリーを抱えたまま、三十分程歩いた。愛斗が不意に立ち止まる。

「着いたよ。もうちょっと待ってて」

愛斗はそのまま病院の門を潜った。比較的大きな市立病院の付近には怪我人が溢れている。

病院の中も例外では無かった。血を流し苦しむ者、痛みにつめく者が多々いる。

「怖いです・・・」

愛斗はリリーが震えているのに気付いた。

「大丈夫だよ。もう病院の中だから」

愛斗は近くを歩いていた看護婦に声をかけた。

「すいません。この子が怪我をしてるんです。見て頂けないでしょうか？」

愛斗の顔を見た看護婦が腰を抜かした様に驚いた。

「皇太子殿下！？どうぞ、お入りください！」

看護婦が診察室のドアを開けた。愛斗は診察室のドアを潜り、リリーをベッドに寝せた。直ぐに医者がやってくる。

「先生、お願いします」

医者は頷き、リリーの診察を始めた。

「じゃありりー？外で待ってるからね」

愛斗は優しい声で言い、病室を後にした。リリーはそんな愛斗の

優しい声に聞き惚れていた。

愛斗は今、病院の中庭のベンチに座っている。リリーの診察が始まってから一時間程が経っていた。

「澪が心配してるかな？」

愛斗は携帯電話を取り出し、屋敷へとダイヤルした。

しばしの沈黙、その後の呼び出し音。澪が電話に出た。

「もしもし？」

「僕だよ、愛斗だ」

「若？どちらから？」

愛斗は周りを見回してから答えた。

「今、小田原の近くの病院だ。空襲で怪我した女の子が居てね、病院で診察中だ。もう少しで帰れるよ」

「若にお怪我はありませんか？今から迎えに上がりますね」

愛斗はありがとう、と礼を言い、またベンチに座った。丁度その時、看護婦がやって来た。

「すいません。診察が終了したのでどうぞ」

愛斗は頷いて、看護婦の後に付きながら診察室へと向かった。

愛斗が診察室に入ると、リリーはベッドにちょこんと座っていた。開かない目で辺りを見回している。

「先生、どうでしたか？」

医者は咳払いを二度、三度して、話し出した。

「まず、目ですが恐らく最新の治療を受けない限り、瞼が開く事は無いでしょう。恐らく爆発の光を直視してしまったせいですね。次に足ですが、頭を強く打った影響で完全に麻痺しています。同じく治療とリハビリが必要でしょう」

愛斗は悲しい顔で頷いた。次にリリーを見る。この健気な少女は自分の身に起こった悲劇を理解出来ているのだろうか？

「そうですね・・・ありがとうございました」

愛斗はそう言い、リリーに近づいた。

「リリー、命に別状は無いから安心してね」

愛斗が優しく言っていると、医者が愛斗に尋ねた。

「君達は兄弟か何かかね？」

「いえ、僕がこの子を助けたんです。今日が初対面ですよ」

愛斗が説明すると、リリーが不意に呟いた。

「お母さんは何処？」

愛斗と医者がリリーを見た。

「病院ならお母さんが来ているんじゃないの？」

医者が言ったが、リリーは首を横に振った。

「違う。お母さんは仕事でまだ町に……」

医者が残念そうに呟いた。

「残念ながらこの子は孤児院かも知れんな」

「そんな！ 捜す手はあるでしょう？」

愛斗が反論したが、医者に遮られた。

「生きている望みは無いだろう。小田原の生存者は絶望的だ」

リリーが場の空気を破って質問した。

「孤児院って何？ お母さんは死んじゃったの？」

医者が暗い顔で、声だけを明るくしてリリーに言った。

「孤児院というのはね、親のいない子供達がいっぱい居るところだよ」

「私にはお母さんがいます」

医者は聞き分けの悪い子供に言い聞かせるように言った。

「君のお母さんはね、もうこの世界には居ないんだよ」

医者の言葉にリリーの目から大粒の涙が溢れる。医者は気の毒そうに電話を手にとった。

「手続きの方はこちらで済ませるよ。それまで入院していなさい」

「待ってください！」

愛斗の叫び声に医者とリリー、看護婦がびくつと体を震わせた。

「僕がリリーを引き取ります。それなら文句は無いでしょう」

医者は顔を曇らせた。

「しかし、そう簡単ではないのだよ。君はまだ子供だし、養っていけるという保障も無い。それに本人に意思もある……」

愛斗はリリーに近づき、手を握った。

「家族が居ないのなら僕が家族になってあげるよ。約束するよ、どんな時でも傍にいて守ってあげる。どんな時でも君に笑顔を与えてみせる」

愛斗の強い口調にリリーは少し戸惑った。

「でも……迷惑じゃ……」

「迷惑なんかじゃない！僕とリリーは家族だよ。だから今は泣いてもいいんだよ」

リリーは溢れてくる涙を止められなかった。そのまま愛斗に抱きつき、泣き始めた。愛斗はそんなリリーの頭を優しく撫でた。

「もう大丈夫。安心して……」

愛斗は医者を見た。医者も仕方なく頷いた。愛斗はリリーをもう一度見つめた。

「この子は、リリーは僕が守ってみせるよ……。リリーに家族が居ないのなら僕がたった一人の家族だ。僕に家族が居ないのならリリーが僕の家族だよ」

愛斗の優しい声に、リリーはただただ泣くことしか出来なかった。

番外編 } W o r l d W a r ? } } (後書き)

次回は第二次世界大戦について、真相に迫っていききたいと思います。

番外編〜World War?〜(前書き)

久しぶりの投稿です。べ、別にサボってた訳じゃないんだからねっ  
!

## 番外編 World War ？ ？

「若、起きてください。朝ですよ」

漣の声愛斗は目を覚ます。愛斗は目を擦りつつ、と背伸びをした。

「あれ、リリーは？」

漣は寝惚けている愛斗に微笑みながら外を指差した。

「外で元気に遊んでいますよ。若よりも早起きですね」

愛斗は頭を軽く掻きながら起き上がり、障子を開いた。

庭ではリリーが元氣よく跳ね回っている。

「元氣みたいだね。良かったよ」

庭で遊びまわっていたリリーは愛斗に気付いたらしく、愛斗の下へ駆け寄ってきた。

「愛斗さん！」

愛斗は駆け寄ってきたリリーを抱きかかえた。

「リリーは元氣だね。僕も安心したよ」

愛斗はリリーの頭を撫でながら言った。この少女の幼さが、母を失ったという悲しみを和らげているのだろうか。だとしたら成長すれば・・・。

愛斗はその考えを頭から追い払った。今はこの少女に笑顔を、幸せを与えることだけを考えよう。将来のことはその後だ。

「若、朝食にしましょうか？今日から軍の指揮を執らなくてはいけないのでしょうか？」

愛斗は漣の言葉でそのことを思い出した。

全軍の指揮権を僕が持っている。この重く、大きな責務は愛斗に託されている期待を表していた。

「軍の指揮・・・僕が・・・」

「若！今は朝食にしましょう。それからのことは後で考えましょう」  
愛斗は頷いた。今は笑顔で朝食をとろう。それがいい。愛斗は暗い考えを頭から追い出し、食卓へと向かった。

朝食を終えた愛斗はきちんとした正装をし、漣とリリーと一緒に玄關を出た。出掛けにリリーは愛斗の二の腕をギュッと握って、ある事を言ってきた。

「ねえ、愛斗さん。一つお願いしてもいいですか？」

突然の言葉に愛斗は戸惑った。それでも笑顔で聞き返す。

「いいよ。何でも言ってごらん」

リリーは愛斗に綺麗な銀のロケットを突き出した。

「平和な世界を創って欲しいです。私のためだけでなく、全ての人のために・・・」

愛斗はそのロケットを受け取り、首にかけた。

「約束しよう。絶対に、その願いだけは僕の命と引き換えてでも叶えて見せるよ」

「約束ですよ」

リリーの首にかかっている金のロケットが輝く。

「ああ、リリーが元気になった頃にはそうなっているよ」

愛斗はリリーを抱き締めた。その目には決意が浮かんでいた。

「全戦線において敵との交戦が確認出来ました。ご指示を」  
髭を生やした副司令官が愛斗を促す。愛斗は画面に映された戦場の様子を見た。

「第七機甲大隊を三百メートル進めよう。白金山山腹の対地砲台、装填せよ。合図で発砲だ」

愛斗の鋭い指示を無線通信士が司令部から三キロほど前方にある戦線に伝える。朝からこの作業の繰り返しだ。

画面の自軍に敵軍が衝突した。それに合わせて通信が入ってくる。  
「こちら第七機甲大隊、敵軍との交戦を開始しましたが、敵は見たことも無い兵器を・・・うわあ！」

途絶えた通信機に向かって副司令官が叫んだ。

「どうした！応答しろ！」

代わりに通信機から聞こえてきたのは第七機甲大隊副隊長の声だった。

「隊長は戦死しました！それよりも敵の新兵器です！人型で、銃を構えています。このままでは・・・」

通信が又もや途切れた。富嶽が通信機に向かい、怒鳴った。

「おい！答えろ！」

しかし、既に通信は途絶えていた。画面には壊滅寸前の第七機甲大隊の影のみが映っている。

愛斗は何も喋らなかった。いや、喋れなかった。人型の兵器、愛斗にはその覚えがあつたからだ。

「E M A・・・もう実戦投入の段階まで・・・？」

愛斗は椅子に座り直し、大声で叫んだ。

「後方支援の第四、三機甲大隊を前線投入しよう。まだ未経験の敵だ。何としても一機鹵獲するんだ」

その指示で再び前線が動いた。二つの機甲大隊が敵陣を囲む様にして動き出した。

愛斗の命令で前線投入された第四機甲大隊の参謀長、厭海星は炎上している戦車から飛び降りたところだった。

「参謀長！敵に今だ損害はありません。こうなれば突入を！」

地面に伏せていた海星に副参謀が声を張り上げた。

「分かっている！くそつ、俺が一番正面のを鹵獲する。援護してくれ！」

海星は副参謀にそれだけ叫ぶと、正面のE M Aに向かって走り出した。

気付いた敵のE M Aも腕に構えた大口径の機関砲を撃った。海星は上手く身を隠しながら近づいていく。最初の岩陰に身を隠したと同時に、無反動砲や戦車の砲弾が飛んできた。砲弾はE M Aの直ぐ前に着弾し、爆音と共に土煙を巻き上げた。

「今だ！」

海星は短く叫ぶと、岩陰から走り出してE M Aの足元へ潜り込んだ。

「畜生！ハッチは何処だ！」

海星はE M Aによじ登り、入り口を探し始めた。背部の装甲を手探りで調べると、小さな窪みを発見した。

「これか？」

海星は窪みに指をかけ、思い切り押してみた。が、開かない。

「なら引いてみるか」

海星は窪みに手をかけ思い切り引っ張った。ハッチは呆気なく開き、海星が覗いた時にはパイロットが呆然とこちらを見ていた。先に我に返ったのは海星だった。

「うおらっ！」

海星の拳がパイロットの顔面で炸裂した。パイロットは鼻から血を噴き出し、気絶した。海星がその体をハッチから外に放り出した。

「これが通信機か？」

海星はE M Aの計器を弄り始めた。小さなレバーを倒すと、画面にS O U N D O N R Yの文字が浮かび上がった。次に周波数を味方に合わせた。

「こちら海星だ。一機の鹵獲に成功した。帰還する」

「了解、司令部より撤退命令が出た。そのまま三十キロ後退せよ」  
「了解」

海星は慣れない操縦桿を握り、撤退を開始した。

番外編〜World War? ? ? (後書き)

次回も番外編です。しつこいっ！って言わないで下さいね？

番外編〜World War?〜(前書き)

しつこい番外編をお楽しみください。ではどうぞ〜

## 番外編 World War ？ ？

本来、陸戦で勝敗を決するのは戦略だ。しかし、時代は進んだ。

愛斗は超一流の策士だ。その周りの士官も一級の策士な筈だ。しかしその戦略を打ち破るほどの脅威が現れたのは日本にとって、最大の痛手となった。

E M A、それは世界最強の汎用人型戦闘兵器。そしてその戦力は一機で戦車中隊一個分に匹敵した。その分隊規模の攻撃を受けた日本軍は呆気ない敗北を迎えた。

指揮官の半分を失い、北部戦線は壊滅した。四国、九州は占領され、関西、中国も。北では北海道が、更には東北をも圧倒的な戦力で占領していった。

日本軍は東京を中心とした首都圏に防衛線を張り、敵を迎え撃つために民間人をも刃として前線に送り込んだ。

日本軍の残された希望、それは一機の鹵獲したE M Aにあるのだ。つた。

愛斗は前線全てを統括する東京の大本営の倉庫に置かれたE M Aを眺めていた。

夜も遅く、心配した澪が毛布を持って倉庫に入ってきた。

「若、もう夜も遅いです。御体がお冷えにならぬようにこれをどうぞ」

澪は毛布を愛斗の肩に優しく掛けた。愛斗は振り返り、口を開いた。

「澪、リリーはどうしたかな？」

「もうお休みになりました。若ももうお休みになられてはどうですか？仕事は私が片付けておきます」

愛斗は肩の毛布を引きあげると、脇のパイプ椅子に腰を下ろした。「機体番号一 三零。正式名称はアディウス。これが敵の新兵器だ

よ」

愛斗は傍らの資料を拾い上げ、読み上げた。澪はそのE M Aに近寄り、右手でE M Aの脚に触れた。ひんやりとした鋼鉄の感触が澪の腕に伝わった。

「僕は明日、これで出撃するつもりだ。もし、もしもだけど僕が戻ってこなかったらリリーにこれを」

愛斗は澪に一枚の封筒を手渡した。澪はそれを受け取り、愛斗を見つめた。

「若、あまり無理はなさらないで下さい。自分だけ責任を負う必要は無いのですから」

「もちろん。死に行くつもりは無いよ。でも・・・もし・・・」

愛斗は立ち上がり、倉庫の扉へと向かい、歩き出した。

「その時はリリーを頼む。後、悪いけど残りの書類整理を頼むよ」

扉の向こうの闇へと消えていった愛斗の後姿を見つめた澪は、拳を握り締め、ぎゅっと歯を噛み締めた。

翌日、愛斗は旗艦に乗り、前線に向かっていた。司令室は何時になく緊張感に包まれ、言葉も少なかった。愛斗は立派の詠えた玉座に座り、モニターを無表情で見つめていた。

「これから作戦を開始する。全軍は僕の指示に従って行動してくれ」

愛斗はそう言い、司令室の扉へと向かって、歩き出した。

「殿下、何処へ？」

愛斗は一度立ち止まり、一言言った。

「出撃する。指揮官が前線に出て指揮を執らなくては士気は上がらないからね」

そう言った愛斗の目には大きな決意の色が浮かんでいた。

愛斗は旗艦の格納庫に収納してあるE M A、アディウスのコックピットに乗り込み、システムを起動した。

「オペレーター、システム起動開始だ。マニュアルを」

「了解、オペレーターマニュアルを送信します」

数秒の間を空けて、モニターにマニュアルが映る。愛斗はざっと読み流し、頷いた。

「よし、分かった。PHPBウェポンM（高出力機動推進システム）起動。

各種兵装を確認した後、第三格納庫より出撃する。ハッチを開いてくれ」

「了解。オペレーター、ハッチを開きます」

愛斗は前方のハッチが開いたのを確認し、コックピット右手のモニターの画面にタッチした。直ぐに画面に装備の詳細が映った。

「主武装はパルスライフル二丁にスラッシュソードが二本。副武装サブは両腕部内蔵型軽機関銃、自動ホーミングミサイルが八発。補助兵装サブとして可動変形ワイヤーが両肩。中々じゃないか」

愛斗は一気にスロットルを押し倒した。脚部のスピナーが高速回転し、アディウスは勢いよく、開いたハッチから飛び出した。

「補助用ブースターを機動。着地する」

飛行は出来ないため、ブースターのジェット噴射で滑空しながら着地するしかない。アディウスは噴煙を巻き上げて地面に降り立った。

「中々の性能だね。オペレーター、敵の位置を」

「了解、右端の画面に転送致します」

愛斗が右端の画面を見つめた。画面に戦場の様子が事細かに映し出される。

「次に戦場の地形データをお送りします。宜しいですか？」

「いや、いい。これで十分だ」

愛斗は操縦桿を握り、スピナーを動かした。アディウスはスケーターの様な動きで森の木々を避けながら進んでいく。

愛斗は戦場の簡略図を見て、マイクに向かって指示を出した。「第七砲台、装填、射撃準備だ。標準は今から座標を入力する。僕が指示を出したら撃つてくれ」

アディウスは見晴らしのいい高台に立った。実際の戦場と画面を

見比べる。愛斗は静かに通信をオンにした。

「第七中隊は三百メートル後退だ。そのまま森に誘い込め。場所はこちらで指定する。第五中隊は東へ五百メートル進め。高台がある筈だ。そこで装填し、射撃準備だ。森で爆煙が巻き上がったら一斉射撃だ」

愛斗は操縦桿を再び握りなおし、森に向かった。そのままワイヤーで木の上に上る。

「いいぞ。第七小隊、俺の機影の下を通れ」

アディウスがパルスライフルを構える。直ぐに味方の戦車が自分の下を通ったのを確認し、画面を見る。後ろ三十メートルに敵の中队規模の一団がいるのを確認した。

「今だ」

愛斗はパルスライフルを後方に向け乱射した。自分のレーダーから敵影が消える。アディウスがワイヤーで地面に降り立つ。前方の敵がブレーキを掛けて止まった。

「貴様は？」

「お前たちに名乗る名は無い」

アディウスはパルスライフルを構え、最前列の二機を破壊した。後ろに控えていた敵がスラッシュソードを構え、突撃してくる。

アディウスはそれを素早い動きで避け、一機をすれ違い様に切り裂いた。続いてミサイルで敵二機を爆破した。

「馬鹿な！何故、奴らがE M Aを！」

隊長機の内部で中隊長が声を張り上げた。他の隊員がそれに答える。

「恐らく先日の戦闘で鹵獲されたE M Aかと思われますが・・・」

「しかしあのスペックは・・・いや、パイロットの問題なのか？どちらにせよ脅威だ。撃墜せよ」

「了解」  
イエス

残存しているE M Aが全機、アディウスに襲い掛かる。愛斗はコ

ツクピットの中で叫んだ。

「邪魔をするな！」

アディウスは構えたスラッシュソードで次々と敵を粉碎していく。ある機体は二つに裂かれ、ある機体は貫かれた。

「このワイヤーは武器としても使えるな」

愛斗はワイヤーを敵機に向かって射出した。そのワイヤーの先端が敵の腕部を切り落とした。凄まじい戦闘力で敵を撃墜していく。

「何故だ？何故、勝てない！」

完全に逆上した敵士官がコックピットの中で叫んだ。

「隊長！後ろ！」

無線から聞こえた声に振り返ると、後ろにはアディウスが睨んでいた。

「何時の間に！？」

隊長が操縦桿を握ったと同時に、アディウスがミサイルで隊長機を吹っ飛ばした。爆煙の中、アディウスは魔王の様に立ち尽くしていた。

「オペレーター、これより敵艦に突入する」

愛斗には作戦があった。このE M Aごと、敵艦に突入し、自爆する作戦だ。もちろん愛斗は寸前で脱出する。

アディウスは地面を猛スピードで走っていく。敵の旗艦を確認すると、そのままブースターで敵の司令室に一直線で突撃をかけた。

「何だ？突入してくるぞ！」

司令官が叫んだ。司令室の士官達は突然現れたE M Aに見とれていた。

「いけ！」

アディウスから愛斗の叫び声が聞こえた。司令室のガラスを突き破り、アディウスが現れた。

「うわっ！」

司令室の士官達は勢いで怯んだ。それと同時に愛斗は脱出ポッド

で飛び出した。

その数秒後、司令室の士官を巻き込んで、旗艦は大爆発を起こした。愛斗は近くに落ちた脱出ポッドから這いずり出て、無線機に向かつて叫んだ。

「敵艦は爆破した。他の戦況は？」

「はい、残念ながら勝利したのはこのみです。他の戦闘では圧倒的な戦力差の前に撤退を開始しました。殿下もお早く撤退を」

愛斗は舌打ちした。所詮、ここで勝ったとしてもそれは小さな勝利にしか過ぎなかった。

愛斗は脱出ポッドに設置してあったスクーターにまたがり、東京方面へと撤退を開始した。

そして、この戦いこそが唯一の勝ち戦だったのだ。

番外編 } World War ? } } (後書き)

次回で番外編は終わりの予定です。  
ご意見・ご感想をお待ちしております。

番外編 } W o r l d W a r ? } (前書き)

いよいよ番外編も終了です。次回からは本編に戻ります。

## 番外編 World War ？ ？

東京大本営。その司令室には愛斗と漣、すっかり眠ってしまったリリーとその他の司令官が暗い顔をして、座っていた。

それもそのはず、三日前に起こった戦いで、愛斗が直接指揮を執った戦い以外は全面敗北という結末を迎えていたからだ。敵は東京を包囲する形で陣をとっており、敗北は時間の問題だった。

「やはり全面降伏か・・・」

副司令官の富嶽が呟く。しかし他の司令官の答えは違った。

「何を言う！降伏は無い！例え全国民の血を払ってでも戦線を継続すべきだ！」

両者の意見が食い違つ中、愛斗は溜息をついた。

「みんな。今は仲間で争っている場合じゃ無いだろう。敵は何時攻撃を仕掛けてくるか分からないんだ」

愛斗が口論をしている司令官たちに向けて言った。司令官たちも下を見て、項垂れた。

「今は落ち着こう。話はそれからだ・・・」

愛斗がそこまで言った時、突然指令室の扉が勢いよく開かれた。

「注進！敵が攻撃を開始しました！もう直ぐここにも・・・」

しかし、そこで言葉は途切れた。突然の爆音と共に、司令室の壁と天井が吹っ飛んだ。熱い炎が巻き上がり、数人の司令官を飲み込んだ。

「うわああ！」

断末魔の叫びをあげ、司令官が炎の中に倒れこむ。周りの被害を受けなかった司令官も我に返り、消火活動を始めた。

傍で泣き声が聞こえる。どうやらリリーが目を覚ましたらしい。

「愛斗さん！怖い！」

「分かってる！」

愛斗は漣の膝からリリーを抱き上げ、そして抱き締めた。

「大丈夫だよ。僕が付いてる」

漣は一番近くの消火器を使い、火を消していた。

「若！リリーさんを連れてお逃げください！」

「でも！漣は！」

漣は消火器を放り投げ、愛斗に近づいた。そして胸の懐中時計を愛斗に握らせた。

「これを私だと思って下さい。さあ、早くお逃げください！」

愛斗はしばらくそれを見つめていたが、決心したように頷いた。

「分かった・・・漣、さようなら・・・」

愛斗はそう呟き、笑顔を見せた。それからリリーを抱え、司令室を飛び出した。

大本営のあちらこちらで火災が発生していて、外からは銃声も聞こえる。愛斗は泣きじゃくるリリーを負ったまま、何とか外に出ることが出来た。

そして、その直後に大本営のあちこちで爆発が起きた。恐らく、武器庫の火薬に引火したのだろう。

正面の大通りではE M Aとの銃撃戦が始まっている。上空には無数の戦艦。

愛斗は構わず、地下室の扉を開いた。そこにリリーを押し込む。

その後に愛斗自身も地下に潜り込んだ。それと同時に轟音が響いた。敵の空爆が始まったようだ。

愛斗はリリーを必死に抱き締め、只震えていた。

数時間は経っただろうか・・・。

辺りは静まり返り、銃声は聞こえない。

愛斗は眠ってしまったっているリリーを背中に乗せ、ゆっくりと地下室の扉を開いた。

地上にほ広がっていたのは、夕暮れの陽に照らされている瓦礫と廃墟だった。

背後の大本営は焼け落ち、鉄筋の骨組みだけとなっている。塀は

崩れ落ち、その向こうには惨めなビルの残骸が横たわっている。

「これが・・・東京？」

完全な焼け野原となった東京を目の当たりにし、愛斗は呆然と呟いた。

大通りに出ると、そこには家を失い、家族を失った者達が瓦礫に腰を掛け、俯いている。皆が皆、絶望に満ちた表情をしている。

中には瓦礫を必死に掘りながら、愛しい家族の名前を呼んでいる者もいた。しかし、愛斗はそんなことを気に掛ける余裕は無かった。愛斗がリリーを背負って歩いていくと、近くの瓦礫の上に置いてあるラジオから音声が流れているのを見つけた。

愛斗はラジオの音量を上げた。どうやらラジオのニュースが放送しているようだ。

生気の無い男性の声がラジオから引つ切り無しに流れている。

「本日、皇国軍の攻撃により、首都東京は陥落。大本営は全面降伏を発表しました。しかし、今だストライダム皇国より亡命したヨハン皇太子の行方は分かっておりません。恐らく、大本営と運命を共にしたというのが大方の見解です。繰り返します・・・」

愛斗はその放送を聞いて、少し安堵の溜息をついた。自分の生死が不明な以上、追手は来ないだろう。何時まで隠れていられるかは分からないが・・・。

愛斗はリリーを瓦礫の上に寝かせ、自分は折れた鉄塔によじ登った。

辺りを見回すと、あちこちで遺体を焼却している炎と煙が見えた。愛斗は怒りの表情を目に浮かべ、鉄塔から飛び降り、リリーを抱き締めた。

「見てろ・・・俺は・・・復讐してやる・・・ストライダムを叩き潰してやる・・・」

愛斗の呟きには言いようの無い怒りが含まれていた。

傍らのラジオからは悲しげに国歌が流れていた。

番外編 World War ? ? (後書き)

次回予告

自暴自棄になっていた愛斗を襲った仲間からの裏切り。

その窮地から愛斗を救ったのは、最高の部下であり親友のアルヴィだった。

アルヴィの死で愛斗は再び自分の使命を悟り、行動を開始する。

次回四十一話「アルヴィの故郷」お楽しみに

## 四十一話 アルヴィの故郷（前書き）

やっと本編復帰です。

ここからが最終章突入、といったところですかね？

## 四十一話 アルヴィの故郷

朝日の中、一機のストライクパニッシャーが柊空港に向かっていった。

コックピットには愛斗が座り、その膝にはアルヴィが横たわっていた。その顔はとても穏やかで寝ているようだ。

柊空港には大型の戦艦が一隻停泊していた。近づくストライクパニッシャーに初めに気付いたのは渚だった。

「あれは敵かしら？」

その時、通信が入った。

「聞こえているか？愛斗だ。急いで出発準備だ」

「愛くん？良かった・・・遅いから心配したわ。後はアルヴィ君だけね」

愛斗は膝の上のアルヴィを見た。

「アルヴィも乗っている」

「そうなの？なら出発ね」

着陸した機体から愛斗が出て来た。腕にはアルヴィが抱きかかえられて足邸内いる。

「愛くん？アルヴィ君はどうしたの？」

愛斗は顔を上げた。

「アルヴィは死んだ。俺に大切な事を気付かせてくれたんだ。自分の命を呈して」

渚は愛斗の顔を見て、悟ったのかそれ以上は聞いてこなかった。

今、アルヴィの遺体は戦艦の船艇倉庫にある部屋に寝かされている。愛斗はアルヴィの傍らですっと見守っていた。

「アルヴィ、お前は立派だ。死して尚、このようにして皆に尊敬されているんだ」

アルヴィからの返事は無いが、愛斗は更に語りかけた。

「お前は俺に忘れていた事を思い出させてくれた。そうだった、俺はまだ死ぬ訳にはいかない。まだ誰とも約束を果たしていない。い  
いかアルヴィ、空の上からよく見てろ。俺は必ず約束を守ってみせ  
るからな」

「愛くん？」

愛斗が振り返るとそこには渚がいた。

「どうした？」

「目的地は何処か聞いてなかったから・・・」

「スイスだ。スイス連邦王国に向かえ」

「何故？」

愛斗はアルヴィを見た。

「アルヴィの故郷はスイスだ。そこに埋葬してやりたい」

「分かったわ。直ぐに向かうわ」

渚は次にアルヴィの遺体の脇に立った。

「綺麗な顔ね。寝ているだけみたい・・・」

「そうだ。アルヴィは最期まで笑顔だったんだ」

愛斗は渚にアルヴィとの事を全て語った。会話の一語一語全てを。  
聞き終わった渚の目には涙が光っていた。

「アルヴィ君は頑張ったのね」

「そうだ。ここまで素晴らしい人間を俺は初めて見た」

渚は涙を拭った。

「私は司令室に戻るわ。愛くんは？」

「俺は着くまでアルヴィの傍にいてやりたいんだ」

渚は頷き、戻っていった。

愛斗は只、アルヴィの顔を見つめていた。

スイス連邦王国、ストライダム皇国領に孤島の様に存在する中立  
国。その国は規模こそ小さいが世界有数のE M A 大国である。

愛斗はアルヴィの遺体を抱きかかえながら戦艦から降り立った。

正面には武装兵に警護された男がいる。

「ようこそ我がスイス連邦王国へ。歓迎いたします。陛下」

愛斗も頷き、握手を交わした。

「急だが葬儀の準備をしてくれ。この国出身の勇士の葬儀を行いたい」

「もちろんでございます。至急、用意致します」

その夜、愛斗はアルプスの麓に全員を集め、葬儀を行った。アルヴィの遺体が全員の前に運び出され、皆が最後の別れを惜しんでいた。

最初にアルヴィに触れたのはロランだった。

「アルヴィ・・・お前は頑張ったんだ・・・俺はお前の友達だった事を誇りに思っぜ」

「アルヴィ君、ありがとうね。そしてさようなら」

渚の目から落ちた涙がアルヴィの頬に落ちた。

愛斗が全員の前に出た。

「我らの誇るべき存在であるアルヴィ・ラーファエルは帝国のため、そして自分の意思を残しこの世を去った。しかし！我らはまだここに生きている。ならする事は一つだ。まだ戦いは終わっていない」

愛斗は左腕を高らかに挙げた。

「アルヴィの遺体を火葬にする。全員、黙祷」

全員が静まり返り、黙祷を行った。

アルヴィの棺に火が点けられた。アルヴィの棺が燃え盛る炎に包まれていくのを見て、ロランが泣き崩れる。

「畜生・・・アルヴィ・・・」

ロランは足元の草を握り締め、震えている。

愛斗は全員に叫んだ。

「堅苦しい儀式は終わりで。アルヴィは皆が笑う事を望んでいる。これより祝宴を行う」

歓声が沸き、料理が運び込まれた。

「長旅で疲れているのだろう」

スイス連邦王国の給仕が酒を注ぎ始めた。

愛斗は祝宴から抜け、E M Aで山の中腹に広がる草原に降り立った。そのまま座り込み、麓の祝宴を眺めていた。

「何をしてるの？」

渚がいる。E M Aでついできたようだ。

「少し疲れた。休ませてくれ」

渚は愛斗の横に座った。

「愛くん、リリーちゃんの事は・・・」

「もういい、リリーは死んだんだ。俺は前に進む。もう後戻りなんて出来ないんだ」

渚は夜空を見上げた。

「愛くんはこれからどうするの？」

「俺は約束を果たす。リリーの怪我を治して、学校に通わせて、笑顔をプレゼントする約束は果たせなかったがまだ最後の約束なら果たせる」

「最後の約束？」

愛斗は渚にある事を耳打ちした。

「分かったわ。頑張りましょう。まず何から始めるの？」

愛斗は決意を込めた目を輝かせた。その目に以前の戸惑いは無い。

「日本に戻る。まだ物語はこれからが第二章だ」

## 四十一話 アルヴィの故郷（後書き）

### 次回予告

新世代とは何か？

秀人のスピッツオブファイアが改良されて帰ってきた。

そしてついに盲目のリリーが<sup>で</sup>出撃する！？

次回「新世代E M A」お楽しみに

番外編に出て来たキャラの紹介を更新にします。

## 四十二話 新世代E M A

「これが僕の・・・？」

秀人は呆けた様に目の前のE M Aを眺めている。

「そうだ。これは君の物だ」

目の前にあったのはスピッツオブファイアと同じ容姿をしたE M Aだ。ヴィルフリートが自慢げに語った。

「正式名称スピッツオブヴァーニング。君のスピッツオブファイアを進化させた新形態だ。性能は従来の二倍、武装も追加した。もちろん紫電にだって遅れを取らない」

ヴィルフリートは咳払いをし、呟いた。

「まあ、紫電が壊れてしまった今、この機体は我が国最高峰の機体だ。戦場ではほぼ無敵と言っても過言ではないぞ」

秀人は紫電の機体を思い浮かべた。黒い悪魔、この表現は自分で考えた。正にピッタリだと思う。

「愛斗・・・本当に死んだんですかね？」

「報告では機体ごと撃墜、炎上しその後に残骸を回収したらしいが遺体までは確認出来ていない」

「愛斗はしぶとい奴ですよ」

ヴィルフリートは声を上げて笑った。

「流石は我が一族、血が繋がっているだけの事はあるな」

秀人は少し頂垂れた。

「笑い事では無いです。以前も死んだと思い込み、それであの大惨事が起きたんですから」

「副都心の件か？」

「はい、僕は大事な女性ひとを失ったんです」

ヴィルフリートはふと思いついたように声を上げた。

「そつえばあの子はどうした？ヨハンが保護していた少女だ」

「リリーの事ですか？今は部屋で寝ていると思います」

「そうか。無理強いはしないが出来たら起こしてくれないか？見せたいE M Aがある」

「例の試作機ニョータイプの事ですか？」

「ヴィルフリートが頷く。」

「そうだ。今までに無い新型だ」

「分かりました。起こしてきます」

「秀人は一礼し、走り去っていった。」

「殿下」

「何だ、フェリクス」

「いえ、あの少女を試作機に乗せるつもりで？」

「そうだ。何か問題があるか？」

「彼女は盲目です。どう操縦をしろと？」

「ヴィルフリートは不敵な笑みを浮かべ、フェリクスを見た。」

「それは見てのお楽しみだ」

「フェリクスは頭を深く下げた。」

「御意」

悲しみに暮れるリリーは深い眠りに落ちていた。そして何時ものように夢を見る。

リリーは夢の中で豪華な寝室のベッドに座っていた。中性ヨーロツパの古城にあるようなベッドだ。

「愛斗・・・さん？」

心細くなり、愛斗の名前を呼ぶとドアが開いた。入ってきたのは愛斗だった。

「愛斗さん？良かった・・・生きていたんですね」

「リリーはこれが夢だと知っている。でも言わずにはいられない。」

「リリー、俺はもう二度とお前を一人にはしない」

「唐突な愛斗の呟きにリリーは涙を押さえ切れなかった。」

「愛斗さん！」

「リリーはベッドに近づいた愛斗に抱きつき、思い切り泣いた。」

「私、ずっと逢いたくて……でも逢いに来てくれなくて……心配して……」

押さえ切れない言葉が次々と溢れてくる。愛斗はリリーの頭を優しく撫でた。

「ありがとうリリー」

愛斗はリリーから離れると、手を優しく握った。

「お前はもう一人で生きていける。自分の道は自分で決めて、その道を真っ直ぐに歩め」

愛斗はリリーから離れていく。

「待って下さい！私を置いていかないで！」

その時、愛斗とリリーの間の床が割れ、二人は引き裂かれた。

「待って！」

愛斗の姿は闇へと消えていった。

「はっ！」

リリーは悪夢から目を覚ました。全身から汗が吹き出て、寝巻きはぐしょぐしょに濡れている。

「またこの夢……愛斗さん……何故、何度も出てくるんですか？」

その質問に答える者はいない。声だけが虚しく響いた。リリーはその場に泣き崩れた。

「愛斗さん……どうして先に逝ってしまったんですか？私はまだ一人でなんとか生きていけないんです」

リリーの部屋のドアがノックされた。

「愛斗さん？」

「いや、秀人だよ」

「どうぞ」

秀人がドアを開けて入ってきた。

「また泣いていたの？あの夢を見たの？」

リリーは泣きじゃくりながら頷いた。

「愛斗は確かに死んだかもしれない。でもリリーは生きている。ならこの無益な争いを早く終わらせる事こそ今僕らに出来るせめても愛斗への報いじゃないか？」

「そうですね・・・私がやらないと駄目なんですよね？」

秀人は頷いた。

「リリーに意思があるなら。さあ、殿下が呼びだ。早く行こう」  
リリーは頷いた。

「今、着替えを取るよ。待ってて」

着替えを済ましたリリーを車椅子に乗せて秀人は格納庫に行った。巨大な格納庫にはヴィルフリートとその副参謀のフェリクスが待っていた。

目の前にあるのは青と赤を基調としたEMAだ。

「殿下、これは？」

「これが試作機だ。機体名はオプティック、新型装備と新機能を兼ね備えた新世代のEMAだ」

「新機能？」

秀人が尋ねた。

「そう、光学迷彩により姿を消す事が出来る。相手から見ればいきなり消えたように見える訳だ」

「そんな事が可能なんですか？」

「可能だ。この試作機にはリリー殿に乗ってもらっ」

秀人は目を丸くした。

「無理です！リリーは目が見えないんですよ！」

フェリクスがヘルメットを取り出した。

「これが操縦の際に装着するヘルメットです。これで外部の情報を直接脳に伝え、視神経に電気信号を送り脳内に映像を映し出すのです。操縦に関してはマニュアルを」

「でもリリーの意思もあります」

秀人はリリーを見た。

「私、やります」

「リリー、本当に？」

「はい、愛斗さんが出来た事なら私にも出来ます」

ヴィルフリートは満足そうに頷いた。

「よし、では決まりだ」

その時、警報が響いた。機械音声が政庁府の司令室に流れた。

「非常事態、東湾湾岸コンビナート倉庫街に敵影を確認、戦闘員は現場へ急行せよ！繰り返す・・・」

ヴィルフリートは警報を聞き、手を上に掲げた。

「リリー殿、早速出撃だ。秀人卿、ジェラルド卿、カミーユ卿と共に出撃せよ」

「了解」

秀人はリリーを残し、二人を呼びに行った。

## 四十二話 新世代E M A（後書き）

### 次回予告

時を経て、再び愛斗は日本に戻ってきた。

秀人と愛斗、彼らが戦う先にあるものとは？

そして予想外の敵が愛斗を阻む。

次回四十三話「光学迷彩の罠」お楽しみに

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 四十三話 光学迷彩の罠

リリー出撃の数時間前。

愛斗は東京湾に進入し、コンビナートに戦艦を停泊させていた。

愛斗は渚を連れ、格納庫に向かう。

「愛くん、見せたいものって？」

「お前のE M Aだ。新しい物がいいだろう？」

どうやら愛斗は渚のE M Aを用意したようだ。愛斗が船内の格納庫の扉を開けた。すると中には青と白を基調としたE M Aが保管されていた。

「愛くん、これの事？」

「そうだ。機体名はスパイラルリーフアंक。アルヴィが乗るはずだった機体だ。今日からこれはお前の物だ」

渚はスパイラルリーフアंकを見つめた。まるで搭乗者を待っているかの様な雰囲気が出ている。

「ありがとう、愛くん。大切にするわ」

愛斗も頷いた。

「大切にやってくれ。俺の命を助けてくれた機体だ」

思えば俺の周りからは不思議と仲間が減っていくな、愛斗はふとそう思った。渚は思い出したように言った。

「愛くん、紫電はどうしたの？」

「紫電はまた壊れたしまったからな。新しい紫電が出来るまで普通の機体に乗る」

「ロラン君のも作り直したのよね？」

愛斗は書類をポツケから出し、少し捲った。

「ロランには飛び切りのをプレゼントしてやった。それに新しい量産機もある」

「新しい？例のやつ？」

「そうだ、正式名称は秋水<sup>しゅうすい</sup>。この戦争で初の実戦投入だ」

渚が微笑む。

「楽しみね」

「ああ、ストライクパニッシャーを凌駕する量産機だからな」

東京政庁府の一室では二人の男が言い争いを繰り広げていた。

「井崎！何故閣下を裏切ったのだ！」

「裏切った？始めから利用されていただけだ！」

海星はあの日に別の場所に居たため直接は巻き込まれなかったが、それが仇となり取り残されたのだった。

「閣下が？そんな訳が無い！」

「しかし、事実だ」

海星は悔しそうに井崎を睨んだ。

「今、お前に出来る事は旧愛斗派を押さえつける事だけだ」

井崎はそれきり会話を打ち切り、部屋を出て行った。

「総員、配置につきました。閣下、ご指示を」

ここは東湾コンビナート倉庫街。愛斗は通信の声を聞き、次の指示を出す。

「分かった。そのまま待機だ。敵を確認できたら指示を出す」

「了解」

愛斗の乗る秋水指揮官機は倉庫と倉庫の間の路地に隠れていた。隣には渚のスパイラルリーフアークが護衛としてついている。

「撫子、お前はそこで待機だ。指示が出るまで動くな」

「分かった」

すぐさま次の通信が入る。

「こちらP-1。敵警備部隊との交戦を開始しました」

「了解したP-1。戦闘を継続せよ」

愛斗のリーダーに次々と敵影が映った。

「敵は網に入った。P-3からP-5、上空を敵が通過する。  
軽機  
関銃で仕留めろ」

愛斗はリーダー上の敵影が消えるのを見て、不敵な笑みを浮かべた。

「いいぞ。N - 5からN - 8、壁際を敵が通過する。仕留めておけ」「了解」

「よし、P - 10からP - 15は屋根に登れ。敵は地上を通過する、息の根を止めろ」

愛斗は的確な指示を出していく。リーダーからは敵の反応が消えていく。

「どうした！ 応答しろ！」

ジェラルドが叫んだ。

「どうした、ジェラルド？」

「前線の味方がどんどんやられている。何があっただ？」

秀人はリーダーを確認した。

「本当だな。それより僕はリリーが気になるな。単独任務なんて・・・大丈夫かな？」

「心配しなくても良いと思うわ」

カミーユがぼそりと呟いた。

「そうかな？」

「そうだが、ほら、もう下で戦闘中だ。行くぞ！」

「暇な任務だぜ。指示を待つて待ち伏せなんて・・・」

「田中、文句言つなよ。俺だって暇なんだぜ？」

「村本、お前が言つな」

二人は暇な任務で痺れを切らしていた。その時だった。

「ん？ 背後に何か映ったぞ？ あ、消えた」

田中のぼやきに村本が反応した。

「俺のには映ってないぞ。うわっ！」

村本の秋水が突然爆発した。田中が振り向くとそこには半透明のEMAが居た。

「うわぁ！」

サブマシンガン

田中は軽機関銃を撃とうとした。しかしその瞬間、何かが腹部を貫き、田中の秋水は爆発した。

「撃墜しました」

「よくやった。リリー」

マイクからはヴィルフリートの声が聞こえた。

「次の戦闘を開始します」

「ん？どうした、P - 6、P - 7？応答せよ！」

愛斗のリーダーから突然反応が消えた。サポートの渚も確認する。

「駄目よ、愛くん。二機とも同時にブレイクしたわ」

「何故だ？リーダーには何も反応は無いが・・・」

愛斗は少し画面を見つめたが何も映っていない。

「まあいい。P - 8、P - 9、エリア3に向かい敵を確認しろ」

「了解」

しかし、十秒後にはその二機との反応が途絶えた。

「何だ？何がいる？」

愛斗は無理やり自分を落ち着かせ、指示を出した。

「第二小隊、エリア3に向かえ。正体不明の敵がいる。見つけ出して破壊せよ」

リーダー上の幾つもの点がエリア3に向かう。先頭がブレイクした。

「応答せよ！」

「こちら、N - 4！分かりません！見えないんです！透明になって・・・」

「愛くん！N - 4、N - 6がブレイク！」

程なくして第二小隊は全機ブレイクした。愛斗は悪寒を感じた。

「透明？新型なのか・・・」

しかしそんなE M Aが存在するのだろうか・・・もしかしたら・・・

。。

「撫子、エリア3に向かえ！お前の紫電模倣型プロトタイプならいけるかもしれない」

「分かった。直ぐに向かおう」

撫子の紫電模倣型プロトタイプ、通称「紫電参式」は基調カラーを紫としたEMAだ。紫電にこそ性能は劣るが、敵もそう簡単には行かないだろう。

「あそこだな」

紫電参式は倉庫の脇に着地した。脚のローラーを使い、移動する。愛斗、敵を確認したぞ」

倉庫の前の空き地、赤と青のEMAが立ち止まっている。

「目標を確認した。撃破するが問題ないな？」

「ああ、構わない」

紫電参式はプラズマライフルを構えた。その時、目の前のEMAが消えた。

「何？」

紫電参式は殺気を感じ、後ろに盾を翳した。盾は引き裂かれた。何時の間に？」

撫子が呟くと、半透明になった。

「これでは狙いが・・・」

紫電参式に衝撃が走り、後ろに吹き飛ぶ。何とか態勢を立て直したが、動きが速すぎる。

「これが試作機？」

紫電参式は重機関銃ヘビーマシンガンを乱射するが全て避けられる。

「駄目だ・・・当たらない」

紫電参式はロストシューターを射出した。狙いは正確だった。しかし、試作機オプティックは突如姿を消した。レーダーにも反応は無い。

「何処に？」

背部に衝撃が走る。それと同時に可愛らしい少女の声が響いた。  
「氷結！」  
プリザード

紫電参式の腹部を冷たい何かが貫いた。

「そういうことか・・・」

撫子は刹那の反応でレバーを倒した。脱出ポッドが射出され、機体は爆発した。

「撫子！返事をしろ！」

「愛くん！紫電参式もブレイク！」

愛斗は舌打ちをした。分が悪い。愛斗はレーダーを確認した。高出力の機影が三機現れる。

「渚、聖霊騎士団だ！お前が相手をしてくれ！俺がその間に部隊を撤退させる！」

「分かったわ愛くん」

スパイラルリーフアークは飛び立っていった。

「撫子、聞こえているな？」

「ああ」

「お前のいる位置から西へ向かえ。秋水があるはずだ。それに乗って渚の援護に行け」

「分かった。それと謎の敵の事だがかなり手強いぞ。お前にとっては最悪の敵かもしれない」

愛斗はそれで通信を打ち切ったが疑問は残る。

「俺にとつて？」

「秀人、ありや敵の大将クラスだぜ！」

秀人は海の方角から向かってくるEMAを確認した。

「あれは・・・リーフアークか？」

秀人には見覚えがあった。アルヴィの愛機だ。アルヴィがいるのだろうか？

「ジェラルド！油断するな！」

秀人はリーファンクの恐ろしさを知っていた。それ故の忠告であったがジェラルドはそれを無視し、肩の部分の電磁ロストシューターを射出した。スパイラルリーファンはそれを受け止め、握りつぶした。

「あれ？予想外・・・」

秀人は舌打ちし、スピッツオブヴァーニングで敵を仕留めに向かった。スピッツオブヴァーニングの一閃が炸裂し、スパイラルリーファンを襲う。しかし、華麗なナイトランスの動きで弾かれてしまった。

「以前とは形態も性能も格段に上がっている・・・」

秀人はブローニングソードを構え直し、鋭い突きを繰り出した。スパイラルリーファンの胴体部分を掠り、火花が散る。

「秀人君、やはり違うわね」

ナイトランスがスピッツオブヴァーニングのプラズマシールドに食い込む。

「これは・・・あの時の・・・」

以前のプラズマブレイクブレイドと同じ原理だ。特殊加工装備という訳だ。

「おりゃ！」

気の抜けた声と同時にキンソードが振り下ろされ、スパイラルリーファンを掠めた。電流が走る。

「隙だ！」

スピッツオブヴァーニングのブローニングソードが胸部に突き刺さる。

「しまった・・・！」

スパイラルリーファンは直ぐにブローニングソードを掴み、引き離れた。

「やはり新世代型か？」

秀人が呟く。今のパワーといい、機動性といい、桁外れだ。後ろから一機のEMAが現れた

「撫子さん！？どうしてここに？」

「愛斗から援護任務を頼まれた」

秋水は重機関銃でヴァジユラを狙い撃った。

「そう来なくっちゃ！」

ジェラルドはそれを避けつつ、キリンソードを秋水に振り下ろした。

「油断しすぎだ」

秋水の斬撃刀に一閃がヴァジユラを掠めた。

「アブね！でも勝負はまだこれからだぜ！」

「全軍に撤退命令を下す！」

愛斗がそう言った時、後ろから青い閃光の一閃。振り向くと青と赤のE M A、オブティックが屋根の上に立っていた。

「あれが・・・指揮官機？」

「そうだ。あれを撃墜しろ」

ヴィルフリートの声が響く。

「分かりました。不可視領域発動！」  
インボッシブルエリア

愛斗の目の前でオブティックが消えた。

「こいつか！」

愛斗の秋水が重機関銃を空中に乱射した。

「そこだ！」

秋水は機関銃を投げ捨て、斬撃刀に切り替えた。それを宙で振る、見事にオブティックの胴体を掠めた。

「何で軌道が？」

愛斗は不敵な笑みを浮かべた。

「企業秘密だ！」

しかし、秋水の後ろに回りこんだオブティックは秋水を蹴り飛ばした。

「マシンスペックでは勝てないな・・・なら！」

愛斗の両目が輝く。

「敵のスピードが格段に上がりました」

「リリー、落ち着け。敵は量産機だ」

秋水は量産機とは思えぬ動きでオプティックに蹴りを叩き込んだ。  
「痛い！」

遠慮無く秋水がロストシューターを射出する。その時、再びオプティックが消えた。

「またか」

秋水は上に飛び上がり、カラスモークを発射した。

「これなら見えないはず・・・」

だがオプティックは迷うことなく愛斗の秋水の下へとたどり着いた。

「何故だ？肉眼では確認できないはず・・・そうか！」

恐らく奴は視覚に頼った操縦をしていない。煙の中から出て来たオプティックの一閃を秋水はもろに受けた。機体に亀裂が入る。

「俺の負けだ」

愛斗はレバーを倒し、脱出した。そして無線を渚に繋ぐ。

「渚、撤退だ。出直すぞ」

「分かったわ」

スパイラルリーフアークと秋水は夜空へと消えて行った。秀人は退却した後の空をしばし眺めていた。最後に通信に渚の声が聞こえた。

「じゃあね、秀人君。また逢いましょう」

## 四十三話 光学迷彩の罠（後書き）

### 次回予告

悪夢は始まった。

再び皇国に攻撃を開始した愛斗の前に今、最凶の敵が立ちふさがる。  
愛斗とリリー、二人の絆は引き裂かれてしまうのか？

次回四十四話「最悪の再会」お楽しみに

#### 四十四話 最悪の再会（前書き）

そろそろクライマックス突入ですかね？

え？誰も期待していないって？まあごもつともですね。

## 四十四話 最悪の再会

「酷い目に遭ったな・・・最悪だ」

撫子が不機嫌な顔で呟く。倉庫街の戦闘で謎の試作機に大敗した愛斗の軍は傷ついた仲間を助けながら集合地点へと向かった。

「撫子さん、もう少しで集合場所ですから文句は後でにして下さい」  
疲れ切った兵士達が集まったところで愛斗は咳払いをした。

「諸君、前に戦闘はご苦労だった。お陰様でいい情報が集まった」  
兵士達が静まり返る。

「まず俺の指揮のミスを謝罪しよう。予想外の出来事だった。戦死者八名、負傷者十名の損害、しかしこれは我らが手に入れた情報と比べれば安い物だろう」

「閣下、それより手に入れた情報とやらを」

愛斗は手でその声を抑制した。

「焦るな。まず大打撃を我々に与えた新型機の情報を手に入れた。奴は光学迷彩により姿を消す事が出来る。その間はレーダーにも映らない完璧なステルス機能もついている」

「それは無敵という事ではないのですか？」

愛斗は首を振った。

「いや、秋水で俺は奴に蹴りを入れた。透明でもダメージは与えられるという訳だ」

「でも量産機じゃどうしようも無いんですよね」

「ロランがゆつくりと歩いてきた。」

「ロラン、戻ってきたか。紫電はどうした？」

「ロランは新しい紫電を運ぶために戦闘には参加していなかったのだ。」

「ばっちり運んできましたよ。カリィヌも一緒です」

「そうか。ではお披露目といこうか」

ロランが笑顔で頷く。

「分かりました。でも隊長、この戦争は厳しくないですか？」

「何故だ」

「こっちは向こうと違って戦力不足ですよ。海星さんは行方不明でカノンさんとアルヴィはこの世にいない。主力が欠けてますね」

愛斗は少し考え込んだ。

「お前の言うとおりだ。そのために紫電がある」

「そうですね。俺の新EMAもあるですし、何とかありますよね」

愛斗はロランの肩を強く叩いた。

「その意気だ。油断するな」

「了解」

すると撫子が手を叩きながら間に入ってきた。

「男の友情よりも早く新しい紫電を見せろ。皆、呆れているぞ」

愛斗が兵士を見ると、全員が間の抜けた顔でこちらを見ている。

愛斗は気を取り直すように咳払いをした。

「では見せるとしよう。カバーを上げる！」

ロランがカバーを引っ張った。中には黒い悪魔が悠然と立っていた。

「おお！・・・で、何か変わりました？」

確かに何時もと変わらぬ紫電だ。愛斗が脚を叩きながら説明した。

「この紫電はスイス連邦が開発した新機能である高出力飛翔翼を六枚取り付けた。これにより機体性能は従来の紫電の十倍近くの機動

性を手に入れた訳だ。プラズマシールドに代わり、エアウイングと

同じ種類のエネルギーシールドを全身に任意で展開出来る。その他

にもスイス連邦開発の新兵器も搭載してある最強のEMAだ。これ

の正式名称は「紫電夜刀神零零式」だ」

「長いな・・・」

撫子のどうでもいいツツコミに全員が頷いた。

「まあ、その分の性能は持ち合わせている訳だ」

愛斗は懐から一つのボタンを取り出した。それを押す。

「それは？」

渚の質問に愛斗が答えた。

「これは仕掛けた爆薬の起爆スイッチだ。今ごろは政庁府を中心とする地域で大騒ぎだな」

ロランが笑みを浮かべた。

「その隙に攻撃を仕掛ける訳ですか？」

「そうだ。だが俺は別行動をとる。新型機を誘き出して始末するために……」

愛斗は一息いれて叫んだ。

「分かったら行動開始だ！」

政庁府に帰還した秀人達は惨劇を目にした。政庁府の回りの市街地や高層ビルが崩れ、炎上していたからだ。

「秀人！これはどういうことだ？」

「分からない！でも敵の仕業だという事は分かる！」

秀人はヴィルフリートの回線に繋いだ。

「殿下、これはどういう事ですか？」

「秀人卿、敵襲だ。奴らはこのエリアの地下に爆薬を仕掛けて壊滅させた。敵影がこちらに向かってきている。そこで迎え撃て」

秀人は少し腑に落ちないが頷いた。

「了解、ジェラルドにも伝えます」

「聞こえてるぜ。迎え撃てばいいんだな？」

秀人は頷いた。

「殿下、リリーは？」

「彼女はオプティックで敵を迎え撃っている。援護してやってくれ」  
「了解」

リリーはオプティックのコックピットで素朴な疑問を抱いていた。

「私は……人を殺した……？それでは愛斗さんと同じ？」

「リリー、これは平和のためだ。目を瞑れ」

「でも、私は……」

「これは命令だ」

リリーは仕方なく頷き、敵の追撃を開始した。

その時、オプティックの前に一機のE M Aが降り立った。そのE M Aは見事な六枚翼を広げた。

「ヴィルフリート様？未確認E M Aです」

「分かった。情報を送れ」

直ぐにデータがリリーの脳内に送られてきた。

「紫電？愛斗さんの？」

「解析の結果はな。しかし紫電などオプティックの敵では無い。撃墜しろ」

「分かりました」

オプティックは<sup>インボツシブルエリア</sup>不可視領域を発動し、姿を消した。

「またか・・・小賢しいな」

紫電は全身からミサイルを発射した。

「燻り出してやる」

愛斗が目を凝らすと、ミサイルが空中で爆発した。

「そこだ！」

紫電は二刀流の構えで迫った。

「えっ??」

リリーが呆気にとられた。速い・・・速すぎる・・・スピードに追いつかない。

オプティックは<sup>ブリザードモメント</sup>瞬間氷結砲を紫電に撃ち込むが全て避けられた。

「ヴィルフリート様？駄目です。勝てません」

「バカを言うな！オプティックで勝てぬ相手などいない！」

「しかし・・・！」

気がつくと後ろに回り込まれていた。鋭い二刀流の一閃でオプティックの胴体にひびが入った。

「嫌！死にたくない！」

リリーは死の恐怖で操縦桿から手を離してしまった。脱出レバーを倒す。

「逃げたか・・・」

その時、撫子からの通信が入った。

「どうだ、愛斗？」

「撃墜した。呆気なかったな」

「殺したのか？」

愛斗はため息をついた。

「いや、逃げられた」

「そうか・・・なあ、お前は誰が乗っていたのか気にならないのか？」

愛斗もはつと気付く。

「確かに気になるな。誰だか知っているのか？」

撫子は皮肉の籠った声で言った。

「リリー・ケンプフェルだと言ったらどうする？」

「何？本当か？」

撫子が頷く。

「ああ、先ほどの戦闘で気付いていた」

「何だと？何故先に言わなかった！」

愛斗は遂、怒鳴ってしまった。

愛斗の心の中に一つの希望が芽生え、その喜びに飲まれそうになる。

「リリーが・・・生きている？」

「そうだ。今ごろは脱出して政庁府に向かっているだろう。奪還するならそこが狙い目だ」

愛斗は何時もとは違う笑みを浮かべた。安堵の笑みだった。

「そうか・・・礼を言うぞ」

紫電は方向を変え、政庁府の方角へと向かった。

## 四十四話 最悪の再会（後書き）

### 次回予告

遂に愛斗の前に敵として姿を現したリリー。

しかし愛斗はリリーを救出すべく、単独で政庁府に乗り込む。  
二人の絆はまだそこにあるのか？

次回四十五話「リリー奪還作戦」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

四十五話 リリー奪還作戦（前書き）

目が疲れる・・・でも負けませんよ。  
何故なら自己満足を得たいから・・・

## 四十五話 リリー奪還作戦

紫電は六枚翼を靡かせて政庁府へと向かっていた。

「リリー、待つてろ！俺が助け出してやる！」

愛斗の紫電はかなりの速度で進んでいたが政庁府まではまだ遠い。

政庁府周辺では激戦が巻き起こっていた。ジェラルドはその様子を見て感想を呟いた。

「この戦闘の激しさは首都包囲戦以上だな・・・」

ジェラルドのヴァジュラの前に一機のE M A、いやE M Aと呼ぶには巨大すぎるE M Aが飛んでいた。

「あれは？」

「俺はロランだ。久しぶりだな、ジェラルドさん」

「ロランか・・・次に会う時は戦場だと言っていたが本当だったな」

ジェラルドが突然、電磁ロストシューターを射出した。ヴァジュラは電磁兵器をメインとした兵装を装備している。  
サイバネティック・ウェポン

「そんな攻撃など！」

ロランのE M A、ベディウェアは紫電の三倍という大きさで形状も人型では無く、六角形の本体の両脇に四本ずつのアームが付いている。

「それがE M Aか？」

「そうだ。新型のE M Aは一味違うぞ！」

電磁ロストシューターは命中したが、ダメージは無いようだ。

「装甲の堅さだけは認めてやるか」

ヴァジュラはキリンソードを抜き、斬りかかった。ベディウェアは八本のアームからロストシューターを射出し、それを絡め取った。  
「機動性で勝負だ！」

ジェラルドは叫び、それを振りほどき、再び斬りつけた。今度は命中したが何かに弾かれた。

「シールドか？」

「その通り！常にプラズマシールドを展開可能だ！」

ジェラルドは遠慮なく攻撃を叩き込んでいく。

「数で勝負だ」

ヴァジュラの電磁系統の攻撃は次第に強さを増していく。

「少し不利だな・・・」

ロランは左端のボタンを押した。追加攻撃を叩き込もうとしたヴァジュラの目の前でベディウエアは形を変えていく。そして人型の通常形態になった。

「これがベディウエアの新機能、二コーシシステム ヒューマノイドモード人型戦闘型だ！」

機動性を増したベディウエアは両手でスラッシュソードを構え、ヴァジュラを斬りつけた。ヴァジュラもキリンソードで受け止める。

お互いに火花が散り、再び散る。

「これが可動変形型か！人型の機動力が半端ねえな！」  
トランスフォーメーションタイプ

ベディウエアはミサイルを発射した。ヴァジュラに何発かが被弾する。

「うわっ！当たった」

「隙あり！」

ベディウエアが止めの一撃を繰り出そうとしたが、寸での所で弾かれた。

「くそっ！後、少しだったのに」

ロランが悪態をつく、ヴァジュラは構えを変えた。両手を重ねたのだ。

「何だ？」

「これが最終兵器！荷電粒子砲発射！」

重ねられた両手が光り、閃光が飛んだ。

「おっと！」

ベディウエアはそれをギリギリ避けた。

「このモードじゃ不利だな」

再び、先ほどの形態になり始めた。

インベリアルモード  
「城塞形態に可動変形！」

二発目の荷電粒子砲は受けきった。ベディウエアは再び、大量のミサイルを撃ち込む。ミサイルの弾幕がヴァジュラを襲う。ヴァジュラがミサイルに気を取られている隙に伸びてきた八本のロストシューターがヴァジュラを絡め取った。

「しまった！」

そのまま引き寄せられ、固定された。

「これで終わりだな」

ジェラルドが覚悟を決め、目を閉じた。その時だった。

「どけ！」

後ろから大剣の一閃を受けたベディウエアは回避行動に移った。

「何だよ……」

現れたのは……。

「団長！」

団長のライヒアルトのヴァンガードだった。ヴァンガードはベディウエアと睨みあった。

「誰だか知らないけど邪魔するなよ」

ロランが嫌味たらしく文句を言うが、敵の反応は冷やかだった。

「私は聖霊騎士団団長、ライヒアルト・イエブラムだ。若僧よ」

「俺はロラン・ギヌメールだ。覚えとけよ」

ベディウエアは不意にロストシューターを六本射出した。ヴァンガードは大剣、コルタナでそれを受け止める。

「予想通りだ」

ベディウエアは残りのロストシューターを射出、脚を絡め取った。

「それがどうした？」

ヴァンガードはコルタナを振るい、全てをなぎ払った。

「へえ、中々」

「次はこちらからだ！」

ヴァンガードの鋭い動きで後ろに回りこまれた。ベディウエアはコルタナの一撃で吹っ飛ぶ。ベディウエアはくると球体のよう

に回転しながら態勢を立て直した。

トランスフォーム  
「可動変形！」

ベディウェアは再び変形し、人型になった。

「ロラン、聞こえているか？」

愛斗の声が無線から聞こえた。

「何ですか、隊長！」

「お前たちは政庁府に近づく敵を妨害しろ。俺は政庁府に侵入する」

「分かりました」

ベディウェアはヴァンガードに向き直る。

「団長さん、残念ながら急用だ。また今度」

「待て！逃げられると思ったか！」

ベディウェアは再び姿を変え始めた。

「これは・・・戦闘機？」

「そうだ。これがベディウェアの第参形態、メサイアモード超飛行形態だ」

戦闘機形態になったベディウェアは超高速で飛び去っていった。

「逃げられたか・・・」

政庁府の司令室によると這って来たのはリリーだった。

「ヴィルフリート様、御免なさい・・・失敗しました・・・」

ヴィルフリートは冷たい目でリリーを見下ろした。

「役立たずが・・・」

リリーは耳を疑った。

「え？」

「折角、チャンスをやったのに・・・目も見えない、体の不自由なお前を使ってやったと言うのに・・・」

「御免なさい！」

リリーは必死に謝った。ヴィルフリートはリリーを起こすと、椅子に座らせた。

「まあいい、お前にはもう一仕事してもらっ。いいな？」

「はい。挽回してみせます」

ヴィルフリートは司令室の全員を退室させた。残ったのはリリーとヴィルフリート、フェリクスだけだ。

「お前はその椅子に座れ」

ヴィルフリートはフェリクスに命じて、リリーを奥の司令官席に座らせた。

「次は何をすれば？」

「待てばいい。そこに座っている」

ヴィルフリートはそう言うと、フェリクスと共に司令室を出て行った。蛻の殻の司令室にはリリーのみが取り残された。

司令室を出た二人は脱出艇へと向かった。フェリクスが後ろを振り返る。

「殿下も人が悪い。要するに囷、ですよ？」

「そうだ。澁坂愛斗を誘き出してもらおう。奴は必ずここに来るだろう。来たところを・・・」

ヴィルフリートはスイッチを取り出した。

「この政庁府ごと葬る、ですか・・・」

「そうだ。相変わらず勘がいい」

「ありがとうございます」

二人は脱出艇に乗り込み、地下道に向かった。

愛斗の紫電は漸く政庁府へと到着した。

「愛くん！私達が敵を押さえるわ。その内にリリーちゃんを！」

「分かっている！」

紫電は政庁府の壁に加粒子砲を撃ち込み、大穴を開けた。そこから入り込む。

「待っている！リリー！」

愛斗は紫電から飛び降り、リリーの下へと向かった。

「邪魔だぜ！」

ロランのベディウエア飛行形態はミサイルと素早い動きで敵機を  
どんどん撃墜していく。

戦況は圧倒的に愛斗側が有利だった。

「殿下！リリーは？」

脱出艇に通信が入った。

「秀人卿、リリー殿は司令室にいる。彼女には囿になってもらうの  
だ」

「何？そんな事はさせません！」

秀人はスピッツオブヴァーニングの出力を上げ、政庁府へと向か  
った。

リリーは司令室の席に座り、静かに待っていた。囿にされている  
とも知らずに……。

ふと、扉が開く音が聞こえた。

「ヴィルフリート様？」

「俺が誰だか分からないのか？」

リリーはその声に聞き覚えがあつた。優しい声、暖かい手。

「愛斗さんですか？」

「そうだ。さあ、俺と一緒に来るんだ」

リリーは服の裾をぎゅっと握った。

「残念ですけどご一緒出来ません」

「何故だ？」

リリーは決心したように大きな声で言った。

「私は愛斗さんが居なくても大丈夫です！」

愛斗は立ち止まった。

「私は……愛斗さんのやり方は間違っていると思うのです。愛斗  
さんが貫こうとしている意志は素晴らしいかもしれませんが。目指し  
ている事も凄いと思います。でも……」

リリーは叫んだ。

「その為に・・・人を・・・誰かの大切な人を奪い、自分の意見だけを押し通す！力で全てを捻じ伏せる！それは間違っています！」

愛斗の顔が曇った。

「しかし、お前は苦しんできた。学校にも行けずに・・・だから俺はお前の為に・・・」

「嬉しくありません！私一人の為に多くの血が、涙が流れました。それは愛斗さんの罪でもあり、私の罪でもあります」

愛斗は下を向き、頂垂れた。

「（リリーの意思は固い・・・説得するのは無理か・・・それなら無理やりにでも）」

しかし、愛斗はその考えを頭から叩き出した。駄目だ、リリーを無理やり連れて行くのはリリーの意味に反する。それでは意味が無い。しかし・・・。愛斗は決意を決めた。

「リリー、俺と一緒に来い。これは命令だ」

愛斗は更にリリーに近づいた。

「来ないで下さい！」

リリーは懷から拳銃を取り出し、愛斗に銃口を向けた。しかし、

愛斗は止まらない。

「お前に俺を討てるのか？」

愛斗も拳銃を取り出した。

「来ないで！」

リリーは引き金を引いた。弾丸は愛斗の頬を掠めた。愛斗は予想外の出来事に尻餅をついた。愛斗は混乱していた。

「お前が・・・俺を撃った？」

「はい、これは脅しではありません」

愛斗は舌打ちをした。どうする？

リリーの拳銃を撃ち落すか？いや、リリーに向けて銃を撃つなど出来る筈が無い。

その時、無線が入った。

「愛くん！秀人君がそつちに・・・」

渚の言葉が終わらない内にスピッツオブヴァーニングが壁を壊して入ってきた。愛斗は立ち上がり、リリーに向かって走り出した。

「リリー！俺と一緒に来い！」

「リリー、助けに来たぞ！」

秀人との声が重なる。リリーも叫んだ。

「秀人さん！助けて！」

「なっ！」

愛斗は転んだ。その隙にスピッツオブヴァーニングがリリーの脇に降り立った。そしてハッチが開く。中から秀人が出て来た。

「リリー、こっちだ」

秀人はリリーを抱え、ハッチに飛び乗った。同時にスピッツオブヴァーニングが浮かび上がった。

「待て・・・リリー・・・」

愛斗は呆然とその様子を見ていた。スピッツオブヴァーニングが完全に見えなくなった時、愛斗は漸く我に返った。

「リリー！待っている！俺が必ずお前を連れ戻す！」

その時、通信が入った。

「愛くん！政府府が自爆するわ！急いで逃げて！」

「分かった・・・」

愛斗は夢遊病者のような足取りで紫電へと向かった。

## 四十五話 リリー奪還作戦（後書き）

### 次回予告

リリーを囚にしたヴィルフリートに疑心を抱く秀人。  
そして諦めようとはしない愛斗。

ヴィルフリートの目的は何なのか？

次回四十六話「秀人とリリー」お楽しみに  
ご意見・感想お願いします。

## 四十六話 リリーと秀人（前書き）

突然ですが、猫って可愛いですね。いや、本当に。  
という事で、四十六話です。

## 四十六話 リリーと秀人

崩れていく天井、柱が次々と割れていく。

愛斗は紫電に乗り込むと直ぐに発進させた。夜空が見えたと同時に政庁府は轟音と共に崩れ去った。

「愛くん！」

渚のスパイラルリーフアークが紫電に近づいてきた。

「大丈夫？」

紫電は幽霊船のような飛び方をしていた。ふらふらと危なっかしく、今にも落ちそうである。

「大丈夫ではないな……」

「何があったの？」

愛斗は俯きながら話し始めた。

「リリーはもうリリーでは無い。俺は捨てられた……俺は……」  
渚はため息をついた。愛斗はリリー絡みの事となると大げさになるのだ。

「愛くん、諦めちゃ駄目よ。リリーちゃんだって愛くんの事が好き  
なはずよ。もう一度頑張りましょう」

「分かった……」

何とも生気の無い返事だったが渚はこの話を打ち切った。

東京郊外、飛行場には一隻の巨大戦艦が停泊していた。戦艦の周辺では兵士が馬車馬のように駆け回っている。

首都を奪われた皇国軍は日本からの撤退を余儀なくされ、全面撤退を開始していた。

そんな飛行場に一機のEMAが着陸した。秀人のスピッツオブヴァーニングだ。秀人はリリーを抱きかかえ、滑走路に降り立った。

「おい、ジェラルド」

「何だ、ってリリー？」

「ジェラルド、車椅子を頼む」

ジェラルドは頷き、急いで車椅子を持ってきた。秀人はリリーを車椅子に乗せた。リリーはボーっとしている。

「どうしたの？」

「いえ、秀人さんと愛斗さんが一瞬重なったように見えました。あ、何でも無いです」

秀人はリリーの顔を真っ直ぐに見た。

「リリー、別に僕についてくることは無かったんだよ。愛斗の方に行きたければ言っても良いし」

リリーは首を横に振った。

「いいんです。愛斗さんは好きですけど今は昔とは違いますから」

「そうかな？愛斗は昔から何一つ変わってないと思うよ。リリーに一途でリリーの為なら何でもする。全く変わってないんじゃないかな？」

リリーはそれを言われて少し顔を赤くした。

「おい秀人、ラブコメってないで行くぞ」

「そうだね」

秀人は車椅子を押しながらタラップを上ろうとした。その時、百メートルほど向こうにヴィルフリートの姿を見つけた。

「ジェラルド、リリーを頼む」

「別にいいけど・・・どうかしたか？」

秀人はジェラルドに返事を返さずにヴィルフリートの下へ向かった。

「殿下、素晴らしい戦艦ですね」

フェリクスの感想にヴィルフリートが満足そうな表情を見せた。

「これはヨハンの置き土産だ。奴に感謝せねばな」

「確か名前はドレッドノートでしたっけ」  
ヴィルフリートが頷いた。

「殿下！」

ヴィルフリートが声の方向を見ると、秀人の姿があった。

「秀人卿、如何しましたか？」

フェリクスがヴィルフリート代わりに秀人に対応した。

「殿下、リリーを囚にした理由をお聞かせ下さい」

ヴィルフリートは薄い笑みを浮かべる。

「何、簡単な事だ。澪坂愛斗はリリー・ケンプフェルが居ると知れば直ぐに飛んでくるだろう。そこを利用しない手は無い」

「しかし、リリーの身が危険では？」

「構わない。戦略的な犠牲だ」

秀人はこのときヴィルフリートに疑念を抱いた。この男は初めからリリーを利用していたのでは？それとも・・・。

「それよりだ、秀人卿。リリー殿はわが国の反逆者、澪坂愛斗、いやヨハン・ストライダム的重要参考人として安全な地域に亡命してもらった。その為にドレッドノートを用意したのだ。君たち聖霊騎士団、ジェラルドとカミュー、そして君には護衛任務について貰う。いいな？」

「・・・分かりました」

ヴィルフリートはフェリクスを連れ、別の戦艦へと向かった。

「殿下はどちらへ？」

「私は一度AU（アフリカ連合）へ向かう。会合があるのでな」

秀人はその後姿を睨んでからジェラルドとカミューのところへと戻った。

ドレッドノートへと乗り込んでいく秀人を確認してからフェリクスが尋ねた。

「殿下、識神秀人は後々厄介かもしれませんな」

「心配はいらない。奴がヨハンを恨んでいる限り私に牙を剥く事は無い」

フェリクスは腑に落ちない顔だったが、これ以上質問することは無かった。



## 四十六話 リリーと秀人（後書き）

### 次回予告

リリーは俺が救い出す。

その言葉の通り、再び愛斗はリリーの奪還を試みる。

二人は昔の様に戻る事が出来るのか？

次回四十七話「ミッドウェー奇襲空戦」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などの報告もお願いします。

## 四十七話 ミッドウェー奇襲空戦（前書き）

バイオハザード4、見に行きました。

予告には裏切られました。アクションは中々で特に・・・おっと  
ネタばれするところでしたね。詳しくは劇場でどうぞ。

## 四十七話 ミッドウェー奇襲空戦

戦艦「長門」<sup>ながと</sup>、ドレッドノートを奪われた愛斗達にとって現在最大級の戦艦である。大きさはほぼドレッドノートと同じ、愛斗達は長門の会議室に全員を集めていた。

「全員、集まったな」

会議室には十二人の指揮官やエースパイロットが集まっている。

「リリー・ケンプフェルを乗せた戦艦ドレッドノートは太平洋を横断し、ハワイへと亡命中。そしてこれが進路だ」

愛斗がホワイトボードに広げた地図を全員が眺める。地図には赤い線が書き込まれている。

「この赤線がドレッドノートの進路、そして我々がリリーを奪還する為に奇襲をかける地点がここだ」

愛斗が太平洋上の群島を指差す。渚が地名を呟いた。

「ミッドウェー諸島？」

「その通り、ミッドウェー諸島を通過し、ハワイへ向かうとの情報だ。しかしこの奇襲は容易なものではない」

ロランがペン回しをしながら尋ねた。

「隊長、詳しく作戦内容をお願いします」

「うむ、まず奇襲兵力は十機だ」

全員の顔が驚きに包まれる。

「愛くん、少し無謀じゃない？」

「いや、第一にもし失敗した場合も考えると兵力の温存は必然だ。

第二に俺はドレッドノートの構造を知り尽くしている。俺の戦艦だからな。いいかよく聞け」

愛斗はドレッドノートの見取り図を地図の上に貼った。

「いいか、ドレッドノートには細かい隙間や入り組んだ通り道がある。そして幸運にもそこはE M A 一機が通れるスペースがある。この隙間を利用しない手はない。十機で奇襲を仕掛け、リリーを奪還

する。作戦内容は分かったな？」

全員が頷く。

「ではメンバーを決めよう。まずは俺だ。他は渚、ロラン、カリィ又、撫子……」

十人全員の名前を読み上げると愛斗は別の地図を広げた。

「ここに全員の配置が書かれている。よく覚えろ」

愛斗はそれを言うつと部屋を出て行った。格納庫で出撃準備という訳だ。

愛斗が紫電を整備していると、撫子がやって来た。手には一冊の本が握られている。

「愛斗、本当に出撃するのか？」

「ああ」

「しかし、リリーが拒めばどうするのだ？」

愛斗は即答した。

「その時は……」

拳銃を取り出す。

「やるしかない」

撫子は愛斗から目を逸らした。

「なあ、愛斗。お前はリリーを討つのか？」

「ああ、世界と人一人の鼎を問えば答えは一目瞭然だ」

そう言った時、愛斗の胸に鋭い痛みが走った。

「うっ！」

愛斗が胸を押さえて膝をつくつと、撫子が愛斗の額に手を当てた。

「漸く副作用が出たか……」

「何だ？副作用とは？」

「お前の力は使ったびに力が強まっていく。お前はまだ最後の力を使っていないだろう？」

「人を創り変える……この能力の事か？」

「そうだ。しかし、お前は作戦のために力を使っただろう？戦闘の  
時にも」

撫子は手に持っていた本を開いた。

「その代償が回ってきたんだ。お前はやがて憎しみに包まれる。そ  
んなお前の為にこの本を読んでやろう」

撫子はゆっくりと朗読し始めた。

”遙か昔、一人の少女がいました。その少女は思った事を具現化する  
力を持っていたのです。人々はその力を「碧眼」と呼び、敬いま  
した。”

”しかしある日、平和な世界にもう一人の能力者が現れました。そ  
のものは人を操り、記憶を消す能力を持っていたのです。人々はこ  
の能力者を悪魔の出来損ないと呼び、蔑みました。”

「それが俺か？」

しかし、撫子は無視して続けた。

”悪魔の出来損ないは世界を壊すために能力を使いました。「碧眼」  
の抵抗も空しく、世界は闇に包まれました。悪魔の出来損ないの力  
は強く、そして限りがありませんでした。”

そこまで読むと撫子は本を閉じた。

「ここまでがお前の歩んできた道だ。この先どういう道を歩むのか。  
それはこの本の続きに書いてある」

「なら早く読んでくれ」

しかし、撫子はいやらしい笑みを浮かべた。

「自分で確かめろ」

そう言うつと撫子は立ち去っていった。

「悪魔の出来損ない・・・か」

ドレッドノートの一室にリリーはいた。その部屋はホテルの高級ルームの様な飾りがあり、絵画があった。青空が一望出来る大窓があり、リリーは車椅子に座りながら空を眺めていた。するとドアが開く音がした。

「リリー？気分はどう？」

「はい、お陰様でいい気分です。快適ですよ」

秀人は優しい笑みのままりリーの肩に手を乗せた。

「君は僕が守るから安心して」

リリーは心の中が自然と温かくなった。

「ありがとうございます。私も秀人さんと一緒に・・・」

「相変わらずだな」

後ろから声が聞こえた。秀人が振り返るとそこに居たのはイヴオンだった。

「イヴオン！何でここに？」

「愚問だな。忍び込ませて貰ったぜ」

「いいのか？」

それは見つかったらかなりマズイ事だと思うが・・・。

その時、爆音が響いた。窓を見ると護衛のコルベット艦が炎を上げて落ちていくのが目に入った。直ぐに艦内放送が警報と共に響く。「非常警報発令。敵の攻撃を受けている。乗組員は直ぐに持ち場につけ。護衛の聖霊騎士団は出撃準備をせよ」

赤いランプが光り始めた。

「リリー、少し待っていて」

秀人は走って部屋を出た。廊下でジェラルドとすれ違う。

「秀人、敵襲だ。急ごうぜ」

「分かった」

二人は急ぎ足で司令室へと向かった。司令室にいたのはストライダム皇国のカスパル將軍だ。

「秀人卿、ジェラルド卿、カミーユ卿。君たちには出撃し、敵を撃墜して貰いたい」

「しかし、三機というのは無謀では？」

「案ずるな。敵はたかが十機だ。君たちなら余裕だろう？」

「秀人は少し不安だったが頷いた。ジェラルドがさかさ質問する。『プラスマシールドを展開すれば良いのでは？』」

「残念ながら敵はすでにシールドの防御範囲の内側に侵入してしまつておる。君たちだけが頼りだ」

カミーユが頷いた。

「分かった。直ぐに出撃するわ」

三人は急ぎ足で格納庫へ向かった。

「愛くん、聖霊騎士団が近づいてきたわ」

通信から渚の声が聞こえてきた。

「分かった。なるべく時間を稼いでくれ」

ドレッドノートの脇の通路を二機の秋水が走っていた。

「木戸！後ろだ！」

後ろの秋水が後ろを向くと同時に電磁ロストシューターが秋水を貫いた。続いて前の秋水も破壊される。

「秀人、二機始末したぜ」

「こつちも一機落とした。カミーユは？」

「二機よ」

愛斗の通信に渚の声が入ってきた。

「愛くん、五機がやられたわ」

「そうか、もう少し時間を稼いでくれ」

その頃、ロランのベディウエアは飛行形態になり、ドレッドノートの隙間を器用に飛んでいた。

「邪魔だぜ」

ミサイルがドレッドノートの砲塔を次々と破壊していく。背後に一機の機影が映った。

「何だ？」

ロランが首を傾げる。

「どうした？」

「いえ、隊長。このまま突っ切りますよ」

その時、後ろから発射された加粒子砲がベディウエアに当たった。

「うわ！隊長、戦闘不能です」

ベディウエアは下に落ちて行った。

「カミーユ、お前のガヘリスは凄いな。俺が苦戦した奴を一撃で葬ったんだな」

「飛行機なんかには負けないわ」

カミーユがぶっきらぼうに言った。

「俺も負けてられないな」

ジェラルドがスロットルを倒し、出力を上げた。ヴァジュラのスピードが上がる。

「敵発見！紫電みたいだな」

撫子は背後から追って来る一機の機体が目に入った。

「ヴァジュラか？厄介だな」

紫電参式はヴァジュラにミサイルを放った。

「邪魔だ！」

電磁ロストシューターが紫電参式を襲う。紫電参式は盾で防いだ。が衝撃で後ろによるめく。

「くっ！」

紫電参式もロストシューターを射出した。

「なあ、勝負は機体性能じゃ無い。腕なんだよ！」

ヴァジュラはそれを軽々と避け、キリンソードを振り下ろした。

紫電参式がブレイクする。

「私の負けだな・・・」

脱出ポッドが機体から飛び出た。続いて機体が爆発する。

「今だ！」

脱出ポッドが着地した付近の壁が開き、兵士が飛び出てきた。撫子が脱出ポッドから顔を出すと、銃口が一斉に向けられる。

「最神撫子さんですね。大人しく投降してください。指示に従えば手荒な真似はしません」

撫子はゆっくりと両手を頭上に上げた。

「分かった。降参しよう」

「愛くん！撫子さんが捕まったわ！」

「何だと？くそ！分かった。残りは？」

「後は愛くんと私とカリィヌさんだけよ」

渚がそう言っていると、通信からカリィヌの叫び声が聞こえた。

「渚！後ろよ！」

スパイラルリーファンクが後ろを向くとスピッツオブヴァーニングが見えた。

「秀人君！」

渚が叫ぶのと同時にスピッツオブヴァーニングのプラズマライフルの青い閃光が飛び出した。スパイラルリーファンクがプラズマシールドを展開した。

「駄目だ！それでは防げない！」

カリィヌの言うとおりに閃光はシールドを破壊し、スパイラルリーファンクの右腕を吹き飛ばした。

「やられたわ」

操縦不能に陥ったスパイラルリーフアークが落ちて行った。

「渚！」

カリィヌが叫んだが渚には届かない。カリィヌのハーヴィルスに衝撃が走った。ガヘリスのロストシュータに腕を串刺しにされていたのだ。

「油断した！」

続いてハーヴィルスの頭部をガヘリスががっしりと掴んだ。

「離せ！」

ハーヴィルスが小型のスラッシュソードで斬りつけるがびくともしない。

「終わりよ」

ガヘリスの加粒子砲がハーヴィルスの胸部を貫いた。脱出ポッドでカリィヌが脱出したが機体は碎け散って、爆発した。

「全滅か・・・」

愛斗が紫電の中で呟いた。司令室内でも將軍が叫んだ。

「聖靈騎士団、ご苦労だった。後は紫電だけだ。始末しろ」

「了解！」

ジェラルドが大声で叫んだ。先ほどの快勝で少しテンションが上がっているようだ。

ヴァジュラの前に紫電が現れた。美しい六枚翼を広げ、二刀流の構えを取っている。

「紫電！覚悟しろ！」

ヴァジュラが電磁ロストシューターを射出した。それを紫電が切り裂く。続いて紫電が六枚翼を棚引かせてヴァジュラを上下真つ二つにした。

「すまん、秀人。戦闘不能だ」

「私がやる」

ガヘリスが加粒子砲を撃ちながら接近した。紫電は全てを避けながら信じられないスピードで接近してくる。ガヘリスがミサイルを大量に放った。

「小賢しいな」

紫電の胸部が開き、白い閃光が大量のミサイルを一閃、全てが爆発した。爆煙を掻い潜り、紫電は上空に上がった。そしてガヘリスの顔面に強烈な蹴りを喰らわせ、叩き落した。

「二機目だ」

紫電の胸部が閉じたと同時に叫び声が聞こえた。

「愛斗！」

紫電が後ろを向くとスピッツオブヴァーニングのブローニングソードが振り下ろされた。紫電が二刀流でそれを受け止め、砕いた。

「秀人か、久しぶりだな」

紫電はスピッツオブヴァーニングを蹴り飛ばし、加粒子砲を撃った。スピッツオブヴァーニングはそれを予備のスラッシュソードで防いだ。溶けたソードを投げ捨て、プラズマガンに持ち構えた。

「秀人、リリーは何処だ？」

「お前に教える筋合いは無い！」

紫電はエネルギーカッターを連続発射し、スピッツオブヴァーニングの左腕を切り落とした。

「何！？」

紫電は遠慮せずに右脚を切り落とし、ドレッドノートの側壁に叩き付けた。

「お前では俺の紫電には勝てない」

愛斗はそれだけ言うと、船内に入り込んだ。

リリーの部屋ではイヴオンがバットを構えていた。  
「入ってきやがれ・・・」

ドアが開く。入ってきたのは愛斗だ。

「愛斗か？」

「そうだ。リリーに用がある」

イヴォンは再びバットを構えた。

「残念だけどよ。リリーは渡さない」

愛斗は冷たく頷いた。そしてイヴォンの腹を膝で蹴り上げた。イヴォンがうめいて倒れる。

リリーが愛斗を見た。

「リリー、お前・・・目が・・・」

「そうです。治療を受けました。まだ愛斗さんの顔は見えませんが、段々と光が戻って来たんです」

愛斗は悲しそうな顔をした。

「また一つ約束を守れなかったな」

「愛斗さん、私は愛斗さんには着いて行きません」

愛斗も頷く。

「その決意は固いのか？」

「はい、愛斗さんのした事は間違っていますから」

「なら、何が正しいのだ？リリー、お前はストライダム皇国の企みを知らないんだ」

リリーは表情を緩めた。

「私は・・・暴力を用いらずとも世界は変わります。ですから愛斗さん、私や秀人さんと仲間になって一緒に世界を変えていきませんか？」

リリーはそう言うと、愛斗に手を差し伸べた。

「リリー、お前は素晴らしい考えを持っている。しかし、それはこの世界では通用しないんだ」

愛斗は刀を抜き、リリーに近づいた。

「何をするつもりですか？」

「お前が俺に従わないのなら・・・」

愛斗は一息ついた。

「お前を討つ事になる」

愛斗はリリーの車椅子の前に立ち、刀を振り上げた。その時だった。

「リリー！」

ドアを勢いよく開けて、秀人が入ってきた。手に持っていたアサルトライフルを乱射する。

「くっ！」

愛斗は咄嗟に窓際に下がった。銃弾は窓を粉々に砕いた。部屋の物と一緒に愛斗が外に吹き飛ばされた。

「リリー、大丈夫？」

直ぐにリリーに駆け寄る秀人。

「大丈夫です」

割れた窓に巨大な黒いE M Aが見えた。その腕には愛斗が乗っている。紫電は遠隔操作が可能なのだ。

紫電が右手のプラズマガン構えた。もちろん狙いは二人だ。

「リリー、最後にもう一度聞く。俺について来い」

「断ります！」

威勢のいいリリーの声に愛斗の顔が暗くなった。

「そうか・・・」

秀人も叫ぶ。

「僕もだ！」

愛斗は構えを解いた。

「お前達の意味はそこまでなのか・・・分かった。諦めよう」

紫電はゆっくり方向を変え、飛び去っていった。

「リリー、いいの？愛斗はリリーのことを本当に心配で・・・」

「いいんです。愛斗さんはもう・・・心の中にしかいません」

イヴオンがゆっくりと起き上がった。

「あれ？愛斗は？」

イヴオンは窓際の秀人とリリーを見た。その時、イヴオンは秀人と愛斗が重なって見えた。



## 四十七話 ミッドウェー奇襲空戦（後書き）

### 次回予告

皇国に囚われた撫子。

ブリューナクの副作用により愛斗に告げられた突然の余命宣告。  
残された時間で愛斗は何が出来るのか？そして秀人の選択とは？  
次回四十八話「力の代償」お楽しみに

## 四十八話 力の代償（前書き）

ヤマトが映画化するらしいですね。  
多分、観にいきます。

## 四十八話 力の代償

ミッドウエーでの奇襲を受けたドレッドノートは無事に亡命先のハワイに到着した。飛行場に降り立った秀人の目に入ったのは元帝国宰相の井崎薫であった。

「井崎さん、どうしてここに？」

「先に到着したのだ。それより重要参考人は？」

秀人の後ろから車椅子に乗ったリリーが現れた。井崎がリリーの前に立ち、片膝をつく。

「リリー殿、我らへのご協力感謝致します。ではこちらへ」

井崎の後ろに立っていた兵士がリリーの車椅子を押していった。

「おお！リゾートだな！」

後ろで騒いでいるのはすっかり意気投合したイヴォンとジェラルドだ。今も二人でサーフィンの話をしている。カミューは何時も通りの格好で歩いている。

「言っとくけど、遊びに来た訳じゃ無いんだぞ」

秀人が二人に釘を刺す。

「少し位なら泳いでもいいだろ？」

尚も二人は遊ぶつもりだ。

「第一俺達のE M Aはぶっ壊れちまったんだからよ。任務も何も無いだろう？」

秀人達のE M Aは紫電に破壊されてしまった。今の秀人達は役立たずだ。

「確かに僕達は今は仕事が出来ないな」

秀人が呟いた。

「だろ？だからさ」。少し位なら」

「お前達！」

そのドスの利いた声に秀人達は肩を震わせた。

「団長！今のは軽い冗談で！」

「どうした？何か言ったのか？」

「いえ、聞いていないのならいいです」

ライヒアルトの周りにはシルヴェストルとナーシャが立っている。

「あんた達のE M Aは壊されたんでしょう？」

「まあ」

秀人が曖昧な返事をした。ライヒアルトが咳払いをして本題を切り出した。

「それよりだ。亡命したお前達には悪いのだが、日本は解放された」  
「は？」

秀人が気の抜けた声を出す。

「澁坂愛斗は日本を放棄し、また行方を暗ました」

「愛斗が？何か目的があつたんじゃない？」

ライヒアルトが頷く。

「ああ、試作機オプティックが奪われた。一部の物資も持ち去られたらしい。とにかく危険は去つたわけだ」

「じゃあ、俺達が逃げたわけは？」

「意味が無くなつたな」

二人は呆然とした。

「まあ、少しは休め。泳いで来てもいいぞ」

「そうこなくっちゃ！」

ジェラルドとイヴオンが海に向かって走り出した。

「え、待って！」

秀人も後を追うことにした。

「愛斗」

撫子が沈み込んでいる愛斗に声をかけた。

「お前は捕まつたんじゃない？」

「ああ、今の私は実体が存在しない。本体は敵に捕まっている。それより少しお前に聞きたいことがあつてな」

撫子の右手が光った。

「お前は自分に残された時間を知っているのか？」

愛斗は撫子を見た。

「どういうことだ？」

撫子は愛斗の額に手を当てる。

「力を大分使っているな。お前の命は後三ヶ月程だ」

「何？」

愛斗は素直に驚いた。

「詳しく説明しろ」

「ああ、お前の力は副作用があると言っただろう？胸の痛みがそれだ。そして力を使い続けると・・・」

「命を奪われると？」

撫子が頷く。

「その力は自分の命と引き換えに手に入れる物なんだ」

「そんなことをお前は俺に言っただか？」

撫子が本を開いた。

「いや、言っていない」

「なら聞こう。俺が力を令、手放せば命は助かるのか？」

「ああ」

撫子がさりとて言う。

「お前は力を手放すつもりは無いだろう？」

撫子はそう言うと言えていった。愛斗は一息ついて呟いた。

「ああ。後三ヶ月で出来る事をするだけだ」

愛斗は立ち上がり、ロランを呼んだ。

「全員を集める。出撃だ」

「護衛任務！？またですか？」

秀人とカミーユにその任務が言い渡されたのはハワイ到着直ぐのことだった。

「ああ、敵の捕虜を本国の帝都に護送して貰いたい」

ライヒアルトが書類を見ながら言った。

「分かった」

カミューが一つ返事を返す。

「・・・分かりました」

秀人も渋々頷いた。

「いいだろう。早速出発せよ」

撫子を護送中の戦艦は本国へと真っ直ぐに向かっていた。

撫子がいる部屋は捕虜とは思えないような豪華な部屋だった。小奇麗なベッドがあり、冷房が効いている。

「全く・・・慣れないな」

撫子が呟き、内線電話を手にした。

「おい、お前。識神秀人卿に面会を求める」

秀人は艦内を散歩していた。というかそれしかすることが無い。

「そうだ。撫子に愛斗の事を・・・」

秀人はあれから愛斗の言った「真の正義」を知りたければ俺のところに来い、と言う愛斗の言葉を思い出し、悩んでいた。愛斗の目的が知りたいのだ。

「撫子なら何か知っているかも・・・」

秀人はそう思い、撫子に逢いに行こうとした。その時。

「秀人卿。捕虜が面会を求めています」

グッドタイミングだ。

「分かったよ。直ぐに行く」

秀人は撫子の部屋へ向かった。部屋の前に着くと、ノックをして中に入った。

「入りますよ」

秀人が中に入ると、撫子がベッドに座っていた。

「識神秀人。クローディヌを愛斗に奪われ、復讐を誓った男か」

秀人は背中に悪寒が走るのを感じた。

「何故知っているんだ？」

「私に分からないことなど無い」

撫子の右手が輝く。秀人が単刀直入に切り出した。

「なあ、教えてくれ。愛斗の目的とは何だ？復讐だと聞いたがそれは本当か？」

撫子が笑みを浮かべた。

「一言で言えば嘘だな。あいつの目的は別にある」

「え？」

秀人が驚いた声を上げた。

「真の正義とは何か？それを知りたいのか？」

「そうだけど・・・」

「いいだろう。お前は正直だな。まずお前がすべき事は二つ。どちらを選択するもお前の自由だ」

秀人は頭を抱えた。

「二つの選択肢？」

「そうだ。一つはこのまま皇国騎士として愛斗と戦うか、二つは愛斗の仲間になり、正義を知るか・・・どちらを選択するもお前の自由だ」

秀人は言葉に詰まった。ヴィルフリートは信用できないのが本当の気持ちだ。いくら皇国のためとはいえ、リリーを囚にしようとしたのは事実だからだ。

「お前の選択で未来は、明日は変わる。愛斗の世界を選ぶか、ヴィルフリートの世界を選ぶか、または・・・」

撫子がベッドに横たわった。

「ストライダム皇帝、レオンハルトの世界を選ぶかだ」

秀人が首を傾げた。

「レオンハルトの世界？」

「ああ、お前が忠誠を誓う人物とは誰だ？何を約束して聖霊騎士団に入った？」

秀人はあの時の言葉を思い出す。

「僕が忠誠を誓ったのはエルネスト殿下・・・そして本国の皇帝陛下

下・・・！」

秀人が叫んだ。

「そうか！僕がヴィルフリートに忠誠を誓った覚えは無い！」

「そうだ。お前は今から丁度本国に帰る。その時、再び世界は変わるかも知れない。私が言いたいのはそれだけだ」

撫子はそう言つと、寝息を立て始めた。

「ありがとう」

秀人は礼を言い、部屋を出た。秀人の意思は固まっていた。

## 四十八話 力の代償（後書き）

### 次回予告

レオンハルトが望む世界。それを聞くために秀人は玉座へと向かう。  
しかし、そこに愛斗が現れる。ブリューナクの融合とは？  
今、ここにレオンハルトと愛斗が対峙する。その時世界は？  
次回四十九話「ブリューナクの融合」お楽しみに

## 四十九話　ブリューナクの融合

秀人が帝都ハーゲンブルグに到着したのは撫子との会話から三日後の事だった。秀人は直ぐにカミーユと共にバイエルン宮殿に向かった。

「止まれ！」

門の前で衛兵に呼び止められる。

「聖霊騎士団、識神秀人だ」

「同じく、カミーユ・ドルゴポロフ」

衛兵がバッジを確認した。

「入城を許可しよう」

衛兵が大きな門を開けた。

「カミーユ、君が忠誠を誓ったのは誰だい？」

秀人が隣のカミーユに尋ねた。

「そんな人は存在しないわ。私は自分のために騎士団に入った。主に忠誠を誓った覚えは無い」

「そうか・・・」

秀人は呟いた。

宮殿の玉座の間は一番奥にある。玉座の間の扉の前に立ち、片膝をつく。

「聖霊騎士団、識神秀人とカミーユ・ドルゴポロフです」

扉が重々しく開いた。直線にのびるレッドカーペットの先の玉座に座っている人物こそが皇帝レオンハルト・ストライダムその人だ。「陛下、初にお目にかかります識神秀人です。お聞きたい事があるのですがよろしいでしょうか？」

「構わん。申せ」

「はい、陛下の世界をお聞かせ願いたいです」

意味の分からない質問だがレオンハルトには通じた。

「私の世界を知りたいとな？面白い」

レオンハルトは笑みを浮かべた。

「今日の晩は満月。夜にここに来るがいい。お前に話してやるう」

秀人は頷いた。

「失礼致しました」

秀人は一礼し、退室した。

その夜。

秀人は正装をして、玉座の間へと向かった。

扉の前に立ち、三回叩いた。

「識神秀人です」

「入れ」

中から声が響いた。

「失礼致します」

秀人は扉を押し開け、中に入った。玉座にはレオンハルトが座り、その後ろには親衛隊七人がいる。そして玉座の前には中年の白髪混じりのナイスガイな男性がいた。白髪が威厳を引き立てているようにも見える。

「秀人卿に紹介しよう。聖霊騎士団のエティエンヌ・グナイスラー卿だ」

中年の男性が一步步出て来た。

「エティエンヌです。初対面ですね秀人卿とは」

そう言い、手を出してきた。秀人が手を握り返す。

「こんばんわ。識神秀人です」

秀人もにこやかな笑顔で返す。レオンハルトが手を叩いた。

「自己紹介は終わったかね。では本題に入ろうか・・・」

その時、爆音が轟いた。

「何だ？」

レオンハルトが玉座から立ち上がった。秀人とエティエンヌが剣を抜き、構える。

「あれは？」

秀人が外を見ると、市街が炎上しているのが見えた。帝都ハーゲンブルグの上空には一隻の巨大な戦艦が見えた。

扉が轟音と共に吹き飛んだ。扉があった場所に出来た大穴から黒い悪魔が姿を現した。

「紫電!？」

秀人が叫ぶ。

紫電のハッチが開き、中から見覚えのある人物が出てくる。

「愛斗……」

秀人が唸る様に言った。

「秀人が……懐かしいな」

愛斗が紫電から飛び降り、歩みを進めてきた。

「ヨハンなのか？」

レオンハルトが愛斗の本名を言った。

「ヨハン!？」

エティエンヌが素っ頓狂な声を出した。

「そうです。名を奪われ、辱めを受けた呪われし皇族、ヨハン・ジークフリード・ヨゼフィーネ・フォン・ストライダムですよ」

レオンハルトの顔から血の気が引いていく。

「馬鹿な……死んだと聞いていたが……」

愛斗が笑みを浮かべた。

「死んだと思っていた？殺したと思っていたの間違いでしょう？」  
レオンハルトが笑い始めた。

「ああ、懐かしき我が親族よ。再会を喜び合おう」

しかし、愛斗の表情は冷たい。愛斗の後ろに撫子が姿を現した。

「愛斗……来たのか？」

「ああ、やるべきことはやらねば……」

愛斗がそう言い、拳銃を抜いた。そしてレオンハルトに突きつける。

「何のつもりだ？」

「貴方を殺しに来ました」

愛斗は軽い調子で言った。

「丁度良い、ここに居る全員に面白い話をしてやろう。なあ、秀人卿」

秀人が息を飲んだ。

「私を殺してもプリューナクの融合は止められないぞ」

「プリューナクの融合？」

秀人が鸚鵡返しに言った。

「そうだ。私が望む世界の計画だ」

秀人は耳を傾けた。

「お前の計画に興味は無い」

愛斗は容赦せずに拳銃の撃鉄を起こした。

「待て！マリーナ、説明してやれ」

レオンハルトは撫子に向かって叫んだ。撫子が気だるそうに顔を上げた。

「その名前で呼ぶなと言ったはずだ」

撫子の冷たい声が響く。愛斗が撫子を見た。その隙に秀人はレオンハルトと愛斗の間に立とうとした。しかし、エティエンヌに腕を掴まれてしまった。

「エティエンヌさん？」

エティエンヌは首を振った。

「これはあの三人の問題、手出しは無用だ」

「しかし・・・」

エティエンヌは手の力を緩めない。秀人は頷き、一步下がった。

「マリーナ・・・初耳だな？」

愛斗が撫子を見ながら言った。

「そうだな。契約時には名前を出さなかったからな」

撫子は本を取り出し、開いた。

「マリーナ・・・まさか契約をヨハンと結んだと言うのか？」

「その通りだ」

撫子があっさりと言った。

「何故だ・・・私以外にブリューナクを与えるとは・・・しかし・・・」

レオンハルトは表情を変え、愛斗を見た。

「お前のその両目・・・何故だ・・・お前は・・・いや、お前に取引を持ちかけよう」

レオンハルトはため息をつき、話し出した。

「よいか？お前の力は「碧眼」だ。そして同時にブリューナクでもある」

「何を？意味がわからない」

レオンハルトは続けた。

「撫子はお前に物語を読んで聞かせたはずだ。その話に出てくる少女、即ち救世主の持つ力は右目が青く輝く事から「碧眼」と呼ばれた。そして悪魔の出来損ないの力は左目が赤く光る。これがブリューナクだ。そしてお前は二つの力を持っている。私と共に世界を、エレメントとノーマルを一つにするのだ！」

愛斗は首を傾げた。

「それと俺に何の関係がある？」

レオンハルトは首のペンダントを弄り始めた。

「お前の両親の殺害を命じたのはこの私だ。知っているだろうがな」

「ああ、知っていた。何故だ？」

「邪魔だったから。最後まであいつは私の計画を拒んだ。私が差別、偏見、弾圧、嘘、争いの無い世界を作ろうと持ち掛けたのに・・・」

愛斗の目から涙が毀れ出た。

「貴様は！貴様の理想論は自分の事しか考えていない！」

レオンハルトは悲しそうに首を振る。

「ヨハンよ。理解しろ。碧眼とブリューナクを持つものが世界を支配し、人々を、エレメントとノーマルを纏めるのだ」

愛斗は声を喉の奥から絞り出した。

「貴様は・・・俺から全てを奪った。まず両親を・・・そして・・・リリーの笑顔も・・・」

愛斗は窓の外を眺めた。

「人が何故嘘をつき、争い、偏見が生まれるのか考えた事があるのか？父上は俺に嘘を吐き続けた・・・俺だって幼くても父上が嫌われている事ぐらい知っていた。でも、父上は俺に心配するな、と言いつけた。俺を不安にさせないための・・・嘘だったんだ。でも！俺はその嘘に救われてきた・・・リリーは・・・俺に何時も微笑かけてくれた。戦争に巻き込まれ・・・自由を失い・・・苦しいのに・・・リリーは笑っていた。寂しいのに・・・俺は嬉しかった・・・俺を励ますために健気に笑うリリーが、でも・・・弱音を吐く事だつて必要なんだ」

愛斗は一息ついた。涙が床に落ちていく。

「お前等は遂にリリーの笑顔まで奪った。俺を心配させないように自分を励ますために吐き続けた嘘に更に嘘を重ねてまで精一杯生きようとしているのに」

レオンハルトは呆れたように足を踏み鳴らした。

「ヨハンよ、お前の考えの愚かさには呆れた。なあ、秀人卿。ヨハンを説得してやれ」

秀人は拳を握り締めた。

「僕は・・・確かに争い、差別、偏見、嘘の無い世界は素晴らしいと思う。でも！強制された自由を求める貴方の世界では無く・・・僕は・・・愛斗の世界を選びます！」

レオンハルトは舌打ちをした。

「下らん。騙されおつて・・・マリナ、ヨハンから力を奪い取れ！意思無き者に力は不要だ！」

撫子はレオンハルトをじっと見つめた。

「どうした？マリナ！」

撫子は動かない。やがてゆっくりと口を開いた。

「なあ、もう終わりにしよう。お前の計画に最初は賛成したが、考えが変わった」

「何だと！？」

撫子は愛斗を見つめ、次に秀人を見た。

「世界は神の力を借りずとも変わる。私はこいつと一緒に居て、意志があれば世界はこんなにも変わる物なのかと気付いた」

撫子はそう言い、座り込んだ。

「裏切り者め！」

レオンハルトは意を決したように、ペンダントを投げ捨てた。

「秀人卿、ヨハンよ。死者と話をしたいか？」

愛斗は耳を疑った。それは秀人も同じだ。

「死者だと？」

レオンハルトの左目が赤く輝いた。それと同時に霧が目の前に現れた。

「これが・・・ブリューナク？」

レオンハルトの叫び声が聞こえた。

「私のブリューナクは死者を呼び出す！その目に焼き付けろ！」

霧の中から愛斗の前に現れたのは・・・。

「母さん、それに父上！」

愛斗の両親が霧の中から現れた。同じく秀人の前にはクロードイヌが現れた。

「父上・・・」

愛斗の父、ジークフリードはゆっくりと口を開いた。

「ヨハンよ。レオンハルトの計画を受け入れよ」

ジークフリードの口から発せられた言葉に愛斗は驚きを隠せなかった。

「しかし・・・」

愛斗は亡き両親の幻影を頭から追い出した。自分の父、ジークフリードはこんなことは絶対に認めない。これは只の幻影だ。

「秀人！耳を貸すな！これは幻影だ！」

愛斗が秀人に叫ぶ。

「秀人さん？澁坂愛斗の言う事なんて無視してください。私と一緒に素晴らしい世界を創りましょう」

前と変わらぬクローディヌの笑顔は眩しかった。しかし、秀人にはその笑顔が歪んで見えた。秀人は目を閉じ、叫んだ。

「違う！クローディヌじゃ無い！クローディヌはこんな事を認めない！」

愛斗の両目が何時にも増して光り輝いた。その光は霧の幻影を照らした。

「消えろ！俺は過去になど囚われない！」

愛斗の叫びが届いたのか、霧の幻影が悲鳴を上げて消えていった。クローディヌの顔も歪み、消えていく。

「馬鹿な！？我が神のブリューナクが敗れただと？」

愛斗は胸を押さえながら、唸った。

「そうだ。お前の負けだ」

レオンハルトは尚も諦めない。

「私を殺してどうする気だ！私が消えても皇国副参謀のフェリクス・バウアーが我が意思を引き継ぐであろう！リリーが貴様に見せた笑顔など、所詮偽りの笑顔だ。真実ではない」

「それを貴様が否定する権利は無い！」

愛斗は拳銃を投げ捨てた。

「この国は俺の物だ！俺が皇帝となるのだ！」

愛斗は高らかに笑い始めた。

「愚かだ！お前の部下が幾らお前を認めようと、世界が認めないぞ！」

愛斗は涙を流しながら怒鳴った。

「なら認めさせてやろう！」

愛斗の両目が輝いた。親衛隊が愛斗に片膝をつく。

「何をしている！貴様ら！」

レオンハルトが跪く親衛隊に向かって叫んだ。

「黙れ！」

愛斗は親衛隊にレオンハルトを包囲させた。

「お前は・・・罪と共に消えるがいい！」

愛斗の叫び声と同時にレオンハルトの体に亀裂が走った。

「おお・・・！」

レオンハルトが壊れていく、崩れていく自分の体を見つめた。

「俺は前に進む！過去は見ない！明日だけを見てやる！」

愛斗は渾身の力と思いを乗せて叫んだ。

「消え失せる！」

レオンハルトの絶叫が響き渡る。レオンハルトの体は砕け散り、ガラスの破片になった。

愛斗は砕け散ったガラス片を見つめ、顔に笑みを浮かべた。

その笑顔は酷く冷たいものだった。

## 四十九話　ブリューナクの融合（後書き）

### 次回予告

突然、皇帝によって会見が開かれることになった。

皇国貴族、全世界の人々がこの会見に、レオンハルトの動向に注目していた。

しかし、混沌を身に纏い、姿を現した人物とは？

次回五十話「新皇帝」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などありましたらどうぞ。

## 五十話 新皇帝

砕け散ったレオンハルトだったガラス片を愛斗は見つめた。彼の死は全世界に伝わることになるだろう。愛斗はゆっくりと玉座の前に立った。

この玉座は俺の物だ。そしてこの国も俺の物だ。

愛斗は心の中で呟き、玉座に腰掛けた。足を組み、肘掛に掛けた手を組む。

「皇帝即位おめでとう。愛斗」

撫子が玉座の上の愛斗に微笑みかけた。その言葉に続くように、後ろの扉が勢いよく開いた。入ってきたのは渚とロラン、カリィヌだ。

渚は愛斗に近づき、満面の笑みを浮かべて言った。

「愛くん、おめでとう。勝ったのね」

「閣下、おめでとうございます」

「隊長、やりましたね」

三人はそれぞれの呼び名で愛斗を褒めた。愛斗も満足そうに渚達に指示を出した。

「渚、ロラン、カリィヌ。三日後にレオンハルトの名で緊急会見を開く。そこで全てを話せばいい。準備をしてくれ」

「分かったわ」

「はい」

「分かりましたよ」

三人は返事をし、玉座の間を出て行った。愛斗は次にエティエンヌを見た。

「お前はどつする？」

問い掛けられたエティエンヌは愛斗の前で片膝をついた。

「私は陛下に、ヨハン様に忠誠を誓います」

愛斗はそう言ったエティエンヌを探るような目線で見つめた。そ

して頷く。

「お前の事情は・・・後日聞くとしよう。渚達の手伝いをしてやれ」  
「ユア、ウィル」

エティエンヌは敬意をこめて愛斗に返事を返した。そして振り返らずに扉から出て行った。

これで晴れて玉座の間には秀人と愛斗、撫子だけとなった。

「愛斗・・・」

はじめに口を開いたのは秀人だった。

「秀人、俺が憎いか？」

愛斗の問いかけに秀人は答えを曇らせた。

「それは・・・でも、君の言う正義は理解出来たんだ」

愛斗は微笑みを浮かべた。そして、秀人に手を差し伸べた。

「なら、もう一度俺と・・・俺とお前なら世界を変えられる・・・きつと」

しかし秀人は差し出された手を握らなかった。

「愛斗・・・君は僕の仇だ。君がどんな正義を持っていようと・・・世界が君を認めても・・・君がクローディヌを殺したことに変わりはないんだ」

秀人は剣を抜き、構えた。

「たとえ、君が僕を許しても・・・僕は君を許す事は出来ない！」

愛斗はその答えを穏やかな表情で聞き、頷いた。

「そうか。それでもいい。只、俺の話を一つだけ聞いてくれないか」  
「何？」

愛斗は秀人に近づき、その口を秀人の耳に近づけた。

そして、ある事を囁いた。

「こちらは皇都ハーゲンブルグ、バイエルン宮殿からの中継です。  
昨日、レオンハルト様の御名において緊急会見の発表がございました

た。本日のこの映像は全世界へ中継されており、世界中が本日の会  
見に注目を集めております。ではここで中継の映像を会見場へと切  
り替えます」

アナウンサーの声で映像が会見場と差し変わった。

「突然の会見とは父上、いや陛下は何をお考えなのだろうか？」

髭を蓄えた男がふと自分の執事に漏らした。この男はヴィルフリ  
ートの弟に当たる存在であるベルント・ストライダムだ。突然の召  
集に戸惑いながらも、急いでここまで駆けつけたのである。

「恐らく余程大事な事なのでしょう」

ベルントの執事が無表情で返す。

この会見場は今現在、皇国貴族のほとんどと記者で溢れかえって  
いた。ほとんどの貴族は陛下がお見えになるまで他の貴族と談笑を  
楽しんでいる。

ベルントはふと、時計を見た。会見はもう始まるうとしている。  
そう思ったと同時に、正面の扉の前に立っていた衛兵が大声で叫  
んだ。

「皇帝陛下、ご入来！」

その声と同時に、楽団が演奏を始める。トランペットの音が会見  
場に響き渡った。

そして、一人の青年が扉から姿を現した。

「嘘だろ？」

ハワイでバカンスを楽しんでいたイヴォンが驚きの声を上げた。  
イヴォンは朝早くおきて、この会見を見ていたのだ。その傍らに  
はジェラルドとリリーも居る。

「まさか・・・澁坂愛斗が？」

アフリカ連合本部では各国の代表が円形のテーブルに座り、モニ  
ターを見ていた。

「ヴィルフリート様？これは？」

副参謀のフェリクスがヴィルフリートに問うた。

「さあな。ヨハンが私に立ち向かう覚悟が出来たという宣言ではないのか？」

ヴィルフリートは全く動じず、成り行きを見守っている。

「誰だ？」

集まった貴族の間で疑問の声が飛び交う。青年はそんな空気に臆した様子も無く、真っ直ぐ玉座へと続くレッドカーペットを歩いてゆく。そして玉座に座り、足を組んだ。

青年は穏やかに口を開いた。

「本日の会見にお集まりの皆さん、ごきげんよう。私がストライダム皇国改め、神聖ストライダム帝国初代皇帝であるヨハン・ジークフリード・ヨゼフィーネ・フォン・ストライダムです」

その言葉に広間がざわついた。

「ヨハン？」

ベルントは思い出したように呟いた。そして愛斗の前に歩みでた。

「ああ、ヨハン。私を覚えているかな？ベルントだよ」

愛斗はベルントを見て、思い出したように笑みを浮かべた。

「もちろんですよ。勉学が得意でしたね」

ベルントも笑みを返した。

「君は大本営陥落の際に死んだと思っていたからね。嬉しいよ、また逢えるなんて。でも今はこれから陛下の、君の叔父上の会見があるんだ。だからこちらに来なさい」

愛斗の顔から笑みが消えた。冷たい瞳で愛斗は広間中に聞こえるように言った。

「我が叔父であり、大罪人のレオンハルト・ストライダムはこの私が葬った」

その言葉に広間のざわめきと怒号は頂点に達した。位の高い貴族が部下に命じる声があちこちから聞こえ始める。

「衛兵！あの無礼者を捕らえ、牢に放り込め！」

広間にいたSPや衛兵があつという間に愛斗を取り囲む。取り押さえようと前に飛び出たその時、二人の男が玉座の裏から姿を現し、衛兵の剣を防いだ。そして、衛兵をなぎ払う。

その二人の人物とは聖霊騎士団、識神秀人とエティエンヌであつた。

二人は顔に冷たい笑みを浮かべ、SPたちを見下ろした。

それに臆した様子も無く、穏やかにベルントは前に進み出た。

「これはこれは秀人卿にエティエンヌ卿ではないですか。貴方達までおふげですか？いい加減にしないと大変な事に・・・」

愛斗それを遮るように立ち上がり、腕を振り上げた。秀人とエティエンヌは素早く脇に避ける。

「冗談ではない。ヨハン・ストライダムみなの御名の下に宣言する。この会場内の貴族、皇族全ての者の役職、爵位を剥奪せよ！」

その言葉と同時に扉が閉まった。玉座の裏からは次々と兵士が出てくる。その兵士達の指揮を執っているのはロランと渚だ。

兵士は会場内の貴族を全員取り押さえ、縛り付けた。

「連行し、国外追放せよ！」

愛斗が命令する。兵士達は貴族たちを引つ立て、広間の外へ連れ出した。貴族が誰一人居なくなり、記者だけになった広間で愛斗は玉座に座りなおした。

「ウィア・ハイル・ストライダム！」

ロランが大声で叫ぶ。他の兵士もそれに続いた。

「ウィア・ハイル・ストライダム！ウィア・ハイル・ヨハン！」

今、この瞬間に新皇帝が即位した。

世界中はこの皇帝によって震え上がることになる。しかし、まだ

その事を知るのは愛斗以外居なかった。

## 五十話 新皇帝（後書き）

### 次回予告

遂に皇帝に即位した愛斗。しかし、もちろんそれを快く思わない者もいた。

そして愛斗の前に姿を現した一人の女性。そしてカミィユが愛斗に想いを告げる。

物語は最終章へと向かっていく。

次回五十一話「生き別れ、再会」お楽しみに  
ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などのご報告もお願いします。

## 五十一話 生き別れ、再会（前書き）

風邪ひいた・・・頭痛い・・・でも今日が金曜日だから頑張れます。  
しかも三連休。

## 五十一話 生き別れ、再会

愛斗は会見を終えて、自分の小さな私室で休憩をとっていた。

愛斗の私室は皇帝の物とは思えない質素な部屋だった。簡易なベツドと机、棚があるだけの部屋は何処か物悲しさを感じさせた。

「隊長、居ますか？」

ロランの声が扉の向こうから聞こえた。

「どうした、ロラン？」

「いえ、隊長にお会いしたいって皇族の方がいて・・・追い払いますか？」

「皇族？全員捕らえたはずではないのか？」

ロランも少し戸惑った声で言った。

「どうやら会場にはいなかったようで・・・で、どうします？」

「一応、名前を聞いておこう」

「はい、名前はマリア・ストライダムと名乗ってました」

マリア、その名前で愛斗の表情が変わった。

「やっぱ追い払います？」

「いや、会おう。応接間に通してくれ」

「ユア、ウィル」

ロランはそう言うと、立ち去っていった。

愛斗は服の乱れを直し、皇帝の正装である長衣を纏って、部屋を出た。

応接間の前に来た愛斗は深呼吸をし、扉を開けた。ソファに座って居たのは・・・。

「マリア！生きていたのか！」

「ああ、ヨハン。私は絶対に貴方が生きていると信じておりましたわ」

そう言い、二人は抱き合う。

二人はあの夜に生き別れてしまい、今再会を果たしたのである。  
「マリア、今日は何故ここに？」

「私はヨハンの手伝いがしたいのです。貴方の父上が成し遂げようとしたことを私はやり遂げたいのです」

愛斗は目頭が熱くなるのを感じた。

「マリア、俺は世界を変えてみせる。大事な人と約束したんだ。手伝ってくれるか？」

「もちろん。ヨハンなら出来るわ。絶対に」

愛斗とマリアは向かい合うようにソファに座った。

「それで、俺が居なくなってから何があったか教えてもらえるとありがたいのだが・・・」

「ええ、まず私は何とか一命を取り留めたわ。ある人のお陰でね」  
「ある人？」

「ええ、貴方の知っている人で今後ろに居るわ」

愛斗が後ろを振り向くと、そこには白髪の老紳士が立っていた。  
その人物は・・・

「ライナー？ライナーなのか？」

老紳士は力強く頷いた。

「はい、陛下。私は若が何時か戻ってくる事を信じておりました。  
私もマリア様とご一緒にお手伝いさせていただきます。書類としか  
戦えない老体ですが、まだまだ頑張れますぞ」

「分かった。ありがとう」

愛斗は頷き、マリアとの昔話に浸った。時折ライナーが紅茶をいれ、三人は昔の様に語り合った。

それは夜更けまで続き、愛斗にとって最高の一時になっただろう。

翌日の昼下がり、愛斗はかつて皇族時代に自分のお気に入り場所だったマリノ庭園の噴水に座り、水面に映る自分の顔を眺めていた。

その顔は悲しく、何かを思い出しているようだ。愛斗は昔と変わ

らず花が咲き誇っている花壇から花を摘み取り、眺めた。

「この花でよく首飾りを作ったな・・・何もかも懐かしい・・・」

愛斗は呟き、噴水に目を戻した。ふと、噴水に映る愛斗の後ろの人物が目に入った。

「誰だ？」

愛斗は振り向き、問うた。その人物は少女であった。

「私よ。覚えていないの？カミーユ・ドルゴポロフを」

愛斗の記憶が突然蘇った。

何時もここに来て笑顔くれた少女、とても無邪気な笑顔。そして幼い顔立ち。

「カミーユ・・・思い出したぞ。侍女の娘で・・・笑顔の可愛い女の子だったな・・・」

カミーユは何も言わずに愛斗に近づき、抱きついた。そして顔を愛斗に埋めるようにして泣き始めた。

「私・・・心配だったの・・・突然いなくなっちゃたんだもの・・・でも戻って来てくれた。ありがとう」

愛斗は少し照れたような笑顔でカミーユの頭を撫でた。

「お前は相変わらず甘えん坊さんだな。ほら、顔を上げて」

愛斗の言葉でカミーユは泣きはらした顔を上げ、愛斗の顔を見つめた。

「昨日と言い、最近は生き別れた人とよく会うな。それで何故カミーユはここに？」

「私は秀人卿と一緒に捕虜の護送任務を受け持ったの。それでここに滞在中に貴方が皇帝になって・・・」

カミーユは驚きを隠せない様で、愛斗に詰め寄った。

「ねえ。どうして生きていたのに戻ってこなかったの？」

「何故って、戻っていたら確実に殺されていたからだ。俺は時が満ちるまで待つつもりだった」

カミーユは静かに頷き、中庭の格納庫に目をやった。

「私が聖霊騎士団なのは知っているよね？足手まといにならないか

ら・・・私を必要としてくれる？」

愛斗は少しだけ戸惑いの表情を見せた。

今、この少女は仲間になろうとしているのだ。状況的には仲間になった方が得策である。しかし愛斗はうん、とは言わなかった。

「カミーユはどうしたいんだ？」

「それは・・・」

「カミーユ、お前はもう立派だ。俺が昔の様に傍で手取り足取り教えなくても一人で生きていける。カミーユは聖霊騎士団に入って後悔したか？お前は自分で進みたい道を進めばいい。俺は何時でもカミーユを応援しているから心配するな。お前には戻るべき場所があるのだろう？」

「・・・ありがとう。勇気を貰ったわ」

カミーユは愛斗に花で出来た首飾りを渡した。お別れの合図、なのだろうか？

「さようなら、ヨハン。また会えるかしら？」

「さあな。でも・・・何時かまた会えるさ」

カミーユは最後に愛斗に無邪気な笑顔を見せた。そして自分のEMAに乗り込み、空の彼方に消えた。

「進めべき道を進め、か・・・俺も洒落たことを言う様になったな」  
愛斗はフツと笑い、宮殿の中へ消えていった。

## 五十一話 生き別れ、再会（後書き）

### 次回予告

中東の砂漠に存在する施設、「特殊諜報部」は皇国の軍事施設であった。

皇帝となった愛斗を監視するため、ヴィルフリートの腹心、フェリクスの謀略が動き出す。

現れた「碧眼」とは？

次回五十二話「偽りの妹」お楽しみに  
ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などのご報告もお願いします。

## 五十二話 偽りの妹（前書き）

今回は新キャラが一気に三人登場です。

沢山のキャラを最終話までに上手く処理しきれんかが不安になってきました。

## 五十二話 偽りの妹

中東の砂漠のど真ん中に存在する巨大な施設。その名を「特殊諜報部」といい、皇国の情報網とも言える組織である。この組織を束ねる長こそが帝国副参謀であり、レオンハルトの望んでいたブリューナクの融合を独自に研究していた人物、フェリクス・バウアーである。

彼は頭脳明快な人物だが一つ欠点があった。

その欠点とは、イレギュラーに対応出来ないという事だけである。この欠点は軍の副参謀として重大な欠点だったが彼はこの欠点を別の長所でカバーしていた。

彼は参謀としては考えられない程のE M A操縦技術を持ち合わせていた。しかし、彼は滅多なことで前線に出ることはない。彼は参謀であり、前線に出て戦う暴力行為は苦手なのだ。

そのフェリクスは今、諜報部の司令室で目の前の巨大なスペースに広がる光景を満足そうに見ていた。巨大なスペースに広がっているのはとても大きく大きな骨組みだ。形からして戦艦のようだが、詳しいことは分からないのが現状であり、知っているのは腹心の部下だけであった。

「完成は後どのくらいの予定ですか？」

フェリクスは手元のモニターで情報を見ながら脇に控える部下に尋ねた。

「はい、このまま進めば後一ヶ月後の予定ですが」

「中々順調ではないですか。結構」

フェリクスはモニターからふと目を離れたかと思うと、深い溜息をつき考え事をしているかのような表情を見せた。

傍らの男はそんなフェリクスを珍しそうに眺めた。

「如何しましたか？貴方がお考え事とは珍しいですな」

フェリクスは顔を上げ、笑顔に戻った。

「いえ、新皇帝のことがどうしても頭に引っ掛かってしまっていますね」

「澪坂愛斗のことですか？ ヴィルフリート殿下はまだ何も手を打っていない様ですが・・・」

「何、殿下の考えは私がよく分かっています。ただやはり保障が欲しいですよ」

フェリクスはそう言い、また考え込む素振りを見せた。

「フェリクス様」

後ろから唐突に少女の声が響いた。フェリクスは振り向き、その人物の正体を悟る。

「ああ、ティアナですか。どうしました？」

ティアナと呼ばれた流れるような黒髪に見るものを吸い込みそうな漆黒の瞳を持った少女は書類をファイルから取り出し、フェリクスの前に置いた。

「書類をお届けに参りました。では」

フェリクスはそんな少女の後姿を見て、ある妙案を思いついた。彼女の容姿を上手く利用した方法を思いついたのである。

「貴方に緊急任務があります。よろしいですね？」

ティアナは頷き、フェリクスの話に耳を傾けた。

「その様な任務を急にとは・・・何か相当お焦りのようですね」

フェリクスは苦笑いをした。

「その通りです。私は小心者ですので、で、引き受けて下さいますね？」

「ええ、でも周りくどい任務ですね。殺したいのならそう仰って下さればよろしいのに」

「いえ、あくまでも殺すのは最終手段です。では澪坂愛斗の監視を頼みましたよ」

ティアナは頷き、フェリクスの前から忽然と掻き消す様に姿を消した。

「相変わらずの能力ですね。碧眼とは」

フェリクスは不思議な笑みを浮かべた。

「愛斗、見せたい物って何だ？」

秀人は愛斗に呼び出され、中庭へ愛斗と共に向かっていた。

「お前に見せたい物と紹介したい人がいる」

愛斗は中庭にある格納庫に秀人を連れていった。秀人は訝しげに格納庫を見た。

「この中にある」

愛斗は格納庫の扉を開け、秀人を招き入れた。秀人は恐る恐る中に入った。そこにあっただのは壊れたはずのスピッツオブヴァーニングであった。

「僕の愛機が何故ここに」

「直したんですよ。大分強化させてもらいました」

突然の声に秀人は肩を震わせた。

「誰ですか？」

秀人は自分の愛機の足下に座っている若い男性を見つめた。

「彼は優秀なエンジニアだ。アルヴィに代わって俺やお前の精鋭機のサポートとバックアップをすることになった。名前は・・・」

「ロイック・ミルンハイムです。よろしく願います。秀人卿」

「ああ、こちらこそ」

ロイックは薄い茶色の髪に細い目を持った青年だった。顔には幼さが今だ残っている。

秀人はロイックと握手を交わし、早速機体に取り込もうとした。

「秀人卿。その機体名は正式名称「スピッツ・オブ・インフェルノ」  
。通称、インフェルノです」

秀人は頷き、ロイックが投げた鍵を受け取った。その時だった。

「陛下、お客様ですが」

秀人はその声の方向に目をやった。格納庫の扉の前には一人のメイドが立っていた。

愛斗はその姿を確認し、メイドの方を向いた。

「分かった。今行く。それと・・・」

「いえ、陛下。その必要は御座いません。すでにこちらに向かっておりますので」

メイドは無機質な声で愛斗の言葉を遮り、次の愛斗の指示を待った。

「分かった。下がれ」

愛斗は追い払うように手を振った。メイドは素直に頷き、格納庫から出て行った。

秀人はメイドの様子を見て、愛斗に問うた。

「なあ、愛斗。今のメイドも強制的に従わせたのか？」

「そうだ。帝宮付きの使用人は忠誠心が高いからな」

愛斗はそう一言言うと、格納庫から出て行こうとした。それと同時に格納庫の扉から一人の人影が入ってきた。逆光でよく見えないが、髪からして女性で歳は愛斗や秀人より年下だろう。

「お兄様！」

その少女は入ってくるなりそう叫んだ。そして愛斗に抱きついた。

愛斗は突然の出来事に驚いて、尻餅をついた。

「何だ！貴様は！」

「お兄様は私のことは知らないのですか？」

愛斗は記憶を探ってみたが、そんな風に呼ばれる覚えのある人物はいない。

「悪いが思い出せないな」

「私はお兄様の妹です。お兄様はご存知ないのでしょうか？」

「ああ、初耳だな。俺に兄妹はいないはずだが・・・それにお前の名前すら俺は知らないぞ」

秀人は二人の会話を聞いて、ある事を考え付いた。

「愛斗、もしかしたら愛斗の親は隠していたんじゃないか？危険から遠ざけるために」

「そうです。私の名前はティアナ・ストライダム。れっきとしたお兄様の家族です」

愛斗は疑う目でティアナを睨んだ。

「では聞こう。何故俺が日本で戦っていた時に俺の前に姿を現さなかった？」

「それは零坂愛斗がお兄様だって分からなかったからです。皇帝になった時に本名を明かされたので漸く分かったんです」

愛斗は何故かそれを聞き、不敵な笑みを浮かべた。

「そうか。ならこれからは俺たちに協力してくれるな？」

「もちろんです！お兄様の為なら何でもします！」

「分かった。ロイツク、格納庫からオブティックを出して来い。ティアナの専用機にしてやろう」

ロイツクは頷いた。

「それとだ。新しい量産機はどうなった？」

「順調に進み、完成いたしました。近日中にテストを行います」

「そうか。予定通り先行試作機はロイヤル・セブンスに支給しろ」

「ユア、ウィル」

ロイツクはオブティックをスタンバイさせるため、格納庫から立ち去っていった。ティアナもそれに続いた。

ティアナが立ち去っていったのを見て、秀人は愛斗に尋ねた。

「珍しいな。愛斗が初見の人間を信用するなんて」

「まあな。少し考えがあるだけだ。お前は撫子を呼んできてくれ。

あいつに頼みたい仕事がある」

秀人は疑問を残した顔で頷き、格納庫を後にした。愛斗はインフレノの傍らに座り、撫子を待った。

こちらはハワイ、皇国軍の臨時総司令部だ。

愛斗の策で国を奪われた皇国軍は一先ずハワイに司令部を置き、様子を見ることにしたのだ。今、司令部の会議場には聖霊騎士団の面子とイヴォンとリリー、その他に後から合流した東部方面軍総司令官であるグレーヌなども集まり、臨時総司令であるヴィルフリートを待っていた。

「何故、殿下は何も手を打たないのでしょかね？」

聖霊騎士団団長、ライヒアルトにそう話し掛けたのは同じく聖霊騎士団の団員、リーベルト・グラハムだった。

「黙っている。殿下の考えは私達などには分かりはしない。言葉を弁えろ」

ライヒアルトの厳しい言葉にリーベルトは静かになった。それと同時に会議場のドアが開き、ヴィルフリートが姿を現した。その後ろにはフェリクスの代わりに井崎と海星がついていた。

ヴィルフリートは会議場の中央の席に座り、全員を見渡した。

「聖霊騎士団、カミーユ・ドルゴポフ。彼女は皇帝の誘いを断り、我らの下に帰還してくれた。その他の聖霊騎士団もほとんどがもう一度皇国に戻ってきてくれたことには感謝している」

ヴィルフリートはカミーユと聖霊騎士団を褒め称えた。その次に暗い顔で話し始めた。

「しかし偉大なる聖霊騎士団にも遂に二人、裏切り者が出たのは事実だ。識神秀人卿、エティエンヌ・グナイスラー卿。この二人には我らの勝利の後、厳罰を下さなければならぬ」

ヴィルフリートの話を守る様にリリーが手を挙げた。

「リリー殿、如何しました？」

海星がリリーを見て、微笑む。

「いえ、愛斗さんが皇帝になったって本当ですか？」

ヴィルフリートが小さく頷いた。

「事実だ。このままではヨハンが世界を手に入れる可能性がある。我々はそれをなんとしても阻止しなくてはならない」

井崎もヴィルフリートの後ろで頷いた。

「奴は人を駒同然に扱う暴君だ。悪の皇帝から世界を救うのが我々の使命であろう」

リリーは頷けなかった。愛斗はまだリリーの中では最愛の、世界に一人しかいない大事な人だ。それを討つことなんてリリーには出来る筈が無かった。

そんなリリーの様子に気付いたのか、ヴィルフリートはリリーに向かって微笑んだ。

「リリー、君がヨハンのことが好きなのは知っている。だから安心してほしい。殺したりはしないからね」

リリーはその言葉を聞き、ほんの少しだけ安堵した。ヴィルフリートは井崎に軽く会釈をした。

「暗い話はここまでだ。君たちに紹介しなくてはいけない人たちがいるのだ。入って来たまえ」

ヴィルフリートの後ろの扉が開き、二人の人物が入ってきた。一人は見覚えのある男性、もう一人は初対面の女性だった。

ギレーヌが男性の方を見て、驚きの声を上げた。

「クリス！生きていたのか！」

クリスは苦笑いを浮かべた。クリスは首都包囲戦の時にコードフェニックスに巻き込まれ死亡したとされていたからだ。

「すいません、姫殿下。少しハワイまでの間、苦労しまして」

クリスと感動の再会を果たしたギレーヌは少し涙ぐんでいた。続いて海星が女性の方を見て、目を丸くした。

「カノン！？何故ここに？」

戴冠パレードで死亡した浅代カノンに生き写しの女性は海星を睨みつけた。

「私は憎き澁坂愛斗に殺された妹、カノンの姉よ。あいつに復讐をするためにここまでやってきたのよ！」

ヴィルフリートがカノンの姉を名乗る女性を紹介した。

「彼女は今も言ったとおり、カノン殿の姉上である浅代菱華殿だ。あさしろりょうか

彼女には私達の指揮下に入って貰う」

ヴィルフリートは二人を席に座らせ、真剣な顔で話し始めた。

「ここからが本題だ。現在国に所属していない我が軍は日本の現在の総司令である鳳凰院絢殿と話し合い、日本の東京を首都に、新家であるストライダム共和国を建国することになった。レオンハルト前皇帝陛下の雪辱を晴らす為にも我々は協力しなくてはいけない。よってこれより日本へと移動する。皆の物、準備に取り掛かれ」

「殿下」

ライヒアルトがヴィルフリートを静かに呼んだ。

「どうした？ライヒアルト卿」

「一つお尋ねしたいのですが、何故殿下は何も対抗策を打たないのですか？」

「既に打っている。何、対局の本番はこれからだという事だ」

ヴィルフリートはそう言い、会議室を出て行った。ライヒアルトの顔には疑心が浮かんでいた。

## 五十二話 偽りの妹（後書き）

### 次回予告

愛斗の皇帝即位から何一つ対抗策を打たないヴィルフリートに疑心を抱く聖霊騎士団団長、ライヒアルト。

皇国の名を取り戻すべく行動を起こす聖霊騎士団。それを迎え撃つ「皇帝の剣」である秀人。「皇国の矛」を名乗るライヒアルト。

「皇国最強の騎士」が、「帝国最強の騎士」が遂に対峙する！

次回五十三話「聖霊騎士団の意地」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などのご報告もお願いします。

## 五十三話 聖靈騎士団の意地

「陛下、共和国のことは既にご存知と思いますが・・・」

愛斗は今、玉座の間でフィリップ將軍の報告を聞いていた。愛斗の傍らには専属執事のライナーが常に立ち、愛斗と將軍の間には内政補佐官のマリア・ストライダム姿がある。

愛斗はフィリップ將軍の報告を聞き、冷たい目で將軍を見据えた。「フィリップ殿、その事は既に知っている。お前は部隊の一兵卒だ。お前の気に掛けることではない」

「しかし・・・」

「お前は気に掛けなくてもよい。黙っている」

「ユア、ウィル」

愛斗の黙れ、の指示を受けたフィリップ將軍は大人しく引き下がっていった。

彼も愛斗の皇位継承に反対したためブリューナクで強制的に従わされてしまった人間の一人だ。愛斗の命令が無い時には以前と変わらず国に尽くそうとするが、愛斗が指示を出せば愛斗の意のままに動く只の人形になってしまう。

退室したフィリップ將軍を見届け、愛斗はマリアを呼んだ。

「マリア、共和国の件に関してはそのうちに会談の場を開く。今は目の前の問題に取り組まなくてはいけない。分かるな？」

「もちろん分かっているわ。ヨハンの言う”目の前の問題”については分からないけど」

「マリアは内政面を頼む。俺は秀人と一緒にやらねばならないことがある」

マリアは愛斗の気持ちを悟ったのか、それ以上詮索はしなかった。愛斗はそのまま玉座の間を後にし、秀人の所へ向かった。

「何故です！何故、許可されないのですか！」

日本の元政庁府、現在の共和国元老院本会議場では聖霊騎士団団長、ライヒアルトとヴィルフリートが口論をしていた。

「今言ったとおりだ。時はまだ満ちていない。しばし待て」

「しかし！皇帝陛下はあの澪坂愛斗に殺されたのです！直ぐに帝国に攻撃を仕掛けるべきではなかったのですか！これでは敵に国力を回復させる時間を与えているようなものです！今こそ我らが決戦を仕掛けるべきではないのですか！」

ライヒアルトの叫びをヴィルフリートは手で遮る様に部屋を出て行こうとした。

「お待ちください！殿下！」

「ライヒアルト卿、君は軍人としてはプロだが策士としてはまだ三流のようだな」

ヴィルフリートはそう言い、部屋を出て行った。

「殿下・・・貴方が行動しないのなら、私達が行動するまでです」  
ライヒアルトはそう呟き、聖霊騎士団の待機所へと向かった。

聖霊騎士団の待機所は元政庁府の敷地内にある大きめの倉庫を改造したもので、今は聖霊騎士団団員とその直属部隊の隊員が寝所として利用していた。

ジェラルドとすっかり意気投合したイヴォンは連日のように待機所を訪れ、くだらない話に花を咲かせていた。

そんなイヴォンとジェラルドを桃色の髪をした女性が後ろから引っ叩いた。

「いてっ！何すんだよ、ナーシャ！」

「ジェラルド、少しはヴァジュラの整備でもしたらどう？アンタみたい腑抜けは足手まといになるのよ」

「少し話してただけだろ。まあいいや、じゃあなイヴォン」

「ああ、また明日」

イヴオンは雰囲気を感じ取ったのか、待機所から大人しく出て行った。

それと同時に団長、ライヒアルトが入ってきた。

「あ、団長。どうかしました？」

ジェラルドが抜けた声で尋ねた。

「お前たち！出撃準備をしろ！」

「は？」

団員とその直属部隊の隊員たちは首を傾げた。

「えっと、まず状況説明からお願いします。出来れば分かりやすく」  
ジェラルドが団長に尋ねた。

「本来、皇国を守るのは我ら聖霊騎士団の役割だ。そして我々は皇国の危機に立ち向かわなくてはいけない。そして我々はそれを怠り、安全地帯でのうのうと過ごしていた。今こそ我ら聖霊騎士団の意地を見せるときではないのか？」

ナーシャの顔が輝いた。

「いよいよ出撃なのですね。零坂愛斗を討つ為に」

ライヒアルトが頷いた。

「我らの实力を見せ付けてやろうではないか。目標は帝都ハーゲンブルグ。皆の者、五分で出撃準備だ」

全員が団長の気迫に押されて、準備を始めた。ナーシャはライヒアルトの顔を窺った。

「団長、私は常に準備をしておりました。この日が何時来るのかと」

「ナーシャ、お前とカミーユは出撃しない」

「はい？」

突然の言葉にナーシャはたじろいだ。

「何故です！私は戦えます！」

ライヒアルトは静かにナーシャの肩に手を置いた。

「いいか、我々にもしものがあつたら、殿下をお守りする者がいなくなってしまう。お前は残り、カミーユと共に殿下をお守りしろ」

ナーシャの目から涙が溢れた。

「私は何時でも仲間とともに討ち死にする覚悟は御座います」

ライヒアルトはそれでもうんとは言わなかった。ナーシャは大柄なライヒアルトの胸に顔を埋めた。

「どうか・・・ご無事で・・・私は団長の武運をお祈りしています・・・」

ライヒアルトはその言葉を噛み締めるように頷き、自分のE M A、ヴァンガードに向かった。

愛斗は久々にバイエルン宮殿の屋上に上がり、青い空を眺めていた。

「この空を何時までも見れたらな・・・」

愛斗の悲しい願いは空に木霊した。

「愛くん！」

突然の叫びに愛斗は振り返った。渚が息を切らして、こちらに向かってくるのが見えた。

「どうした？」

「大変なの！敵の部隊が帝都に迫ってきているわ。隊旗から見て、聖霊騎士団とその直属部隊で間違いないわ」

愛斗は長衣の袖を直し、渚に指示を出した。

「そうか。帝都周辺に警備部隊を配置しろ。お前やロランやカリィ又が指揮を執れ。俺と秀人で迎え撃つ」

「分かったわ」

愛斗は皇帝の正装のまま、格納庫に向かった。

「殿下！非常事態です！」

井崎が扉を勢いよく開け、部屋に入ってきた。

「どうした？随分と慌てているようだが」

「ライヒアルト率いる聖霊騎士団が独断で帝都へ攻撃を仕掛けようとしております！」

ヴィルフリートは落ち着いた様子で椅子に座りなおし、モニターのスイッチを入れた。

「まあいいではないか。いい結果を期待してみようじゃないか」

井崎は納得がいかなかったが、ヴィルフリエットの言う事はほぼ間違いないので従うしかない。

「対局はこれからなのだからね」

ライヒアルト率いる聖霊騎士団は帝都の目前まで迫っていた。ライヒアルトの無線にリーベルトの声が入った。

「団長、敵は帝都周辺に警備部隊を配置、皇帝直属部隊も帝都の周辺に散在しています」

「そうか。帝都の様子は？」

「はい、恐らく全ての警備兵、新鋭隊、直属部隊までもが澪坂愛斗に掌握されています」

ライヒアルトは無線を全ての味方に繋がるようにした。

「我々は皇国に忠誠を尽くし、全力で陛下のために戦う名誉ある騎士である」

ジェラルドもニヤリと笑った。

「要するに、澪坂愛斗如きには従わないってことさ」

ジェラルドが喋ったと同時にリーベルトからの通信が入った。

「団長、前方に敵影を発見しました。迎撃部隊と思われませんが・・・」

「確認した。数は？」

「はい、二機です」

「二機だと？それだけで我らに立ち向かおうと言うのか？舐められたものだな・・・」

ヴァンガードのリーダーに二機の影が映った。かなりの速さで接

近してくる。

「来ます！」

リーベルトの叫びと同時に目の前に黒い悪魔と、青と金の騎士が立ちはだかった。

「あれは紫電？それにスピッツオブヴァーニングも・・・しかし何故六枚翼なのだ？」

目の前のインフェルノは六枚翼を棚引かせ、悠然と飛んでいた。

「愛斗、敵を確認した」

「ああ、俺は周りの奴を片付ける。お前は団長を討て。お前にはその権利がある」

「分かってるよ。愛斗も本気でやれよ」

目の前の紫電が突然、高度を上げて上空に舞い上がった。聖霊騎士団の視線もそちらに移る。その隙を狙ってインフェルノが一直線に聖霊騎士団に突っ込んだ。

「団長！紫電じゃない！インフェルノが・・・！」

しかしリーベルトの言葉は最後まで続かなかった。紫電の胸部が開き、白銀の閃光が聖霊騎士団目掛けて発射された。閃光は聖霊騎士団の直前で何十もの光の筋に分かれ、聖霊騎士団のE M Aを次々に破壊していった。

「団長！俺です！ジェラルドですけど、リーベルトやミッチェルがやられちゃいました！」

「そうか。私がインフェルノの相手をする。お前とシルヴェストルと私の直属部隊で紫電を討て」

「了解！」

ライヒアルトの周りのE M Aがジェラルドの方へ向かっていく。

紫電は爆煙の中から出て来たE M Aを確認した。

「まだ生きていたか。まあいい、三分でケリをつける」

紫電は上空から急降下で接近、二機を切り裂いた。更にもう一機の頭を鷲掴みにし、粒子砲で粉碎した。その後、もう一度上空に舞い、ミサイルで残りを片っ端から叩き落した。

「嘘だろ・・・この短時間で団長の直属部隊が全滅かよ」

「ジェラルド！僕が奴を引き付ける！お前はその隙に後ろから攻撃してくれ！」

そう言ったシルヴェストルのブラックセイヴァーは紫電へと向かっていった。そして両手に持ったスラッシュソードで紫電に斬りかかる。紫電はそれを避け、ブラックセイヴァーの胸部を鷲掴みにし、青い閃光で貫いた。

「すいません・・・ジェラルドさん・・・」

ブラックセイヴァーから脱出ポッドが射出され、それと同時に機体は爆発、炎上した。

「くそっ！」

ヴァジュラは後ろに回り込み、電磁ロストシューターを両腕から発射した。

「まだ残っていたのか」

紫電の胸から出た閃光が電磁ロストシューターを砕き、その煙の中から紫電の粒子砲が飛び出し、ヴァジュラの胸部を破壊した。

「うわっ！」

それと同時に紫電の蹴りを喰らったヴァジュラは力なく墜落していった。

「任務完了。後は秀人に任せるか」

秀人のインフェルノは今、ヴァンガードと向かい合っていた。

「識神よ。お前は最強の騎士を名乗っているようだが、それは間違いだ。何故なら皇国最強の騎士は私であり、他には存在しないからだ」

「団長、皇国は既に存在しません。今在るのは帝国。よって帝国最強の騎士は僕です。国を裏切ったのは貴方達ではありませんか？」

ヴァンガードは大剣、コルタナを背中から引き抜いた。その姿からは想像も出来ないスピードでインフェルノに斬りかかる。それを素早く避けたインフェルノは背中からプラズマガンを構えた。難攻

不落の異名を持つヴァンガードからはその異名を覆すような素早い攻撃が繰り出される。それを避けるインフェルノは防戦一方だ。

「どうした識神よ！その程度で騎士を名乗ろうと言うのか！」

「いえ、これからです！」

インフェルノは向かってきたヴァンガードにプラズマガンを投げつけ、素早く二本のデイトライトソードを二刀流の構えでコルタナを受けた。

「ほう、銃を捨て剣を構えたか」

ヴァンガードは先ほどと同じ様に大きな一撃を繰り出そうと構えた。インフェルノはその隙を逃さず、がら空きになった脇腹部分に斬りかかった。ヴァンガードはそれを見越したように、ロストシューターを射出し、インフェルノを弾き返す。

インフェルノは素早く受身の姿勢で構え、ヴァンガードの腕の部分を斬りつけ亀裂をいれた。

「やはり一筋縄ではいかないか。ならこれしかない」

ヴァンガードの胸や腕の重いパーツが突然、ヴァンガードから外れた。身軽になったヴァンガードは先ほどの倍の速度でインフェルノを襲った。

「これでは！」

インフェルノはそれを素早く避けた。

「この最終形態・・・まさかお前に見せることになるとはな・・・」

素早いヴァンガードの動きにインフェルノは再び防戦に追いやられた。

「このままでは・・・」

秀人は苦しげに呟いた。その呟きに答えるようにモニターに愛斗の顔が映った。

「愛斗？」

「秀人、お前なら勝てるはずだ。落ち着いて、行動パターンを見極めろ」

「分かっているよ。僕たちはこんな所で負けるわけにはいかない！」

「そうだ。健闘を祈る」

インフェルノは再び、ヴァンガードに向き直った。

「戦いの最中に考え事とは余裕だな！」

ヴァンガードは容赦なく、インフェルノに斬りかかる。その攻撃をかわしていく内にある事に気付いた。

「そうか・・・あれなら！」

インフェルノは突然上空に舞い上がり、そこから急降下を開始した。

「正面からとは・・・血迷ったな！」

「いや、お前の弱点は知っている！」

インフェルノとヴァンガードは同時にすれ違い、火花が散った。

インフェルノの腕には一本の剣しか握られていなかった。もう一本は・・・ヴァンガードの胸部に深々と刺さっていた。

ヴァンガードの弱点、それは装甲を外したことにより薄くなった胸部の装甲だった。

「まさか・・・この私が・・・申し訳御座いません・・・陛下・・・」

ヴァンガードは爆発し、爆煙の中インフェルノは優雅に、世界にその姿を示すかの如く空中で静止した。

「聖霊騎士団が敗れたのだと？」

井崎がモニターを見て驚きの表情を浮かべた。

「予想通りの結果だよ。フェリクス」

「そうですね」

ヴィルフリートは落ち着いた声でフェリクスと話している。突然、モニターに愛斗の顔が映った。

「澁坂愛斗？」

「ヴィルフリート殿、今の余興は楽しんでいただけましたかな？」

「ヨハンか。まあまあだな」

「そうですか。しかし、今の戦闘を見て、私がこの国の、そして世界の皇帝であることが実感していただけたことだろう。その上で、私は共和国との講和会見を行いたい」

井崎と海星が驚愕の表情で目を見開いた。

「会見には大きな兵力は一切動員せず、軍人も一切会見の場には干渉させない。全て貴方達の要望に応えよう。ただし、一つ条件がある」

リリーもその画面に見入った。愛斗の出す条件を聞くためだ。

「いいだろう」

「会見を開く場合は、東京ではなく静岡県熱海市、旧澀坂邸を指定させてもらおう」

その場所を聞いた途端、リリーの顔が引きつった。

「どうしたんだ？リリー」

イヴオンがリリーに尋ねる。

「熱海の澀坂邸は・・・」

「どうしたんだ？言ってみろよ。何かまずいのか？」

「あそこは私と愛斗さんが幼少期を過ごした思い出の場所なんです・・・」

運命の齒車が再び回りだそうとしていた。波乱を含んで・・・。

## 五十三話 聖靈騎士団の意地（後書き）

### 次回予告

帝国の圧勝で終った聖靈騎士団との対決。

しかし愛斗に不穏な情報やつて来た。

エティエンヌが愛斗に忠誠を誓うのは何故なのか？

その理由は過去に隠されていた。

次回五十四話「それぞれの過去」お楽しみに

五十四話 それぞれの過去（前書き）

今日は連投です。  
調子がいいので。

## 五十四話 それぞれの過去

「なありリリー、熱海で愛斗と何かあったのか？」

リリーをイヴオンが問いただす。リリーは俯いたままゆっくりと口を開いた。

「熱海は・・・私と愛斗さんと澪さんが昔、戦争の前に住んでいた場所なんです・・・」

初耳だったイヴオンはリリーに尋ねた。

「澪？聞いたことないな。その人はどうしたんだ？」

「分かりません。目が見えなかった私が覚えているのは終戦の日、落ち込んでいる司令官、燃える大本営です。私が目を覚ました時に見たのは泣いている愛斗さんでした。周りでは物の焼ける匂いがして、大勢の悲鳴が聞こえていました。それから・・・」

リリーはあの日の記憶が蘇って来たのか、口を閉ざしてしまった。「じゃあ澪って人も死んだのか？」

「それだけは本当に分からないんです。愛斗さんに何度尋ねても教えてくれませんでした」

「そうか・・・愛斗は何か知っているんだな」

イヴオンは頷き、窓から見える景色に目を移した。ヴィルフリートはモニターのスイッチを切り、イヴオンや絢たちの方を向いた。

「と、いう訳だ。議会で話し合うことはしない。ヨハンの要望通り会見は熱海の旧澪坂邸で行う」

会議室の面々は黙っている。異議を唱える者はいないようだ。

「それとも一つ。ヨハンの置き土産についてだ」

「置き土産ですか？」

「そうだ。ヨハンはどういう訳か新型EMA、秋水を日本に残していった。秋水の機動力も我らのストライクパニッシャーを一回り上回っている。これを利用しない手はあるまい。井崎、早速取り掛かれ」

「はい」

井崎は一礼し、退室した。

「リリー殿。貴方にも出席してもらう。彼に逢いたいのだろう」

リリーは一瞬、戸惑う素振りを見せたが、直ぐに頷いた。

「はい。愛斗さんにもう一度だけ逢って・・・話をしたいです」

ヴィルフリートはその返事を予想していたように微笑んだ。

「では今日は解散としよう。各自準備を整えてくれ」

帝都ハーゲンブルグ、バイエルン宮殿の屋上では愛斗が専属執事のライナーと共に静かな一時を過ごしていた。愛斗は腕時計を見て、ライナーに尋ねた。

「ライナー、そろそろ日本に発つ時間だ。準備をしてくれ」

「はい、陛下」

愛斗は長衣を棚引かせ、宮殿内に入ろうとした。

「ヨハン様」

背後から聞き覚えのある男の声が聞こえた。愛斗もその男を見つめる。

「エティエンヌか。アフリカ戦線から帰還したのか」

「はい。アフリカ連合の本部を占領し、このままいけば交渉に持ち込めそうです」

「そうか。全ては順調だな」

エティエンヌは白髪が混じった黒髪を片手で梳いた。これはエティエンヌの癖なのだ。

「その・・・ヨハン様。実はアフリカ戦線で敵から妙な噂を聞きまして・・・一応ご報告したほうが宜しいかと・・・」

愛斗はエティエンヌの表情から読み取ったのか、真剣な顔になった。

「ライナー、少し席を外してくれ。準備を頼む」

「ユア、ウィル」

ライナーは一礼して、その場から立ち去った。

「報告を続ける」

「はい。ヨハン様、信憑性や真偽については定かではありませんが、「特殊諜報部」をご存知でしょうか？」

愛斗の顔が反応する。

「ああ。最近そのことを知った。それで？」

「はい。現地での情報では中東の砂漠に存在する研究施設だとか・  
・どうやらそこで宜しくない動きがあるそうです」

「具体的に説明してくれ」

「具体的かどうかは分かりませんが、噂によれば指揮を執っているのは元皇国副参謀のフェリクス・バウアーという男です。なにやらヴィルフリートの指示で新兵器を製造中とのことで・・・これ以上具体的な話までは聞き出せませんでした」

愛斗は考え込むような素振りを見せた。

「分かった。近いうちに手を打とう」

エティエンヌは一礼し、その場を立ち去ろうとした。

「待て、エティエンヌ」

愛斗が立ち去ろうとする背中に呼びかけた。

「何でしょう？ヨハン様」

「俺からもお前に聞きたいことがある。何故、俺がレオンハルトを殺害しようとした時、止めなかった？そして何故俺に忠誠を誓うんだ？」

エティエンヌは思い出したように愛斗の顔を見つめた。それからゆっくりと口を開く。

「私は元々はジークフリード様のお屋敷でお世話になっていたのです」

愛斗が驚いた様な表情を見せた。エティエンヌは回想を辿りながら、愛斗に話を始めた。

「私は元々庶民の出です。家が貧しく奴隷にされるところをヨハン様の父上、ジークフリード様に救われたのです。それから私はジーク

クフリード様の下で騎士としての教育を受け、聖霊騎士団に入隊する事が出来たのです」

愛斗はその話に聞き入っていた。自分の知らないところでそのような事が起きていたのだ。

「俺はお前の姿を屋敷では一度も見たことがない。それは何故だ？」

「それは、私がヨハン様に近づかなかったからなのです。ジークフリード様はヨハン様を危険から守るため、召使などを一切近づけなかったのです」

「そうなのか？俺は初耳だぞ」

「ええ、ジークフリード様は私にそう仰いました。ジークフリード様がお亡くなりになった後も私はジークフリード様の死の真相を独自に調査いたしましたのですが・・・手がかりはつかめず終いでした」

「そうだったのか・・・お前は俺の親へ忠誠を誓った。だから俺にも義理として忠誠を誓うのか？」

エティエンヌは静かにそれを否定した。

「違います。ジークフリード様に忠誠を誓った身であれば、その息子に忠誠を誓う、これもまた道理でございます」

愛斗の顔に安堵の色が見えた。この男は愛斗に本気で忠誠を誓っているのだ。

「お前が俺に対して出来る事は一つ。俺に忠誠を誓え」

「ユア、ウィル」

エティエンヌは力と意思を込めてその言葉を口に出した。この忠誠心は何事にも揺るぐ事は無いだろう。彼は唯一、愛斗自身に忠誠を誓った部下なのだから。

愛斗も心の荷が降りた気がした。

この男は俺に忠誠を誓ってくれる。だからこそ俺は前に進まなくてはいけない。俺が次に向かう場所、そこでどんな結果が待ち受けているようにも・・・俺は・・・。

愛斗の心も揺るぐ事は無いだろう。この意思、約束だけは果たさ

なくてはいけないのだから。

## 五十四話 それぞれの過去（後書き）

### 次回予告

リリーと愛斗の思い出の場所である熱海。

会見の場を熱海に指定したのは何故なのか？

そしてリリーと愛斗が再び出会う時、愛斗が見せる顔は皇帝の顔か？それとも昔の顔なのか？

次回五十五話「熱海会見」お楽しみに

## 五十五話 熱海会見

神聖ストライダム帝国皇帝専用艦、ドレッドノートは熱海まで残り三十分の距離まで近づいていた。

日本から奪還に成功したドレッドノートは再び、愛斗の元に戻ってきた。ドレッドノートは名付け親の元に帰ってきたのだ。

「美しいな。相変わらず」

司令室の玉座に座る愛斗は目の前に広がる伊豆半島の全景を見て、感想を漏らした。

「そうでしょう。ここは有名な観光地らしいですから」

ライナーも愛斗に同意する。

今回の熱海会見に同行するのは専属執事のライナーと内政補佐官のマリア。一応、護衛としてロランを連れて来ているが、それ以外の軍人は連れて来ていない。秀人にはロイックと一緒に別の任務を言いつけてある。

ティアナは着いていくと言い張ったが、愛斗の説得で何とか思いとどまったらしい。

それにしても厄介なものだ。今回の会見の真意は講和を結ぶ事にある。こちらの戦力が完全ではない以上、不本意な争いは避けたいのだ。今回の会見での講和はそのための保険に過ぎない。

国力回復……。愛斗はこのことだけを考えて、無理やり富国強兵の政策を行ってきた。

まず手始めに植民地の統一、ノーマルに対する差別の撤廃だ。植民地であれ、国民は自分の下に統一しなくてはいけない。共和国との戦争は総力戦でなくては厳しい。国民を統一させるためには全ての差別を無くさなくてはいけない。そのために財閥を解体し、地方行政を見直したのだ。

これらの政策のお陰で貴族や皇族からは恨まれる事になったが……。愛斗は自分に異議を申し立てる貴族や皇族から地位を奪い取り、

追放した。その中でも有能な者はブリューナクで強制的に配下にした。無駄に忠誠心の高い宮殿付きの使用人も同じ手段で従わせた。このことを知っているのは一部だけだが……。

「陛下、着艦いたします。御準備を」

ふとライナーの声で我に返る。愛斗は最近の出来事に浸っていて、ボーンとしていたようだ。

「ああ、分かっている。マリア、行くぞ」

愛斗は玉座から立ち上がり、昇降タラップへと向かった。

「いや、久しぶりやな。能面の百鬼を見るのも」

リリーとイヴォンの隣では絢がタラップから降りてくる一団を見ながら感想を述べていた。

「まあ俺も愛斗と直に会うのも久しぶりかな」

「私事です。久しぶりに話が出来たら嬉しいですけど……」

それぞれの思いを胸に秘めながら、三人はタラップから降りてくる人物を窺った。

三十人程の親衛隊がタラップから降りてきた。それに続くように茶髪で長髪の女性が見えた。その後ろにいるのは……。

「愛斗……」

イヴォンが呟く。

何時もと同じ白を基調とし、赤や黒、青など様々な色の絹が使用された正装は様々な宝石で彩られていた。そして、愛斗は悠然と歩みを進める。その姿は聖君と言っても過言では無かった。

「素晴らしいな」

ヴィルフリートの声で三人は後ろを振り返った。

「君達、そろそろ澪坂邸に移動してくれ。会見を行う」

三人は名残惜しそうに愛斗を見てから頷いた。

「ではこれから会見を開始します」

フェリクスという言葉で両者が向き合った。会見を行うのは澁坂邸の和室だ。

愛斗が帝国側の中央に座り、その右脇にはマリア。その左脇にはロランが座っている。専属執事のライナーは愛斗の後ろに立っている。

共和国側の席は中央にヴィルフリート、その両脇に井崎と海星。

海星の隣にはリリーをイヴオン、井崎の隣には絢だ。

「では講和条約の要綱を読み上げよう。一つ目に両国が互いの領土を侵さず、現在互いの領土に兵力が存在している場合は条約締結から三日以内に撤退する事。二つ目に互いに平和のために協調し、現在他国に対して行っている侵略活動を三日以内に中止する事。三つ目に軍事力を削減する事。以上の項目を承認していただけますかな？」

ヴィルフリートがまず手元の書類を読み上げた。通常ならばここで異議が出る。それから三日ほど話し合い、それから条約が締結する。

しかし、愛斗の口からはあっさりとした言葉が出た。

「分かった。その条件を全て承認しよう。但し、私がここに締結の印を押すのは、休憩を挟んでからだ」

愛斗の口から出た言葉にヴィルフリートは不敵な笑みを浮かべた。

「では休憩をにしよう。皆、少し寛いでくれ」

和室の緊張がとけ、皆が姿勢を崩し小声で話し始める。

愛斗は立ち上がり、イヴオンに近づいた。イヴオンとリリーは近づいてくる愛斗に少しだけ恐怖を覚えた。イヴオンは勇気を振り絞って、近づいてくる愛斗と向かい合った。

「愛斗・・・何か用か？」

イヴオンは自分でも声が震えているのが分かった。しかし、愛斗の口から出た言葉は以外なものだった。

「イヴオン、リリーを俺に少しの間預けてくれないか？少し散歩が

したいんだ」

イヴオンはリリーを見た。リリーはイヴオンの視線を受け取ったのか、決心したように頷いた。

「分かった」

その言葉で愛斗はリリーを抱きかかえ、庭にある車椅子に乗せた。リリーと愛斗の去っていく姿をイヴオンは複雑な気持ちで眺めていた。

「久しぶりだな。こうして二人で歩くのは」

愛斗は車椅子を押しながら、家の前の土手を歩いていた。昔と変わらない田園風景は愛斗の心を奥底から癒していた。

リリーも愛斗の優しい声と言葉に、警戒が解け始めた。

「そうですね。あの頃は目が見えなかったですけど、今は見えます。綺麗な風景ですね。こんなに綺麗なものが傍にあって見る事が出来なかったなんて・・・」

「でも今は見える。それでいいだろう？」

リリーは笑顔で頷いた。愛斗も同じ様に微笑んだ。

「そうだ。あそこに行こう。覚えているな、何時もの川を」

「あのザリガニを取った川ですね。懐かしいです。ザリガニはどんな形をしているんでしょうか？」

「そうだな・・・缺があるぞ。挟まれない様に気をつける」

愛斗は昔と同じように、車椅子を止めてリリーを抱きかかえた。

そのままりリーを抱えて、土手をゆっくりと降りた。

昔、愛斗とリリーのお気に入りだった川は今も変わらずに透き通っていた。リリーが恐る恐る川を覗き込むと、小魚が驚いて逃げいった。

「愛斗さん。お魚さん捕まえます？」

「やってみるか？」

愛斗は邪魔な長衣を脱ぎ捨て、ラフな格好になり、リリーを抱え

て川に入った。愛斗は川の中の大きな岩にリリーを座らせた。

「愛斗さん？」

「待つてろ。今、ザリガニを捕まえてやるぞ」

愛斗は石をどけて、赤い生き物を手で掴んだ。それをリリーの目の前に出した。

「これがザリガニだ。結構、大きいだろう？」

「うわー、凄いです。結構怖いですね。持っていても平気ですか？」

「ああ、挟まれるなよ」

リリーはザリガニの腹を掴もうとした。それを見た愛斗は慌てて、リリーに注意した。

「リリー、ザリガニはな背中を持つんだ。腹を持つと挟まれるぞ」

リリーは挟まれる事を想像したのか、少し身震いした。

「ほら、今度はちゃんと背中を持つんだ」

リリーは愛斗の忠告通り、ザリガニの背中を掴んだ。ザリガニは捕まれた驚きからか、じたばたと鋏を動かして抵抗した。抵抗しても敵う筈が無いのに、その小さな生き物は抵抗し続けた。

まるで私みたい……。リリーは心の中で呟いた。

私みたいな弱い生き物が世界を変えようなんて、初めから意味が無かったのかもしれない。私は愛斗さんに今まで頼って生きてきた。でも、もう愛斗さんは昔みたいに何時も傍にいてくれるわけじゃない。私は愛斗さんにとっての”何”だったんだろう。

リリーはふとそんなことを考えてしまっただった。

愛斗はリリーの気持ちを感じたのか、優しい笑顔で微笑んだ。

「大丈夫だ。お前との約束は守る」

「約束？」

「そうだ。お前は今は忘れていても知れない。そのうち思い出すよ」

愛斗は透き通る川を見た。午後の暖かな日差しの中、蝶が草むらから羽ばたいた。

「魚を捕まえてみようか？見てみたいだろう？」

「お魚さんを？」

「ああ、でも見たら直ぐに逃がしてやらないとな。魚が死んでしま  
う」

愛斗は魚を捕まえるため、しゃがもうとした。その時だった。愛  
斗の胸を締め付けるような痛みが襲った。ブリーナクの副作用だ。  
「うっ！」

愛斗は胸を押さえ、川に膝をついた。荒い息で必死に酸素を取り  
込もうと、息をしている。

いきなり倒れた愛斗を見たリリーはパニック状態に陥った。

「愛斗さん！どうしたんですか！」

リリーは愛斗に近づこうと、手を伸ばした。

「触るな！」

愛斗の怒鳴り声にリリーはビクツと手を引つ込めた。愛斗は苦し  
げな声を絞り出した。

「平気だ・・・少し体調が悪いだけなんだ。心配するな」

愛斗はゆっくりと立ち上がり、リリーを抱きかかえた。

「今日はもう戻ろうか？イヴオンが心配する」

愛斗は頼りない足取りで川岸へと向かった。

リリーは自分を恥じた。

私はこんなに苦しんでいて、弱っている愛斗さんに頼っているの  
か……。私は愛斗さんのやっている事を否定する権利は無いのか  
もしれない。私なんか……。

「リリー、お前のせいじゃない。お前は心配するな」

愛斗は川岸に置いてある長衣を肩に背負い、土手を登った。

土手の車椅子にリリーを乗せ、ゆっくりと押した。

澁坂邸の前にはイヴオンが立っていて、リリーの姿を確認すると  
走って近づいてきた。

「リリー、おかえり。どうだった？」

「いえ、愛斗さんが……」

愛斗はリリーの言葉を遮る様にイヴオンに頼みごとをした。

「イヴオン、リリーを頼むぞ」

愛斗は澁坂邸から出て来たマリアの肩を借りて、邸内に入っていた。

リリーは自分が途轍もなくちっぽけな存在に感じた。

所詮、私なんて・・・。

何も出来ない女なんだ。

リリーは黙り込んでしまった。イヴオンもその気持ちを察したのか、リリーの肩に優しく手を置いた。

## 五十五話 熱海会見（後書き）

### 次回予告

「お前は俺の妹だろう？」

この一言がティアナの運命を変えた。

愛斗は諜報部を潰すために中東の砂漠へと向かった。  
そこに現れる強敵とは？

次回五十六話「諜報部奇襲作戦」お楽しみに

## 五十六話 諜報部奇襲作戦

熱海から帰還した愛斗は相当疲れ切った様子で玉座に座っていた。マリアが心配した様子で愛斗に話し掛けた。

「ヨハン、大丈夫？相当疲れているみたいだけど・・・」

「大丈夫だ。それより緊急の任務がある。ティアナを呼び出してくれ」

マリアは頷いた。

「その前に一ついい？どうしてあの講和条約を受け入れたの？」

「何故？結ばなくては時間が掛かるだろう？」

「あの不平等な、明らかにこちらに不利な条約なんて抗議すべきだったんじゃない？」

愛斗は落ち着いた様子で口を開いた。

「確かに。しかし俺があの条約を守るとでも思ったのか？」

「じゃあ条約を破る気なの？」

「相手も守る気が無いものを守っても意味が無いだろう？」

マリアは愛斗の言う意味が理解出来たのか、少し微笑みを見せ、退室した。ライナーも出て行き、晴れて部屋には愛斗と撫子だけになった。

「撫子、昨日ブリューナクの副作用が起きた。日に日に酷くなっていく様だが、どういうことだ？」

撫子は不敵な笑みを見せた。

「お前の副作用は今が峠だ。この段階でほとんどの人間が力を捨てるか、力尽きる。お前もこれを超えれば、少し落ち着くだろう」

「しかし、昨日は危なかった。リリーに感ずかれたら台無しになってしまう」

「分かっている。そろそろティアナが来るのでは？」

その言葉と同時に扉が開き、ティアナが姿を現した。

「お兄様？何か御用ですか？」

愛斗は玉座に座りなおし、ティアナに向き直った。

「お前に任務がある。俺と撫子、エティエンヌ、カリィヌとお前で出撃する。ある場所を攻撃するのだ」

「ある場所？」

「そうだ。お前がよく知っているだろうと思つてな・・・」特殊諜報部」を」

その言葉でティアナの顔が引きつった。拳銃を素早く引き抜き、愛斗に突きつける。

「お兄様、何処まで知っているの？」

「全てだ。お前が特殊諜報部から来た者だということは知っている」  
「何時から？」

「初め、お前が俺の前に姿を現した時からだ。俺はお前に尋ねたな。何故、熱海の時に姿を見せなかったと。お前は俺に澁坂愛斗とヨハンが同一人物かどうか分からなかったから、と言った。でも、能面の百鬼と澁坂愛斗が同一人物だという事は一度も公表していないんだ」

ティアナは悔しそうに歯軋りをした。見事に誘導尋問に引っかけたのだ。

「後は撫子の能力を使って探らせてもらった。さあ、俺のいう事を聞か、ここで死ぬかだ」

愛斗は拳銃を抜き、ティアナに突きつけた。

「分かったわ。なら！」

ティアナの姿が掻き消す様に消え、愛斗の後ろに姿を現した。

ティアナは愛斗の頭に容赦なく拳銃を突きつける。その右目は青く輝いていた。

「私の碧眼を計算にいれてなかったみたいね。お兄様」

愛斗は拳銃を投げ捨て、両手を頭上に挙げた。

「諦めたのね。さようなら、お兄様。短い間だったけど楽しかったわ」

ティアナは拳銃の引き金を引こうとした。愛斗が不意に口を開く。

「寂しい奴だな」

「何!？」

「聞こえなかったのか? 寂しい奴だと言ったんだ」

ティアナはこの状況で何を言い出すのかと、疑問に思った。

「きつとお前は今まで誰にも愛されなかったんだな。だから愛を求めた。違うか?」

「お兄様に私について言われる筋合いは無いわ。第一・・・」

「いや、お前は誰かに気に掛けて欲しかったんだ。自分を認めて欲しかったんだ。自分を道具としてでは無く、一人の人間として認めて欲しかった」

ティアナは自分の心の内を読まれたようで、不気味に感じた。でも凶星だった。

ティアナの銃口が下がっていくのを確認した愛斗は、振り返った。

「お前は人間だ。そうだろう?」

「でも・・・私を認めてくれる人なんて・・・今まで・・・」

「俺が認めてやる。お前の人間としての全存在を肯定してやる。だから・・・」

「私に諜報部を裏切れって言っの? それは・・・」

愛斗はティアナの肩に手を置き、優しく呟いた。

「お前は利用されているだけだ。諜報部にこのまま居たとしても、お前に本当の幸せは訪れない」

「私は諜報部に命を救われたの! 今更、行くところなんて・・・」

愛斗はティアナの手から拳銃を取った。

「俺の所に来ればいい。俺がお前に幸せをやる。約束する。だから俺を手伝ってくれないか?」

ティアナの心は揺れ動いた。

私を認めてくれる人がいた。私を必要としてくれている。幸せをくれる。私は人間として生きられる。

私が求めていたものが全て手に入る。目の前のこの人が私を認めてくれるの? 嬉しい。

愛斗が止めの言葉を口にした。

「お前は俺の妹だろ。協力してくれ」

ティアナのスパイとしての心は崩れた。

ティアナは命令を忠実に守り、動く機械から、幸せを求める貪欲な生き物に生まれ変わっていた。

「・・・分かりました。諜報部への攻撃の先導は私がやります。だから幸せを下さいね。お兄様」

「約束しよう」

ティアナは身を翻し、ドアから出て行った。撫子が不敵な笑みで愛斗を見つめる。

「相変わらず口だけは達者な奴だ。微塵にも思っていない事を・・・」  
愛斗は冷たい表情でティアナが去っていく様子を眺めた。

「精々、使えるだけ使っさ。」「瞬間移動の碧眼」、十分な戦力になる。役に立たなくなったら捨てるだけだ。後腐れが無くていいだろう?。」

愛斗の冷たい笑みは消えず、静寂が玉座の間を支配していた。

中東の広大な荒地。不毛の大地は何処までも続くように見え、訪れる者を絶望に陥れるようにも見える。

そんな灰色の空の下をEMAの一団が編隊飛行を行っていた。前方に聳え立つ黒い建造物を目指し、部隊は進んでいた。

先頭の黒いEMA、紫電のコックピットでは愛斗が前方の建造物を見つめていた。

「カーリーヌ、止まれ」

愛斗が無線で指示を出す。紫電の後ろに続く三十機ほどのEMAを率いているカーリーヌのハーヴィルスが動きを止めた。後ろの一団も同時に停止する。

「閣下、作戦内容を」

「まず、ティアナが潜入する。ティアナの合図でカーリーヌと直属部

隊は突入しろ。研究員、警備員、関係者は全員殺害しろ。俺と撫子、エティエンヌは外で待機し、出て来たフェリクスを討ち取る」

カリーヌが頷く。それと同時にティアナのオブティックが諜報部に向かい、一直線に飛んでいった。

オブティックが施設の地下道入り口前にたどり着くと、施設内からの通信が入った。

「こちら諜報部。IDと名前を」

「NO354、ティアナです。進入許可を」

ティアナは前と同じく冷たい声で応えた。そして直ぐに返事が返ってくる。

「了解しました。進入を許可します」

ゲートが開き、オブティックは中に進入した。ティアナは通信を愛斗へと切り替えた。

「お兄様、ゲートが開きました。今の内に」

「分かった。カリーヌ、撫子、突撃だ。関係者を生きて逃がすな」

カリーヌ率いる部隊と撫子が最高速度で施設へと向かい、飛んでいった。愛斗とエティエンヌは外で待機だ。

ゲートの守備をしていた中年の警備員はまず、EMAの一団が進入してきたことに異変を感じただろう。しかし、もう手遅れだった。次の瞬間、ハーヴィルスから発射されたミサイルがゲートの開閉管理室ごと吹き飛ばし、全軍が一斉に施設内に雪崩れ込んだ。

鳴り響く警報。施設内から慌てて出て来た人間を容赦なく機銃で撃ち殺していった。

「我ながら残酷ね・・・でも任務をこなさないと」

カリーヌは自分の理性を押さえつけ、白衣を着た研究員に向け、容赦なく発砲した。警備員にも容赦なくミサイルを叩き込む。

施設内は広く天井も高いため、EMAが飛び回る事が出来た。カリーヌ又直属部隊は地面から二十メートルは在ろうかという天井付近

からミサイル、機銃を逃げ惑う人々に撃っていた。

ミサイルを施設の建造物に撃ち込んでいると、ハーヴィルスの横に撫子の紫電参式が近づいてきた。

「あら、撫子さんは戦闘に参加しないのね」

「ああ、この連中には知り合いが多くてな……何、昔仕事仲間だったんだよ。フェリクスや研究員とはね……」

「一体、どういう研究なの？」

「お前に話しても理解出来るか分かんが……ブリューナクや碧眼についての研究を行っていた」

カリー又はその手の話に興味が無かった。コックピットから左の方を向くと、なにやら軍人らしき人々がミサイルや機銃を構えているのが見えた。

「敵を発見、射殺します」

ハーヴィルスの右手に内蔵されている機銃が火を噴き、十数名の軍人を蜂の巣にした。撫子はその軍人を見て、顔をしかめた。

「あら、お知り合い？」

「まあな」

撫子はコックピットを開け、近づいていった。

「久しぶりだな。リーク將軍。元気か？」

体中を撃たれていたリーク將軍は息も絶え絶えに、撫子に懇願した。

「助けてくれ……死にたくないんだ……」

撫子はふうと溜息をついた。知り合いだということとで助けてやるかな。撫子はそう考えた。

「待っている。今、乗せてやる」

その時、ハーヴィルスの機銃が將軍たちを更に撃ち抜いた。リーク將軍は完全に息絶えてしまった。

「おい！何故撃った？」

「何故って。内部の人間は全員虐殺せよ、との命令ですから」

カリー又はそう言い、飛び去っていった。逃げている研究員を見

つけると、機銃を撃ち込んでいた。

「それにしても・・・フェリクスが見当たらないな・・・」

撫子は一人呟いた。

その頃、施設内の格納庫にフェリクスはいた。目の前にはほぼ球体のE M Aが待機している。

「これが試作機、アイギスですね。実戦シミュレーションとしてはいい相手では無いですか。皇帝陛下自らがやってくるなんて・・・」  
フェリクスは独り言を呟き、コックピットに乗り込んだ。

「アイギス、発進！」

格納庫の扉から、高速でアイギスは飛び立っていった。

カリー又は地上を見渡して、一言呟いた。

「もう粗方終ったし、後は残りの始末かしらね」

そう呟いた時、通信がハーヴィルスに入った。

「こちらN12、数百名の子供を発見しました。恐らく、この施設に収容されている子供ではとされます。一応、抵抗はしてきませんが・・・どうします？」

「構いません。全員射殺です。この施設の人間は一人たりとも逃がしてはいけないわ」

「了解」

それと同時に通信の雑音に雑ざって、悲鳴と銃声が聞こえた。カリー又は溜息をつき、シートに持たれなかった。

「私も堕ちたわね。閣下がやり遂げたら軍人なんてもう辞めるわ」  
そう言い、コックピットから外を見渡した。

「あれは？」

百メートルほど先に球体に近いE M Aが飛んでいるのを発見した。  
「あれがフェリクスね。撫子さん！フェリクスを発見、追跡するわ」  
「分かった。私も行く。愛斗に連絡を取るから先に行け」

ハーヴィルスが先に飛び立っていった。紫電参式は愛斗へと通信を繋げた。

「愛斗か？」

「そうだ。何かあったのか？」

「ああ、フェリクスがそちらに向かっている。恐らく狙いはお前だろう。そっちの戦力は？」

「俺とエティエンヌ、ティアナだ」

撫子は小さく頷き、フェリクスの後を追いつめた。

この施設から出るゲートは二つ。そのうちの一つは既に封鎖してある。フェリクスは残りの一つから脱出を試みるはず。

愛斗の狙いはそこだった。

紫電とオプティック、そしてエティエンヌのタルタロスが残されたゲートの前で待ち伏せしていたのだ。

エティエンヌのタルタロスは両腕が楕円形の刃物、プラズマシエルになっていて、戦闘時にはその刃がプラズマを帯び、チェンソーの様に回転し、絶大な破壊力を持つ。遠距離武器は持ち合わせていないものの、それでも尚、帝国随一の性能を誇る精鋭機だ。

「撫子、カリィヌはゲートの内側で待機させる。念のためだ」

「分かった。私はそっちに向かえばいいんだな？」

「ああ」

撫子はカリィヌにその旨を伝え、愛斗の元へ向かった。

「ヨハン様、レーダーに反応。フェリクスと思われます」

エティエンヌからの通信を受け、紫電は上空へ向かった。ゲートの方角から球体のEMAが向かってくるのが見える。

「あれは・・・まさか・・・」

愛斗はフェリクスのEMA、アイギスをその目で見て、自分の目

を疑った。

「エティエンヌ、解析結果を！」

「はい、恐らくロラン殿の乗っていた。ベディウェアと同じタイプのE M Aと思われますが」

「可動変形型か・・・厄介だぞ」

アイギスは真っ直ぐこちらに向かってくる。愛斗はエティエンヌとティアナを両翼に移動させた。

「いいか、気をつける。奴はどんな攻撃をしてくるか分からないぞ」  
アイギスは紫電に突っ込むかと思いきや、タルタロスの方へ向かった。突進を避けたタルタロスを攻撃せずに素早い動きで紫電の後ろに回りこんだ。

「何？」

アイギスから発射されたロストシューターが紫電の高出力エアウイングを破壊した。

「これでは！？」

紫電の出力が五十パーセントに下がっていく。愛斗は必死にスロットを倒すが、出力はそれ以上は上がらない。

「さすがの紫電も出力が半分では、使い物になりませんね」

フェリクスが笑みを浮かべたまま言った。愛斗は舌打ちをした。

「お兄様！任せて下さい！」

オプティックがナイトランスを構え、アイギスに振り下ろした。

それに反応するようにアイギスのロストシューターがナイトランスを弾き返した。

「ティアナ！俺のブリューナクとお前の碧眼でケリをつけるぞ！」

「はい、お兄様！」

愛斗のブリューナクが発動し、紫電の出力を補う。ティアナの碧眼でオプティックはアイギスの背後に瞬間移動した。

「させませんよ！」

フェリクスは操縦桿の脇にあるスイッチを押した。それと同時に結界のようなものがあたりに広がった。愛斗のブリューナクとティ

アナの碧眼が輝きを失っていく。

「何だと？」

「そんな・・・」

二人が悔しそうに声を上げる。

「この結界が張つてある限り、貴方達の力は使えません。さあ、もう諦めたら如何ですか？」

アイギスのロストシューターがオプティックに襲い掛かる。辛うじてナイトランスで防いだが、形勢は不利になった。

「お兄様に手を出すな！」

オプティックは怒涛の勢いでアイギスにナイトランスを振り下ろす。それを避けたアイギスはロストシューターでナイトランスを弾き飛ばした。

「貴方は恩知らずですね。誰が貴方の命を救ったのか覚えていますか？感情制御の問題から貴方は処分される予定だったのですよ。貴方の能力を買った私が救ってやったと言うのに・・・動物の方がまだマシですよ」

「黙って！貴方だって結局私を利用していただけじゃない！偉そうに保護者面をするな！」

フェリクスは呆れたように、首を振った。アイギスは容赦なくロストシューターを射出し、オプティックの両脚を砕いた。

「え？」

「貴方を助けたのは私の見込み違いでした」

アイギスによってオプティックは地面に叩き落された。アイギスは紫電とタルタロスに狙いを定めた。

「愛斗！」

撫子の紫電参式が漸く到着した。フェリクスはそれを見て、ダルそうに舌打ちをした。

「邪魔ですよ」

ロストシューターが紫電参式を弾き、紫電参式も地面に落下した。「さあ、後は貴方達だけですよ」

愛斗はエティエンヌに向かい叫んだ。

「俺が時間を稼ぐ！お前は部隊を連れて退却しろ！」

「いえ、ヨハン様。その必要は御座いません。私が戦いましょう」  
タルタロスはアイギスに向かい合った。

「聖霊騎士団如きが私に勝とうなんて思っていないませんよね？」

「いや、そのつもりだ」

アイギスは両翼についている機銃でタルタロスを撃った。タルタロスの両腕のプラズマシエルトが回転を初めた。

「私は既に団長を超えている。貴様如きには負けん」

タルタロスは機銃を避けながら、アイギスに接近、右腕のプラズマシエルトを振り下ろした。アイギスの表面の装甲に火花が散る。

アイギスは回転しながら態勢を立て直した。

「どうやら団長を超えたと言っるのは本当の様ですね」

フェリクスは笑いながら、上空へと向かった。

「今日はここまでです。どうやら貴方と戦っても私は勝てそうにありませんので」

アイギスから脱出ポッドが射出された。それと同時にアイギスが自爆する。

「では。ヴィルフリート様に報告しなくてはいいけませんので」  
その声で通信は途切れた。

「ヨハン様、敵は逃げたようです。今の内に撤退を」  
「分かっている。紫電を修理しないとな」

「どうやらまたロイツクの仕事が増えそうだ。」

愛斗はそう思い、笑顔でエティエンヌに返事を返した。

しかし、愛斗達が攻撃するまでもなく、既にヴィルフリートの陰謀は完成していた。だが愛斗はまだ知る由も無かった。

## 五十六話 諜報部奇襲作戦（後書き）

### 次回予告

諜報部を殲滅することに成功した愛斗。

しかそれが新たな波乱を呼ぶ。

突如、ハーゲンブルグに使節として送られてきたリリー。

リリーは城下で愛斗に対しての群衆の思いを目の当たりにする。

次回五十七話「リリー 国交大使」お楽しみに

## 五十七話 リリー国交大使

「そうか。ヨハンが行動に出たか・・・」

「はい。皇帝直属の騎士、エティエンヌは恐るべき強さです。現在の兵力では太刀打ち出来ないかと」

日本の共和国元老院宮殿の司令室、ヴィルフリートは中東より帰還したフェリクスの報告を聞いていた。

「心配するな。既に紫電、インフェルノと並ぶEMAを開発してある。パイロットも目星をつけてあるのだ」

「そのパイロットとは？」

「聖霊騎士団、ナーシャ・ギルマンだ。彼女の操縦テクニックはお前と同等、いやそれ以上だ」

ヴィルフリートは冷たい笑みを浮かべながら、呟いた。

「これより我らは外交官を神聖ストライダム帝国に派遣する」

「外交官とは？」

「鳳凰院絢殿とリリー・ケンプフェル国交大使殿だ。特にリリー殿には特別任務を与える。今すぐ呼び出せ」

フェリクスは小さく頷き、部屋から出て行った。ヴィルフリートは窓から青空を眺めた。

「帝都はいずれ瓦礫の山になる。束の間の幸せを味わってくれ。ヨハン」

ヴィルフリートの独り言は誰にも聞こえる事は無かった。

空は・・・只蒼かった。

何時ものように玉座の間に座り、職務をこなしていた愛斗は部屋に突然飛び込んで来たマリアに驚き、ペンを取り落とした。

「どうした？随分と慌てているようだな」

息も切れ切れにマリアは報告を始めた。

「共和国からの通達よ。先日 of 諜報部攻撃の説明を求める、よって

話し合いを行うために大使を二名派遣した。早急に話し合いの場を設けることを要求する。と言っているわ」

「そうか。随分と強硬だな。ヴィルフリートらしくない」

マリアも顔を顰める。幼い頃からヴィルフリートを知っている二人にとつて、彼の性格は全て承知していた。その上でこの行動は多少予想外だった。

「では素直に従おう。大使の名前は？」

「えーっと、鳳凰院絢、リリー・ケンプフェルと書いてあるわ」

愛斗の顔が引きつる。ティアナがそれに気付いたのか、愛斗に尋ねた。

「お兄様、お知り合いですか？」

「ああ、俺の大事な人だ」

ティアナはその言葉に顔を顰めた。

私より大切な人？お兄様は私が一番大切なのではないの？私よりお兄様に愛されているなんて・・・。

ティアナの心に邪悪な嫉妬が生まれた。愛情を感じずに育ったせいか、愛情表現が上手く出来ないのだ。自分では自覚していないようだが、ティアナの心はかなり捻じ曲がっていた。

「ではお迎えの準備をしなくてはいいけませんね」

ティアナは作り笑顔で応えた。丁度、傍に居たロランが首を傾げた。

「でも何で奴はその二人を大使に選んだんでしょうかね？」

「ヴィルフリートのことだ。企みだろう」

愛斗は首から掛けてあるロケットを手で撫でた。

「しかし先日の攻撃での虐殺の噂が城下に流れてしまっているようです。日に日に陛下は国民から恨まれているようですが・・・」

ライナーが率直な意見を述べた。

「もちろん知っている。それにそうでなくては成功しないだろう。ところで秀人と渚はどうした？」

「ああ、二人ならさつき城下に出かけました。用事があるみたいで」

「そうか。では俺も出かけよう。少し用事があるんでな」  
愛斗はそう言い、玉座の間を後にした。

三日後の正午。

バイエルン宮殿の発着場に一隻の戦艦が舞い降りた。少数の護衛に守られて降りてくるのは、二人の少女であつた。

背の高い方は車椅子を押しながら歩いている。

この二人が国交大使に任命された絢とリリーだ。日本からの長旅を終えて、漸くたどり着いたのだ。

「車椅子も結構重いんやな。イヴオンの気持ちがよく分かったわ」

絢がリリーの車椅子を押しながら素直な感想を述べる。リリーも笑顔でそれに応える。

「はい。無理はなさらないくださいね」

「大丈夫や。これくらい朝飯前や」

二人が会話を弾ませていると、数十人の兵士と一緒に一人の少女が宮殿から出て来た。黒髪で穏やかな顔をしたその少女は皆がよく知っている人物だ。

「貴方方が大使殿ですね。私は南風渚。陛下の下で軍の指揮を執らせて頂いております」

渚はリリーの車椅子を押し始めた。リリーもそれに抵抗せず、従った。

「渚さん。貴方の事は秀人さんからイヴオンさんからも聞いています。とても正義感が強いって愛斗さんも言っていました。そんな貴方が何故？」

渚は静かにリリーの問いに答えた。

「私は自分の正義を貫こうと思うの。只それだけよ」  
「そうですか」

渚はそのまま車椅子を押し、会議場へ向かった。

会議場は臨時で設けられたという事もあって、そこまで豪華な造

りでは無かった。

リリーと絢はとりあえず指定された席に座る。反対側に眺えられた玉座を模した椅子には愛斗が、皇帝が座っていた。

冷たい視線は二人を見据える。

熱海の時とは随分と違う顔だった。恐らくこれが皇帝としての顔なのだろう。冷たく、そして無情で……。愛斗という男は仮面を被り続けているのだ。その下の優しい笑顔を隠して……。

リリーは数日前ならそう思っただろう。しかし、今のリリーは愛斗を信用する事が出来なかった。

ヴィルフリートから知らされた悪魔の力、ブリューナク。そして罪のない人たちの虐殺。

全て愛斗さんがやった事だ。その責任は負わなくてはいけない。例え、その先に待つ結果を愛斗さんが望んでいなかったとしても。

愛斗も席に座るリリーを冷たい目で見つめた。

俺はこの少女を愛している。世界で一番、そして今まで出会った誰よりも。

この気持ちを伝えられたらどんなに楽なのだろうか……。伝えたい。昔の様に暮らしたい。世界など捨てればまた昔に戻るのかもしれない。あの頃に帰れるのかも知れない。

この考えが脳裏を掠める度に愛斗は頭から追い出してきた。

愛斗には既にリリーを笑顔にすることは出来ないのだ。生きている間は……。

「では、まず初めに共和国大使の方々に今回の来国の理由を説明していただきたいのですが」

マリアが二人に尋ねる。絢が書類片手に立ち上がり、読み上げた。「七日前に行われた共和国直属施設、特殊諜報部奇襲の件についてです。我が共和国側の施設を破壊し、関係者を虐殺した責任を皇帝であるヨハン・ジークフリード・ヨゼフィーネ・フォン・ストライダム陛下に負って頂きたいのです」

マリアが愛斗と顔を見合わせる。愛斗は立ち上がり、何時かの様

に冷たい声で言い放った。

「施設が存在していた地域は我が帝国領。自国の領土に存在する施設をどう扱おうがそれは国の勝手。それに特殊諜報部は兵器開発を目的とした施設、兵器の資料もこちらでは回収済みだ。他国の領土での軍事活動は条約違反では無いのか？」

絢は言葉に詰まった。愛斗はその様子を見て、更に問い詰めた。

「ではこちらからの質問だ。開発資料に記述してあった兵器、「レーヴァンティン」とは何だ？」

「その様な兵器は存在しておりません。いえ、少なくとも私の知る限りは存在しておりません」

愛斗はリリーに目をやった。先ほどから俯いて、顔を上げようとしない。

「遠路から遙々我が帝国に来たのだ。滞在の間はゆっくりと休んでいけ。下がれ」

愛斗はそれだけ言うと、会議室から出て行った。

マリアが書類を纏め、二人を見た。

「では部屋まで案内いたします。着いて来て下さい」

絢は大人しくその後が続いたが、リリーは動かなかった。

「すいません。少し宮殿内を散策させてはもらえないでしょうか？」

リリーの頼みにマリアは頷いた。

「構いません。では」

絢はそのままマリアと一緒に出て行った。後ろに控えていた茶髪の男性が車椅子の持ち手を持った。

「じゃあ、行こうか。どちらへ？」

「貴方は？」

「俺は帝国軍北部方面軍指揮官のロラン・ギヌメールですよ」

「貴方がロランさん？秀人さんから話は聞いています。とっても気さくで明るい方と言っていました」

ロランは恥ずかしそうに目を伏せた。

「光栄だな。で、どちらへ？」

「城下を少し。お願いできますか？」

「分かった。じゃあ」

ロランが車椅子を押し始める。二人はそのまま城下へと向かった。

「これがハーゲンブルグなのですね」

リリーは今、歴史的な町並みが並ぶ商店街に居た。

ハーゲンブルグは古代から栄えてきた地で、町並みは全てが古風だった。人々は活気に溢れている。

一つ気になった事は、皆が皆不満を募らせた表情を、疑心に満ち溢れた表情をしていることだ。

「ロランさん。あの喫茶店に入りましょう。少し疲れました」

「ああ、分かった」

ロランは車椅子を押しながら喫茶店へと入った。

喫茶店の中は酒場のような感じで、女性のバーテンダーが一人、客が十人ほどいた。適当に空いている席にリリーが座ると、ロランは剣の柄に手を掛けた。

「ロランさん？」

「いや、城下とは言えど物騒なこともあるからな。念のため常に剣は身に着けているんだ」

そう言い、周りに目を光らせた。周りの客は気付いた様子も無く、一人のウェイトレスがこちらにやってきただけだった。

「ご注文は？」

「エスプレッソを」

「じゃあ俺はミルクティーをお願いします」

ウェイトレスはロランとリリーを何処かの貴族と判断したようだ。馬鹿に丁寧な口調だった。

五分程経って、運ばれてきたエスプレッソとミルクティーに口をつけた。その時、入り口から一人の男が焦った様子で走ってきた。

「おい！姉ちゃん！」

バーテンダーの女性はその男の声に反応した。どうやら知り合いのようだ。

「どうしたんだい？ ジョゼフ？」

「聞いてくれよ！ 共和国からの大使が派遣されたってよ！」

リリーは少し耳を傾けた。

「例の虐殺の件でかい？ あの皇帝は酷いもんだね」

「そりゃ、そうだぜ！ 初めは貴族を追放したりとか、聖君だとか騒がれたさ。でも実際は只の暴君だったじゃねか！」

「レオンハルト様から皇位を奪ったのよ！ 悪の皇帝はヨハンよ！」

一人の男が紙面を読み上げた。

「会見には皇帝が直々に出席。陛下の栄光あるご判断に期待。だよ」

「何が栄光だよ！」

「虐殺皇帝が！」

「悪の皇帝に死を！」

口々に愛斗を罵る言葉が飛び交う。バーテンダーの女性がそれ抑止した。

「あんた達！ そんなこと言っていると捕まって一族諸共殺されちゃうよ！」

その言葉に喫茶店の輩は静まり返った。

ロランはリリーの耳元で囁いた。

「出ようか？」

「はい・・・」

リリーは小声で呟き、喫茶店を後にした。

愛斗への憎しみを直に見て、既に喋る気力すらも無かった。

## 五十七話 リリー 国交大使（後書き）

### 次回予告

愛斗が信用出来ずに戸惑うリリー。

愛斗もそれに気付き、心を悩ませる。

愛斗が下した決断とは？そして二人の関係はどうなるのか？

次回五十八話「悲しみの決別」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

誤字などのご報告もお願ひします。

五十八話 悲しみの決別（前書き）

今回は切ないお話です。多分・・・

## 五十八話 悲しみの決別

リリーがハーゲンブルグにやって来てから十日。

あの喫茶店の出来事から、リリーは城下に出ることを控えた。これ以上、愛斗への暴言を聞きたくなかったのだ。

そのため、リリーは毎日のようにロランに車椅子を押して貰い、宮殿内の庭園を散策するのだ。

愛斗は熱海の時とは違って、リリーに一度も近づいてこない。そればかりか、ここ五日間は姿すら見ていない。

あの時の愛斗さんは何処に行ったんだろうか？

リリーはそう思い、寂しそうに庭園の花を眺めた。

色とりどりの花は互いに競い合うようにして咲き誇っている。それに何の意味があるのか？ふとそんなことまで考えてしまう。

「リリー？気分でも悪い？」

「いえ、大丈夫です。少し考え事をしていて……」

「ならいいけど」

リリーは愛斗の事が分からなくなっていた。

残酷な悪魔なのか、それとも優しくて昔と変わらない青年なのか。リリーは自分でも今の状況が分かっていた。交渉は難航している。本来ならば国に帰還するはずが今だに帰国命令が降りないという事は、リリーが交渉の人質になっているという事なのだ。

まるで籠の鳥だ。

リリーはそう思った。

結局、私は交渉の道具でしかないのか……。所詮愛斗さんにとっても小さな存在。愛斗さんという大きな物語のほんの小さなエキストラ。

「リリー？」

「大丈夫です……あの、ロランさん？」

ロランは笑顔でリリーを見つめる。

「どうしたの？」

「いえ、ロランさんから見て、愛斗さんはどういう人物ですか？」

ロランは真面目な顔で答える。

「皇帝陛下は自らの意思を最後まで貫く強い意志をもったお方です。決して暴君などでは」

「そうですか・・・」

「皇帝陛下、ご入来！」

大きな声が響いた。リリーとロランはその方向を向く。

宮殿の庭園に続く階段を愛斗が降りてくるのを確認した。その横にはマリアが、後ろには渚とティアナがいる。秀人はいないようだ。庭園内で訓練をしていた兵士達は皇帝の姿を確認すると、一斉に敬礼した。愛斗はその姿を満足そうに見た。

「訓練を続ける。毎日、怠るな」

「ユア、ウィル！」

兵士が唱和する。愛斗はこちらに気付いた様で、歩みを進めて来た。

ロランが片膝をつき、頭を深く下げた。

「ロラン」

愛斗が静かにロランの名前を呼ぶ。

「はい、陛下」

愛斗は優しい笑みを浮かべ、リリーを見る。

「午後から雨が降るようだ。大使殿を中に戻してくれ。いいな？」

「はい、陛下。それと少し御話があるのですが・・・よろしいですか？」

「構わない」

ロランは傍に居たメイドにリリーを部屋に帰すように指示を出した。

「お前たちも下がっていいぞ」

愛斗が後ろにいたマリアや渚、ティアナに言う。三人は何も言わずに、戻っていった。

誰も居なくなった庭園。雨が近づいてきている印に、空気には湿気が混じっている。空も青い部分が減り、灰色の雲が増えて来ていた。

「何だ？ ロラン」

ロランは愛斗を見つめ、一息ついて若干叫び気味に言った。

「あんまりじゃないか？ リリーは隊長の大切な人じゃ無かったんですか？ ならどうして気遣って声を掛けてあげる事位出来ないんですか？ 俺は思いますけど、隊長は鬼です。優しい言葉も掛けられないなんて・・・家族でしょう？ 何故・・・」

そこまで言って、ロランは口を噤んだ。愛斗は下を向き、辛そうな顔をしている。ロランは急いで自分の言ったことを後悔した。

「すいません・・・差し出がましいことを・・・」

しかし、愛斗はロランを真っ直ぐに見て、口を開いた。

「いや、お前の言うとおりだ。今晚は珍しく暇だ。会いに行くよ。話をしてくる」

ロランの顔が輝く。

「ありがとうございます。って、何で俺が礼を言ってるんでしょうかね？」

「ありがとうは俺のセリフだ。お前はリリーのことをよく考えている。優しいな」

愛斗に褒められたロランは照れたのか、ぶつぶつと一言、三言言って立ち去った。愛斗も暗い空を見つめ、溜息をついた。

その夜、リリーの部屋ではリリーが一人で机の上に置いてある愛斗の写真を見ていた。

写真の中の愛斗は澄み切った笑顔で笑っていた。

「愛斗さん・・・あの頃の愛斗さんは何処に行ってしまったんです

か？」

リリーは連日、部屋で愛斗の写真を見て過去の感傷に浸っている。リリーにとつての愛斗は優しい人物で、今の様な冷酷な表情は見せたことが無い。いや、自分の目が見えないだけで、本当はどうだったか知らないだけかもしれないが。

とにかくリリーは愛斗が好きだった。リリーは知らないがそれは愛斗も同じで、お互いの事を思つて行動していることがお互いを苦しめているなんて、二人は想像もしていなかった。

要するに二人は完全にすれ違っていたのである。

夜の闇が深まっていき、リリーがそろそろ床に着こうとしていた時、ドアが叩かれた。

誰だろう？リリーはそう思った。

この時間にメイドは何時も来ない。今まで来た事が無いのだ。だとしたら・・・。リリーはロランを想像した。ロランならリリーを気遣ってくるかも知れない。しかし、その考えは次に響いた声と、扉を開いて入ってきた人物を見て、消えた。

「リリー、久しぶりに一緒に話さないか？」

その男は愛斗だった。

リリーの顔が冷め、愛斗の顔を静かに見つめた。

愛斗は静かにリリーの方に歩みを進めた。そして昔と変わらない優しい笑顔になる。

「夜更かしは体に悪いんだ。もう寝ないとな」

リリーは静かな目で愛斗を見つめ続ける。ふと顔を逸らし、「一介の大使の身など別に気遣わなくても・・・。」と言った。

愛斗はそのままリリーの脇にある椅子に座った。キシリと音を立てて、椅子が軋む。

愛斗はそのまま視線を机の上の写真に移した。

「俺の写真か・・・これはお前の十歳の誕生日に撮った写真だな」

「覚えていたんですね」

「お前の誕生日を忘れるわけが無いだろう？」

愛斗は相変わらずの声のトーンで続けた。

「あの頃は・・・楽しかったです」

愛斗は急に表情を険しくした。

「過去を振り返るな。それよりも未来を見る」

愛斗の冷たい言葉にリリーは項垂れた。

「そうですね・・・結局、私は愛斗さんにとってちっぽけな存在だったんですね？」

「そう思うか？俺が憎いか？」

リリーは何も言わずに只、項垂れた。愛斗もその表情を静かな瞳で見つめる。その瞳は相変わらず赤と青だった。

リリーは何も言わなかったが、愛斗もそれは同じだった。只一言、  
「お前はそれでいいんだ。お前は一人でも生きていけるんだからな」  
そう言った。

リリーは再び、口を開こうとしたが、愛斗がそれを遮る。

「お前に謝りたいんだ。俺のせいでお前は苦しんでいる。俺が居なかったら、お前は普通の人生を歩めたのかも知れない」

「違います！それは・・・」

「いいんだ。分かってるよ」

愛斗はそう言い、昔と同じようにリリーを抱き締めた。

「俺が責任をとる。俺がお前を元に戻してやる」

「何を？・・・まさか・・・」

愛斗はリリーの顔を、その透き通る様な瞳をまじまじと見つめた。  
「すまなかった・・・俺が忘れさせてやる。嫌な事は全て・・・」

愛斗の右目が。そう、碧眼が青く輝いた。

『忘却』の碧眼。

愛斗の瞳にリリーが映る。愛斗の瞳から出る青は全てを洗い清める様に、リリーの瞳を照らした。

「愛斗さん！やめ……………」

言葉は続かなかった。

光が収まった後のリリーは呆然と愛斗を見つめていた。そして不意に呟く。

「皇帝陛下？どうしてここに？」

愛斗は皇帝の顔で微笑んだ。

「お前の身を案じたただけだ。夜更かしは肌に悪いぞ」

愛斗はリリーを抱え、ベッドへと運び、毛布を掛けた。そしてその手を握る。

「おやすみ」

小さな呟きだった。でもそこには大きな意味が、愛情が込められていた。

部屋を出ようと立ち去る愛斗をリリーが呼び止める。

「待ってください。こんなことを陛下に申し上げるのもなんですが、一つ聞いて欲しいことがあるんです。どうして陛下に申し上げなくてはいけないのか分かりませんが……………」

「言つてごらん？」

愛斗は優しい声で呟き、リリーの話に耳を傾ける。

「私、今まで何かに縛られて生きていたような気がするんです。何か大きくて、温かいものに……………」

「それは大事な人か？」

愛斗は分かりきっていることを聞いた。もちろん、わざとだ。

「はい…………多分…………でも何故か分からないんです。誰だか思い出せない。でもきつと私はその人のことを愛していたんだと思います」

「そうか。ならそれでいいじゃないか。人なんて脆いもの、何時か逢える日が来る。その時まで、さようなら」

「え？」

リリーがおどけた声を上げる。愛斗は愛する者と完全に決別したのだ。静かに、振り向かずに部屋を出る。

愛斗の目には悲しみが浮かんでいたのを見たのは、窓の外からその様子を見ていた撫子だけだった。

## 五十八話 悲しみの決別（後書き）

### 次回予告

リリーから自分についての記憶を奪った愛斗。

しかし愛斗とリリーの関係を快く思わないティアナがいた。嫉妬と僻みに業を滾らすティアナが狂気の行動を起こす。

次回五十九話「妬みと憎しみ」お楽しみに

五十九話 妬みと憎しみ（前書き）

今回は悲しい話です。

## 五十九話 妬みと憎しみ

ティアナはリリーの部屋から出て行く愛斗を何度も目撃していた。一体、何をしているのかしら？」

ティアナの疑問はそこだった。

第一、愛斗とリリーの関係をティアナは快く思っていなかった。ティアナにとっての愛斗は唯一の存在であり、兄である。それはリリーにとっても同じだが、ティアナは自分勝手だ。自分の気に入らない事、人を全て消してきた。ティアナにはそれを実行出来る力を持っていた。

ティアナはふと、裾の中の拳銃に手を掛けた。

私にはこれがある。その気になればリリーだろうが、誰でも殺せる。私とお兄様の関係を邪魔する者は許さないわ。

ティアナの嫉妬心はまだ抑えられていた。そう、まだ今は・・・。

愛斗は白馬に跨り、渚と秀人、ロランを引き連れてハーゲンブルグを一望出来る場所に向かっていた。たまの楽しみである遠乗りだ。小高い丘に到着し、昔から変わらない帝都を眺める。愛斗は感想を漏らした。

「いい都じゃないか？」

渚も頷く。

「そうね。東京とは違って、また別の魅力があるわ」

「俺もそう思います。やっぱり落ち着きますね」

愛斗は次に巨大に聳え立つバイエルン宮殿を見た。白い外壁に、中世の城をそのまま再現したような宮殿はとても美しかった。

「愛斗？少し聞いてもいいか？」

「何だ？」

秀人が愛斗に尋ねた。

「僕はリリーの食事を時々持つていく。そこで気付いたんだ。」何かをしたという事に」

愛斗は頂垂れた。やはり感づかれたか……。

「そうだ。俺に関する記憶を全て消し去った。只それだけだ」

「どうして？」

渚が驚いた顔で尋ねる。ロランも薄々気付いていたようで、特に驚かなかった。

「リリーは俺のせいで苦しんでいた。だから解放したんだ」

秀人は黙り込んだ。秀人には自分なりの考えがある。でもそれが人と一致するかどうか？それは分からなかった。

「愛斗、一つ言わせてもらうと、僕は間違っていると思う。最後くらいは傍に居てあげれば……」

「秀人、お前は若い。考え方も素直だ。だがそれは人に通用しない場合もある。俺みたいな人間にはな……」

愛斗の意味ありげな言葉に秀人は口を閉じた。渚も秀人の様子を見て、頷く。

「秀人君、愛くんのやろうとしている事は間違っていないわ。そういう考え方もあるのかも知れないわね」

「俺も……隊長のやろうとしていることは分からないでもないです。でも……いや、何でも無いです」

愛斗は何も言わずに、手綱を握り、馬を翻した。

「戻るぞ。スイス連邦王国の会議に参加しなくてはいけない。一時間後に出発だ」

愛斗は城の方向に引き返していった。渚とロランもそれに続く。

秀人はしばらくその場を動かなかった。

「では行つてらっしゃい。お兄様」

「気をつけてね。ヨハン」

マリアとティアナに別れを告げ、愛斗はドレッドノートに乗り込

んだ。スイスとの会議に出席するため、愛斗は明日までスイスから戻ってこない。渚、ロラン、秀人も愛斗に着いていく。もちろんライナーもだ。エティエンヌは今、アフリカ戦線にいる。帝都の留守を任されたのはティアナと撫子にマリア、カリーヌの四人だ。カリーヌは軍の演習に出かけている。

そのため、実質的に帝都に残るのは撫子、ティアナ、マリアの三人だ。

ドレッドノートが浮上していき、山の彼方に消えるのを見届け、マリアが宮殿へと引き返していった。

「ティアナさん、何時もの書類をお願いしますか？」

「はい、マリアお姉さま」

ティアナは満面の笑みで応えた。撫子はその様子を冷たい目で見ている。

ティアナにとって、撫子も忌まわしき存在だった。何だか分からないが、何時も愛斗にくつついている。今日は違うみたいだが。

リリーに撫子、それに渚も邪魔な存在だった。そしてもう一人、ティアナがお姉さまと呼んでいる、目の前の茶髪の皇女、マリア・ストライダムだ。何様つもりか知らないが、愛斗と親しく話している。しかも従妹だという。

でもティアナは気にならない。何故なら、愛斗は自分だけを愛してくれている。そう思っているからだ。

一人で笑顔を見せているティアナに撫子が近づいた。

「おい、お前。お前が一番だと思っているのだろうが、お前がどんなに頑張ろうが、愛斗の一番はリリーだ。他には存在しないぞ」

「はい？いきなり何のことですか？」

撫子は厳しい表情のまま続けた。

「惚けるな。私の能力は知っているはずだ」

ティアナは憎しみの籠った視線を撫子にぶつけ、黙って立ち去っていった。

その夜。

色々と機嫌が悪いティアナはぶつぶつと呟きながら、宮殿の廊下を歩いていた。何度も何度も懐の拳銃に手がのびる。いつそ邪魔な奴は全て消してしまえばいいのでは？ そうも思った。

無意識のうちに応接間に入る。下を向き、沸いてくる嫉妬心と戦う。

「ティアナさん？」

ふと名前を呼ばれた。目の前には忌まわしき茶髪の皇女、マリアがいた。

「あら、マリアお姉さま。何か私に御用？」

作り笑顔で対応する。内側には怒りの業火を滾らせながら。

「いえ、少しお聞きしたい事があるのです」

一息あけて、マリアが口を開いた。

「貴方、諜報部のスパイだったのですよね？」

ティアナは身構えた。

何故この女がそのことを？ 知っているのはお兄様だけのはず……いや、もう一人いた。

「撫子さんから聞いたのですか？」

しかし、マリアは首を横に振った。

「いえ、ヨハンから聞きました」

「お兄様が？」

「ええ。私は貴方に感心しているのです」

ティアナは耳を疑った。

この女が私を？ 馬鹿げてる。

「何故その様な事を？」

「貴方は諜報部を裏切ってまで、ヨハンと一緒に居る事を願った。よっぽど好きなのですね。ヨハンのことが」

ティアナの顔が紅潮する。マリアがそれを見て、静かな声で笑った。

「図星みたいですね。私、そういった事には鋭いんですよ」  
そう言つて、また笑い始める。ティアナは逆にマリアに聞き返した。

「マリアお姉さまはどうなんですか？」

「私もヨハンが好きよ。だって初恋の人だもの」

「え？」

ティアナが驚きの声を上げる。

「私は小さい頃からヨハンを見てきた。優しく、誰でも愛す事が出来る。一目ぼれだったわ」

マリアは思い出したように喋り始めた。

ティアナの心は沈んでいた。

この女は私と同じ？お兄様を愛しているの？私の味方？

ティアナの怒り、嫉妬の炎は弱まろうとしていた。しかし、マリアは最大の失敗を犯した。

「みんな好きなのよ。ヨハンのことが。貴方もそして」リリー」さ  
んも」

リリー。

その名前でティアナの心の中の業火は爆発した。

止め処ない怒り、嫉妬、妬みの感情が渦巻く。

気付くと、ティアナは拳銃を引き抜き、マリアの胸に向けていた。  
撃鉄を起こし、引き金に手を掛ける。

「え？」

マリアの間の抜けた声。腹が立つ。

ティアナは容赦なく引き金を引いた。

鋭い爆音。マリアの胸に弾丸が命中し、鮮血が飛び散る。そのまま呆然とした表情で、床に仰向けに倒れた。

「渡さない。お兄様は・・・」

「ティアナ・・・貴方・・・」

「黙れ。お前に私を侮辱する権利はない」

ティアナは拳銃を裾にしまいこみ、立ち去ろうとした。

私のお兄様を奪おうなんて百年早い。次はリリー・ケンプフェルだ。アイツを殺せば、邪魔者は粗方居なくなる。そうすれば・・・。ティアナは無表情で応接間を出て行こうとした。ふと、ティアナはあることを思い出した。マリアに近づき、しゃがんだ。

「そういえば、私はリリー・ケンプフェルの部屋を知らなかったわ。教えてくださる？」

マリアは乾いた唇をゆっくりと動かす。

「教えない・・・絶対に・・・」

「そう・・・じゃあね」

ティアナは冷たい声で別れを告げた。永遠の別れを。

応接間の扉を閉め、リリーの部屋を探しに、ティアナは歩き出した。

宮殿の中庭にドレッドノートが着陸した。中からは愛斗が降りてくる。

「予想外の早さだったな。ここまで早く帰れるとは」

「まあそうですね。でも、隊長。出迎えがいませんね」

確かに。

何時もなら真っ先に駆けつけるマリアが今日は来ない。まだ眠る時間でも無いし・・・。

愛斗の背中に悪寒が走った。

宮殿の中庭に咲く薔薇が散り、噴水に落ちた。波紋が広がっていく。

「マリア！」

愛斗は走りだした。宮殿の扉を押し開け、中を走り回る。扉とい

う扉を全て開け、マリアの姿を探した。

何故だ？嫌な予感がする。鳥肌が収まらない。

愛斗は三階の応接間の扉を開いた。中は暖かく、暖炉の火が燃えていた。そしてその真ん中に横たわる人影がある。

「・・・あれは・・・！」

愛斗はその人影に向かって走り出した。

その人影の顔を見て、確信する。マリアだ。

「マリア！」

静かに横たわるマリアの胸の部分は血にぬれていた。青いカーペツトは血と混じり、紫色になっている。その出血量がマリアの命の短さを語っていた。

「酷い・・・誰がこんなことを・・・」

愛斗の声が漸く耳に届いたのか、マリアが薄っすらと目を開けた。その焦点が愛斗を捉える。

「ヨハン・・・？ヨハンなの？」

「そうだ。おい、渚！救護班を呼べ！」

「分かったわ！」

渚が頷き、走っていく。マリアは無理やり笑みを浮かべ、愛斗に話し掛けた。

「私より・・・リリーさんを・・・守ってあげて・・・狙われているわ・・・」

「狙われている！？誰に！」

マリアは口を開けなかった。

「まあいい！とにかく喋るな！」

マリアにその声が届いたのかは定かではないが、マリアはそれを無視した。

「私が初めて・・・ヨハンを知った日・・・即位記念のパレードの時・・・他の皇族からは・・・蔑まれても・・・ヨハンは堂々としていた・・・」

「よく覚えているな・・・でもそんなこと今は・・・」

「私の前から消えたとしても・・・ヨハンは何時も私の心の中にいた・・・笑顔で・・・正義感が強くて・・・負けず嫌いで・・・プライドが高くて・・・そして何よりも優しかった・・・だから私も頑張り続けた・・・何時、ヨハンが帰ってきててもいいように・・・部屋を綺麗にして・・・待ち続けた・・・それで・・・漸く現れてくれた・・・」

愛斗の左右の色が違う瞳から涙が溢れた。涙はマリアの頬に落ちる。

「マリア・・・俺はお前が思うような綺麗な人間じゃないんだ・・・」

「いいの・・・それでも・・・」

マリアの脈が弱まってきた。

このままでは・・・そうだ。一か八か使ってみるしかない。ブリユーナクを。

「マリア、俺の目を見る。しっかりと・・・」

マリアの目が愛斗の左目を捉える。

「絶対に死ぬな！」

瞳が輝き、マリアの顔を照らした。しかし、マリアの脈は弱まっていく一方だった。

「ヨハン・・・貴方にはお礼が言い切れないほどあるの・・・だから・・・」

「ダメだ！マリア！」

愛斗の目から零れ落ちる涙は量を増していく。そしてもう一度ブリユーナクを使おうとする。

「無駄だ。やめろ」

撫子の冷たい声が響く。

「うるさい！」

「お前の力は悪魔の力。故に人を救うことは出来ない。マリアの命を短くするだけだ」

「黙れ！俺は救ってみせる。この力で・・・」

マリアの目をもう一度見つめ、再びブリューナク使う。自分の副作用などどうでもいい。

「死ぬな！死ぬな！」

しかし、効果は虚しいほどにない。マリアはゆっくりと言葉を吐き出した。

「リリーさんが・・・危ない・・・今すぐ・・・助けてあげて・・・私の代わりに・・・」

一息つき、恐ろしくゆっくりと唇が動いた。

「さよ・・・なら・・・」

脈が途絶え、愛斗が握っていた腕から力が抜け落ちていく。

「あ・・・あああ」

愛斗の悲痛な声が応接間に響く。

「マリア！マリア！」

しかし、返事はない。その安らかな顔は寝ている様にしか見えない。愛斗の声が震え、呻き声が漏れる。

唾を飲み、もう一度マリアの手を握る。しかしその手は力なく、冷たかった。

「うわあああああああああああああああああああ！」

愛斗の絶叫が応接間に響き渡る。

撫子の瞳からは、一滴の涙が零れた。

## 五十九話 妬みと憎しみ（後書き）

### 次回予告

淡々とリリーの部屋に迫るティアナ。

狙うのはリリーの命だ。

リリーの運命は？

そしてティアナはどうなってしまうのか？

次回六十話「愛の崩壊」お楽しみに

## 六十話 愛の崩壊

ティアナは薄ら笑いを浮かべながら、離宮の客室を一つ一つ回っていた。

もうすぐ、リリー・ケンプフェルは死ぬ。そうすれば愛斗はティアナだけのものになる。もう誰にも渡さない。絶対に。

「ここでもないの？ 一体何処なのかしら？」

まあいい。夜は長く、時間はタップリがある。焦る事はない。ゆっくりと、慎重に・・・追い詰めればいいのだ。

マリアは今ごろ死んでいるだろう。あえて急所は外したが、あの出血量では長くは持たないだろう。

暗闇の中、携帯電話が鳴り響いた。

「誰・・・お兄様！？」

どうして・・・。明日まで戻らないはずじゃ・・・。もしマリアの死体を見られたら・・・いや、自分が犯人だという事がばれたら・・・。

ティアナは無理やり心を落ち着かせ、電話の通話ボタンを押した。

「お兄様、如何しました？ 随分と早いですね？」

「ああ・・・それよりもだ・・・マリアが死んだ」

ティアナはニヤリと笑った。計画通りだ。

「え！？ 誰に？」

「分からない。それよりもリリーが危ないんだ。部屋を教えるから、行ってくれ」

チャンス到来。

ティアナは爆笑しそうなほどに、嬉しさがこみ上げるのを感じた。バカだ。自分から場所を教えるとは・・・。

「分かりましたわ。で、部屋の場所は？」

「ああ、離宮の三 七号室だ。急いでくれ」

「分かりましたわ。今すぐ向かいます」

何だ一つ上の階じゃないか。

ティアナはゆっくりと足を進めていった。最後の時間だ。ゆつくりと向かった方がリリー・ケンプフェルが長生きできるではないか。ティアナは邪悪な笑みを浮かべたまま、リリーの部屋へと向かった。

マリアの亡骸の傍らに座り込み、携帯電話をポケットにしまった愛斗は頂垂れた。目の前の現実が信じられずにいたのだ。

「マリア・・・」

撫子が愛斗に近寄り、マリアを見下ろした。

「可哀想に・・・偽妹に殺されるとはな・・・」

「そうだな・・・なんだと!？」

撫子は平然と頷いた。

「マリアを殺したのはティアナだ。リリーもアイツは殺す気だぞ」

愛斗は先ほどの会話を思い出す。

「しまった。奴に部屋を教えてしまった」

撫子が何時に無く真剣な顔で頷く。

「そうだ。急いだ方がいいんじゃないか？悲しみには後でも浸れる」

愛斗は扉から丁度入ってきたロランと秀人に向かって叫んだ。

「ロラン、秀人！リリーの部屋に向かえ！急げ！」

二人は尻を鞭で叩かれたように走り出した。

ティアナはリリーの部屋の前に立っていた。

いよいよこの日が来た。リリー・ケンプフェルをこの世から抹殺出来る日を。

ティアナはゆっくりと、そして慎重に扉を開けた。中にはベッドの上で安らかに寝息を立てるリリーの姿があった。その寝顔は月明かりに照らされ、実に神秘的で、人形のような可愛らしいさを持ち

合わせていた。

同時にティアナに嫉妬が湧いたのも事実だ。でも今日で終る。この娘の人生は。ティアナはゆっくりとベッドに腰掛けた。

そして、ふわふわとした手触りの髪を撫で上げた。この可愛らしい顔とも今日でお別れ。さようなら。

ティアナは拳銃をリリーの頭に突きつけた。引き金に手を掛け・・。

「リリー！」

突然、ドアが開いて秀人とロランが侵入してきた。

ティアナは驚き、拳銃を隠した。

「あら、秀人さん。どうかしました？」

「リリーの命が狙われているんだ。誰か怪しい人を見なかったか？」  
「いえ、見ていません」

ティアナは見事な演技で誤魔化した。幸いにもこの二人はティアナがマリアを殺したことで愛斗と撫子の会話を知らなかったため、何とか誤魔化すことが出来たのだ。

ティアナは心の中で溜息をついた。

まあ、リリー・ケンプフェルは何時でも始末出来る。私には力があるのだから、何時でも、誰でも殺せるのだ。今日は見逃してやろう。

ティアナはそう考えた。秀人とロランが出て行くのと同時に兵士が入ってきた。ティアナは寿命が延びたリリーを愛しそうに眺め、部屋を後にした。

「中継をお伝えします。昨夜未明、神聖ストライダム帝国第四皇女にして、帝国内政補佐官を務められていたマリア・レオンハルト・リバーネ・フォン・ストライダム殿下が何者かによって殺害されました。この件に関して、皇帝陛下は当面の間、国民に対して喪に服

すようにとの事です。葬儀、及び式典は三日後に帝都ハーゲンブルグ、聖マリアン広場で執り行われる予定です」

イヴオンがこのニュースを見たのは、事件の翌日だった。どのチャンネルでも、ラジオでもこのニュースばかりを放送している。

ニュースを見ているのはイヴオンだけではなく、同室に居るヴィルフリート、ギレーヌ、その他の議員が集まってみていた。

その中でも落胆が激しいのはギレーヌだった。

「どうかしました？」

海星がギレーヌの身を案じて、声を掛ける。ギレーヌは俯いたまま、応えた。

「マリアは私の妹だ。あいつが死ぬなんて私は思ってもいなかった・

・・・」

「御心中、お察しいたします」

海星は頂垂れるギレーヌを慰めている。ヴィルフリートは何も言わず、モニターのスイッチを入れた。何かを待っているかのようにモニターが映るの同時に、音声が始めた。

「共和国の皆さん、お元気でしょうか？」

愛斗の声だ。三秒遅れて、画面に愛斗が映る。何時もの服装だ。

「何を抜けぬけと！」

ギレーヌが憤慨して、怒鳴った。イヴオンがそれを抑制する。

「まあ、落ち着いてください姉上。貴方方への招待状をプレゼントしに来たのです」

「プレゼント？」

「ええ。三日後の式典へのゲストとしての招待状です。是非、お越しいただきたい」

ヴィルフリートが薄い笑みを浮かべて、画面に話し掛けた。

「いいだろう。では三日後にまた逢おうじゃないか」

「はい。では待っていますよ」

画面は再び、点滅して消えた。ヴィルフリアートの顔にはまだ冷たい笑みが残っていた。

三日後、聖マリアンヌ広場には式典のための特設会場が設けられ、巨大な雛壇が聳え立っていた。

一面を花で埋め尽くし、その中央に巨大なマリアの遺影がある。雛壇の前方には演壇があり、その左右にゲストの特別席が幾つも設けられている。共和国の議員、帝国の重臣、他国からの使節や大統領、首相が揃いに揃って、座っていた。

そして人広場一杯に市民が集まり、涙を流していた。愛斗は憎むべき相手だが、マリアは尊い存在だったようだ。中には「マリア様が居られたから、暴君を抑制する事が出来た」などの意見も出ている。

会場がほぼ満員になった時、広場中にそして世界中に向けて中継が始まった。同時に国歌が流れる。

「マリア様に向けての慰霊の言葉を、帝国陸軍総参謀であり、親しかった南風渚様をお願いしたいと思います」

無機質な女性の声で、渚が演壇に立った。そして、マイクのスイッチが入る。

「親愛なる、マリア様へ。私、南風渚はここに宣言いたします。マリア様亡き後も、我々が臣民の指導を行い、未来永劫、この国を榮させ、そして……」

十分にも及ぶ渚の慰霊の言葉が終わり、無機質な女の声のトーンが少し上がった。

「では皇帝陛下からのお言葉を頂きたいと思います」

愛斗が雛壇に上り、演壇に立つ。

全世界が彼の、若き皇帝の言葉に耳を傾けていた。

愛斗は民衆からの強い視線にも全く怯まなかった。堂々と落着き払って、演壇に立った。その口が開こうとする。国歌の音量が大きくなる。

「全人類よ！我が親愛なる従姉<sup>あね</sup>、マリアは逝った。しかし、これは

悲しむべき死ではない！」

ギレーヌが肩を震わせて、怒りを露にしている。無理も無いだろう。

「帝国は激動の時代を迎えようとしている。我ら帝国臣民は、いまこそ一丸となつて世界平和に尽くさなくてはいけない。私が世界統一を終えたその先の未来、それこそが真の明日であり、未来だ。未来は希望に満ち溢れている。何かあるか分からない。悲しい事、嬉しい事、悔しい事、色々な事があるのだ。しかし、それ全てを統括してこそ、未来は輝くのだ。神聖ストライダム帝国に栄光を！ウィア・ハイル・ストライダム！（我らがストライダム万歳）」

「ウィア・ハイル・ストライダム！ウィア・ハイル・ヨハン！」

兵士が立ち上がり、唱和する。歓声を浴びながら、愛斗は雛壇を下りた。しかし、その目はティアナを捉えて離さなかった。

「式典も終つたし、漸く悲しみに浸れるわね・・・」

渚が愛斗の横に立ち、言った。渚もマリアの死に悲しんでいる。

今も目には涙が浮かんでいる。

愛斗が今居るのは、会場の直ぐ近くに設けられたVIPルームだ。小綺麗な部屋で愛斗はソファーに座っている。渚はその横に立って、愛斗と話していた。

「ああ・・・ティアナを呼んでくれ・・・理由は分かっているだろう？」

「・・・分かつたわ」

渚がVIPルームの扉を開いた。ティアナが小走りで入ってくる。「お兄様、渚さんに呼ばれたので来たのですが、何か御用ですか？」

愛斗は落ち着いた顔でティアナを見つめた。ティアナの黒い瞳と視線が交わる。

「ティアナ・・・何故、マリアを殺した・・・」

「・・・？何のことですか？私にはさっぱり・・・」

「惚けるな！」

愛斗の怒鳴り声に、ティアナだけでなく、渚も肩を震わせた。ティアナは泣きそうな顔で、愛斗の顔を見つめた。

「お兄様……どうして怒っているんですか？」

「貴様がマリアを殺し、リリーをも殺そうとした事は知っている！何故だ！」

「だって！あの人たちは私からお兄様を奪おうとしたのよ！だからお兄様があの人たちに取り込まれる前に、私が……」

愛斗はふらふらと立ち上がり、怯えるティアナに近づいた。

「一つ言わせてもらおう……お前は気に入らない奴は殺す。それでいいんだな？」

「違う！私はお兄様のために……」

「黙れ！お前がどう足掻いてもリリーには届かない！人間のクズはお前だ！」

愛斗はティアナの胸倉を掴んで、揺さぶった。

愛斗の中で怒りの感情が込み上げ、爆発した。

「俺はな……お前が嫌いなんだよ！気に入らない奴は全て消す？死ぬのに相応しいのは貴様の方だ！そんなお前を折角、駒として使ってたんだぞ？お前のことはもうよく分かった。最後の命令だ、出て行け！」

愛斗はティアナをソファーに叩きつけた。ティアナは呆然と、悲しみをその瞳に湛えて愛斗を見ている。立ち去ろうとする愛斗を見て、漸く我に返った。

ティアナは立ち去っていく愛斗の足にしがみ付き、泣いた。

「いや！捨てないで！お兄様！いや！」

「黙れ！」

愛斗はしがみ付いてきたティアナを平然と壁に向かって蹴り飛ばした。ティアナが壁に背中を打ち、呻き声を上げる。

「ちよつと愛くん！やり過ぎよ！」

「渚、お前は黙っている！」

愛斗は渚も怒鳴りつけ、部屋を後にした。渚はティアナを横目で眺めて、部屋から出て行った。  
ティアナは一人、泣いていた。

## 六十話 愛の崩壊（後書き）

### 次回予告

帝国の新型E M Aが開発された。それは帝国にとっての大きな進歩だった。

しかしその代償なのか？帝都に遂に敵が姿を現した。

そしてティアナはどうなるのか？ヴィルフリートが愛斗を追い詰める。

次回六十一話「帝都奇襲作戦」お楽しみに

## 六十一話 帝都奇襲作戦

「陛下、準備が整いました。中庭へ」

愛斗は名前を呼ばれ、我に返った。急いで、気を取り直して自分の名前を呼んだ男の方を見る。

「分かった、ミール。では演習を開始しよう」

この男はエティエンヌ直属の皇帝親衛隊、「ロイヤル・セブンス」隊長であるミール・サブレットだ。

ロイヤル・セブンス自体は元々あった直属部隊だったが、皇位簒奪や諸事情により、廃止されたのだ。だが急に復活することになったのは、愛斗が指示を出したからであった。

ロイヤル・セブンス復活の理由、それは皇帝の権威を世に示すため、全てが終わるまで愛斗の身を守るためだった。愛斗は只でさえ、国民、世界中人々から悪の皇帝と呼ばれている存在だ。殺害を企む輩など、それこそ腐るほどいるだろう。

ロイヤル・セブンスのメンバーは、隊長のミール・サブレットを筆頭とし、副隊長のディーク・ゲイル、前衛担当のアントニウス・ベッケンバウアー、カルロス・エルナデス。後方支援担当のマリー・イラノフ、クラレス・シャルロワ。最後に通信士のコーネリアス・コンスタントだ。

どれも揃いに揃って美少年、美少女の集まりであり、神聖ストライダム帝国の花形とも言える部隊だ。制服は皇帝の正装と同じく、白を基調としており、豊かな装飾が施されている。

「陛下、こちらです」

愛斗が中庭に到着したときには、既にロイヤル・セブンスの隊員は揃っていた。その様子を秀人、渚、カリィヌが見学している。特にロイックは自分が開発したE M Aが実戦投入されると大喜びで機体の最終調整を行っていた。

ロイックは愛斗が到着したことに気付いたのか、何時もより感じ

のいい笑顔で寄って来た。

「陛下、ではまずご説明いたします。まずこちら」

ロイツクは愛斗の前に置かれている赤と金のE M Aを指差した。

「こちらが新型E M Aであるアルテミスです。この赤と金のカラーリングは先行試作機のみで、新武装も装備しております。予定通り、こちらの機体はミール殿に支給致します」

ロイツクは次に、同じ形容をした濃い青のE M Aの説明を始めた。  
「こちらはアルテミス量産機、通称「アルテミス・ヴィース」です。先行試作機より性能は落ちますし、武装も削減しておりますが、それでも共和国のストライクパニッシャーなどとは比べ物にならないほどの性能をもっています。こちらは一般兵に支給致します」

ロイツクは次に黒いカラーリングのアルテミスを指差した。

「これがアルテミス、ロイヤル・セブンス機である通称「アルテミス・ロイヤル」です。ロイヤル・セブンスの前衛担当及び、通信士に支給します」

ロイツクは待ってましたとばかりに、最後のE M Aの足下に立った。そして愛しそうに撫で上げる。

「これはガイザレス。遠距離戦専用のE M Aです。主武装は両腕に装備してあるプラズマライフル。ミサイル発射機構を背部に接続し、主力の背後からの攻撃をメインとしています。一部の士官と、ロイヤル・セブンス、後方支援担当であるクラレス殿とマリー殿に支給されます」

一通り説明を終えたロイツクは早速、試験飛行を始めるのだ、と言って周りに向かって叫び始めた。愛斗も見ろべきなのだろう。しかし、愛斗はどうしても不安が拭いきれなかった。何か嫌な予感があったのだ。

その夜。

愛斗は自室で最後の書類整理を行っていた。ふと溜息をつき、書

類の内容に目を通した。

「いい加減、共和国側に返さなくてはな。奴らは俺が交渉の餌にリリーと絢を人質にとっていると思っっているからな」

愛斗はリリーの記憶を奪った時のことを思い出した。

あの日のことは、あの時のリリーの顔は二度と忘れる事が無いだろう。もう逢う事もないし、思い出す事も無いのだから。

俺は間違っていたのだろうか？俺はそうは思わない。秀人の考えも分からないではないが、あの時記憶を消さなかったら、リリーは何時までも俺のことを引きずって前に進むことは出来なかっただろう。

しかし、結果的には愛斗はリリーの気持ちを裏切った事になる。ただ純粹に愛斗を愛していたリリーから俺の記憶を奪う。リリーにとっては残酷な事だろう。

愛斗はもう一度深い溜息を吐いた。

「俺にはリリーを愛する資格などは無かったな。初めからそうだったんだろう」

愛斗は机の上のブランデーを一気に飲み干し、席を立った。

「うわっ！」

突然の揺れで愛斗はふらついた。机の角に掴まり、何とか揺れを耐える。

「地震か？それとも・・・」

愛斗は収まってきた揺れの中で、机の電話を手にし、司令室へとかけた。

「愛くん？良かった・・・今、連絡をしようと思っていたところだったの」

「何があった？地震か？」

渚は騒々しい司令室の雑音に負けなように声を張り上げている。「現在、ハーゲンブルグ上空に無数の敵影を確認したの。さっきの揺れは地下の水路から敵が侵入してきた音だと思うわ。地下の方には秀人君が向かっているから大丈夫だと思うけど・・・」

「分かった。市街の方はどうだ？」

「市街の戦況は圧倒的に不利よ。現在、三方向から攻撃を受けていて、宮殿を守るのに精一杯で市街までは手が回らないわ」

愛斗は静かに頷き、電話を切った。

部屋の窓からは燃え上がるハーゲンブルグの町並みが見えた。そしてその上空に浮いている戦艦。

「やはり・・・」

戦艦には白地にオリブの枝を啜えた鳩と十個の星が描かれている。間違いなくストライダム共和国の戦艦だった。

「ヴィルフリート殿、これは貴方の戦略なのだな。ならば抜かりは無いはず」

愛斗は冷たい表情を崩さずに、呟いた。そして部屋を黙って後にした。

愛斗は宮殿の発着場へと向かっていた。

宮殿の大ホールには渚が居て、愛斗を待っていた。

「愛くん、早く行きましょう。敵はもう迫ってきてるわ」

愛斗は黙って頷き、宮殿の扉を開け、外に出た。後ろに控えていた兵士が先行する。

「陛下をお守りしろ！」

愛斗が外に出たと同時に、秋水の機銃が愛斗たちを襲った。間違はなく狙いは愛斗だろう。

「渚！急いでドレッドノートへ！一先ず避難するぞ！」

「分かったわ」

愛斗は黒煙の中を走り出した。

発着場へはまだ敵は居ない様だった。巨大な戦艦、ドレッドノートが愛斗を迎えているようにそこにあった。

「陛下、お乗りください。指揮は中で」

ライナーが愛斗を急かす。

ドレットノートの司令室にある玉座に座ると、モニターに戦況が映し出された。司令室に現在居るのは、ライナーとロイック、その他のオペレーターだけだ。

戦況は言われるまでも無く不利だった。ハーゲンブルグを囲むようにして、三方から敵は押し寄せてきている。バイエルン宮殿はまだ無事だが、その他の離宮は炎上しているようだ。

愛斗は離宮というキーワードであることを思い出した。

「ライナー、渚に指示を伝えてくれ。リリー・ケンプフェルと鳳凰院絢がまだ残っている。至急、救出せよ」

「ユア、ウィル」

ライナーは後ろの兵士に命じた。命じられた兵士は黙って渚に伝えに行った。

愛斗は椅子に深く座りなおし、落ち着いた声を発した。

「ロラン、西からの部隊を食い止める。カリィ又は東、渚は北だ。

ロイヤルセブンスはドレットノート周辺の敵を掃討せよ」

モニター上の青い点がそれぞれの方向に向かいだす。

通信からはロランの声が聞こえてくる。

「隊長！敵は聖霊騎士団の生き残りです！」

「何！？まだ生きていたのか？」

愛斗は舌を軽く打って、画面を見つめなおした。遂に正面からも少数の部隊が突入を開始してきた。

「秀人！そっちはどうだ？」

「ダメだ。残念ながらそっちにはいけそうにない。敵が多すぎる！」

「そうか。ロイヤル・セブンス！正面の敵を迎え撃て……！」

リーダーには超高速で飛ぶ未確認E M Aが映し出されていた。このカラーリングは……。

「まさか……ナーシャ？」

ロイヤル・セブンスはドレッドノートの前衛を担当し、敵を次々に引き裂いていった。

「こちらミール。どうやら敵は後僅かのようだ」

「分かりました。では引き続き後方支援を私達は担当します」

クラレスとマリーが短く返事をし、再び両腕内蔵プラスマライフルを装填した。

「何だ・・・聖霊騎士団なんて弱いもんだな。これじゃ、永遠にやってたって飽きませんよ」

デイクがへらへらと笑いながら、感想を漏らした。

「今のところはな・・・しかし気を抜くな」

「分かりました。おっと、コーネリアスからだ。こちらデイク」  
通信機からコーネリアスの声が聞こえた。どうやら相当焦っているようだ。

「どうした？」

「副隊長！超高速で近づいてくる敵影を確認しました！」

「何！？」

その連絡を聞いていたミールが前方を見た。鮮やかな桃色をしたE M Aが超高速で近づいてくるのを肉眼で確認する。

「確認した。これより迎撃態勢を・・・！」

前方のE M Aが突然、六枚翼を広げた。それは紫電やインフェルノのそれと同じものだった。六枚翼を広げた敵は一瞬で間合いを詰め、ミールのアルテミスを真つ二つに切り裂いた。

「まさか！この私が・・・」

次の瞬間、アルテミスは爆発四散した。デイクが素早く残った隊員に指示を出す。

「全員散開！」

そう叫んだと同時に、目の前のE M Aは片手に持っていたソードを投げつけた。ソードはくるくると高速で回転しながらアントニウスのアルテミスに向かって飛んでいった。

「避ける！」

デイクが叫んだが、間に合わずに上体部と下体部を二つに裂かれた。

「うわっ！申し訳御座いません！エティエンヌ様・・・」

ミールと同じく爆発した。残ったロイヤル・セブンスは五人だ。

五人は素早く新しい隊形を作った。デイクとカルロスが前衛に出て、その後ろにコーネリアス、更に後ろにマリーとクラレスだ。

二人を倒したE M Aは五機の前に優雅に静止した。六枚翼は依然、健在だ。

E M Aから女性の声が響いた。

「貴方達がロイヤル・セブンスね。私は聖霊騎士団ナーシャ・ギルマン。帝国を裁く者よ！」

デイクはその名前に反応した。

「貴方がナーシャ殿ですね。噂は聞いております」

「そう、光栄ね。でも私はここで武勇伝を披露するつもりは無いの。退いてくれる？」

デイクはしばらくの沈黙の後、口を開いた。

この時のデイクには圧倒的な敵に対する恐怖心よりも、隊長を失い、陛下を守らなくてはいけないという使命感が勝っていた。

「・・・そうはいきません。陛下をお守りするのが我らの使命。たとえこの命、失ったとしても！」

再び、一息の間。

ナーシャはゆっくりと言葉を吐き出した。

「そう・・・なら、私は貴方方を倒すわ。恨まないでね」

「望むところ！」

デイクとカルロスはナーシャのE M Aに突っ込んだ。

「私の”シュヴァリエ”を嘗めるな！」

ナーシャのE M A、シュヴァリエは上空に舞い上がり、ソードを投げつけた。

「避ける！」

カルロスとディークは素早くそれを避ける。コーネリアスもそれに続いた。しかし後方から支援をしていたマリーとクラレスは避けることが出来なかった。

二人のガイザレスはなすすべも無く、真っ二つになった。

「嘘！？やられたの！？」

「いや！死にたくない！」

二機のガイザレスは爆発し、砕け散った。

ソードは弧を描きながら、シュヴァリエの手に戻った。続いてシュヴァリエのソードから赤い閃光が飛び出し、地上の警備部隊を吹き飛ばした。

爆煙の立ち込める中、シュヴァリエは先ほどと同じ配置に戻った。残されたのは三人だ。

副隊長であるディークは手足の震えを止める事が出来なかった。

圧倒的な戦力差、かけ離れたマシンスペック。今、生涯最凶の敵が目の前にいる。俺はこのまま死ぬのか？

ディークは恐怖に心を支配され、自然と腕が操縦桿から離れていた。つた。

「攻撃は終わり？なら、先に進ませてもらうわ」

ディークはナーシャにそういわれても動く事は出来なかった。まるで蛇に睨まれた蛙のように微動だに動けなかった。

「待て」

静かな声が響く。その声の主は……。

「エティエンヌ様……」

擦れる声を喉から絞り出した。三機とシュヴァリエの間にタルタロスが現れた。

「お前たちはよくやった。帝国の英雄と褒め称えても足りないだろう。さあ、急いでドレッドノートへ向かえ。陛下をお守りするのがお前たちの役目だ」

ディークは情けなくて涙が出た。

自分達ではシュヴァリエには届かない。勝ち目が無い事を知った

時にでる悔しさの涙であつた。

「・・・分かりました。御武運を」

三機は引き返し、ドレッドノートの方角へとむかつていった。エティエンヌは改めてシュヴァリエと向かい合う。

ナーシャが重々しく口を開いた。

「エティエンヌ、私は貴方のことを素晴らしい人間だと思っていたわ。義理深く、そして高潔で・・・でも、貴

方は私達を裏切った。そんなにあの澁坂愛斗がいいのかしら？」

ナーシャの言葉にエティエンヌは静かに目を閉じた。

「私は自分を偽ってきた。漸く本来戻るべき場所を見つけたただけだ」  
「黙れ！」

シュヴァリエは上空に再び舞い上がり、ソードを投げた。ソードは先ほどのように回転しながらタルタロスへ向かつて飛んでいく。同時にタルタロスのプラズマシエルも回転を始めた。

向かつてきたソードをタルタロスはプラズマシエルで受け流した。ソードはそのまま弧を描き、背後からタルタロスを襲う。タルタロスも負けずに、上空に上がり避けた。

「まだまだ！」

ソードを掴んだと同時にシュヴァリエはソードを前方に突き出した。切先から赤い閃光が飛び出し、タルタロスへと飛んでいく。

「この程度！」

タルタロスは器用な動きで、無駄なくそれを避け、一気に距離を詰めた。そのままプラズマシエルをシュヴァリエに振り下ろす。

シュヴァリエはそれを左手の盾で受け止め、タルタロスに回し蹴りを打ち込んだ。

「くっ！」

エティエンヌは次の攻撃を予想し、素早く後ろに下がった。追い討ちを掛けるようにシュヴァリエからは開き閃光が飛んでくる。

エティエンヌは通信を愛斗の居るドレッドノートへと繋げた。

「どうした。エティエンヌ」

愛斗の冷たい声の響きに応えるように、エティエンヌは現在の状況を説明する。

「現在、ナーシャ・ギルマンと戦闘中です。圧倒的なマシンスペックの差があり、私では勝つ事は出来ないでしょう。私が限界まで時間を稼ぎます。そのうちに脱出を」

「ダメだ！今、援軍を送る。もう少し持ちこたえろ！」

愛斗は通信を切り、秀人へと繋げた。直ぐに秀人の声が聞こえる。

「こちら識神秀人。愛斗か？」

「そうだ。エティエンヌの援護に向かえるか？」  
しばらくの沈黙。

「・・・悪いけど、こっちはこっちで手一杯だ。なるべく早く向かう」

「・・・そうか」

愛斗は通信を切り、手を組んだ。

このままでは全滅は必須。ならば脱出が最優先事項。しかしまだリリーと絢、二人の内の一人も確保出来ていない。

「陛下！鳳凰院絢様を確保。現在、艦内に輸送中です」

愛斗の顔が輝く。

「そうか！リリーは？」

「はい、第七離宮は既に敵に占領されており、既に奪還されたものと思います」

愛斗は安堵の息を吐いた。リリーは少なくとも無事だ。そして絢は確保できた。後は避難するだけだ。

「緊急浮上だ。ただちに脱出せよ！」

「ダメです！敵が多すぎます。このままでは撃墜される可能性も・・・」

愛斗は小さく舌打ちをし、席を立った。

「くそ・・・後、少し時間があれば・・・」

愛斗は自分を恨みながら、肘掛を叩いた。愛斗が俯いていると、司令室内に大声が響いた。

「未確認E M Aが接近中！味方と思われます。北東の方角から敵陣に近づいていますか・・・」

「何だ？とにかく映像を」

ロイツクはモニターを操作し、画面に映像を映した。そこに映って居たのは・・・。

「オプティック！？まさか・・・ティアナか！」

ロイツクが素早くキーボードを操作し、情報を解析する。

「間違いありません。オプティックです」

「通信を繋げる！」

愛斗が叫ぶ。ロイツクは気迫に押され、通信回路をオプティックに繋げた。

一息の間を空けて、愛斗は口を開いた。

「ティアナか？」

レーダー上のオプティックは敵陣の真ん中で、孤軍奮闘していた。通信を通して、少女の声が返ってくる。

「・・・そうです。私です。お兄様」

愛斗は厳しい声でティアナに尋ねた。

「出て行けといったはずだ。何故、戻ってきた？」

「私のお兄様だからです！」

オプティックはナイトランスを構え、敵をまた一機串刺しにした。続いて、瞬間氷結砲で三機に大穴を空ける。

「お兄様には指一本触れさせない！」

ティアナは叫び、操縦桿を握る手に力を込めた。

「お前はマリアを殺した。許しがたいことだ。お前は既に俺の指揮下ではない」

「分かってます！」

敵の秋水に囲まれていたティアナの右目が青く光る。それと同時にオプティックは瞬間移動した。しかし、転移先にも敵は腐るほど

いた。

「もう一度！」

ティアナがもう一度碧眼を使う。何度使っても敵の包囲は抜けられなかった。

碧眼は体力を使う。ティアナは六回目で息が荒くなり、目から生気が失われていった。どうやらもう逃げ場は無いようだ。

「もう・・・疲れた・・・最後の手段を・・・使わせてもらいます」  
オブティックの胸部が開いた。そこには球状の物体がついていた。  
「さようなら・・・お兄様・・・愛していますね」

愛斗は息を呑んだ。

一度はこの少女を俺は捨てた。途轍もなく憎かったからだ。しかし、この少女は俺のために命を捨てようとしている。ならば自分がやることは唯一つ。愛斗はゆっくりと口を開いた。

「いいか？一度しか言わない。俺は嘘を吐くぞ。”愛しているよ”」

その一言にティアナの頬が緩んだ。

「ありがとう。楽しかったわ・・・私のお兄様・・・」

ティアナがコックピットに備えられた爆発ボタンを押す。

オブティックの胸部が鋭く輝き、光の球がうまれた。見る見る膨張していく光の球は突然、眩いばかりに輝いた。

コードフェニックスが再び、始動したのだ。

光の玉は膨張を開始した。オブティックを中心とし、光が渦巻いていく。

「ドレッドノートを緊急浮上させろ！」

愛斗が叫んだ。

市街では敵味方が一斉に引いていく。

「来るぞ！」

次の瞬間、光の球は炸裂し、辺りを飲み込んだ。爆風がドレッドノートを襲う。

司令室は大地震に見舞われたかの如く、揺れた。

次第に光が収まっていく。愛斗はゆっくりと目を開け、外の光景を見た。そして息を呑む。

帝国の中心であり、中世から栄えていた帝都ハーゲンブルグはいまや瓦礫すら存在しない荒野になっていた。バイエルン宮殿の敷地は半分を除いて更地となっている。辛うじて残っているのは本殿と幾つかの離宮のみだ。

帝都は完全に壊滅した。一部を残して・・・。

## 六十一話 帝都奇襲作戦（後書き）

### 次回予告

ティアナの想いは本物だった。帝都は壊滅したが、愛斗は真の愛情をティアナから受け取ることが出来たのだった。

愛斗は決意と約束を胸に秘め、出撃する。

そしてヴィルフリートの謀略も同時に動き出す。遂に最終決戦が始まろうとしていた。

そして今、時空戦艦レーヴァンティンが大空に舞い上がる。

次回六十二話「ヴィルフリートの謀略」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

後、誤字などのご報告もどうぞ。

## 六十二話 ヴィルフリートの謀略（前書き）

いよいよ最終決戦に突入です。

## 六十二話 ヴィルフリートの謀略

爽やかな朝日が愛斗を照らしている。

愛斗の右手には一つのペンダントが握られている。ティアナのものだ。以前、ティアナが俺の部屋に置いていったもので、唯一愛斗の手元に残っているティアナの遺品だった。

そんなものを持って愛斗は何処に行くのか？その答えは決まっている。

ここは帝都から五キロほど離れた緑溢れる丘に存在している墓地だ。この墓地には古くから皇国に仕える貴族や皇族の遺体を埋葬する由緒正しき場所だ。歴代皇帝やその他近隣の国の王も眠っている。その墓地の一角にマリアの墓が設けてある。そしてその隣にも一つ空いている墓があった。愛斗はそこに向かおうとしているのだ。

愛斗は周りを見渡し、一言呟いた。

「いい場所だ。墓地だと言うのに幸せが大気に満ちている」

大衆が抱く墓地のイメージは暗く、陰気で死者が群れる場所、というものだ。でもここは違う。夜は星が綺麗で、透き通る様な夜空が拝める。

朝は今の様に爽やかな風を身に受け、幸せを感じ取る事が出来る。午後は穏やかな日差しが心と体を温めてくれる。

四季によってもこここの風景は変わるのだ。春は花が咲き誇り、互いを競い合っている。夏は新緑が芽生え、力強く生氣に満ち溢れている。秋は涼しさと枯葉が心を癒してくれる。同時に悲しみに浸ることも出来る。冬は新雪を掻き分け、眩いばかりのダイヤモンドダストを拝む事が出来た。

「今も変わらないな・・・」

愛斗はマリアの墓の前で呟いた。まるで話し掛けているかの様にゆっくりと。そして何よりも優しく。

昔、マリアとここを訪れた時のことに浸る。懐かしい思い出に。

「マリア、お前を殺したティアナは・・・俺のためにその命を犠牲にしたんだ。そっちに居るだろうが、あまり恨まないでやってくれ」  
愛斗はマリアの墓石からその隣の空いている墓石へと目を移した。何も刻まれていない墓石を開いて、そこにティアナのペンダントを埋めた。

「ティアナ、お前の隣にはマリアが何時でもいるぞ。あまり喧嘩はするなよ」

愛斗は一歩下がり、二つの並んだ墓石を交互に見た。

「愛斗、一人か？」

撫子が後ろから姿を現した。愛斗も撫子を見つめる。

「撫子か・・・よく生きていたな・・・」

「皮肉のつもりか？残念だが全く嫌味が感じられないぞ？」

愛斗はフツと笑い、近くの墓石に腰を下ろした。撫子も愛斗の背中に自分の背中を合わせるように墓石に座り込んだ。

「敢えてティアナをマリアの隣に埋めたのかは知らないが、お前にしては優しいじゃないか」

愛斗は少し首を動かす。

「ティアナは俺の妹だ。姉の隣に埋葬するのは普通じゃないのか？」

「いや・・・そうだな。そうかもしれないな」

撫子が意味ありげに笑い、ふと真顔になる。

「思えば二人でゆっくりと話せるのはこれが最後かもな・・・」

「そうだな。これで最後なのかもな」

愛斗の顔にも笑みが広がった。撫子も同じように笑う。

「俺が居なくなった後、お前はどするんだ？」

撫子は空を見上げた。青く透き通った空だ。

「そうだな・・・また昔の様に旅でもするかな。お前がない世界も見てみたい」

愛斗は真顔になり、撫子見つめた。

「今回は俺だから良かったが、次に男と関わる時はもっとおしとやかにしたほうがいいぞ。顔だけはいいいんだからな」

愛斗の皮肉に撫子は不敵な笑みを浮かべた。

「褒め言葉として受け取っておくよ」

愛斗はしてやったとばかりに笑い始めた。

「お前もその傲慢な性格は直した方がいいぞ。皇帝陛下君？」

愛斗もニヤリと笑う。

「褒め言葉として受け取っておくよ」

同じ言葉を撫子に返した。二人は立ち上がり、見つめ合う。

「元気でな」

「ああ」

短く会話をし、二人は墓から立ち去った。

いよいよ大詰めだ。これで全てが終る。この戦いの果てに。

「殿下、リリー・ケンプフェル殿をお連れしました」

フェリクスが車椅子に乗ったリリーを横に連れて、ヴィルフリートに伝えた。

ヴィルフリートは冷たい表情でリリーを見つめた。

「リリー、ヨハンと話が出来たかね？」

リリーはびっくりしたように、首を横に振った。

「まさか！この私が、一介の大使などが陛下と御話なんて・・・」

ヴィルフリートが目を細める。その様子を見たフェリクスがヴィルフリエットの耳元で囁いた。

「実はリリー殿に彼は碧眼を使ったようです。恐らく彼についての記憶は全て消し去られているのかと・・・」

「そうか。ではあれを使え」

「はい」

フェリクスはリリーに向き合い、ある装置を出した。

「リリーさん、今から愛する人の記憶を呼び覚ましますよ」

フェリクスが装置のスイッチを押す。

高い金属音と同時に赤い結界が部屋に張られた。リリーの目が色

を失い、それと同時に灰色が瞳の奥で渦巻く。

数分は経っただろうか。リリーの瞳に色が戻った。同時にリリーが我に返る。

「……！私は？」

「リリー、君には最後の任務を与えたいと思う。とっておきの任務を」

ヴィルフリートがリリーに微笑みかける。

「なんですか？」

リリーが尋ねると、ヴィルフリートがフェリクスに目配せした。

フェリクスが頷き、ドアを開けた。兵士に縛られて入って来たのはイヴオンだった。

「イヴオンさん！？どうして!？」

ヴィルフリートはイヴオンの頭を優しく撫でた。それからリリーに視線を移す。

「彼は司令室に忍び込んだんだ。いけないネズミだね」

「イヴオンさんを離して!」

「そうはいかない。君とイヴオン君にはさっきも言ったように大事な任務があるのだからね」

リリーは口を噤んだ。イヴオンも恨みのこもった目でヴィルフリートを睨みつける。リリーはしばらくの沈黙のあと、口を開いた。

「その任務が终れば、私達を自由にしてくれますか？」

ヴィルフリートが笑い始める。裏表のない綺麗な笑顔だった。

「もちろん。初めからそのつもりだよ。嫌でもそうなるさ」

ヴィルフリートはフェリクスとその部下を見た。

「さあ、彼らを「レーヴァンティン」のロイヤル・スペースにお連れしろ。いい死に場所だよ」

「何!？」

ヴィルフリートは二人に慰みの気持ちで説明を始めた。

「君達の最後の任務はヨハンをレーヴァンティン内に誘き寄せることだ。任せたぞ」

兵士はその言葉が終ると同時に二人を連れ、部屋から出した。

ヴィルフリートは笑みを消し、真面目な顔で椅子に座りなおした。  
「出来れば殺したくないのだ。協力してくれリリー。その先に真の平和があるのだから・・・」

ヴィルフリートの平和を願う気持ちは本物だった。

ただ、それは愛斗の方法とは違った。だから戦うのだ。勝者が築く世界が真の平和に繋がるのだから。

ヴィルフリートはモニターに向かって、全軍に向かって叫んだ。  
高らかに、力を込めて。

「時空戦艦レーヴァンティンを起動せよ！全軍出撃！」

今、最終決戦が始まろうとしていた。

「陛下、共和国軍の動きが見えました」

ここはドレッドノート総司令室。一言でいうとコックピットだ。

この部屋に現在いるのはメインオペレーターのロイックと愛斗の後ろに立ち、補佐をするライナーだけだ。

「そうか。報告しろ」

「はい、敵は現在我が軍を迎え撃つため、太平洋上で大気しています。その地点はここなんです。いくつかの島があるだけで、それ程重要な地点では無いかと・・・」

愛斗はモニターに映し出された地図を見た。直ぐにある場所が思いつく。

「聖域か・・・物語は原点に戻るわけだ」

愛斗は再び、笑みを浮かべて叫んだ。

「全軍！全速力で聖域へと向かえ！」

神聖ストライダム帝国軍二十五万、ストライダム共和国軍二十万。今世紀最大の決戦が幕を開けようとしていた。

物語の原点となる場所で。

「殿下！敵を確認しました！前方です！」

待っていたとばかりにヴィルフリートが笑みを浮かべる。後ろにはフェリクスと井崎が立っていた。

ヴィルフリートはゆっくりと敵の大軍を見渡す。そして呟いた。

「ではヨハンに見せてやろうではないか。レーヴァンティンを」

そう言い、笑った彼の顔は冷たかった。

澄み渡るような青空の下、ロイックの声が響いた。

「陛下、前方に敵です・・・って！」

司令室にざわめきが広がる。愛斗もそれを見て立ち尽くした。

「何だ・・・あれは？」

自軍から数キロはなれた場所に浮かんでいる戦艦、いや戦艦と呼ぶにはあまりにも大きすぎる代物だ。全長は三・五キロ、幅は八百メートルほどだろう。通常の戦艦の何十倍もあるそれは悠然と浮かんでいた。

周りには扇形に敵が陣を張っている。前衛には五万近くのEMAがあり、帝国軍を待ち構えていた。

「・・・どうします？」

あまりの衝撃にロイックが床に座り込む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

愛斗には返す言葉も無かった。

「敵を前方に確認、総員は出撃準備を開始せよ」

艦内放送が鳴り響き、秀人はブリッジへと向かっていた。

以前の聖霊騎士団の正装とは反対の黒いマントを身にまとい、自分達のE M Aが待っているブリッジへと向かうのだ。

扉の前には二人の兵士が立っていた。

「識神秀人だ。通してくれ」

兵士が扉を開け、ブリッジに入る。

インフェルノはそこにあった。秀人はブリッジからインフェルノを見下ろし、一言呟いた。

「僕は何故、戦うんだ・・・その先に何が待っているんだ？」

秀人の心の中に渦巻く小さな疑問。

実に自分勝手な疑問なのかも知れない。何故なら自分に出来ることは愛斗の剣として戦う事だけなのだから。

「秀人」

低いとも高いともとれない女の声に秀人は後ろを振り返った。撫子がそこにはいた。

「撫子さん、僕に何か用か？」

「いや、お前が私に用があるのではないのか？」

凶星だった。

「ああ・・・僕はこれから出撃して愛斗を邪魔する敵を討つ。その間愛斗を護衛する事は出来ない。だから、君が愛斗を守ってくれ。

盾として」

「分かった。お前も気をつけろ」

「心配してくれてありがとう」

二人は微笑みあった。

「陛下、ご決断をお願いします」

ライナーが愛斗の肩を叩く。愛斗は玉座に座りなおし、頷いた。  
「作戦に変更は無いぞ。ここで負けるわけにはいかない」

ロイツクが頷き、艦内放送のスイッチを入れようとした。

「ヨハン、聞こえているかな？」

静かな声が響いた。数秒遅れて、モニターが明滅してヴィルフリートが映った。

「ヨハンよ、レーヴァンティンはどうかな？」

「素晴らしい出来だな。貴方にしては」

「いい皮肉だ。君に知らせたいことがあるんだ。何、リリー・ケンプフェルのことだ」

愛斗の顔色が変わった。

「貴方が相手でもリリーに手を出したら、その時は覚悟して貰いたい」

「何、そんな無粋なことはいらないよ。ただ、彼女を取り返したければ、レーヴァンティンに来るがいい。待っているよ」

そう言い残し、映像が途切れた。同時にロイックが叫ぶ。

「陛下、レーヴァンティンの情報が手に入りました。奴は高度を成層圏まで上げてから、時空転移するつもりです。そうしたら勝ち目は……」

「よくやった。高度を上げさせる前に落とさなくてはいけない、そう言うことだな？」

「ええ」

愛斗は艦内放送のスイッチを入れた。そして指示を出す。

「全軍に告ぐ。敵は高度を成層圏まで上げる事によって時空転移するつもりだ。我らはそれを防がなくてはいけない！何としても高度を上げさせるな！」

それを聞いていたロランはその時、ベディウェアに乗って、軍の最前線にいた。

「分かりました。で、前衛部隊はどうします？」

「ひきつける。作戦通りにいく」

「ユア、ウィル！」

ロランが操縦桿を強く握った。

「殿下、前衛部隊を進めます。よろしいですか？」

「構わない。早く進めたまえ」

「了解、全軍進め！」

ヴィルフリートの指示で前衛部隊が動き始めた。先頭を務めるのは菱華だ。

「澪坂愛斗、お前は私が討つ！」

五万のE M Aが帝国軍に向かって進み始めた。見る見る距離を縮めていく。

「陛下、敵が接近してきています！」

「まだだ！引き付けろ！それと覇龍はじゅうを装填しろ！」

ロイツクが頷き、キーボードを素早く操作する。

「敵との距離、後五百メートル！」

「今だ！」

ロイツクが標準を定め、スイッチを押した。

ドレッドノートの先端から小型の弾頭が発射された。弾頭は真っ直ぐに敵へと向かっていく。

「何？あれ？」

菱華が弾頭を見つめる。

弾頭は二つに割れ、炸裂した。それと同時に青く澄み切っていた空に黒雲が広がり始めた。

「何だ？」

井崎がレーヴァンティンの指令室で呟いた。戦場が見る見る内に黒雲に覆われていく。昼間だと言つのに、空は暗く夕方のような。  
「全軍突撃！」

菱華が叫び、再び五万の前衛が動き始めた。その時だった。

突然の雷鳴。天を裂くように稲妻が一機のEMAを貫いた。それを皮切りに、強風が前衛を襲い、雷がEMAを切り裂いた。

「これじゃあ、近づけないわ！って、きゃっ！」

稲妻が菱華の秋水を直撃する。秋水は力を失って落ちて行った。同じように前衛は次々と荒れ狂う海に落下していく。

「効果は抜群ですね」

ロイツクが微笑んだ。愛斗も不敵な笑みを浮かべた。

「そうだな。これが切り札の一つ。氣象兵器「霸龍」はりゅうだ」

愛斗は次に通信で部隊を指揮するロランと渚、カリィ又向かって叫んだ。

「全軍、レーヴァンティンに攻撃を掛けよ！」

その号令で主力は十五万が一斉にレーヴァンティンに向かって突撃を開始した。

今、決戦が始まった。

## 六十二話　ヴィルフリートの謀略（後書き）

### 次回予告

遂に始まった最終決戦。

そして超時空戦艦レーヴァンティンの真の恐ろしさを愛斗は目の当たりにする。

無敵戦艦レーヴァンティンに抗う術は残されていないのか？

次回六十三話「レーヴァンティンの戦場」お楽しみに

ご意見・ご感想をお願いします。

あと、誤字などのご報告もどうぞ。

## 六十三話 レーヴァンティンの戦場（前書き）

いよいよ大詰め、ラスト直前です！

## 六十三話 レーヴァンティンの戦場

「でりゃああああ！」

ロランは叫びながらベディウエアで敵に突っ込んだ。ロストシューターで秋水を撃墜する。合計八本あるロストシューターを巧みに使い、敵を貫いては落としていく。ロランが指揮を執る軍も戦いを優勢に進めていた。最新鋭EMA、アルテミスは秋水と互角の力を持っていたため、こちらが劣勢になることはないだろう。

「敵陣を崩せ！レーヴァンティンは直ぐそこだ！」

「分かってるわ！」

渚も叫び、ナイトランスで敵を撃墜して行く。

暗雲立ち込める戦場は死を具現化したかの如く、乱れていた。

敵味方が混じって、混戦を続ける様は見るものを震え上がらせるだろう。

「敵陣は崩れたな。やはり物を言うのは戦術だ。いくら強いEMAがあろうとも、いくら優秀な指揮官が居ようともやはり戦術が無くでは意味が無い。その事をヴィルフリートに思い知らせるいい機会だ」

愛斗がふと顔を顰める。

「しかし敵が扇形の陣形を崩さないのは何故だ？まるでレーヴァンティンに誘い込んでいるようだが・・・」

ロイツクもその事は気にしているようだが、彼は軍師では無いのでなんとも言えないところだった。

「陛下、ロラン様率いる先鋒がレーヴァンティンに接近しました」

「そうか。続ける」

愛斗は冷たい目でモニターに移った戦場を見ながら呟いた。

「殿下、敵が接近中です。如何しますか？やはり使いますか？」

フェリクスがヴィルフリートに目配せをする。ヴィルフリートは表情を崩さずに答えた。

「そうだな。敵は十分引き寄せた。撃て」

「はい」

フェリクスが司令室に叫んで、指示を飛ばす。

「アロنداイト、発射準備」

「了解、目標は前方五百メートル。範囲は半径三百メートルに指定。装填用意！」

別のオペレーターが素早くキーボードで打ち込む。

「装填完了。目標を捕捉しました。殿下、ご指示を」

ヴィルフリートが頷き、手元のスイッチを押した。

「前方に高エネルギー反応！」

ベディウエア内で無機質な女性の声が告げた。ロランが首を傾げる。

「高エネルギー？レーダーを確認する・・・確かに前方からミサイルらしき物体が接近中・・・！」

突然、目の前の物体が光り始めた。ロランも刹那の反応で上空に向かう。それと同時に甲高い不協和音が響き、弾頭の周囲三百メートルにいたE M Aが砕け散った。

「何！？」

ロランが無線を愛斗に繋げる。

「隊長！敵の攻撃です！」

「分かった。報告しろ」

「見れば分かります！」

ロランの叫び声が聞こえる。愛斗はレーダーに目をやった。

「何だ・・・これは・・・」

レーヴァンティンに接近していた味方はほとんどが消滅していた。レーヴァンティンからは次々と弾頭が発射され、爆発した地点から円形状に味方が消えていく。

「・・・作戦に変更は無い！」

愛斗は叫んだ。しかし、司令室は静まり返っている。圧倒的な戦力差を見せ付けられ、脱力感が皆の心を支配していた。

「陛下、恐らくあれは電磁波を応用した兵器です。指定範囲に特殊な電磁波を起こし、内部からE M Aを破壊していくのではないかと」

ロイックの推測は見事に当たっていた。

「そうか。しかし懷に潜り込めば奴も使えまい。全軍に伝えよ。如何なる犠牲を持ってしてもレーヴァンティンに侵入せよ！」

「ユア、ウィル」

ロイックが全軍にそれを伝える。愛斗は戦場の簡略図を見ながらある地点を指差した。

「レーヴァンティン内にリリーが居る。何としても奪還しろ。後続部隊も全て前線にまわせ」

「はい」

ロイックがモニターを見ながら頷く。

「殿下、敵は捨て身の覚悟での突撃を開始した模様です。如何しますか？」

ヴィルフリートは先ほどから何一つ表情を変えない。

「構わない。扇形の陣形を崩して、レーヴァンティン周辺に集める。ミッシェン「ストロングホールド・ライド」を発令だ。通信をナーシャに繋げてくれ」

「はい」

フェリクスが頷き、部下に指示を出す。

「こちらナーシャ」

「ナーシャ、出番だ。聖霊騎士団の意地を見せてみる」

「分かってるわよ!」

ヴィルフリートが不敵な笑みを浮かべる。

「いい結果を期待しているよ」

「だとさ!海星、ヘマしないでね!」

「承知している」

ナーシャ率いる別働隊五万は聖域の東側、帝国旗艦ドレッドノートの後方に隠れていた。「ストロングホール・ライド」は後衛の部隊が前線に出たときに旗艦ドレッドノートを直接攻撃する作戦だ。「海星!あんたのプラズマライフルでドレッドノートを撃ち落して!中には人質の絢が居るわ!」

海星は頷き、ドレッドノートに標準を定めた。

「三・・・二・・・一・・・ゼロ!」

青い閃光が暗い空の下を真っ直ぐに切り裂いた。

目標はもちろんドレッドノート後方の動力部分だ。

「陛下!後方から高エネルギー反応!来ます!」

「プラズマシールドを展開しろ!」

ロイツクがキーボードを入力しようとするが、それと同時に大きな衝撃が司令室を襲った。

「うわっ!」

「間に合わなかったか!」

ロイツクが床から立ち上がり、モニターを覗き込む。

「陛下、後方から敵軍が接近中!後、三十秒程で来ます!」

愛斗はゆっくりと立ち上がり、中央の大モニターを見つめた。それと同時にロランや渚の声が聞こえた。

「隊長！敵はレーヴァンティンに満遍なく強化型プラズマシールドを展開しています。まったく歯が立ちません！」

「愛くん！レーヴァンティンは難攻不落よ！」

愛斗は落ち着き払った顔で司令室の面々を見回した。皆が愛斗を見ている。

「陛下、如何します？」

愛斗の決断が迫られていた。

「このままだと本艦は洋上に不時着します。しかし陛下は・・・」

「・・・分かった。お前たちは人質を解放しろ。ロイック、通信を全兵士に繋げてくれ」

「分かりました・・・」

ロイックが通信を繋げる。愛斗はマイクに向かって、全兵士に向かってゆっくりと口を開いた。

「全兵士、士官、戦闘員、乗組員に告ぐ。旗艦ドレッドノートはこれより洋上に不時着する」

前線の兵士達は頂垂れた。旗艦が落とされたという事は負けを意味していた。

「よって私は君たちをこの戦いから解放する。敵に下るも、敵に寝返るも、離脱するも、戦うも君たちの自由だ。しかし、最後に私の話を聞いて欲しい」

兵士達は無線から聞こえてくる声に耳を傾けた。

「現在、レーヴァンティンは上昇を開始し、成層圏に向かおうとしている。私は皇帝として最後の突撃を掛ける。それに当たって君たちに聞いて欲しい。君たちは今、何のために戦っているのか？国のため？自分のためか？そうではない。人には家族があり、愛する人

があり、守るべきものがある。そして今それが滅びの危機に面している。我々一人一人が今こそ剣となり、敵を討たなくてはいけないのだ」

愛斗は一息ついた。そして最後は力を込めて言葉を吐き出した。

「守れ！大切なものを！そして未来を求めろ！」

兵士達は沈黙した。

「私からは以上だ。今まで私につき従ってくれてありがとう」

静寂を破ったのはロランだった。ロランは全兵士に聞こえるように大声で叫んだ。

「戦え！レーヴァンティンは直ぐそこだ！」

ロランがレーヴァンティンを指差す。レーヴァンティンは既に雲の中に隠れようとしていた。あまり時間はない。

「ウィア・ハイル・ストライダム！ウィア・ハイル・ヨハン！」

兵士が唱和する。全軍は上昇していくレーヴァンティンにいざ、突撃を掛けんと舞い上がった。

司令室では愛斗がオペレーターの面々に向き合っていた。

「先ほど言った通り、今まで俺と共に戦ってくれてありがとう。君たち全員の忠誠心に心から感謝する」

オペレーター、ロイック、ライナー、司令室にいる全ての乗組員が愛斗に敬礼した。

愛斗は長衣を翻し、司令室から出て行った。ロイックが急いで後を追う。

冷たい廊下は静まり返っていた。刻一刻と落ちつつあるドレッド

ノート周辺ではすでに秀人、エティエンヌが戦っているだろう。

「ロイック、君には感謝している。敵はもう迫ってきている。お前は降伏しろ」

ロイックは愛斗を見つめた。

「やはり使っただすね。僕の作ったシステムを」

「ああ、使わせてもらっぞ。絶対に成功させる」

「光栄です」

二人は並んで、廊下を歩いている。ロイックは最後に紫電の整備を行いたいらしい。艦は激しく揺れ始めた。

「警告、警告。敵E M Aが艦内に侵入。総員、脱出せよ。繰り返す、総員、脱出せよ」

無機質な声の警告を聞き、愛斗はロイックと向き合った。

「さらばだ。ロイック」

「ええ、陛下」

二人は微笑み合う。その時、廊下の反対側が爆発し、敵兵士が入ってきた。アサルトライフルが愛斗とロイックを襲う。

「陛下！」

愛斗とロイックは物陰に身を隠し、敵の様子を窺った。

「やはり入ってきましたか・・・陛下、僕が時間を稼ぎます。その間にブリッジへ」

「・・・分かった。死ぬなよ」

「はい！」

ロイックは拳銃を抜き、敵に向かって発砲を始めた。愛斗はその隙にブリッジへと向かうべく、走り出した。

「愛斗の邪魔をする敵は僕が排除する！」

秀人の乗るインフェルノは暗雲立ち込める空を切り裂くように飛

んでいた。敵の秋水もインフェルノを発見し、一斉に叫んだ。

「いたぞ！討ち取れ！」

何百機もの秋水が居インフェルノへと向かっていく。インフェルノは両手に構えたプラズマガンを連射し、接近してくる秋水を次々と撃ち落していく。

敵が刀を抜き、接近戦の構えを取り始めた。インフェルノも剣に持ち替え、スラッシュソードを敵に振り下ろし、二つに裂いた。続けざまに突進し、もう一機を真つ二つに裂く。

片手に剣を、もう片方に銃を持ったインフェルノはまさに”地獄の使者だ。”

問答無用に敵を切り裂き、海の藻屑に変えて行く。

「識神秀人！」

叫び声が聞こえた。インフェルノが振り向くと、彼方からやって来る一機のE M A、海星の雷電が見えた。

「海星さんですか」

返事は返って来なかった。代わりに飛んできたのは斬撃刀の一閃だった。それをスラッシュソードでインフェルノは受け止めた。

「愛斗殿は私達が止める！邪魔立ては無用！」

斬撃刀の次の一撃を避け、インフェルノはプラズマガンを立て続けに撃った。

「僕も同じです！愛斗の邪魔をするなら、容赦はしない！」

インフェルノは高出力エアウイングを使った反則的な機動力を使い、一気に雷電との距離を詰めた。そしてスラッシュソードを振り下ろす。それを受け止めた雷電の動きを見越して、ロストシューターが雷電を襲う。

「プラズマシールド展開！」

前方に展開されたプラズマシールドのせいでロストシューターは当たらず、弾き返される。

「秀人殿、貴方は愛斗殿に愛する女性を奪われたはず。なのに何故！？」

秀人は雷電を蹴りつけ、距離をとった。

「僕には救わなくてはいけない人がいる！だから！」

インフェルノは得意の急降下で接近、一気に切り裂いた。雷電は横っ腹に大きな切り傷がついている。

「私の負けだ・・・その力を正義に使っていたのなら・・・」

雷電から脱出ポッドが射出された。それを見届けた秀人は一言呟く。

「いいえ、これが僕の正義です」

愛斗は自分の直属部隊の待つブリッジへと向かった。その他の部隊は既に出撃し、敵と交戦を開始している。現在このブリッジに待機しているのは愛斗の直属部隊とロイヤル・セブンスのみだ。

「陛下、総員出撃準備完了です。ご指示を」

愛斗は全員を見回した。といっても五十人程度だが、腕は確かな者達ばかりだ。

「我々は今からレーヴァンティンに突撃を掛ける。これが最後の作戦だ。これで失敗したら勝機はないと思え」

「ユア、ウィル！」

愛斗は全員がそれぞれのE M Aに乗り込んでいくの見つ、自分のブリッジへと向かった。

狭い廊下を進んで行くと、大きな扉が見えた。ここが格納庫だ。整備はロイックのお陰で完璧だろう。

そんな専用格納庫にもう一つ残っているE M Aがあった。撫子の紫電参式だ。愛斗に気付いたらしく、撫子は愛斗に近づいてきた。

「また会ったな。撫子」

愛斗は薄い笑みを浮かべたまま、話し掛けた。

「お前もな。まだここにいたのか？」

「これからが本番だからな。最後の手段を使うためには俺が必要だ」  
撫子が表情を険しくする。

「やはり出撃<sup>で</sup>ることにしたのか？」

撫子は黒い悪魔、紫電を横目で見た。そして一言呟く。

「あのシステムを使うのか・・・」

愛斗もそれに応じるように頷く。

「その通りだ。お前には援護を頼みたい」

撫子は頷いた。

「リリーはどうするんだ？下手をすると危険が及ぶかもしれないぞ」

愛斗は笑みを浮かべた。

「俺の目的のためなら仕方がないさ」

撫子はその言葉を聞いて、俯いた。

「なあ、愛斗。私は少し悔やんでいるんだ。お前に与えたブリューナクは結果としてお前とリリーの関係を引き裂いてしまった。だから私は・・・」

愛斗は拍子抜けしたような顔で撫子を見つめた。そして笑い出す。

「お前らしくないじゃないか。反省なんて」

撫子は顔を上げ、真顔で愛斗を見つめる。愛斗も撫子を笑みを浮かべたまま見つめた。

「撫子。お前が居なかったら俺はあの場所で死んでいた。お前は俺の命を救ってくれたんだ。感謝している。ブリューナクが無くとも俺は同じことをしていただろう」

しばしの沈黙。

撫子は愛斗を見つめていたかと思うと、不意に笑い出した。

「感謝されたのか？私は？生まれて初めての経験だな。ありがとう」

「俺からも言わせてくれ。ありがとう・・・」

二人はお互いに歩み寄り、手を伸ばした。

愛斗も最後に撫子を抱き締めようと、手を伸ばしたのだった。しかし、その幸せの一時は突然、邪魔されることになった。

「敵がブリッジに侵入！」

無機質な女の声で告げられる。それと同時に背後の格納庫の扉が破られた。三機のE M Aが入ってくる。先頭の桃色のE M Aはナーシャのシュヴァリエだ。その背後の二機は秋水だった。

「ナーシャか！」

愛斗は叫んだ。それに反応するようにナーシャも叫ぶ。

「澪坂愛斗！団長の仇、ここで討つ！」

シュヴァリエのソードが愛斗に振り下ろされようとしている。

「ナーシャ！」

紫電参式からプラズマ弾が飛ぶ。シュヴァリエがそれを左手の盾で防ぐ。

「邪魔をするな！」

「悪いが、させてもらうぞ」

紫電参式がナーシャに斬撃刀を振り下ろす。それをシュヴァリエがソードで受け止める。

「撫子！」

愛斗が叫ぶが、撫子はシュヴァリエに対しての攻撃の手を緩めない。

「お前に愛されて私は幸せだったよ。でも別れは必然だ」

愛斗が気付いたように、目を見開く。撫子の瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「ここは私が時間を稼ぐ。お前はレーヴァンティンを止める」

「だが！シュヴァリエのスペックで考えればお前に勝ち目は！」

愛斗は尚も叫ぶ。

「愛斗、お前は勝て！自分の運命に、そしてヴィルフリートに！」

愛斗は撫子の決意を受け取った。力強く頷く。

「分かった。必ず勝ってみせよう！」

愛斗は紫電に乗り、出撃した。

「いよいよか・・・」

秀人が呟く。ドレッドノートから次々とアルテミスが出てきている。いよいよ愛斗が出撃するのだ。そう思うと同時に愛斗からの通信が入った。

「秀人、撫子が時間を稼いでくれている。今の内にレーヴァンティンに」

「分かっているよ。さあ行こう」

紫電とインフェルノは暗雲立ち込める空を、その上に向かって進みだした。

既にレーヴァンティンは雲海に出ているだろう。あまり時間は無いわけだ。紫電は猛スピードで雲へと突っ込む。雲の中でも敵味方が入り乱れて戦っていた。只でさえ視界が悪いのに、何かを求めるように必死に戦っていた。紫電の後ろには直属部隊、ロイヤル・セブンス、インフェルノがついて来ている。

「渚、ロラン、エティエンヌ、カリィヌ、突撃を掛ける。ついて来い！」

「はい！」

全員が同時に答える。

紫電は更に速度を上げ、レーヴァンティンへと接近していた。

「そろそろだ。秀人、護衛は頼んだ。俺がシステムを起動させる！」

「ああ、任せてくれ！」

愛斗は紫電のコックピット内の端末を起動させた。

愛斗の最終手段、それはレーヴァンティンのシステムを直接、ハッキングしてコントロールを奪うものだった。しかし起動条件は厳しく、レーヴァンティンの防御範囲内に侵入する間の二十秒足らずでレーヴァンティンのセキュリティのロックを解除し、防御範囲内に侵入と同時に起動させなくてはいけない。少しでも遅れるとロックが掛かって、失敗となるのだ。

でもやるしかない。俺なら出来る。

愛斗は確信していた。

「プログラム起動！」

運命のカウントダウンが始まった。

「殿下、澁坂愛斗率いる部隊が突撃を掛けてきます」

井崎がリーダーも見て、報告した。ヴィルフリートは冷たい笑みを浮かべた。

「そうか。アロンドイトの標準を奴らに変更だ。近づいたところを撃て」

「はい」

フェリクスが指示を出し、オペレーターが入力を開始する。

「装填完了！」

ヴィルフリートが頷き、ボタンを押した。

「陛下！敵の守備隊です！」

エティエンヌが叫ぶ。目の前には色違いの秋水二機と、秋水が無数にいた。色違いで指揮を執っているのはギレーヌだ。そしてクリスもいる。

「レーヴァンティンには手を触れさせん！」

「こちらもです！」

カリーヌが突っ込んでいく。全身からミサイルを発射しながら突っ込み、敵を蹴散らす。

「閣下、私にお任せを！」

「分かった！」

愛斗はカリーヌとその愛機であるハーヴィルスを見送り、入力を開始した。

「聖霊騎士団です！」

次は前方に黒を基調としたEMA、ガヘリスが現れた。カミーユだ。

「ヨハン、私は貴方と戦う。間違っていないと思うわ」

愛斗も頷く。ベディウェアのロストシューターがガヘリスを襲った。

「隊長！ここは俺が！」

「助かる。ありがとう」

二機は戦い始めた。愛斗はそれを見送り、どんどんレーヴァンテインに接近していった。

空は下とは違って、青く澄み渡っている。

「行くぞ！」

今、最後の賭けが始まる。侵入までは残り十秒だ。前方から高エネルギー反応が確認出来る。恐らく巨大なプラズマキャノンだろう。喰らえば終わりだ。

「くそ・・・あともう少し待ってくれ・・・」

しかし待つてはくれなかった。青い閃光が愛斗に向かい、放たれた。愛斗が死を覚悟したその時だった。インフェルノがプラズマシールドを最大出力にしてプラズマキャノンを防いだ。

「愛斗！急げ！長くは持たない！」

愛斗は頷き、キーボードに打ち込み始めた。高速で指が動き、ロックを解除していく。突入三秒前、ロックは無事解除された。

「これで！」

プラズマキャノンを掻い潜り、プラズマシールドの隙間からレーヴァンテインの防御範囲内に侵入した。同時にプログラムを起動させる。画面が青くなり、システムがハッキングされた。

「・・・成功だ！」

急いでプラズマキャノンを止め、シールドの隙間を広げる。愛斗に続く様にして次々に部隊が入ってくる。

「目標はレーヴァンテインを止めることだ！」

これで戦いは終る。最後の舞台が始まった。

## 六十三話 レーヴァンティンの戦場（後書き）

### 次回予告

死闘の末、レーヴァンティンの防御範囲内に侵入した愛斗。

しかし内部にはジェラルドとシルヴェストルが待ち受けていた。死闘を繰り広げるインフェルノ。

青く輝く虚空の彼方でナーシャと秀人が、愛斗とヴィルフリートが対峙する！

そして予想外の結末が戦いの果てに待っていた。

次回最終話「Last Promise」お楽しみに

**最終話    L a s t   P r o m i s e (前書き)**

いよいよ最終回です。どうぞお楽しみください。

## 最終話 Last Promise

激戦が繰り広げられるレーヴァンティン周辺から離れ、雲の下。今だに暗雲立ち込めるそれでも激戦は続いていた。

ナーシャのシュヴァリエはソードを投げ、アルテミスを切り裂いた。ナーシャは大量にいる帝国軍に向けて叫んだ。

「お前等みたいなブリューナクの奴隷とは戦う価値もない！」

シュヴァリエの性能はインフェルノ、紫電と同等だった。圧倒的なマシンスペックで敵を撃墜していく。

紫電参式はシュヴァリエの後を追う形で飛んでいた。

撫子もまた無表情だった。

「お前のような血気盛んな若者に愛斗の考えは分からないだろう」

「黙れ！」

シュヴァリエは戻ってきたソードを再び投げた。それを余裕で避け、上空に舞い上がった紫電参式を追うようにして、シュヴァリエの盾からミサイルが発射された。紫電参式はそれも避け、更に高度を上げた。

撫子は鬼気迫るナーシャを見て、真顔で呟き始めた。

「愛斗の優しさをお前たちは理解していない。自分の命を辞してでもあいつが考えているのは……」

「減らず口は慎め！」

ナーシャのソードの先から赤い閃光が出て、紫電参式を襲う。紫電参式は何とか避けることが出来たが、他のアルテミスはまともに喰らい、爆発した。

「只……私も誰かに愛されてみたいんだ……」

ナーシャは怒りのあまり震えていた。

何に怒っているのかは分からない。只、許せなかった。仲間を奪った愛斗が。

「あんたみたいな奴には分からないのよ！人間の感情なんて！」

シュヴァリエも上空に上がったかと思うと、回転しながら紫電参式の装甲をソードで貫いた。

「流石はシュヴァリエ！これが・・・」

シュヴァリエはソードを引き抜き、頭部から下半身にかけてを切り裂いた。

「・・・私の負けだよ・・・」

脱出ポッドが射出され、紫電参式は爆発した。

「貴方だけは許せないわ。悪魔の力を人に与えた奴は・・・」

シュヴァリエはそう言い残し、レーヴァンティンへと、虚空へと消えていった。

撫子は落下しながら、愛斗と初めてあった時のことを思い出した。  
「愛斗・・・勝てよ・・・お前の運命に・・・そして未来に・・・」  
脱出ポッドは洋上へと落下していった。

「何とか侵入しろ！話はそれからだ！」

紫電はレーヴァンティンの表面を飛び、侵入経路を探していた。

レーヴァンティン内には無数のE.M.Aが通る道がある。そこから入れば艦内は制圧出来たも同然だ。

「あまり時間は掛けられない・・・なら！」

紫電は空中で止まり、胸部を開けた。白い閃光が飛び出し、レーヴァンティンを攻撃する。

敵の秋水が次々と飛び出してきた。

「予想通りだな。秀人！行くぞ！ロイヤル・セブンスもついて来い！」

インフェルノと十機ほどのアルテミスがついてくる。

「渚とエティエンヌは外の敵と戦え！俺の直属部隊もそっちにまわす！」

「ユア、ウィル！」

紫電は開いた扉から内部に侵入を開始した。外のガイザレスはプ

ラズマライフルでレーヴァンティンを外から攻撃していく。

「殿下、敵がレーヴァンティン内に侵入しました」

ヴィルフリートは依然、落ち着いた態度で頷いた。

「ヨハンも面白い小細工を使うようになったじゃないか。まあいい、全員避難する準備をしておけ」

「はい？」

井崎が間の抜けた声で尋ねた。

「レーヴァンティンを捨てると言うのですか！？これを奴に取られてはお終いですぞ！」

ヴィルフリートは井崎を手で遮った。

「レーヴァンティンを渡すとは言っていない。レーヴァンティンはヨハンごと消し去る。レーヴァンティンの代わりなら作れるが、ヨハンは一人しかいないからね。彼には愛する者と一緒に塵になってもらう」

フェリクスが横で苦笑する。

「相変わらず殿下らしいお考えですね。そう来ると思いましたよ」

ヴィルフリートは不敵な笑みを浮かべ、モニターを見た。

「私は負けないよ。何があってもね」

「イヴォンさん・・・すみません・・・」

リリーは今、豪華な広間にいた。大きな玉座が拵えてあり、リリーはそこに縛られている。イヴォンも同じように近くの柱に縛られている状況だ。

この部屋には綺麗な観葉植物や装飾品があり、名前の通りロイヤル・スペースだった。

イヴォンはリリーを見て、微笑んだ。

「いいんだよ。それに愛斗が助けに来てくれるさ」

「そうですよね……」

リリーの瞳から涙が零れ落ちた。

「愛斗さん……助けてください……」

「愛斗……来てくれよな……リリーを悲しませないでくれ……」

二人はそれぞれの気持ちを呟いた。

「無駄に広いんだな……」

秀人が呟く。

紫電とインフェルノ、ロイヤル・セブンスと少数の親衛隊がレーヴァンティン内を搜索していた。目標はリリーが監禁されている部屋と司令室だ。

「お前たち、先行しろ」

三機のアルテミスが通路を進み始めた。その瞬間、その三機は爆発した。

「どうした!」

爆煙の中、姿を現したのはヴァジュラだった。しかし、容姿は以前とは違い、よりスマートになっていた。ジェラルドの声が通路に響く。

「零坂愛斗! お前は俺が倒す! このヴァジュラ・エリミネーターで!」

強化されたヴァジュラは紫電にクロムメタルソードを振り下ろした。

紫電はレーザーサムライブレードでそれを防ぐが、逆に碎かれてしまった。恐ろしいパワーだ。ヴァジュラはもう一振りして、紫電の胴体を狙った。紫電もプラズマシールドを張って、防ごうとするが、虚しく碎かれた。

「何だ……この力は……」

愛斗はこの狭い通路では存分に戦えない事を悟った。

「こちらへ来い！」

愛斗は叫び、紫電で広めの格納庫に入った。

「何処へ逃げようと無駄だ！」

ヴァジユラもそれを追う。待っていたとばかりに紫電の胸部から白い閃光が発射された。

「小賢しい！」

ヴァジユラはそれを避け、紫電との距離を詰めた。閃光は壁に当たり、大爆発を起こした。壁に大きな穴が空き、青空が見えた。

二機は再び向き合った。

「覚悟しろ……」

「くっ！」

愛斗は身構えた。この狭い場所では高出力エアウィングを使えない。性能もヴァジユラに劣るというわけだ。

「ジェラルド！」

叫び声と共にインフェルノが間に入り、ヴァジユラのクロムメタルソードを受け止めた。右手の銃をヴァジユラに突きつける。

「愛斗……先に行け……君にはやるべきことがあるのだろうか？」

「ああ……すまない！」

紫電が格納庫から出ようとする。

「待て！」

ヴァジユラが追おうとするが、間にすかさずインフェルノが入る。

「ジェラルド、君の相手は僕がするよ」

「秀人！邪魔をするな！こっちが一人だとも思ったのか？」

ジェラルドの言葉と同時に後ろの壁が壊れ、漆黒のE M Aが現れた。

「シルヴェストルさん？」

「そうです。秀人卿、貴方と戦わなくてはいけません。お許しを」  
ブラックセイヴァーとヴァジユラが一気にインフェルノに襲い掛かる。秀人も閉所での戦いは不利だという事は分かっていた。

「ついて来い！」

インフェルノは愛斗が空けた大穴から飛び出した。二機もそれに続く。

「陛下！」

突然、無線から聞こえて来た声に愛斗は驚いた。

「その声は・・・ロイツクか？」

「はい！お伝えしたい事があるんです！」

「言ってくれ！」

「リリーさんの居場所がわかりました。レーヴァンティン後方のロイナル・スペースです！」

愛斗の胸に希望が生まれた。

「そうか。よくやった。お前は帝国の英雄だ」

「ありがとうございます。でもそろそろ降伏しますね。弾ももうないですし・・・」

「そうしろ。ライナーはもう縛を解放したのか？」

「ええ」

愛斗は息をゆっくりと吐き出した。

「よかった。一安心だな。ではさらばだ」

「ええ、さようなら」

通信は切れた。愛斗はインフェルノにリリーの居場所を転送する。これで秀人がリリーを救出してくれるはずだ。

愛斗は紫電のコックピットから出た。既に前に道はない。ここからは歩きだ。

愛斗は近くのドアからレーヴァンティン内に侵入を開始した。

「待っている・・・俺は勝つぞ・・・」

「秀人！お前には正義がないのか！」

ヴァジュラのクロムメタルソードがインフェルノに振り下ろされ

る。インフェルノもそれを受け止め、蹴りこんだ。

「ジェラルド、シルヴェストル。君たちでは僕のインフェルノに勝つことは出来ない！」

インフェルノはスラッシュソードを構え、上空に上がった。

「待ちやがれ！」

ヴァジュラが後を追う。しかし、インフェルノは急降下でヴァジュラではなくブラックセイヴァーを狙った。突然の攻撃のせいでブラックセイヴァーは避けるまもなく切り裂かれた。

「うわっ！ジェラルドさん！後は頼みましたよ・・・」

ブラックセイヴァーは落ちて行った。ヴァジュラが間髪いれずにクロムメタルソードでインフェルノに襲い掛かる。

インフェルノもそれに応じ、スラッシュソードでそれを受け止めた。

インフェルノとヴァジュラは互いに旋回しながら、切りあつた。

ヴァジュラが切りつければ、インフェルノもそれに対して防御し、次はインフェルノが攻撃をするといった具合に両者の攻防が続いていた。勝負を焦ることは敗北に繋がるだろう。秀人もジェラルドも慎重に戦っていた。

「秀人！俺はお前を倒し、愛斗を倒す！」

ヴァジュラがクロムメタルソードを大きく振り上げ、振り下ろそうとした。そのチャンスに秀人は見逃さなかった。振り下ろされるクロムメタルソードをスラッシュソードが砕き、そのまま懷に潜り込み胴体を真つ二つに切り裂いた。

「これが僕の実力だ。戦場でものを言うのは結果だ」

二つに分かれて落ちていくヴァジュラ内でジェラルドは笑っていた。

「確かにな。でも主役は俺じゃないぜ？」

「何？」

ヴァジュラの上半身はまだ動いていたため、プラズマライフルを構えることが出来たのだ。プラズマライフルから出た青い閃光はレ

ーヴァンティンのプラズマシールドに穴を空け、一瞬だけ隙間を作ったのだ。

そしてそこから一瞬で入ってきたE M Aがあつた。桃色に光る機体で、右手にはソードが、左手には盾が握られていた。

「ナーシャか・・・」

ジェラルドが明るい声でナーシャに呼びかける。

「ナーシャ！後は頼んだぜ！」

「任せて・・・」

シュヴァリエとインフェルノが向かい合う。

最強の騎士同士の戦いが今、始まるうとしていた。

「やっと降伏してくれましたか・・・」

戦場の下。洋上に不時着したドレッドノートの格納庫に乗組員が集められていた。先頭で話をしているのはロイックとライナーだ。

「私達は既に皇帝の指揮下から外れました。今はもう帝国軍でも共和国軍でもありません。その証拠に絢様は解放しました」

撃墜された海星は頷いた。隣には菱華もいる。

「分かりました。貴方達の身柄の安全は保証しましょう」

ロイックとライナーが安堵の溜息をついた。

「ありがとうございます。そろそろこの艦も沈みます。急いで脱出した方がいいのでは？」

海星と菱華も頷いた。未だ上空では戦いが続いていた。

「これで！」

ロランが叫んで、ロストシューターを撃ち込んだ。ガヘリスはそれを避け、プラズマライフルを構え、撃った。ベディウエアはそれを避ける。

「力は使わなくては生かせない！お前のような少女には力など無用

だ！」

カミーユも負けずに言い返す。

「貴方みたいな人に負けるほど弱い女じゃないわ」

ベディウェアの中央の円形部分が開き、強力な荷電粒子砲が発射される。

「見切ったわ」

ガヘリスは少し標準をずらし、プラズマライフルをフルバーストで撃った。お互いの攻撃はすれ違い、それぞれの方向に向かって飛んでいく。

ガヘリスには強化プラズマシールドが用意されていたため、防ぐ事が出来た。しかし、ベディウェアは間に合わず、青い閃光に貫かれた。

「何！？」

ベディウェアが爆発し、砕け散った。カミーユはガヘリスの戦闘態勢を崩し、一言呟いた。

「詰めが甘い奴・・・」

「甘いのはそっちだ！」

突然の声にカミーユは肩を震わせた。爆煙の中から出て来たのは戦闘機形態になったベディウェアだった。

「特攻！」

ベディウェアはそのままガヘリスに突っ込んだ。プラズマシールドの展開も間に合わず、ガヘリスは正面の装甲版が全て剥がされ、コックピットが剥き出しになった。立ち込める煙の中にはロランが長剣を構えて立っていた。

「詰めが甘いのはそちらだ。俺の勝利は確実になったな。我が名はロラン・ギヌメール、その心に刻み込め！」

カミーユは落ち着き払った声で呟いた。

「そう。じゃあね」

「何だと？」

カミーユは脱出ポッドのレバーを倒し、脱出した。そして機体は

爆発する。

脱出ポッドはそのまま洋上へと落ちて行つた。洋上に着水した力ミーユがまず驚いた事はロランがしっかりとしがみ付いていたことだった。流石に力ミーユも驚いたのか、ロランの手をとり、コックピットに入れた。

「大丈夫？」

「何とかな。お前、子供だと思っていたら中々やるじゃないか」

「貴方もね」

二人は見詰め合つた。そして微笑みあう。ロランはその次に空を見上げた。未だに黒雲が空には立ち込めていた。

「ナーシャ、君とはあまり戦いたくないよ・・・正直に言ってね・・・」

シュヴァリエとインフェルノは今、レーヴァンティンの砲塔の上に立つて向き合っている。

ナーシャもゆっくりと口を開いた。

「秀人、私は貴方を尊敬していたわ。愛する人のために躍起になつて頑張るその姿に共感も覚えたし、同時に仲間であることに誇りも感じた。でも、貴方は結局自分が良ければそれでいいのよね？」

秀人は静かに首を横に振つた。

「違う。僕と愛斗には何としてもやり遂げなくてはいけない事があるんだ。邪魔はさせないよ」

しばしの沈黙が流れる。口を開いたのはナーシャだった。

「そう・・・貴方はブリューナクが欲しいの？」

「違う！ブリューナクは存在してはいけない！しかし愛斗とブリューナクは別だ！」

「関係ない。貴方がこれ以上愛斗の味方をするというのなら・・・」  
秀人も静かに頷く。

「そうか・・・なら」

「ここで倒す！」

二人は同時に叫んだ。

それと同時にインフェルノのプラズマガンが火を噴いた。シュヴァリエのソードの先端からは赤い閃光が出て、インフェルノを襲う。二機は飛び上がり、一度離れたかと思うと急接近し、刃を交えた。鋭い音を立てて、インフェルノのクロムメタルソードとシュヴァリエのソードがぶつかる。新型のE M Aの攻勢はここからが始まりだった。インフェルノが素早い回し蹴りを叩き込む。それを避けたシュヴァリエの盾からはミサイルが何十発と発射された。

「僕は君に負けない！」

インフェルノが急上昇し、上につく。上空からプラズマガンのフルオート射撃でシュヴァリエを狙う。それを次々と避けながら、シュヴァリエのソードが回転しながらインフェルノを襲う。

「甘い！」

インフェルノがそれを避ける。

二機は激しい戦いを行いながら、レーヴァンティンの表面を翔けた。素早い攻撃、そして高いマシンスペック。この二つがぶつかり、二機は恐ろしい程まで戦いのレベルというものを上げていた。

「貴方達は間違っているわ！確かに力があれば人は強くなれるのかもしれない！でもそれは卑怯よ！」

インフェルノはシュヴァリエの攻撃を避けながら、プラズマガンを撃ち込んだ。

「君は分かっている！追い詰められた人間の心境を！僕は未来が欲しいんだ！」

シュヴァリエはソードを構えた。先端からは赤い閃光が出る。インフェルノもそれに対抗するようにプラズマガンをフルバーストで撃った。

「卑怯者！貴方は力に飲まれているわ！」

「違う！愛斗はこうするしかなかったんだ！辱められ、散々裏切られた者の気持ちが分かるか！辛いけど、誰も頼れない！弱者はただ耐えるしかない！そんな世界に何の意味がある！」

インフェルノの動きが格段に上がった。怒りの感情のせいだろうか。

「君は・・・愛斗を理解していない！理解しようとしてもしていない！愛斗は自分の命を、大切な人と居られる時間を捨てたとしても、皆の幸せを願っていたんだ！」

二機の戦いは激しさを増していた。

「ここからは通させないわ！」

「その通りだ！」

渚とエティエンヌの双壁は恐ろしく、敵を寄せ付けなかった。

「この一命！ヨハン様のために！」

プラズマシエルが高速回転を始め、次々とアルテミスを切り裂いていく。スパイラルリーフアークのナイトランスも風を切り、敵を貫く。

レーヴァンティンの防御範囲内での戦いも激しさを増していた。敵味方が入り乱れ、攻防戦を繰り広げる。ひたすら何かを求めて。

「貴方は悪魔よ！正義を知っていながら、悪に手を染める！」

秀人も負けじと怒鳴り返す。

「君に正義を語る資格はない！」

インフェルノがスラッシュソードをシュヴァリエの盾に振り下ろす。盾は堅く、砕けないものの火花が散った。カウンターでシュヴァリエのソードがインフェルノを襲う。

シュヴァリエからは再びミサイルが発射された。それを器用に避

けつつ、プラズマガンで反撃した。

二人は戦い続ける。

彼らも何かを求めて。

「畜生！外れろ！」

イヴオンが自分の腕を足を固定している鎖を外そうともがいている。しかし虚しくも鎖は金属音を立てるだけで、壊れる様子は全く感じられない。

「イヴオンさん、無理しないで下さい。助けは来ますよ・・・」

「そうだな・・・うわっ！」

部屋が大きく揺れた。先ほどから揺れは収まらず、何度も爆発音が響いている。

「余程、攻撃が激しいんだな。愛斗は何処にいるんだろう」

「きつと、戦っています。愛斗さんも秀人さんもそういう人ですから。きつと弱つても、エネルギーが尽きてても戦い続けると思います」

インフェルノがゆつくりと砲塔の上に降りた。シュヴァリエもそれし従うように砲塔の上に降り立った。

秀人がゆつくりと計器を見る。エネルギーはもう尽きていた。

「エアウイングのエネルギーが切れた。プラズマシールドも使えない。プラズマガンも弾切れだ・・・」

ナーシャも計器を確認する。

「こつちもエネルギー切れよ。ミサイルも撃ち尽くした・・・」

秀人とナーシャは再び向き合う。

「でも戦いは終らない！」

インフェルノが砲塔から飛び降りた。シュヴァリエも続く。二機はレーヴァンティンの表面を器用に進み、お互いに衝突した。インフェルノがスラッシュソードをシュヴァリエに振り下ろす。シュヴ

アリエもソードを思い切りスラッシュソードに打ち込む。

二つのソードは互いにぶつかり、砕けた。二機はもう一度離れ、距離をとる。

インフェルノがブースターで飛び上がり、回転蹴りをシュヴァリエに叩き込むが、盾に防がれる。盾は粉々に砕け散った。

「くっ！」

「まだまだ！」

インフェルノが右手の拳をシュヴァリエの顔面に叩き込んだ。シュヴァリエも壁を蹴り、一回転して攻撃を加える。

ここからはE M Aとは思えない動きが連発された。壁を蹴り、空中で何連発もの攻撃を繰り返すインフェルノ。シュヴァリエもそれに応じて、避けつつ反撃を加える。

二機は一度、距離をとった。秀人が歯軋りをしながら呟く。

「これがナーシャの腕前か・・・インフェルノでも倒せない・・・」

「私が本気を出しているのに・・・出力最大でも勝てないなんて・・・」

ナーシャも呟く。二人は睨みあい、怒鳴った。

「これで終わりにしましょう！」

「望むところ！」

シュヴァリエの予備の小型ナイフが引き抜かれた。それを深く構え、インフェルノに突進する。インフェルノもそれに応じるように左手で突進してくるシュヴァリエの頭部を掴んだ。

しかし、腕は独立部隊のように動き、インフェルノの胴体を貫き、動力部分まで貫通した。

「まだだ！」

インフェルノの左手から紫電と同じ粒子砲が発射された。

紫電との交換性が高いインフェルノは紫電のパーツを装備することも出来た。

頭部を吹き飛ばされたシュヴァリエは完全に機能を停止した。ナーシャは悔しそくに、呟いた。

「勝てなかったのね・・・私・・・」

ナーシャの右手が脱出レバーを倒した。機体から脱出ポッドが射出され、機体は爆発する。

「いや・・・君の勝ちだよ・・・」

インフェルノの動力部分は完全に破壊されていた。次の瞬間、インフェルノは大爆発を起こした。

「殿下、そろそろ行きましょうか？」

フェリクスがモニターを見ながら言う。

「ヨハンよ。悪いが君に消えて貰うよ。世界のためにね」

ヴィルフリートが実に残念そうに呟く。井崎も頷き、扉から出ようとした。

「お待ちください」

静かな声が聞こえた。その声には聞き覚えがあった。

ヴィルフリートが正面の一番大きなモニターを見る。モニターは明滅し、愛斗が映った。愛斗は何処かの部屋の椅子に座っているようだった。

「やあ、ヨハン。早かったね」

「ええ、貴方のお陰で少し手惑いましたよ」

ヴィルフリートは冷たい笑みを崩さずに愛斗を見据えた。

「悪いけど君には負けて貰うよ。このレーヴァンティンは自爆させる。もちろん君と一緒にね」

「そう上手くいくでしょうか？」

愛斗がヴィルフリートと同じ笑みを浮かべた。

「このレーヴァンティンのシステムは既にハッキング済みです。私からの操作がない限り作動しませんよ。それに司令室のドアは既にロックされているはずですよ。もう逃げ場はありません。チェックメイトです」

一同が黙り込む。ヴィルフリエートの顔から笑みが消えた。しかし

態度には余裕が消えなかった。

「そうか。では私の負けだな。さあ、早く自爆スイッチを起動させたまえ。それで私は死ぬ。君の勝ちだ」

愛斗は首を横に振った。

「いえ、貴方を殺したところでそれは貴方の負けにはなりません。死は最大の逃げです。今日と言う今日こそ逃がしませんよ。貴方には敗北の二文字をプレゼントします」

愛斗は淡々と続ける。

「貴方の最大の弱点はそこでした。絶対に負けないという心こそが貴方の最大の弱点。そして私は勝ちたいのです」

ヴィルフリートは表情を一切崩さずに、頷いた。

「よく分かっているじゃないか。兄の性質が」

「ええ、そうですね。貴方は私と同じように平和を求めていた。そのための過程なら手段は厭わない。それが貴方の考えですよ。でも私は違う。貴方の言う平和とは強制された平和です。強制的に人々に平和を押し付け、世界を一つに固定する。私が願う平和とは変動を繰り返す未来です」

フェリクスが拳銃を抜こうとする。その途端に司令室にいたオペレーターがフェリクスと井崎を取り押さえた。初めから愛斗にブリュナクを掛けられていたようだ。

ヴィルフリートは悲しそうな表情を見せた。

「しかし、未来が平和とは限らない。世界はどんどん悪くなっていく可能性もある・・・」

愛斗がささずそれを否定する。

「違う。人々は幸せを求める限り、世界は悪くならないのです。確実に、ゆつくりとでも幸せになっていくのです」

「そうかね。私はそうは思わないよ。人とはそう言う生き物だからね」

愛斗も頷く。

「そうです。確かに人は私利私欲に走り、争いを起こします。しか

しそれも幸せを求めるといふ事の裏返しなのです。何かを求め、より良い環境を作ろうとする。それが人間なのです」

ヴィルフリートが溜息を吐く。

「言いたい事はそれで終わりかな？なら早く自爆させたまえ。それで勝負はつくのだからね」

「いえ、そうはいきません。貴方には死では無く、もう一つの結末を用意していますから」

「まわりくどいね。早く言いたまえ」

愛斗が椅子に座りなおした。

「貴方は優秀です。いい政治家であることは違いないでしょう。そんな優秀な人材をみすみす殺すと思いますか？貴方なら優秀な人材が居た場合どうします」

「是非、起用したいね」

「そうでしょうね。私もです」

ヴィルフリートが少し顔を顰め、愛斗を見つめる。

「そんな画面越しに喋るなんて君らしくないじゃないか。堂々と出てきたらどうかね？」

「ええ、そうさせていただきます」

今度の声は近くで聞こえた。ヴィルフリートの正面にいたオペレーターがゆっくりと振り向き、帽子を取った。服も脱ぎ捨てる。オペレーターの制服の下から出て来たのは皇帝の正装だ。

ヴィルフリートが初めて動揺した。

「何だ。初めからそこにいたのかね」

「ええ、貴方を味方にするためにね」

愛斗の両目が輝いた。

「まさか！」

それと同時に愛斗の両目が今までに無い輝きを見せた。

「最初で最後の力だ。貴方を創りかえるための・・・」

その光を直視したヴィルフリートは呆然とその場に立ち尽くした。愛斗が胸を押さえ、うめく。光が収まると同時に、愛斗は床に倒れた。呻き声を上げながら、何とか立ち上がる。

「陛下、ここは危険です。お逃げください」

ヴィルフリートが愛斗に声を掛ける。愛斗も頷いた。

「させないぞ！」

井崎がオペレーターを振り払い、拳銃を愛斗とヴィルフリートに向かつて構えた。

「澪坂愛斗！貴様に世界を渡すわけにはいかない！」

「止めてください！井崎さん！」

フェリクスが押さえつけられながらも止めようとする。井崎は無視して怒鳴った。

「お前は死ね！」

井崎が拳銃の引き金に手を掛けるのと、司令室のオペレーターが一斉に井崎を蜂の巣にするのは、ほぼ同時だった。

「ああ………」

井崎が床に倒れる。愛斗は冷たく見下ろした。

「……閣下……お助けください……閣下のお役にたって見せます……」

愛斗は表情を何一つ変えなかった。

「井崎、お前のような弱者には世界を変える資格はない」

愛斗は冷たく言い放ち、ヴィルフリートに指示を出した。

「早く逃げる。逃げ遅れるぞ」

「はい」

ヴィルフリートは部下を連れて司令室を後にした。井崎は既に息絶えていた。フェリクスは呆然と魂を抜かれたように歩いて行った。愛斗は全員が出て行くのを確認すると、床に倒れた。自分の肉体が限界を迎えている。もう長くは持たないだろう。

愛斗は壁に手をつきながら、紫電へと向かった。

「自爆装置が作動しました。乗組員は至急、避難してください。繰り返します・・・」

ロイヤル・スペースに艦内放送が流れた。イヴオンが焦り始める。「くそっ！外れる！」

イヴオンが必死に鎖を外そうとするが、やはり外れる気配はない。「もう駄目なのか・・・」

イヴオンが呟いた。それと同時に扉が思い切り吹き飛んだ。入ってきたのは秀人だった。

「リリー、イヴオン！」

秀人が駆け寄り、拳銃で二人の鎖を壊した。

「サンキュー！助かったぜ」

「ありがとうございます。秀人さん」

「お礼はいらないよ。さあ、急ごう！」

秀人はリリーを背中に乗せ、急いで格納庫に向かった。

格納庫には既にE M Aは一機も残っていなかった。秀人が悔しそうに齒軋りをした。

「秀人！お前のインフェルノはどうしたんだよ！」

秀人はイヴオンたちを見て、済まなそうに呟いた。

「ナーシャと戦って壊されたんだ。ごめん」

「そんな・・・」

イヴオンが崩れ落ちる。脱出手段は断たれた。三人が落胆し、諦めかけたその時、声が聞こえた。

「秀人君！」

秀人が顔を上げると、格納庫の入り口から渚のスパイラルリーフ・アークが見えた。

「渚！」

秀人が叫んだ。スパイラルリーフ・アークは三人の前に着地した。

コックピットから渚が出てくる。

「早く！」

秀人がリリーをまず押し上げる。リリーが乗ったことを確認すると、次はイヴオンが乗り、最後に秀人が乗った。

「行くわよ！」

スパイラルリーフアークが発進した。渚は大分、焦っているようだった。

「急がないと間に合わないわ。愛くんが・・・」

秀人もその事を思い出した。

「渚、愛斗は？紫電はどうした？」

「レーダーではもう脱出したみたいよ。でも急がないと・・・」

「そうだな。間に合わなくなる」

「何がだよ？」

何も知らないイヴオンが質問する。

「それは・・・とにかく急ごう」

愛斗は紫電に無事乗り込み、脱出に成功していた。後ろではレーヴァンティンが爆発を始めている。

愛斗は不意に胸に手を当てた。そこには何時もあるロケットが無かった。

薄れ行く意識の中で愛斗は一つの会話を思い出した。

「秀人、予定通りに全てが成功している。後はレーヴァンティンを消し、俺が全てを終らせるだけだ」

ここはドレッドノートの談話室だ。レーヴァンティンとの接触までは後、三時間程だろう。秀人とどうしても話さなくてはいけないことがあったのだ。

秀人も愛斗の心境を察したのか、真剣な顔で見つめた。

「考え直せないのか？リリーのためにも・・・」

愛斗は首を横に振る。

「それはダメだ。俺が居る事によって、リリーは傷ついてしまう。それに俺にリリーを笑顔にさせる事は出来なかったみたいだ。だからお前にこれを渡したいんだ」

愛斗が差し出した手には一つのロケットが握られていた。愛斗が何時も身に付けている奴だ。

「これはな、リリーと俺の絆の印なんだ。でも今日からこれはお前の物だ。俺には無理だったが、お前ならリリーに笑顔を与えることが出来ると思う。俺に代わって、リリーに笑顔を、未来を見せてやってくれ」

秀人は黙ってそれを受け取った。

「愛斗・・・君はもう・・・」

「ああ。俺はこの戦いで全てを終らせる。世界を、この悪魔の力で救ってみせるんだ。俺の命を払って」

秀人も頷いた。

「君の犠牲は無駄にしないよ。僕らが新しい未来を作っていく。君のような人が出ないために。でも・・・代われるものなら君と代わりたい」

愛斗は少し残念そうな顔をした。

「いや、秀人。お前には、お前やリリー、渚達には生きて欲しい。俺の作った世界で、笑顔で、幸せになって欲しい」

撫子はその頃、落ちていくレーヴァンティンを見つめながら、涙を流していた。

愛斗への想いが胸に溢れる。

「愛斗・・・お前は・・・ブリューナクの存在意義を覆した。お前はこれで・・・」

撫子の瞳から落ちた涙が海に流れる。初めて本気で流した涙だっ

た。

「未来は、世界はこんなにも輝いている。俺は世界を変えることが出来たんだ。お前たちのお陰だよ」

愛斗の呟きに秀人は力強く頷いた。

「愛斗・・・君の気持ち、全て僕らが受け継ぐ・・・」

愛斗は満足そうに微笑み、部屋から立ち去ろうとした。秀人がそれを止める。

「待ってくれ。愛斗、せめて最後にリリーに会ってくれないか。一度でいい。約束してくれ・・・これが最後の約束だ・・・」

愛斗は黙って頷いた。

秀人の目からも涙が零れ落ちた。

強い衝撃で愛斗は我に返った。紫電は不時着したようだ。

愛斗は最後の力を振り絞って、コックピットから出た。空は青く、澄み切っていた。愛斗はそのまま転げ落ちるようにして、地面に倒れた。仰向けに転がり、空を仰いだ。

「綺麗だ・・・」

一言呟いた。

「秀人君、紫電の不時着場所が分かったわ」

「そうか。急いでくれ」

秀人はコックピットを開け、下を見た。

「あつたぞ！紫電だ！」

スパイラルリーフアークは急降下し、紫電の近くの海に着水した。そのまま陸まで滑空し、停止する。秀人は紫電の横に横たわる愛斗を見つけた。

「愛斗・・・」

一言呟き、秀人はスパイラルリーフアークから飛び降りた。愛斗の下へ走っていく。

愛斗はうつすらと目を開いていた。しかし瞳に既に気はなく、生きているのかも分からなかった。愛斗の正装はあまり乱れておらず、王冠を模った黒い帽子は直ぐそこに落ちていた。

秀人は愛斗の肩を掴み、揺さぶった。

「愛斗！リリーが来たぞ！もう一度会ってくれ！約束しただろ！」

その言葉に反応したのか、愛斗の手が秀人の腕を軽く握った。それを確認した秀人は渚たちに向かって叫んだ。

「急いでくれ！」

渚とイヴオンでリリーを支えている。直ぐそこまで来ると、リリーは二人から離れ、愛斗まで這って行った。

リリーは愛斗の顔を見つめる。その顔はもう死を目前にした顔だった。イヴオンも気付いたのか、拳を握り締めた。

「愛斗・・・さん？」

愛斗の顔には笑みが浮かんでいた。薄い笑みだった。しかし、その笑顔は澄み切っていた。

「どうしたんですか？」

事態を理解出来ないリリーは秀人に尋ねた。

「愛斗は・・・もう死ぬ・・・最後はリリーに看取って欲しいと思つて連れてきたんだ。愛斗はブリューナクの副作用で自分が死ぬことを前から知っていた。でも死を覚悟してでも世界のために戦ったんだ」

秀人の話を聞いたリリーは涙を抑えられなかった。大粒の涙が愛斗の服に零れ落ちる。リリーは愛斗の腕を握り、自分の頬に触れさせた。

「愛斗さん・・・私から最後に一言言わせてください。今まで言いたかった事です・・・愛しています・・・だから・・・」

その言葉が愛斗に届いたのかどうかは定かではない。しかし、そ

の言葉に愛斗の目が少し力を取り戻した。両目の赤と青が消えていき、元のように漆黒の瞳に戻った。

乾いた唇がゆっくりと動き、言葉が聞こえた。

「空が・・・綺麗だ・・・俺は・・・未来を・・・創って・・・  
みせる・・・」

最期の言葉だった。

愛斗の瞳がゆっくりと閉じていく。完全に閉じた時、リリーの握っていた愛斗の腕から力が抜けた。

愛斗は一番愛していた少女に看取られ、十七歳の生涯を今、閉じた。

「愛斗さん！？目を開けてください！いや！死なないで下さい！愛斗さん！」

リリーが叫びながら、愛斗の体を揺さぶった。

しかし、愛斗からの返事はない。穏やかな死に顔はまるで眠っているようだった。いや、そうしか見えない。

いち早く我に返った渚の目からも大粒の涙が零れ落ちた。スパイラルリーフアークの無線で全軍に繋がるようにし、震える声で喋り始めた。

「全軍に告ぎます。皇帝陛下が戦死いたしました。全軍は速やかに戦場を離脱し、これ以降の戦闘は禁じます。繰り返します・・・」

イヴォンも膝から崩れ落ちた。秀人もイヴォンの肩に手を置き、泣いた。

リリーは愛斗の顔をもう一度見つめた。穏やかだった。

「愛斗さん・・・どうしてですか？私は世界なんてどうでも良かったのに・・・愛斗さんが居ないなんて、もう笑顔も見ることが出来ないなんて・・・私には・・・」

次の言葉は出てこなかった。リリーは愛斗の温もりの残る胸に顔を埋め、泣いた。大声で泣いた。泣き声は悲しく、聖域に木霊した。

空は青く輝いていた。未来を示すかのように。

最終話 Last Promise (後書き)

エピソードもあります。

## エピソード（前書き）

最後は・・・爽やかに終るつもりです。

## エピソード

柔らかい日差しが朝の生徒会室を照らしている。

相変わらず生徒会室は書類と私物で溢れかえっている。一見すれば汚い光景かもしれないが、何故かとても暖かく感じた。

そんな朝の生徒会室の扉がゆっくりと開かれた。生徒会長、南風渚が入ってくる。

扉が開かれたことで、一枚の写真が床に落ちた。愛斗のスナップ写真で笑顔の愛斗が写っている。

それを拾い上げた渚は微笑んだ。写真を机に置き、鞆を床に下ろす。椅子を引いて座ると、もう一度その写真を眺めた。そして呟く。「ねえ、愛くん。愛くんのお陰でみんな幸せになれたわ。町には活気が戻ったし、政治も良くなった。差別も前ほど酷くなくなつたし、何より笑顔が溢れているわ」

渚は写真を壁に貼りなおした。丁寧に、そして想いを込めて。

渚は笑って、机を整理し始めた。私物を片付け、書類を纏める。

これから毎日、行っていく作業だ。でも退屈じゃない。この日常が幸せだった。

生徒会長の席に座ると、扉の小窓に人影が見えた。ゆっくりと扉を開けて、入ってきたのは秀人とイヴオン、その間にはリリーがいる。まだゆっくりとではあるが、リリーも一人で歩いている。

渚は微笑みかけた。

「リリーちゃん、今日から学校かしら？」

「いえ、まだです。でも今の内に見学しておこうと思ったんです」

リリーも笑顔で答えた。秀人とイヴオンも生徒会室を見回した。相変わらずの汚さだ。リリーは壁に貼ってある愛斗の写真に気付いた。

「これは？」

渚がその写真を外し、リリーに渡した。

「これはね、愛くんが初めてここに来た時に撮った写真よ。生徒会に誘ったら、入ってくれたわ」

リリーも愛しそうにその写真を見つめた。

「他の写真も無いんですか？」

リリーの問いに、渚は思い出したようにファイルを取り出した。

何冊かのファイルにはタイトル欄に名前が書いてある。

「生徒会メンバーの写真はここに別々にファイリングされているわ。

これが私、これが秀人君ね。こっちがイヴオン君、これがクロードイヌ、こっちは愛くんよ」

リリーは愛斗のファイルを開いて、可愛らしく首を傾げた。

「これだけですか？」

「そうね。愛くんの写真は全部で三枚しかないのよ」

リリーは三枚の写真を見た。一枚は先ほど見たもの、二枚目は学園祭の時のもので、コスプレをしている。三枚目は格納庫で撮ったもので、愛斗と秀人、ロラン、セドリツク、アルヴィなど中隊のメンバーが写っている。

「愛斗さん・・・幸せそうですね・・・私にも笑顔を見せてほしかったです」

リリーは愛斗の写真を見ながら呟いた。秀人とイヴオンも少し頂垂れる。ファイルを閉じたリリーは渚の方を見て呟いた。

「渚さん。私に愛斗さんの話をして下さい。私の知っている面も皇帝としての面も全て・・・」

渚も嬉しそうに頷く。

「いいわ。でも沢山あるから大変よ」

「構いません。お願いします」

「そうね、じゃあまず・・・」

秀人とイヴオンも聞き始めた。四人は仲良く愛斗の思い出について話すのであった。

「待てよ、カミーユ！落ち着いていこうぜ」

ロランが学園の広場でカミーユに引つ張られていた。

「ダメ。早く校内見学しないと・・・」

「分かったから落ち着こうぜ。学校は逃げないって！」

ロランはあの戦いでいい感じになったカミーユと一緒に復学した。カミーユは転校初日で、校内見学に張り切っているのだった。

「よし！じゃあまずは格納庫に行こう！いい場所だぜ」

「いいわ。じゃあ早く、早く」

二人は並んで走り出した。そんな幸せな様子を屋上から眺める青年がいた。ジェラルドだ。

「ったくよく。あいつ等、朝っぱらからイチャつきやがって・・・場所を考えろよな・・・」

ジェラルドも制服を着ていた。今日からこの学園に入学するのである。

「まあいいではないか」

後ろから聞こえた声にジェラルドは反応した。急いで振り向く。後ろに立って居たのは海星だった。

「何だ・・・なんか用か？それより何で学校にいるんだよ？」

海星は頭を掻きながら、軽く笑い始めた。

「今日からこの学校で体育教師だ。ビシバシ扱いてやるぞ」

「あんたが教師か・・・いいかもな・・・こういうのを幸せって言うのかね？」

ジェラルドは呟いた。

「そうですとも」

気付くと後ろには中年教官のオスカーがいた。

「誰だ？」

「私は秀人君や愛斗君たちの担当教官だったものですよ。彼らは成長してくれました」

ジェラルドもニヤリと笑った。  
「そうだな。これが日常なんだな・・・」

ジェラルドが呟いているころ、学園の門を潜る女子生徒が一人いた。桃色の髪をした女性は一ナッシュだ。

一ナッシュは着慣れない制服を着て、呟いた。

「何よこれ！着にくいし、動きづらいし・・・それに平和な学園だし・・・馴染めるかしら・・・」

一ナッシュはずっと戦う騎士の身であったため、こういう雰囲気は苦手だった。

「でも・・・退屈はしないかもね・・・」  
一言付け足した。

新たに立て直された政庁府の一室では、二人の兄妹が旅支度をしていた。一ナッシュとシルヴェストルだ。二人はあの戦いの後、長い因縁の折り合いをつけて、また兄妹としてやり直すことを決めたのだった。

そんな支度をしている中、部屋に入ってくる人影があった。シルヴェストルがそれに気付く。

「あ！総督閣下！」

入ってきたのは一ナッシュだった。彼女は照れくさそうに微笑んだ。その後ろには昔と変わらずにクリスがいる。

「総督閣下は止してくれ。私はただの一ナッシュだ」

「はい。一ナッシュさん」

シルヴェストルも微笑む。

「お二人はもういかれてしまっんですか？」

クリスが尋ねる。一ナッシュが元氣良く頷いた。

「はい。戦争も終わりましたし、地元に戻ってのんびりと農業でもします」

「そうですか。それは羨ましいですね」

クリスが穏やかな表情で同意する。シルヴェストルがギレーヌを見て尋ねた。

「ギレーヌさんはこれからどうします？」

「そうだな・・・私はゆつくりと過ごさせてもらう。戦争はもう御免だよ。日本は彼女に任せる」

ギレーヌが後ろを見た。後ろには少女が立っていた。

「どうも。ウチは鳳凰院絢や。日本はこれからが華やで、頑張らんといけんな」

カリーヌが笑い、シルヴェストルも微笑む。

「頑張ってください。応援していますよ」

そう言い、握手する。時計を確認して、カリーヌは鞆を背負った。

「じゃあ、そろそろ飛行機の時間ですので、さようなら」

「ああ、さらばだ」

「お元気で」

二人とギレーヌたちは最後に抱擁し、別れた。

熱海の小高い丘の上に愛斗の墓はあった。リリーが必死に頑張つて建てられたものだ。

今はエティエンヌが管理をしている。エティエンヌは墓の前に立ち、花を添えた。そして片膝をつき、深く頭を下げる。

「ヨハン様・・・いえ、陛下。世界は全て陛下の思惑通りに幸せに向かつております。この世界、陛下が創り上げた未来は私が責任を持って守り上げていきます。だからご安心ください」

エティエンヌは静かに立ち上がった。

「エティエンヌ卿！宴会が始まります！」

後ろからライナーの声が響いた。菱華もいる。エティエンヌは手振りて返事を返し、心地よい空気を思い切り吸った

「陛下が望んでいたのはこの世界だったのですね・・・」

エティエンヌはそう呟き、墓を後にした。

涼風が高原を泳いでいる。

ここスイスは何時も変わらぬ青空があった。何処までも緑が広がる高原と、高いアルプスの山々。撫子はそれにひかれてこのスイスにやってきていた。

撫子が今、居るのはアルプスの麓の高原だ。下にはアルヴィの生まれた村があり、こちら辺には放牧された羊がたくさんいる。

撫子は高原の牧草に仰向けに寝そべり、空を眺めていた。羊の一派が撫子の傍らに座る。

撫子は羊を撫で、空を仰いだ。そして本を開く。

「愛斗・・・これはお前に読んだ物語だ。そしてこの物語のラストはお前に読まなかった。何故なら、この物語のクライマックスは間違っていたからだ。書き直さないと」

撫子はペンで文字を書き込んでいった。そして羊達を見回す。

「子羊達よ。英雄の物語をこれから読んで聞かせよう。よく聞けよ」撫子は本を脇に置いた。そして呟く。

「悪魔の力、ブリューナクは世界を滅ぼす。ふふ、ブリューナクの意味さえも覆したか・・・なあ？愛斗よ・・・」

一陣の風が撫子の髪を吹き抜けた。本のページが自然に捲れる。空は青く、何処までも澄み切っていた。

## エピソード（後書き）

今までご愛読ありがとうございました！

実はもう一話番外編があるので、爽やかに終りたい！という方は見ないほうが良いかもしれません。主人公が死んでしまったんだから、切ない感動が味わいたい！という方はどうぞご覧下さい。

くThe After 遺したもの（前書き）

実はこの話は投稿するか、しないか最後まで悩んだ話です。理由は、爽やかに終ればいいんじゃないか？と思ってたのと、執筆中に何度も目頭が熱くなり、涙が零れ落ちそうになったからです。いや、正直泣きました。

それでも！という方はティッシュとハンカチ、豊かな心をご用意下さい。

ちなみに登場キャラは主にリリーです。やはりメインヒロインなので。

ご感想など貰えるとありがたいです。

以上、前書きが長くなってしまいました。すいません。

## く The After 遺したもの

冷たい雨が傘を叩いている。今日の天気は雨だが、午後からは晴れると聞いている。

リリーは復興が進む元帝都ハーゲンブルグにいた。ここで待ち合わせの約束を今日はしているのだ。

「リリーさん」

ふと名前を呼ばれる。声の人物は誰か分かっていた。

「エティエンヌさん、今日はよろしくお願いします」

リリーは軽くお辞儀をした。

リリーは今、自分の足で立つことが出来る。まだ杖を使わないと歩く事は出来ないが、生活に支障は無かった。

「では、宮殿にご案内します」

「はい」

何故、リリーがここハーゲンブルグを訪れたのか、それは愛斗の遺品を受け取るためだった。愛斗が遺した物はリリーが愛斗の誕生日に滯と相談してプレゼントした腕時計と、あの日に被っていた王冠を模った黒い帽子。愛斗が秀人に譲り渡したロケットだけだった。リリーは愛斗が確かに自分の近くで生きていたという証拠が欲しかった。その為には遥々とここまでやってきたのだ。

リリーは数ヶ月前のことを思い出していた。

リリーは愛斗が死んだあの日、泣きつかれて気絶してしまった。目を覚ましたのは数日後の病院のベッド。秀人が目を覚ました時に病室にいた。

リリーは目を覚ますと、まず第一に秀人に尋ねた。

「愛斗さんは？愛斗さんは何処？」

秀人は渚を呼び、落ち着いて聞くようにリリーに言った。秀人と渚の話はこうだった。

あの日、リリーが気を失った後にスイス連邦王国の軍人が来て、愛斗の遺体を回収していった。このまま放置しておけば、共和国に奪われて辱められる可能性があったからだ。

腕時計と帽子はその時に秀人が回収したものだった。

その後、遺体はスイスの山中で火葬され、その遺骨は熱海から太平洋に葬られたらしい。

リリーはその話を聞いて、ショックを受けた。何度も泣きながら、「返して！愛斗さんを返して！」

と懇願した。

しかし、愛斗の遺骨はもう残っておらず、結局リリーの願いは叶わなかった。

次にリリーが考えたのは、愛斗をせめてきちんと埋葬することだった。遺骨は無くとも形だけは墓を作ってあげたかった。そうしないと気が済まなかった。これには秀人と渚も賛成してくれた。

しかし、それすらも世界は認めてくれなかった。

リリーはとりあえず葬儀の手配をするために色々なところを訪ねた。しかし、退院してから知った事だが、愛斗は世界の敵として世界中の人間から恨まれる存在になっていた。

罪の無い人々を虐殺し、世界を恐怖に陥れ、独裁政治を行い、レ・ヴァンティンを使って人々を強制的に支配させた大罪人、悪の皇帝として世界から否定されていたのだ。話を聞いているうちにリリーは抗議しなくなった。何故なら、ヴィルフリートの犯した罪も全て愛斗の責任になっているからだ。

そんな情勢で愛斗の葬儀を受け入れてくれる人なんて居なかったのだ。結局、リリーはそれも諦め、ならばせめてもと、墓だけでも作ろうとした。

まず秀人と渚に相談したが、二人とも土地は持つておらず、最善は尽くすと言ってくれた。リリーが次に向かったのは歴代の皇帝が

眠る由緒正しき墓地だった。そこにはマリアとティアナも眠っていて、埋葬するには最適の場所だった。しかし、それすらも認められなかった。ストライダム国内でも愛斗は実の叔父であるレオンハルトを殺害した悪逆非道の皇帝として憎まれていたからだ。

リリーは落胆の気持ちに包まれながらも、知り合いを当たってみる事にした。まず思いついたのは地元で農業をやっているカリーヌ達だ。リリーは連絡をとり、頼んだ。カリーヌ本人は喜んで引き受けてくれたが、兄であるシルヴェストルがそれを否定したため、カリーヌは本当に済まなさそうに断った。

最終的にはエティエンヌとライナーが熱海に土地を用意し、ローンがその費用を出してくれたお陰で墓は作ることが出来た。

当日、来てくれたのは秀人と渚、ロランとエティエンヌにライナーの五人とリリーだった。墓石にはエティエンヌが文字を彫り込んだ。そこに彫り込まれた文字がリリーの胸を激しく締め付けた。

「A i t o M i o s a k a N . C , 0 5 \ N . C , 2 2」

新世紀五年から新世紀二十二年。たった十七年だ。それが愛斗に許された生きる時間だったと思うと、リリーは涙が止まらなかった。何故、この青年はこんなにも早く逝かなければならなかったのか？ 墓に埋めたのは腕時計だけだ。何故なら、それ以外の遺品が無かったからである。黒い帽子は愛斗が最期に身に付けていたのもだ。たたため、手元に置いておきたかった。帽子を埋めなかったのはそれが理由だ。リリーは五人に心からお礼を言った。五人も笑って返してくれたが、五人も悲しんでいるのは分かった。

リリーはそれから落ち込んでいた。そして漸く、愛斗の遺品を受け取るために宮殿に行く機会が出来たのだ。

「私ももう宮殿から離れますのでね。ヨハン様の私室をどうしようかと迷っていたところなのです。貴方が来られて本当に助かりました」

エティエンヌは宮殿への道程の中、絶えずリリーに話し掛けていた。リリーも笑顔で返す。

「愛斗さんに関連した物はもう無いんですね？」

「ええ、私室には手を触れさせていませんが、残った宮殿内のヨハン様の肖像画、彫像などは全て焼却されてしまいました」

リリーは少し項垂れた。

「疲れましたか？」

エティエンヌがリリーを気遣って、肩に手を置く。リリーは笑顔で平気だという意思表示をした。エティエンヌも頷き、歩き始めた。宮殿はもう人気も無く、清掃業者の人が居るくらいだった。エティエンヌはリリーを愛斗の部屋の前まで案内した。

「ここです。私は下に居ますので、何かありましたら内線電話でお呼びください。では」

エティエンヌは一礼し、立ち去っていった。リリーは深呼吸をして、部屋のドアを開けた。

中は皇帝の部屋とは思えない程、狭くて質素だった。部屋は数ヶ月間、人が入っていないと言うのに妙に生活感が溢れていた。今にも愛斗が帰って来るのでは？という疑問も感じる。

リリーはまず、部屋のベッドに横たわった。愛斗が確かにここで寝起きしていたという温もりを感じ取るため、シーツに顔を埋める。冷たい布団だったが、確かに温もりがあった。リリーの目からは涙が溢れた。綺麗に澄んだ瞳から零れる涙はシーツを濡らした。それでもリリーは泣いていた。

大分泣いただろうか？リリーはベッドから起き上がった。

リリーは次にタンスの引き出しを開けた。中には衣服が大量に入っていた。中には皇帝の正装だけではなく、私服もあり、学生服もあった。リリーは数着をバッグにしまいこんだ。後のクローゼット

にも同じように衣服が掛けられていた。次にリリーは机に目をやった。

小綺麗な机の上には何枚かの写真が置いてある。それを見て、またリリーの胸が締め付けられた。

数枚の写真は全てリリーの物だった。一枚はリリーの十歳の誕生日に撮った写真だ。その他にも昔の写真があった。渚も持っていないであろう愛斗の写真もある。全てが笑顔で、リリーも幸せそうに笑っていた。

リリーはその写真もバッグにしまった。リリーはふと、机の一段目の引き出しに手をやった。開くと、そこには一枚の封筒があった。手紙のようだ。リリーは封を切り、中を見た。愛斗からの手紙だった。

「この手紙を読んでいるのは恐らくリリーか、エティエンヌだろう。この机の二段目に俺が世話になった人間への手紙が入っている。どうか届けてくれ。三段目には俺の父親の形見がある。これはエティエンヌに渡してくれ。」

リリーは何も言わずに二段目を開けた。そこには何枚もの手紙が入っている。名前を確認していくと、秀人やロラン、渚など、世話になった人への手紙ばかりだった。そして一番下にリリー宛の手紙を見つけた。他の手紙をバッグにしまい、自分宛の手紙はその場で封を切る。その内容はリリーの心を大きく揺さぶった。

「リリーへ、

お前がこの手紙読んでいるという事は世界は今、幸せな未来に向かって進んでいるだろう。

お前は俺が居なくなつて、相当落ち込んでいるのかも知れない。でも、お前には笑顔でいて欲しい。それが俺の願いだから。困った時は遠慮なく秀人達を頼れ。皆はお前を助けてくれるし、お前の笑

顔は皆を助けるんだ。だからお前は俺の創った未来を、世界を存分に生きてくれ。

お前は自分を小さな存在だと悔やんでいるかもしれない。俺の死を自分のせいだと思って苦しんでいるかもしれない。でもそれは違う。お前のお陰で俺は最期の時まで頑張る事が出来た。お前が居てくれたから俺は笑う事が出来た。お前は小さな人間じゃない。お前の笑顔は人を幸せにする。この俺が保障するよ。お前と過ごした時間は俺の一生の中で一番楽しい時間だった。ありがとう。

俺はお前に伝えることが出来なかったが、今なら伝えられる。愛している、リリー。

### 愛斗より」

リリーは自分の目から涙が零れていることに気付かなかった。手紙の上に涙の跡が出来たのを見て、リリーは漸く自分が泣いていることに気付いた。

リリーは手早く三段目から愛斗の父親の形見であるペンダントを取り、部屋を後にした。エティエンヌに手紙とペンダントを届けてから、個室を借りた。

リリーは愛斗に向けて手紙を書いたのだ。心を込めて、想いを込めて。リリーは書いた。

「愛斗さんへ、

愛斗さんの手紙を読んで私は勇気を貰いました。愛斗さん、愛しています。世界が愛斗さんを恨んだとしても、私は愛斗さんを愛し続けます。私はこれしか愛斗さんに伝える言葉が思いつきません。

愛斗さんは世界をよりよい方向へ導いたんですよね？ならきつと天国に行って、私を見守ってくれていると思います。今、私は愛斗さんのお陰で出会えた人と、愛斗さんのお陰で出来た未来を過ごしています。全部愛斗さんが私にくれたものです。だから精一杯、今

を生きて、愛斗さんの創った未来を笑顔で過ごしていきたいと思えます。か弱いし、力もない私ですけど、精一杯生きていきます。

だからまだ私はそっちには行けません。今度、愛斗さんが生まれ変わった時は、今度こそ一緒に暮らしましょうね。愛斗さんが創った世界を存分に自分で生きてください。

だから、もう少しの間だけ、私を暖かく見守っていてくださいね。

リリーより」

今日は晴れている。綺麗な青空だ。リリーは制服を着て、頭には愛斗の王冠を模った黒い帽子を被っている。

青空を見ると、愛斗が自分を見ていてくれるような気がして、目頭が熱くなる。でも涙は出さなかった。笑顔でいることがリリーに出来ることなのだから。

今日からは学生として新しい人生を送る。先生に連れられて、教室に入った。

「皆さん、今日からこのクラスに入るリリー・ケンプフェルさんです。仲良くしてあげてくださいね」

女子からは拍手は飛び、男子からは歓声が飛ぶ。リリーもそれに応えるように微笑んだ。

「リリー・ケンプフェルです。足が悪いので、皆さんに迷惑を掛けるかも知れませんが、どうかよろしくお願いします」

再び、拍手の嵐。先生が指示した席にリリーは座った。

休み時間になると、クラスメイト全員が集まってきて、リリーを質問攻めにした。リリーもそれに丁寧に丁寧に答えていく。

一人の女子がリリーの帽子を指差して、尋ねた。

「ねえ、その帽子何？変わったファッションね？リリーちゃんの趣味？」

リリーは黒い王冠を模った帽子に手を触れた。宝石がちりばめられている帽子は確かに変わっているだろう。

リリーは帽子をもう一度撫でると、微笑んだ。

「この帽子は大事な人の帽子です。一生身に付けます・・・」

周りの生徒がその言葉に反応する。また質問攻めが始まった。リリーは幸せそうに笑った。そして帽子を、愛斗に触れるように撫でた。

見てください、愛斗さん。愛斗さんのお陰でこんなにいい人たちと出会えました。ありがとうございます。

愛しています、愛斗さん。

く The After 遺したもの（後書き）

今まで未熟な作者である上、長い駄文にお付き合い頂き、本当にありがとうございます。

続きは・・・あるかも知れません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9674/>

---

秀人と愛斗！

2010年10月20日18時25分発行